
東城学園戦記

葉月 優奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東城学園戦記

【Nコード】

N8928P

【作者名】

葉月 優奈

【あらすじ】

舞台は都内にある大きな学校、東城学園高等学部
一大イベントの体育祭では、ある勝負が行われていた
赤と青組の戦いは、ただの体育祭ではない

それは、大事なものを賭けた戦い

手に入れたものは、世界の全てを自由にすることができるという

あるものは、悪魔となりて勝利をめざし

あるものは、悪魔のような能力を持つ者と手を組んだ

勝利を収めるべく、少年少女が戦う結末は、未来を変えてしまう
勝ったのは、赤か、青か

果たして、体育祭の結末は、どんな未来を導くのか

第一話：数学教師の十字架（前書き）

——登場人物紹介

三野宮 織香：『織香部』顧問、既婚者、本編主人公。

東城学園高等部で、数学を教えている。ショートボブで、色白な大人の女性。

完璧主義者で、理論的。娘のプリカに「様」つけをしていて、愛している。

旦那は、教師一年目で知り合うが、ある理由から別居している。

園川 哲治：『織香部』部長、エロい男子。悠や椿、あずさより一っ年上。

好きなものは、フィギュア。自作でフィギュアを作るほど、手先は器用。

眼鏡をかけている痩せた男で、常にカメラを首にぶら下げている。

広州 伊豆奈：『織香部』部員、子役。

赤い髪でカールがかかっている、童顔で無邪気な人気天才子役。しかし、普段は対照的におとなしく、周りとは無駄な関わりを持たない。

皇 悠：『織香部』部員、気弱な少年。

ぼさぼさの銀髪、気弱で人見知りの少年。しかし彼は普通の人ではなく、ある『特殊なこと』から体育祭に呼ばれていた。

沢尻 桜子：東城学園日本史教師、独身。

なぜか常にセーラー服を着ている、セーラー服日本史教師。

三野宮先生を尊敬していて、いいマンションに住んでいる。

長峰 あずさ：『織香部』部員、ツンデレ毒舌アイドル。

意外と可愛いロングヘアと、目立ちたがり屋の大きなリボンが特徴。

テレビでは、ツンデレ毒舌アイドルとコピーで売っているけど、人気はいまひとつ。

夜奈月 椿：『織香部』部員、背の高い女子高生。

中学まではバスケットをやっていて、身長が高い。

ポニーテール少女で、学校の寮で暮らしている。

天照 小百合：体育祭を走っていた女子。足は速い。

凛々しい女子のいでたち、長い髪が特徴。

赤組の勝利のために頑張っている。

福永 誠：赤いショートヘアで、筋肉質の男。

背が高く、スポーツ万能風な空気を持つ彼は、特殊な人間。

プリカ様：ピンクの髪の赤ん坊。

とても愛らしい、「にゅ」と、「ばぶばぶ」ぐらいしかしゃべれない。

第一話：数学教師の十字架

彼女は、死ぬつもりではなかった。いや、殺すつもりがなかった。わたくしの目の前で、かけがえのない一人の生徒の命が亡くなった時、わたくしの背中には罪という十字架を背負う。そして、その十字架はとてつもなく重く痛いもの。

わたくしの名は三野宮 織香、高校の数学教師ですわ。

紺色のスーツで、立ち尽くした簡易テントの中。

白い肌と、ショートボブのわたくしは、きれいな姿勢で立っていました。

そんなわたくしの目の前では今、体育祭を行っていますの。

体育祭は赤と青組が、グラウンド上で生徒たちが火花を散らしていましたの。

いよいよ、最後の競技ですわ。

「差は十点劣勢ですが、リレーですべてが決まりますわね」

そのリレーは、男女混合組選抜のリレー。

一年女子から三年男子まで、六人が繋ぐリレー。

そして、赤か青のはちまきをした一年の女子生徒二人が、目の前のスタートラインで号砲一発走り始めた。

わたくしは、担当する赤組を応援していましたの。

「あとは見るだけ、というわけか」

わたくしの隣に眼鏡をかけ、体操服姿の男がいた。彼女の名は、園川 哲治。

やや痩せこけた顔、顔から流れる汗は、まさに運動後の男子そのものだった。

そんな彼は、なぜかデジタルカメラを首にぶら下げ、写真を撮って

いた。

「あんたのせいで、赤組負けちゃうわよ」

園川君の隣にるのが、赤いワンピースの女の子。

高校生の園川君と違い、カールがかった髪の小さい女の子は、小学生っぽく見えた。いや、小学生ですわ。

彼女の名は、広州 伊豆奈。

彼女は、わたくしの引率する赤組のお手伝いをしてくれましたわ。

「あつちには、赤組には、あいつがいるんだぞ！」

「それまでに、リード取れるかが鍵ね」

グラウンドでは、最後のリレーが続いていた。

次を走るのは二年生の女子、赤と青のバトンをほぼ同時に受け渡した。

まさに横一線のレース、わたくしは厳しい顔を見せていた。

「だからこそ、彼を呼んでいますの。切り札は、最後まで取っておくものですわ」

そういつてわたくしは、一人の人物をテントの奥から呼びつけた。

わたくしの腕で、ピンク髪の赤ん坊がとてもなく愛らしい寝顔を見せていた。

その隣でわたくしは、そういいながら奥にいた気弱な少年を呼びつけた。

銀髪の少年、彼の名は皇 悠。彼は中学三年生、よその学校の生徒。そして私が呼んできた、究極の切り札。

「彼は？」

「人は、汗をかきますの」

そういいながらわたくしは、そばにいる園川君の額の汗をぬぐった。晴れた秋の日、人の熱気でグラウンドはさらに熱く感じられた。

「さて、問題ですわ」

「なんだ、俺は忙しいんだ。負けると、すべてがおかしくなるのだから。」

それまでに俺は、最後の完成フィギュアを完成させないといけない」

「あきらめるの、早すぎ」

「無理だろう、あっちの悪魔にかなう人がいない。」

あいつには、心臓すらないんだからな」

「そうですわ」と、わたくしは、それでもほくそ笑う。

「皇君、彼が出てきますわ。よく、見ていてくださいな」

わたくしの目の前、そこには一人の人物が映っていた。

容姿端麗、きりつとした目の男。

背も高く、彼が出てくるだけで、女子たちの視線が集められる。

それ以上に、人間以上の威圧感を放つ。

体操服を着たその男子は、いかにも運動ができそうなそんないでたち。

赤毛の男子は、それでも険しい顔を見せていた。

三年生の彼は、福永 誠。彼は、俗にいう半悪魔。

「本当にこんなことをして、いいのかな？」

「彼にバトンが渡るときが、勝負ですの」

皇君の確認に、わたくしは同意した。それは、悪いことかもしれない。

でも、やらなければ私の一番大事なものが失われてしまう。

「均衡した勝負、彼を足止めさせる小さいもので十分ですわ」

「先生、何をするんですか？」

「酸素を抜きますわ」

広州さんの質問に、わたくしが正面を向いたまま答えた。

そして、間もなくして三年生の女子が、男子にバトンを渡すところまで来ていた。

間もなく、アンカー勝負になる。

赤と青、ほぼ互角。

後ろの皇君に、わたくしは正面を向いたまま開いている左手をすつとあげた。

すると皇君の顔は、いや目が赤く光る。

そして、皇君の髪の色がぼさぼさの髪から、跳ねてとげのようなものが見えた。

「俺は、お前に指図をされる覚えはない、だがノーマルとの約束は守ってもらっぞ」

いきなり聞こえる、強くしつかりした声。先ほどの、弱気な皇君の声ではない。

「もちろんですわ、教師は生徒の悩みを叶えることがお仕事ですの」赤い目で、わたくしを睨んできた。

皇君のもう一つの人格、それは『破壊の皇帝』という絶対的存在。

「では、作戦通りお願いしますわ」

「やるか。こいつの存在を、守ってやらないとな」

『破壊の皇帝』となった皇君は、先ほどの消えそうな存在感から急に強烈な威圧感を放つ。

隣にいた園川君と広州さんも、いきなりの皇君の変化に戸惑っていた。

そんなあつけにとられた二人とは対照的に、体育祭は進む。

そして、アンカーの福永君ともう一人の男子がバトンを待つ。

彼の背後から、赤と青の鉢巻をつけた三年生の女子が二人、バトン

をつなぐために走って来た。

ほぼ横一線のリレー、間もなくバトンが渡る瞬間。

わたくしは、隣の彼をちらりと見ましたの。

「『破壊』、酸素とナトリウム」

わたくしの言うとおり、『破壊の皇帝』は『破壊』を行った。

それと同時に大きな爆発音と、黒煙が包む。狙い通りの、水素爆弾的爆発。

半悪魔である福永君は、どんなことがあっても死なない。

でも、水素爆弾を頭に受ければ、理論的に彼を止められるかもしれない。

わたくしは、水素爆弾で彼の動きを止める作戦を試みた。

そしてわたくしの理論通り、大きな爆発した。

わずか、一瞬のことだった。大きな爆発音が、グラウンドに響く。

福永君を中心に起きた爆発に、わたくしは彼の動きが止まったと思った。

だが、その爆炎の中から出てきたのが、赤い髪の男。ゆっくりと現れた男の姿に、わたしは身震いした。

「ま、まさか……そんな」

現れたのが、赤い髪の福永君だった。

わたくしが確信した勝利は、一瞬にして碎かれた。

「なんだ、一体！」

「何が、どうなっているんだ？」

やがて晴れた煙の中、そこには巻き込まれた女子が横になって倒れていた。

息絶え絶えの少女の顔を見て、わたくしはショックでしたの。

それは、仲間でもある赤組の天照さんあまてらすが、ススだらけの全身で、焼けた体操服で倒れていた。

あの爆発の後は、体育祭は中止ですわ。

騒然とした体育祭、グラウンドはあつという間に、違う形で修羅場と化した。

中断された体育祭の中、警察がやってきましたの。

騒然としたそのグラウンドの中で、爆発の原因を調べていく。

でもあの爆発の状況は、科学的に調べることはできないでしょう。

『アビ』を使っていますから。

それにしても、よくあの男が爆発の中でよけたのだと驚きがあった。理論的に間違っではない、皇君はちゃんと彼のはちまきを狙って『破壊』しておりますの。だから、福永君が爆発に巻き込まれるのが筋ですわ。

なのに、なぜ後ろにいた天照さんあまてらすが巻き込まれたのか。

職員室で、体育祭の事情聴取を終えたわたくしは、自分の机でゆっくりして考えておりましたわ。小学部の広州さんは帰ったのですが、園川君は今頃体育祭の片づけを行っているはずですわ。

そして、わたくしは机のそばにあるベビーカーにいた大切な娘の寝顔を見て、満足な顔をしておりましたの。

（プリカ様、お守りできましたわ）

わたくしには、安堵の気持ちがあった。

あの体育祭の景品で娘でもあるプリカ様を守れたことが、一番うれしかった。

そこで、職員室に走って現れたのが、なぜか水色のセーラー服女性。

我が東城学園高等部は、ブレザー着用なのでセーラー服はあの人しかない。

生徒でなければ、そう、あの人。

「沢尻先生、なんです？騒々しいですわ」

「福永君が、捕まったですよ！」

沢尻先生が持ってきた情報は、わたくしにとっては一番意外だった。彼女は、一応日本史の教師ですの。その情報で、わたくしの顔は一気に曇った。

「どういうことですか？」

「よくわかんないですけど、警察が彼を捕まえていったんですよ」

「ありえませんか」

わたくしは、自分の机に座ったまま唇をかんだ。

今回の爆発は、科学的に捜査しても犯罪の凶器は見つからず、自然的な爆発に見えるような作戦。それ故に、犯人に結びつく根拠は何もない。

『アビ』というものは、一般的に社会に精通しておりませんの。それ故にわたくしは皇君を使って、ある意味完璧な事故に見せかけた作戦。

ノーリスクハイリターンな、パーフェクト作戦ですわ。

「そういえば、天照^{あまてらす}さんは？」

「んー、病院に運ばれてから、情報が入っていません」

「そうですか」

「でも、オリツチ。あまり、芳しくないみたい」

沢尻先生が誰にも聞こえないよう、わたくしにこっそり教えてくれた。

その言葉に、わたくしはなんだか申し訳なさを感じた。

ちなみに『オリツチ』とは、沢尻先生がわたくしを呼ぶときのあだ名ですわ。

なんと、変なあだ名でしょう。

「しょうがないですわね」

「ねえ、オリツチ、そういえば昼間いたあの子は？」

「えっ？ ああ、彼は皇君、彼は特殊な世界ですの」

「東城の制服、じゃないですよ。珍しいです」

まあ、セーラー服を趣味で着用している沢尻先生に、言われる筋合いはありませんわ。

「それでも、近くの学校の生徒ですわ」

「あの、すいません」

そんな時に一人の女子生徒が、わたくしのいる職員室の机にやってきた。

紺のブレザーということは、一年生ですわ。

「どうしましたの？」

「三野宮先生、教室の電球が切れているので、取り替えてもらっていいですか？」

「まあ、仕方ありませんわね。」

沢尻先生、向こうのベビーカーにいるわたくしの娘をおねがいできますか？」

「アイアイサー、です」

沢尻先生は、にこやかな顔でわたくしのそばにあるベビーカーを押して行った。

「では、先生」

「わかりましたわ」

わたくしはすぐさま立ち上がり、近くにあった白い蛍光灯を持って

女子生徒の後ろについていく。それでも、わたくしの頭の中では、
あまてらす天照さんの安否が気になって仕方なかった。

職員室から間もなくして、たどり着いたのが教師棟から離れた二年生の教室。

ここは体育祭で、倉庫代わりに使っている空き教室。

最近は日が短くなり、六時前でもかなり暗いですわ。

秋の夕暮れから、夜に変わる時間帯。わたくしの時計は、五時五十五分を指していた。

「この部屋です」

「蛍光灯が、消えてしまったのですの」

わたくしは、女子生徒が入っていった教室の中に入ると、月明かりだけが、照らす薄暗い部屋だった。ちょうど日の入らない教室で、電気をつけないとさすがに暗い。

わたくしは、電気のスイッチを探そうと周りを見回したとき、ガサツと音がした。

案内した女子生徒は、次の瞬間に倒れた。まるで魂が、抜けていたかのように。

わたくしが駆け寄ると、女子生徒は気を失っていた。

だが、額に謎の模様のようなモノが見えた。

その薄暗い部屋から、見えたのが奥に一人の生徒？いや違う。黒いマントのようなものが、奥で風になびいていた。

「三野宮 織香、ようこそ。魔術の世界へ」

「だれです？」

眉をひそめ、真正面の人物を見ていた。

顔は分からないけど、黒いマントをつけた女性。
それから、わたくしが聞き覚えのある声。

「あなたは、重要な罪を犯してしまいました。
^{ジ・ハード}聖戦に、犯してはいけない不正を犯しましたね」
その人物が誰なのか、すぐにわたくしは分かった。
すると、わたくしは電源のスイッチを入れた。

そこにいたのが、二十代前半の女。高校生ではなく、大学生のような女。

金髪のミドルヘアーに、細い体と高い背丈。それから全身を真っ黒なローブで覆った、イメージ魔女風の女。

「メヒカ・ヴェローチカ」

「正解よ」

メヒカは、この学園のOGであるが、学園によく手を出してくる要注意人物。

そして、この体育祭でも青組に協力をしていた。わたくしは、前に出て彼女をにらみつけた。

「あなたはもう、この学校の生徒ではありませんわ！」

「^{ジ・ハード}聖戦を不正したあなたに、言われる理由はない。

あなたには、冥界の悪魔より罰を与えましょう」

そういいながら、メヒカの顔半分が影に覆い隠された。

そのあとメヒカは、両手に持った一本の長い定規のような棒を床に突きつける。

すると、わたくしのいる教室の床が急に円が浮き上がって、青白く光りだした。

それは丸い円形のもの、円はわたくしを囲むように光りだす。
次の瞬間、持っていた蛍光灯がバリンと床で割れた。

わたくしは、頭をかかえて屈んでしまっ。

「魔方陣？」

「『アビ』には『アビ』。あなたは、罰は受けてもらっわ。不正をしたので、あなた方の負けです。

負けたら約束は、わかっていますね」

「プリカ様は、絶対渡しませんの！」

わたくしは自分の娘、ピンク髪の赤ん坊を頭に思い出していた。さっきも机のそばのベビーカー、わたくしの一番大事な娘。

この聖戦は、プリカ様をめぐる戦い。^{ジ・ハード}

その戦いの内容は、体育祭の赤と青の組で競われる対抗戦。勝敗は、スコアで決まる。

勝ったほうが、プリカ様を自由にできるというもの。そんな約束が、されていたのだ。

「それは、あなた方が決めたルールにすぎませんわ！」

わたくしは、あなた方に大切な娘を差し出すつもりはありませんものの！」

「理事長との契約があるでしょ、それだけよ。

大体、三野宮先生、あなたは今の立場が分かっているの？」

「くっ！」

青白く光った魔方陣は、わたくしの動きを、自由を奪う。

苦々しい顔、滴る汗、背筋に緊張が走る。

そして、わたくしの目の前には、無数の紫色の煙が浮かび上がっているのが見えた。

「不正は不正」

「体が……重いですわ。何をしたのです？」

「あなたがいなければ、プリカは一人では生きられない。

初めから、契約に乗っ取らずこうすればいいのよ。まあ、主人が直接能力で手を出すことを拒むから、私も遠慮はしていたけど、もういいわよね」

だんだんとわたくしの体に、激しい脱力感にさいなまれた。まぶたが、体が、重い。

「大丈夫、あなたには一生償っても償いきれない罪を、十字架を背負ってもらうわ」

「このままでは……いけませんわ！」

わたくしは険しい顔で、メヒ力を見ていた。

でも、だんだんと意識のほうが遠のいていく。

もうダメかも。

わたくしの体に、紺のスーツに魔方陣で発生した紫色の煙が包んでいく。

しかし、絶望感漂うわたくしの背後から、声が聞こえた。

「正義の日本史教師、参上！」

「なんだと！」

メヒ力のおののく声の後、私は次の瞬間、重い足を動かしていた。

激しく地面を蹴り、魔方陣の中から外の廊下まで体を飛ばしていた。そのまま横に倒れたわたくしのそばには、ちょうどセーラー服のあの人がいた。

かがんだ私のそばには、沢尻先生。

その沢尻先生は、赤ん坊プリ力様を抱きかかえていた。

「『時を止める赤ん坊』、プリカ」

「プリちゃん、よしよし」

沢尻先生に抱っこされ、うれしそうな顔を見せていたピンク髪の赤ん坊プリ力様。

ちなみに、なぜわたくしが『プリ力様』と言っているかというと、

かわいいものには「様」をつける癖があるからです。本当ですわ、間違いありませんの。

「分が悪いわね、でも……」

「な、なんですか？」

「あなたには、完全にはないがかけてあるわ、三野宮 織香」

「メヒカ、これ以上、我が学園に関わらないでくださいな」

きりつとした顔で見ようとしたけど、次の瞬間わたくしの体から紫の煙が立ち込めた。

なんですの、この煙は。湯気のような紫色の煙は、わたくしの周りに立ち込め始めた。

「残念だけど、今回は邪魔が入ったようね。さすがに、アレには叶わないわ」

「こんなことは間違っていますわ、プリカ様を利用しようだなんて

！」

「MOBAはそれでも、あきらめないから！」
モバ

メヒカは、そんな捨て台詞を言い残して、その場から立ち去った。
セリフ

脱力感のあるわたくしは、追いかけることができず、その場で、濃くなる煙の中から成り行きを見守っていた。

が、次の瞬間、わたくしの視界が完全に煙で覆われていた。

「オリツチ、どうしたの？」

沢尻先生も、その異常に気がついた。でも、何か声を出そうとしても声が出ない。

視界が次第に狭まっていく、体が、苦しくだるい。

そして、紫の煙に私の体は完全に包まれた。

まがまがしい煙に包まれ、はらりと紺のスーツが落ちたのが見えた。約十秒の出来事。あつというまに、煙が晴れた。

そのあと、私の視線が急に低く感じた。

なぜか、わたくしの着ていた紺のスーツが床にはらりと落ちていた。

「あゝ、オリッチかわいい」

「わたくしは、かわいい類のものではありませんの」

などと言いながらも、わたくしの体は沢尻先生の大きい手が伸びてきた。

なんですよ、急に沢尻先生が大きくなったような気がしますわ。

「オリッチの、新しいコスプレですね。ふかふかですね」

沢尻先生から抱き上げられた私のそばには、赤ん坊のプリカ様の顔が見えた。

まあ、なんと愛らしいのでしょうか。

つて、おかしいですわ、プリカ様も顔が大きいのですの。

わたくしは、プリカ様から視線を逸らすと、沢尻先生の左腕にある腕時計が見えた。

その時刻は、丁度六時を指していた。はっ、プリカ様のご飯の時間ですわ。

「沢尻先生、あのわたくしプリカ様にご飯をさしあげないといけませんわ」

「何、ミヤーミヤー言っているんですか、オリッチ」

「ミヤーミヤー？何のことですかの？」

しかし、よく耳を澄ましてみる。

確かに、あろうはずもない猫の鳴き声が聞こえてくる。

ど、どういうことですかの？とわたくしは自分の右手を見た瞬間、今日一番の驚き。

「真っ黒な、猫の手ですわ！」

「猫オリツチ、じゃあ帰ろうか」

「ちょ、ちよっとどうするつもりですか？」

しかし、私の声は全て猫の鳴き声に変わってしまう。

沢尻先生は、猫のわたくしの声を理解できるはずもない。

これがあのメヒカが、やった呪いなんだと、わたくしははつきり感じた。

そのあと、間もなくして沢尻先生に抱きかかえられて教室を後にした。

黒猫に変わった自分の姿を見て、わたくしは事の重大さを感じた。だけど、わたくしはプリカ様を、抱きかけるどころか何もできないでいた。

それから二時間、わたくしの目の間にはきれいなマンションが見えた。

夜の闇に包まれ、沢尻先生に抱きかかえられた黒猫のわたくしは、なすがままで玄関のドアを開けてきた。

「ささつ、猫オリツチ。私のおうちにようこそ」

そういえば、沢尻先生と仲がいいですが、家に行ったことはありませんでしたわね。

沢尻先生が部屋にわたくしを入れて否や、ものすごくきつい匂いが私の鼻を感知した。

「な、なんですの！この異界のにおいは！」

「ちよっとオリツチ、ご飯作るから待っててね。プリちゃんはこっちで」

部屋に入ると、そこはとにかく狭かった。いや、狭く感じられた。

畳の和室で、窓側に大きなキッチン。

ただ畳の和室には漫画や下着、さらには学校で使うプリントなんかが散らかっていた。足の踏み場さえない、とにかく汚い部屋。

「なんという、汚い部屋ですよ！」

「じゃあ、ちよっと待っていてくださいね。今、ご飯作っちゃいます」

とか言いつつも、私の目の前には食べた後っぱいプラスチックの容器が見えた。

あれは、即席めんのカップですね。

なんだか嫌な予感がしますの、それに体中がむずむずしますわ。かゆくてたまりませんの。

それでも隣のプリカ様は、いろんなものに興味を示しているようにも見えた。

ダメですわ、そんな汚いものを触っては。

そんなプリカ様が触っているのは、バイ菌だらけの無造作に捨てられた、いや虫。

緑色のにおいのきつそうな小さな虫が、目の前を横切った。

わたくしは、プリカ様を抱きかかえ引きはがそうとしたが、プリカ様を抱きかかえることができない。黒猫の姿が、もどかしいですね。

そのまま黄緑色の虫を捕まえた後、じーっと見つめ、観察している。それから間もなくして、プリカ様は口を開けた。

どうやら赤ん坊の特性として見たものを口に入れる、いけないと判断したわたくしは、猫なのでプリカ様に飛びかかっていくしかなかった。

「にゅ？」

小さい右手に持っている紙くずを体で体当たりして、吹き飛ばした。

黒い右手を伸ばし、無理矢理払う。

「にゅ、にゅ」

床に転がった紙くずを、やはり興味本位に見ていた。

「口に、入れたらいけませんわ!」

しかしわたくしの言葉は、猫の鳴き声としてしか聞こえない。

「にゅっ!」

プリカ様は、やはりハイハイで紙くずを追いかけていく。

このままではプリカ様は、あの紙くずを食べてしまいますの。

黒猫のわたくしは、何とか先回りして紙くずとプリカ様の距離を話そうとした。だが、

「この部屋は、ものすごく汚しますの!」

慣れない四つ足、猫には歩きにくく、散らかり激しい部屋でわたくしは激しくコケてしまう。

「まずいですわ!」

しかしプリカ様は、ほかの小さな虫を見つけてハイハイで近づく。そして、ようやく虫を手で?まえた。

「にゅ?」

どうやらプリカ様は、黄緑色の虫を口に入れようとしていた。そこに、

「はい、プリちゃんいけませんよ」

右手に持った虫を、払ってキッチンから出てきたのが沢尻先生。

にこやかな顔を見せたセーラー服姿の沢尻先生が、プリカ様を抱きかかえた。

そのまま自分の胸に当てて、頭を優しくなでていく。

「プリちゃんは、やっぱりおっぱいですね」

もどかしく、黒猫のわたくしは疲れた顔つきで漫画の上に横たわってみていた。

「猫オリツチは、こっちな」

そんな沢尻先生が、わたくしの目の間に見せたのが、すごい異臭を放つ魚が見えた。

「な、なんですか？これは食べ物ですか！」

もちろん猫の鳴き声に変換されるが、一応言ってみた。

「さ、オリツチ。猫は、やっぱりお魚よね」

「くっ、こんな家に住んでいるとわたくしも、プリカ様も死んでしまいますわ」

などと口走ると、沢尻先生はプリカ様に対して、セーラー服の上半身のボタンをはずし始めた。

「プリちゃんは、こっちなですね」

オリツチほどじゃないけど、おっぱいはあげられますよ」

などと言いながら、露わになる胸。

沢尻先生は、ためらいもなくプリカ様に対しておっぱいをあげ始めた。

その時だった。わたくしの携帯電話の着信音が鳴った。

お気に入りのインディーズロックバンドの着信音は、完全にわたくしのものですわ。

でも、黒猫だと電話を取ることができない。着信音に気づいたのか沢尻先生が、携帯のあるスーツに近づく。

「あつ、この着信音はオリツチですね」

沢尻先生が、床に乱暴に置いたわたくしの紺のスーツから、携帯電話を取り出す。

くっ、携帯に出る気ではないでしょうか？などとおもいつつも見て

いるがあっさりと電話に出た。なにか、わたくしの中の崩れるような気がした。

「少しぐらい、躊躇^{ちゅうちよ}はせめてしてほしいですわ」と言っても、もちろん猫の鳴き声になる。

「もしもし、沢尻です」

沢尻先生は私の黒い携帯電話を取り出し、耳に当てていた。黒猫のわたくしは、這いつくばってただ見るしかなかった。沢尻先生が、軽快な声で私の代わりに電話に出ていた。

「はい、はい……そうですか」

ふと、沢尻先生の声のトーンが少し下がったのが分かった。間もなくして、わたくしの携帯電話の電源を切った。その顔は、ちらりとどこか神妙な顔にも見えた。

「プリちゃん、よしよし」

何かをごまかすように沢尻先生は、プリカ様を抱きかかえ頭を撫でていた。

プリカ様は、やっぱりうれしそうに、沢尻先生のおっぱいを大事そうにつかんでいた。

「沢尻先生、何があつたのです？」

わたくしは、すかさず彼女の足元にやってきた。

しかし、彼女の頭の上から水滴がわたくしの頭に零れ落ちた。

なんですか？ 汗？ 母乳？ いや、涙ですね。それは、沢尻先生は泣いていたから。

プリカ様に顔を見せまいと、うつむきつつも泣いていた。

でも、わたくしは涙を、水滴を、猫肌で感じていた。

「天照^{あまてらす}さん……死んじやった」

弱気な声に、電話の内容をはっきりとわたくしは感じた。それは、紛れもなくわたくしの責任で、失った一つの命。とてつもなく悲しげな現実をわたくしは、沢尻先生の言葉と涙で思い知らされた。そして、わたくしの背中には確かに、黒猫と十字架が背負われたような気がした。

なんだか、体が急に重くなってきましたの。

それは、早朝のこと急だった。

わたくしは、慣れない沢尻先生の部屋の環境に、一睡もできなかった。

たまにカサカサする音にびくついてしまい、おちおち眠るところではありませんわ。

わたくしの隣で、やや湿った敷布団に沢尻先生がプリ力様と一緒に眠っていましたの。

そんな睡眠が取れないわたくしの体が、重くなりずっしりと自分の体に重さを感じていた。

その瞬間は、不意に訪れた。

再びわたくしの周りを今度は白っぽい煙が噴き出した。

わたくしは、猫鍋ではありませんわ。などと突っ込みを入れる間もなく、わたくしの猫の体が包まれた。

「ま、またですよ！」

しかし、白い煙が晴れて間もなく、わたくしは、自分の視線が高くなっていた。

「あれ？」

わたくしは、なんだか少し肌寒く感じた。

そのあと、自分の手が視界に入ってくる。
それは肉球のある猫の手ではなく、人の手だった。
白くてしなやかなわたくしの手が見えた瞬間、安堵の気持ちが湧き
上がる。

「人に戻りましたわ」

わたくしは、自分の姿をよく見まわした。

白く美しいわたくしの肌、大きな胸、まさに人間そのものだった。

（にしても、裸ですわね）

などと思っていたら、無造作に置いてあった紺のスーツをわたくし
は見かけた。

置時計の時間は、丁度朝の六時を過ぎていた。

それからしばらくして、わたくしの姿は和室にあった。

紺のスーツに、キッチンの奥にあったエプロンをつけて和室に戻っ
てきた。

（この部屋では、プリカ様は死んでしまいますわ。片づけをしまし
よう）

次々と要らないものを捨てていき、部屋の整理や掃除をしていた。

沢尻先生は、プリカ様と隣の洋室で眠っていた。

まあ眠っているほうが、都合いいですわ。

掃除をしながら、わたくしはいろいろ考えていた。

メヒカ・ヴェローチカ、青組のOG。

あのOGがかけた呪い、MOBA^{モバ}をずっと援助していたそうですわ
ね。

急にわたくしの姿が、彼女の呪いで変わった黒猫の姿。

現実には、受け止めなければいけませんわ。

「ほえ、オリツチ。よしよし」

などと、寝相悪くだらしなさそうに聞こえてきた沢尻先生。食事を終えたわたくしは、思慮を一旦停止した。

その沢尻先生は、下着姿でまだ寝ていたが、プリカ様の頭をなでていた。

どうやら、寝言ですわね。安心しましたわ。

そんなわたくしが自分の携帯をふと見てみると、もう朝の十一時になっていた。

大体の掃除と食事の用意を終えたわたくしは、沢尻先生の眠っている布団に近づいた。

「沢尻先生、起きてくださいな」

「えっ、ねむい」

「もうお昼ですわ」

「ん、あと五分」

「五分も待てませんわ、食事が冷めてしまいますの！」

そういつて、わたくしは沢尻先生の布団を強引にはぎ取った。

沢尻先生は、寝ぼけた顔とぼさぼさの髪でゆっくりと起き上った。

そんな沢尻先生の隣のプリカ様を、わたくしが抱き上げて、頭をなでてあげた。

プリカ様のほうが寝起きよく、すぐにわたくしの顔をみて、甘える顔を見せてくれた。

「オリツチ」

「ちゃんと起きてくださいな、もうお昼ですの」

そういつて、寝ぼけた沢尻先生は体を起こして周りを見回した。

「あれ、ここ私の家ですか？」

「何をおっしゃっているのです、わたくしが片づけましたの」
やや不機嫌にわたくしが言うと、沢尻先生を無理やり用意した座布団に座らせた。

その部屋は、はじめ来た時の散らかった部屋とはまるで違う。本棚の中にきれいに整理された漫画、無くなったゴミたち。足の踏み場のない昨日とは、全く違う。

「布団を干しますわ。どいてくださいな。沢尻先生はご飯を食べてくださいな」

ときぱきと指示をして、わたくしはさっきまで沢尻先生が寝ていた布団を窓から干していた。

「すごいね、オリツチ。こんなこともできるんだね」

「当たり前ですわ。主婦ならこれぐらい朝飯前ですの」

「本当に、朝飯前ですね」

「ちゃんと食べてくださいな」

わたくしは、沢尻先生の眠っていた布団をてきぱきと干していく。

「沢尻先生、ありがとうございますわ」

窓から、わたくしは外を眺めた。

外は、驚くほど晴れていて、秋晴れの雲が空に広がっていた。

そんな光景を見ると、昨日の出来事が嘘のようにさえ感じられた。

でも、私の胸に残るはずかな違和感。

なにか、煮え切らない顔で、布団を抱えたわたくしは窓の外を見た。

「いえ、オリツチ。こちらこそお部屋掃除してもらって……」

「それにしても、沢尻先生」

布団を干し終えたわたくしは、すかさず部屋のほうに振り返った。部屋の主である沢尻先生は、わたくしの作ったサンドウィッチを口

にほおばっていた。

「どうしたの？」

「どうしたのではありませんわ、この部屋はなんですか？」

虫は湧いて出てくる、足の踏み場はない、おまけに謎のキノコまで生えているではありませんの」

「勝手に生えてくるんですよ。でも、キノコもおいしいですよ。

たまに笑いが止まらなくなったり、お通じが止まらなくなったり」
妙にうれしそうに語る沢尻先生、彼女はなんとたくましいのでしよう。

わたくしには、とてもついていけませんわ。あきれ顔のわたくしは、ため息をつく。

そんな沢尻先生のそばでは、プリカ様はゆっくり眠っていた。

「わたくしはともかく、プリカ様にあんなものを食べさせては、死んでしまいますの！」

「あううつ、ごめんね、オリッチ」

「沢尻先生の生活態度は、見えましたわ。

これでは、生徒指導の田奈先生を、この部屋に入れて教育すべきですの」

わたくしは、不機嫌な顔を見せた。

沢尻先生は、バツの悪そうな顔でうつむいてしまふ。

「ですが、大目に見て差し上げますわ。

なんといってもプリカ様に、わたくしの代わりにおっぱいを上げてくださいましたの」

「オリッチ、ありりね」

「変な挨拶は、教師としてよくありませんわ」

わたくしは、やっぱり怪訝な顔で沢尻先生をにらんでいた。

そんな沢尻先生はなんとまあ、下着姿ではに cand 見えた。

「沢尻先生、それよりなんで下着姿ですか？何かのサービスですか」

「え、暑いからですよ。寝るときはいつも下着だし。

ほらセーラー服って着るのにも……」

サンドウィッチをテーブルに置いた沢尻先生は、窓にかけてあった青いセーラー服を頭からかぶる。

すると、あっという間に上半身はセーラー服姿になった。

「はい、变身完了」

「何が、变身完了ですか？ただの物ぐさですわ」

やはり、呆れ顔に変わった。

そんなわたくしは、紺のスーツのポケットに手を入れ取り出した携帯電話。

「沢尻先生。それより昨日の連絡、詳しく教えてくださいな」

わたくしはやはり気になっていた、あの事。そして、沢尻先生が涙した電話の内容。

その言葉が、来たばかりと沢尻先生の顔が一気に曇った。

そのままテーブルについて、わたくしの顔をじっと覗き込んだ。

「今日の夜六時、緊急職員会議があるってこと。

そして、昨日の体育祭の事故についての話があるみたい」

「そう、ですか」

「オリッチ、気を落とすことはないですよ」

「そう思わずには、いられませんわ」

わたくしは、なんだか泣きたくなりそんな顔を見せていたのでしょう。

母親として強い女性として毅然たる表情を崩さないわたくしは、やはりその事になると苦しい。見えない十字架を、わたくしは背負っているようなそんな気がした。

「わたくしには、責任がありますわ」

「責任？」

「そうです、あまじいす天照さんのために、生きることをしなければいけませんわ。

それが、生者に課せられた責任ですの」

「おおつ、なんかオリツチ哲学的ですね」

何が思ったが、その言葉を飲み込んだ。

それはわたくしの目の前に、かわいいプリカ様がいたから。

「よしよし、プリカ様」

わたくしは、眠るプリカ様の頭をなでてあげた。

プリカ様は、わたくしになでられてうれしそうな顔を見せていた。

眠そうな顔で、起きてしまったプリカ様。

ねむけまなこ眠気眼の愛らしい娘、そんな娘をやはり母親の顔で向き合うわたくし。

「オリツチ、そういえば黒猫からどうやって戻ったんですかあ？」

「おそらくは、あれですの」

そういつてわたくしは、奥に置かれた置時計を見ていた。

「沢尻先生が、あの魔術師の呪いをぎりぎりで止めてくださったおかげで、どうやらこの呪いは完全にかからないものなのですの。」

昨日の呪いのかかった時間から換算すると、十二時間。

呪いの時間は十二時間、人の時間も十二時間ということのようですね」

「なるほど、さすがは数学教師ですね」

「いずれにしても、呪いは残っていますわ。」

しばらく沢尻先生、わたくしとプリカ様をよろしくですの」

わたくしは、沢尻先生ににやかな笑顔を見せた。

しかし、沢尻先生はなぜか左手を頭の上にあげて、口を開けてわたくしのほうを見ていましたの。

「な、なんですか？」

「あ、いえ、なんでもないです」と恥らう顔の後に、沢尻先生が、えへへつ、と笑っている。

その瞬間、沢尻先生のそばを突如、黒い石のようなものがさささと、素早い動きで走り抜けていった。

「くっ、こ、これは！」

「ゴキちゃんの、ジェツファルソン・パピオン三世ですよ」

「は？」と漏らした後、わたくしは、途端に青ざめた顔になり、近くの雑誌を手取る。

わたくしから必死に逃げるゴキブリを、目の色変えて追いかけて叩きまわっていた。

（こんな部屋、いやですわ！早く呪いを解かないと、死んでしまいますの！）

などと、強く強く思いながら。

あれから半年もの月日が経った。わたくしは、ホワイトボードのそばに立っていた。

ここは数学準備室、もともと数学の授業で使うものを置いている倉庫の部屋。

都内でも指折りの大きな東城学園では、いろんな空き教室があり、わたくしはその部屋を部室として学校側に申請した。そんなわたくしは、部活に来ていた。

「それで、何をするのだ？」

わたくしの目の前には、五つの机が中央に集まっていた。その机に、座っているのが眼鏡姿の男子。青色のブレザーを、着ていた園川君がいた。

お決まりのデジタルカメラを、首にぶら下げていた。

彼は、この部活の部長になりますの。

やや長めの髪の園川君は、時折怪しく笑い、奥のほうを見る。

「あら、時間ですが一人、まだ遅れていますわ」

わたくしは、腕時計を見て一個だけ開いていた机を見ていた。

「まったく、時間にルーズなんてどうかしているわ。あたしは、忙しいのよ！」

奥に座る女子生徒が、やや目を吊り上げて怒った顔を見せた。

長いストレートヘアに、かわいくリボンをつけて紺のブレザーとスカートを着ていた。

彼女の名は、長峰 あずさ。新しく部活に入った、一年生。

わたくしがお金で雇った彼女は、芸能関係の仕事をしているようです。

「毒舌アイドル、少しは黙んなさい」

「なによ、伊豆奈！あんた、生意気よ！」

長峰さんの隣にいるのが、長峰さんよりはるかに低い背で、白いワンピースを着た女の子。広州さんですわ。

彼女は東城学園付属小学部の、三年生になりましたわ。

ちなみに広州さんとは、二年前にわたくしが小学部で代理の授業をしたときに知り合いましたの。

広州さんは、わたくしに憧れてこの部活に来ましたの。本当ですわ。以来ずっと広州さんは、わたくしたち高等学部の生徒と行動していますわ。

「あの……」

そして、広州さんの目の前にはやはり紺のブレザー、灰色のズボンでぼさぼさの銀髪男子、あの皇君が見ていた。

「大体、時間に遅れる奴なんてクビよ、クビ！」

「あずさだつて、よく仕事を遅れてくるじゃない！」

皇君の声をよそに、広州さんと長峰さんは言い合っていた。

この二人、もとの知り合いなので、いつもこんな調子ですの。わたくしは、そんな二人のやり取りをほほえましく見ていたが、わたくしには時間があまりありませんの。使える時間は、十二時間ですから。

「全員そろっていないですが、はじめますわ」

と、わたくしがホワイトボードにマジックで部活名を書こうとした。そんなとき、突如ホワイトボードの裏のドアが開いた。

「す、すいません。遅くなりましたっ！」

ドアから出てきたのが、ポニーテールの女子生徒。

彼女も、紺色のブレザーを着ていた。

「よく来てくださいましたわ、夜奈月さん。あなたは来てくれると

……」

「あーっ、プリちゃんだ」

そういいながら、彼女はわたくしのそばにあるベビーカー中の赤ん坊に近づいて、頭をなでていた。

「にゅ？」

「夜奈月さん、謝ってくださいな」

わたくしはやや険しい顔で、彼女を見ていた。わたくしは、遅刻には厳しいですの。

そんな夜奈月さんを、部長の園川君がすかさず写真を撮っていた。

「えっ、はい。初めまして夜奈月 椿です。」

東城学園の一年生だよ、みんな遅れてごめんなさい！」

夜奈月さんは、大きな身長だけどかわいく頭を下げた。

そんな彼女は、わたくしの今の切り札ですの。

「夜奈月さんは、あそこの皇君の隣ですわ」

夜奈月さんは、わたくしの指示に従いプリカ様からすぐに離れて空いている机についた。園川君も、夜奈月さんの写真を何枚か撮っていた。

「あの、なんで写真を撮っているんですか？」

「あんたは写真、撮られるのが苦手？まあ、素人だから仕方ないわね」

夜奈月さんの目の前にいる、長峰さんが腕組みしながら大きな彼女を見ていた。

園川君は、夜奈月さんの言葉を聞いたのか、カメラを構えるのを、なぜかやめていた。

「えっ、あーっ、長峰 あずさちゃんだね。テレビで、見たことあるよあ」

「さすが気づいたたようね、超絶美少女、スーパーアイドル長峰あずさ様を……」

「毒キノコアイドルだっけ、なんかそんな感じで言われているんだよね」

「毒キノコじゃなく、毒舌。まあ、毒キノコもはずれじゃないわ。リボンが、キノコのかさに見えるし」

と、広州さんが突っ込みを入れた。当然、長峰さんは顔をこわばらせていた。

「なによ、デカ女！あんたに、言われる筋合いないわよ！」

「あたし、何も言っていないよ」

「みなさん。まずは、自己紹介からしましょう」

目の前のわたくしは、前にいる五人の生徒に促した。

そして、なぜかわたくしのそばにいる、部長の園川君のほうに向いて哺乳ビンをマイク代わりに向けた。園川君は、首を少々ひねりながらも大事そうなカメラを置いて、周囲をやや険しい目で眼鏡越しに見ていた。

「まずは、俺からいくか。俺の名は、園川 哲治。特進クラスの二年だ。

この織香部の部長として新しくなったばかりだな、次は隣のお前だ」
「えっと、僕は……その、皇 悠といいます、一年です……」

園川君の右隣の皇君は、気弱に人見知りした。

無理ありませんわ、彼はあまり人に打ち解けるのが得意ではありませんもの。

それが、わたくしの与えられし問題ですわ。この部活の、テーマでもありますの。

そんな彼は、わたくしのクラスの生徒でもありますの。

「えっと、じゃあ次はあたしくね。

さっきも言ったけどあたしの名は、夜奈月 椿っていうんだよ。

ここの部活は、とつてもかわいい赤ちゃんのお世話できるって聞いてやってきました」

夜奈月さんは頭を下げるが、「ふん」と長峰さんが鼻を鳴らしているのが見えましたわ。

「じゃあ、このスーパーアイドル、長峰 あずさ様が特別に挨拶を

してあげるわ！」

「性格わるそ」

「伊豆奈、うるさいわよ」

長峰さんが、隣の広州さんを睨む。平然とした顔の広州さんは、長峰さんを見上げた。

「あたしはね、本当は忙しいんだけど、特別に下々の部活に付き合
つてあげるから、感謝なさいよ！」

「仕事、また切られたんでしょ」

「うるさ〜い！そんなこと、ないんだからね」

そういうと、自分で認めたことになりますわ、などと思いながら長
峰さんは自分のかわいいポイントからいろいろと話し続けた。だる
そうに聞いている広州さんと対照的に、夜奈月さんはじろじろと長
峰さんを見ていた。

「じゃあ、最後、はい」

「わたしは、広州 伊豆奈です。見ての通りほかの人と違って小学
部から来ました。よろしくおねがいします」

哺乳ビンを、もって無邪気にお行儀よく一礼した。

「ああつ、伊豆奈ちゃんも、かわいいなあ」

そういつてすかさず、かわいい物好きの夜奈月さんが広州さんのほ
うに手を伸ばして頭をなでようとした。が、

「触らないで、伊豆奈は子供じゃない！」

ぱしっ、と夜奈月さんの手をはじいた。

夜奈月さんは、不満そうに手をひっこめるのだった。

「まあ、みなさん、全員終わりましたわね」

「織香先生、聞きたいことがある」

「なんでしょ」

わたくしのそばにいた園川君が、手を挙げてわたくしのほうに振り返った。

わたくしは、哺乳ビンを近くのベビーカーにちょこんと座っているピンク髪のプリカ様に渡した。

「ところでこの部活は、何をする部活なんだ？」

見たところ男子、女子、一般人、アイドル、小学生とばらばらの人選をしているようだが……」

「よく気づきましたわ。では部活名を書きますわね」

そういつてそばのホワイトボードに、わたくしは『織香部』と大きく書いた。

「『織香部』？」

「そうですよ、『織香部』ですわ」

「なに、ダサイ名前ね。」

『あずさ様ファンクラブ』、とかセンスある名前に変えなさいよ！」

「そっちのほうが、ダサイ」

広州さんが、すかさず長峰さんに絡んでいました。

この二人の席の隣同士は、考えたほうがいいですわね。

「何をするんですか？」

「簡単ですわ。」

この『織香部』はわたくし数学教師、三野宮 織香のお手伝いをする部活ですよ」

「おてつだい？」

「そうですよ、早速、わたくしのお手伝いを皆さんにやってもらいますわ」

そういいながら、わたくしは目の前の園川君に一枚のプリントを手渡した。

「これは？」

「これは、今度の一年生の抜き打ちテストの問題用紙ですね。園川君には、このコピーをお願いしますの。」

それが終わったら、こちらの解答用紙のコピーもお願いしますわ」

「えっ、あの……」

「皇君も、一緒に行ってくださいな。コピー機はこの部屋の廊下をまっすぐ歩いた先に事務室がありますので、そこでコピーができますわ、みなさんよろしくですの」

「わ、わかりました」

「ああ」

男性陣には、今日はコピーをお願いしましょう。

何より女性陣は、ほかにやるべきことがありますわ。

「あの、あたしたちは？」

「そうですね、女性陣は女性陣にしかできないことを教えますの」

「えっ、女性にしかできないことって？」

夜奈月さんが聞いてくると、わたくしはこの部屋の奥にある白いカーテンを指さした。

「全ては、あの中で話しますわ」

わたくしは、にこやかな顔で机にいる三人の女子をみていた。

「やった、プリちゃんだよお」

夜奈月さんのうれしそうな声が、白いカーテンの中に響いた。

白いカーテンの中、そこは赤ん坊グッズであふれていた。

中央にあるのは、木製のベビーベッド。そして、ガラガラ。

ほかにも紙おむつの束だったり、粉ミルクの缶だったり、ここが学校であることを忘れさせるものばかり。

「こうやって、プリカ様を抱きかかえるのですわ」

わたくしは、得意げに自分の娘ピンク髪のプリカ様を抱きかかえた。
「よしよし」

「広州さん、おびえないで、優しく撫でるのですわ」

わたくしは、広州さんに優しく頭のなで方を教えてあげましたの。

「こうですか、先生」

「そうですね。ほら、見ていてくださいな、プリカ様が喜んでいきますの」

わたくしに、抱かれたプリカ様の顔がほぐれて笑顔になっていた。
安心した表情の、かわいい赤ん坊なプリカ様。

「なにやってるの？伊豆奈。そんなんじゃだめよ」

「では、長峰さんやってみてくださいな」

わたくしは、長峰さんにプリカ様を手渡した。

長峰さんは、片腕でやっぱりぎこちなく抱きかかえる。

すると、抱きかかえられるほうのプリカ様は、途端にこわばった顔へと変わっていく。

「あずさちゃん、こうじゃなくて、肘をつかって、そう」

「うるさいわね、分かっているわよ！」

夜奈月さんは、やはり的確にアドバイスして長峰さんを誘導していた。

そんな夜奈月さんをつつとうしがりながら、なんとか抱きかかえる形になる長峰さん。

「抱っこは、みなさんどうやら問題ないようですね」

「こんなもの、あたしにかかれば……」

「よしよし、プリちゃん」

長峰さんのことを無視するのか、かわいいプリカ様の頭をなでてい

た夜奈月さん。

「ちょっと、椿。いい加減しなさいよ！」

「かわいいものには、やっぱり叶わないなあ」

「では、次にいきますわ、だっこ、なでなで、ときたら後は」

わたくしは不意に、近くにいた夜奈月さんの胸をつんと指さした。

「あんっ！」

「ミルクですわ」

「ミ、ミルクってもしかして……」

「広州さんは、小学生ですから仕方ないしまして、夜奈月さん」

「はい。あたしも、あまり自信ないなあ」

夜奈月さんは、そういうながら自分の胸をブレザー越しに見ていた。

「なによ、椿は自分のおっぱいに、全く自信ないの？」

「そういう、あずさちゃん自信あるの？おっぱい」

「もちろんよ、超絶美少女アイドルに、不可能はないわ！」

自信たつぷりに、胸を張って長峰さんが言った。

わたくしは、二人のやり取りをじっと見ていた。

「じゃあ、見せてあげるわよ。超絶美少女アイドルの、おっぱいをね」

「えー、すごいね」

夜奈月さんが、わざとらしく拍手した。

おっぱいと聞いて、プリカ様も喜んでる様子。

本当は粉ミルクで済まそうと思ったのですが、まあ面白そうなのでいいでしょう。

長峰さんは夜奈月さんにプリカ様を抱かせて、ブレザーの上着を脱ぎ始めた。

それにしても、さすがは夜奈月さんですわ。

プリカ様の抱きかかえ方は、やはり一番手馴れていますの。

白いシャツになった長峰さんは、さらにシャツも脱ごうとしたとき、急にぴたつと止まった。

「あれ、あずさちゃん、どうしたの？」

「なんかいるわ、その白いカーテン」

「そうね、いるわね」

わたくしは、何も感じなかったが、長峰さんと広州さんはどうやら何かを感じたみたい。そのまま二人は、白いカーテンのそばに近づいた。

そして、長峰さんは白いカーテンを開いた。

すると、そこにはコピーしに事務室にいつているはずの、園川君と皇君の姿が見えた。

「な、なにしてるのよ!」

「決まってるわ、覗きよ!」

広州さんの言葉に、長峰さんの右足がすかさず飛んできた。

園川君と皇君は、逃げようとしたけど、長峰さんのけりは二人の逃げる背中に思いつきりぶつかった。

蹴り飛ばされた二人は、そのまま床に転がり込む。

腕を組んだ長峰さん、そのそばに、園川先輩にカメラが床に転がる。それを広州さんが、素早く拾った。

ああと、園川先輩が声を漏らすが、もう遅かった。

「覗きを、アイドルのあたしにやるなんていい度胸ね!」

腕組みした長峰さんの迫力が、まるで背後に炎をまとうているかのようだった。

赤いドラゴンの影が見えますわ。

園川君も、隣の皇君も完全におびえていた。
睨みつける長峰さんの迫力は、アイドルのものとは違う。

「こ、これには深いわけがあつて……。皇、後は任せたっ！」

「せ、先輩ずるいですよ」

「大丈夫、二人とも逃がさないから」

いつの間に夜奈月さんも、長峰さんに加担し逃げようとする園川君の背後を抑えていた。なんだか夜奈月さんに抱きかかえられたプリカ様が、とっても嬉しそうですわ。

その後、皇君と園川君は、問答無用で女子たちの洗礼を受けるのだった。

呪いがかかって、二度目の春を迎えた。

わたくしは、未だに自分の家に帰ることができませんの。

それでも、わたくしはあの沢尻先生の家から引越はしてしましたの。

沢尻先生の家は、ゴミ屋敷ですわ、地獄ですわ、異世界ですの。
それと違い、ここなら安心ですわ。

もちろん、わたくしが夜六時には黒猫になるからですわ。

わたくしとプリカ様には、ほかにお世話してくれる人が必要ですから。

そして今現在、夜のわたくしは黒猫になってしまいましたの。

洋室の部屋に女の子らしい部屋にいたわたくしは、自分の家から持ってきたパソコンを猫姿で動かしていた。

「マウスが、動かしづらいですわ」

といいつつも、ミャーミャーと鳴くだけのわたくし。

黒猫の手で動かすパソコン、画面で見ている。

そんなパソコンの後ろにあるベビーベッドには、現在プリカ様の姿がなかった。

「プリちゃん、お風呂気持ちよかったね」

そんな時、部屋のドアから夜奈月さんが出てきた。

ピンクのバスタオル一枚の夜奈月さんは、プリカ様を抱きかかえている。

わたくし親子は今、夜奈月さんの寮で一緒に暮らしていましたの。

そんな夜奈月さんは、パソコンの前で器用に二足立ちしている黒猫のわたくしを見かけましたの。

「あつ、先生。そっか、そろそろご飯を作るね」

そういいながら風呂上がりの夜奈月さんは、プリカ様をベビーベッドにおいてキッチンのほうに向かっていた。

それから間もなくして、夜奈月さんは白いお皿を私のほうに持ってきた。

「織香先生、ご飯ですよ」

彼女は、白いお皿を床に置いた。わたくしはそれを見ると、ミルクがつがれた白い皿に、中央にはキャットフードの缶詰の山が見えた。わたくしの猫の時では、至福のごちそうですの。

ここは天国ですわ。料理はうまくありませんが、お部屋はきれいに掃除されていますし、夜奈月さんは優しいですもの。

沢尻先生のところだと、食事は腐った魚や謎のキノコばかり、いくら掃除してもゴキブリは住み着いていますし、（本人いわくペット）いつ命がなくなってもおかしくない地獄でしたもの。

「じゃあ、プリちゃんはミルクね」

小さい子が大好きな夜奈月さんは、プリカ様に近づきベビーベッドから抱き上げた。

「にゅ」と不機嫌な顔で、プリカ様は夜奈月さんの哺乳ビンを、なぜか拒んでいた。

実はプリカ様は、赤ちゃんですがグルメなので粉ミルクを、なかなか飲まない傾向がありますの。

「プリちゃん、のんでよぉ」

こういう時は母乳しかありませんわ、などと思いつつもわたくしは夜奈月さんに出されたエサを食べていた。

（にしても、お世話されるのも悪くないですわね）

夜奈月さんの四苦八苦する、プリカ様のミルクあげを見ていた。

食事中的わたくしの背後にあるパソコンが、メールを着信したと音楽が流れた。

（メールですわ）

わたくしは食事を切り上げ、猫としては立ちづらい二足で小さいテーブル上のパソコンを覗き込んだ。

見づらいパソコン画面、足をバタバタさせると少し離れたところから夜奈月さんが来て、正座した。

「先生、乗って」

わたくしは、ミャアと猫らしく鳴いて夜奈月さんのひざの上に乗った。

パソコンが、見やすいですわ。そこから覗き込んだパソコンで見たものは、学校側からのメール。

これでも教師なので、わたくしは学校で何かあったらメールで知らされることになっていますの。

「えっ、学校でウチのクラスが、急に手品のように消えたんだって」

夜奈月さんは、メールの内容を読み上げた。
ちなみに、夜奈月さんとわたくしは、同じクラスですわ。
わたくしは、猫目でメールの内容を詳しくよく見ていた。
それは、最近二年生を担当して間もないここ数日、わたくしのクラスで起きていた一つの小さな問題だった。

「では、今日の授業はこれまでですわ」

昼間は人のわたくし。自分の担任するクラスの数学の授業を終えて、起立、礼、着席。

教壇の前、わたくしは次のクラスに移動すべく教科書とプリントをまとめているとき、

「織香先生、すいません」

と紺のブレザーを着た男子生徒に、呼び止められた。

「なんででしょう」

「先生、俺の学生手帳がなくなったのですが……」

「まあ、よく探しましたの？生徒指導室にはいきましたの？」

などと指示してみた。落とし物はたいてい生徒指導室に、届くようになっっていますわ。

しかし、すぐさま深緑のブレザー男子の後ろから、女子たち三人組が現れましたの。

「先生、図書館で借りた本がなくなっちゃいました」

「わたしは、携帯です」

すると続々とモノがなくなった生徒たちが、わたくしの教壇前に来ましたの。

「すいません、先生こっちも……」

「私のほうも」

十人ほどの生徒が、我先にと被害報告を訴えてきた。
要はこのクラスで、モノがなくなる被害が多発しているということ
ですわ。

「具体的に、いつ無くなったのですか？」

「それが、学校に来るまではあつたんですよ」

「そうそう、いつの間になくなって……」

なるほど、忽然^{こうぜん}と姿を消したというわけですね。

まあ、わたくしは刑事でも、風紀委員でもありませんが、この問題
に関しては考えてみますの。一応、わたくしはこのクラス担任です
から。

そんな時、わたくしは教室を見回すと、一人の男子が、ややバツ悪
そうに窓を眺めているのが見えた。

その人物を見て、わたくしはこの問題の謎が解けた。そして、わた
くしはこう言った。

「消失したものは、残念ながら戻っては来ないですわ」と。

その日の放課後。彼を職員室に呼びつけたのが、久しぶりの事。

その人物は、わたくしのデスクのそばに立っていた。

やや泣きそうな顔を見せた彼の名は、皇 悠。

「皇君、あなたですわね。消失事件」

わたくしは、感情を押し殺して冷静に言い放った。

いろんな感情はありますが、ここは冷静にと考えましたの。

いつも内気で、おどおどした皇君は声を発することなく頭を垂れた。

「まあ、あなたのことですから、仕方ありませんわ。ですが……」
座っていたわたくしは、思わず立ち上がり、皇君のほうに顔を向けた。

驚いた皇君は、背をそらそうとしたけど、わたくしはすかさず彼の顔を両手でつかんだ。

「ちゃんと、起きたことは報告だけはしてくださいな。」

あなたは、普通ではないのですから」

内気な草食系少年、皇君は普通ではない。

『破壊の皇帝』と呼ばれる、破壊的な性格をもった二重人格。

どんなものでも、原子レベルから存在するものを『破壊』できる、普通の人と全く違う少年。

でも、気弱で草食系な皇君に、わたくしは『破壊の皇帝』を抑える様に言うておりますわ。編入試験の日に。

でも、彼の中に眠るもう一つの人格といいましょうか、それが『破壊の皇帝』。

そんな彼をわたくしはあの時、体育祭という建前の聖戦ジ・ハードという戦争で、彼を使わせた。

そして、そんな彼は、『破壊の皇帝』に感情を支配され、一つの失敗を起こす。

「皇君、やはりあなたは『破壊の皇帝』を抑えられませんの?」

「……無理です。最近は強くて」

あきらめ色の、暗い顔を見せた。うつむいたまま、重く声を紡ぐ。

「そうですか」

皇君は、やや感情に乏しい。怯えているだけ。

聖戦は終結したが、皇君の『破壊の皇帝』は問題を引き起こしていたの。

彼と違うところで、起こしてきた問題、『破壊』の暴走。

『破壊の皇帝』になると、どんなものでも触れることなく、破壊ができますわ。

それは、存在がなくなるということ、消失。

非科学的に、ひっそりとモノがなくなる現象。

「あなたの感情を抑えられれば、『破壊の皇帝』は出てこなくなりますわね」

「でも、どうやって？」

おそらく彼は、わたくしと出会ったあの時から問題と向き合っていますわ。

だから、わたくしは彼の顔から手を離してにこやかな顔を見せた。

「そのために、『織香部』を作りましたの。」

この部活は、あなたの悩みを解決するきっかけですの」

わたくしは、おどおどする皇君の顔を覗き込んでいた。

やや戸惑った感のある皇君だが、わたくしは安心させるように頷いて見せた。

次の日、わたくしは数学準備室に集めていた。

今日は土曜日ということもあって、午前中で授業が終わっていたのでお昼時間ではあったけど、わたくしは四人の部員を集めていた。

四人とは、皇君以外の全員。

それぞれ食事をしながら、皆さん集まっていますの。

わたくしを含めても五人、いや、プリカ様も入ると六人ですわ。

もちろん、プリカ様は白いカーテンの奥のベビーベッドで眠っていますわ。

「先生、なんでお昼に呼び出したんですか？」

先に言ってきたのが、夜奈月さん。

夜奈月さんの隣だけが空席、彼女はなぜかメロンパンを食べていた。

「今日の織香部は、こちら。『皇 悠大作戦』ですわ！」

「皇 悠？」

「大作戦？」

部員の女子三人が首をひねった。

唯一部長の園川君は、じーっ、とわたくしの文字をみていた。

「皇君のことは、皆さん知っていますわね」

「ああ、なんかいつも、もじもじしている男ね」

「あまり喋らないから、よくわかりません」

長峰さんと広州さんは、皇君の印象を正直に答えた。

まあ表面的なところは、そうですね。

「あたしもクラス一緒だけど、よくわからないなあ」

そつえば、夜奈月さんは皇君と同じクラスでしたね。

まあ、わたくしが担任だから当然ですけど。

「ヤツは、イイヤツだぞ。」

なんでも嫌な顔一つせず、やってくれるしな。エロ本やれば、何でも言うこと聞く」

相変わらず、園川君はカメラを首にぶら下げていつていた。

「園川君が、よく知っているみたいですね。じゃあ内容を話しますわ。」

皆さんには、それでもよく知らない皇君の心を、開いてもらいたいのですわ。

つまり、仲良くなってもらいたいのですわ」

わたくしの言葉に、全員食べるのをやめてわたくしを見ていた。

「でもあいつのこと、あたしは知らないわ。織香は知っているの？」
「彼は臆病で、なかなか本当のことを話してはくれませんの。」

わたくしも初めて会ったのは、半年ぐらい前ですけど、わたくしは彼のことをよく知りませんわ」

「情報を渡しなさいよ、それじゃあ、なんにもわかんないじゃない！」

「あなた、馬鹿ね。わからないから、生徒である伊豆奈たちに頼んできたんですよ」

と、小学生の広州さんに言われて文句を言う長峰さんは、むっとした顔を見せた。

「そうですね、さすが広州さんですの。」

まあ長峰さんはアイドルですし、ファンの心をつかむように、彼の心をつかむのは当然できますわね」

「当然よ、あたしにまっかせなさい！」

胸を張った長峰さん、彼女は扱いやすいですね。

「広州さん、園川君、お二人もお願いできますか？」

「はい、先生のためですから」

「俺は……」

素直に従った広州さんに対し、ややごねた様子の園川君。

そこでわたくしは彼の背後に立ち、耳もとで囁く。

「成功したら、夜奈月さんのオフショット写真を差し上げますの」
すると、彼は眼鏡の鼻あてを抑えて頷いた。

交渉成立ですわ、交渉のダシになった夜奈月さんは、ちょっとこっちのほうを見ているが残ったメロンパンを食べていた。

「皇君は、午後はわたくしのクラスの教室にいるように話をしますわ。」

彼には午後から、『織香部』があるので残ってもらっていますの。皆さん、さあ頑張ってくださいな」

「あたし一人で十分、あんたたちは指をくわえて見ているといいわ。超絶美少女アイドルの、実力見せてあげる」

鼻を鳴らした長峰さんは立ち上がり、そのまま歩いて行った。

「待ちなさい、皇先輩の心は伊豆奈が開きます」

と長峰さんに競うように、広州さんも部屋を出て行った。

部長の園川君は、じーっと夜奈月さんのほうを見ていた。

「これで、椿人形が、グフフっ」

「あ、あの……」

ぶつぶつ言いながら謎の舌なめずりをして園川君は、やはり立ち上がりぶつぶつ言いながらも部屋を出ていく。

やや怪しげな園川君を、夜奈月さんは困惑気味の顔で見ていた。

わたくしと夜奈月さんの二人きりになった数学準備室、メロンパンを食べ終えた夜奈月さんは首をひねっていた。

「な、なんだったの？」

「夜奈月さんは、断る権利がありませんわ」

「あっ、立った」

「何が立ったのですの？」

夜奈月さんがわたくしの顔を、笑顔で指さしてきたので不機嫌な顔で彼女を見ていた。

「本当に、生きているみたい髪の毛。なんか入っているの？形状記憶のヤツとか」

「ふざけないでくださいな！

あなたは切り札なので、皇君の心を開くまで残ってもらいますわ！」
彼女のほうに近づくわたくしは、じーっと彼女のほうに顔を向けた。

「えー、土曜日ぐらい友達と遊びたいよお。

渋谷に遊びに行きたいなあ。大体切り札って何？」

「ダメですよっ！」

強く反対されて夜奈月さんは、がっかりした顔を見せていた。

わたくしたち『織香部』は、全員教室そばのドアにいた。

ちなみにプリカ様は、夜奈月さんが抱きかかえていますわ。

土曜日の放課後、学校は人が減り部活の生徒以外はほとんどいない。

「ここにいますわ」

皇君は、行くあてもないのか誰もいない教室で、携帯電話をぼーっと見ていた。

どうやら、『織香部』開始の時間まで彼はここで時間をつぶしているようです。

「あれね、楽勝じゃない」

「ふーん、こうしてみると皇先輩は、いつも一人なんですな」

長峰さんと広州さんは、皇君のことをドアから隠れてじっと見ていた。

部活に行く生徒が、グループを作りご飯を食べている中で、窓際の席で一人いる彼。

担任のわたくしがいうのもなんですが、いつも通りの光景。

「彼は編入でこの学園に来たので、周りの友達が少ないのですわ。では先に誰からいきますの？」

「このあたしに、任せなさいよ！」

そういつて、肩を怒らせて長峰さんが中に入っていく。

その成り行きをわたくしは、三人の部員と見守ることにした。

「ねえ、皇」

「あつ！」

興味なさそうにのそつ、と彼は長峰さんの声に小さく声を漏らした。携帯を持ったまま、その場に恐縮するように立ち上がった。

「あんた、最近元気ないわよ。悩みがあるんでしょ、あたしに話しなさいよ」

「えっ、うーん」

意外と図星ですの、彼は『破壊の皇帝』という人格に悩んでいますから。

それにしても、長峰さんは高飛車スタイルですか。

男性は、ツンとした女性に弱いですわね。デレもあれば、完璧ですが。

「えっと、その……」

「分かった、あたしのサインがほしいんでしょ！」

「へっ？」

「いいわよ、ペンを出しなさい」

長峰さんはやや強い口調で、強引に皇君の筆入れを取り出した。

「あーっ、遅いわね！」

もたつく悠に長峰さんは、荒々しくペンを取り出し、机のあたりを見回す。

「教科書に書くわね、これがあればもう悩むことないわよ。なんと言つても、超絶美少女アイドルのこのあたしがサインしてあげるんだから」

と長峰さんは、さらさらさらっとサインを書いてあげた。

皇君は、何も言わず黙ってサインのほうを見ていた。

「いい、皇。悩んだらこれを見なさい。悩みなんか吹っ飛んじゃうんだから、ね」

「は、はい……」

「じゃあ、帰るから、ついてこないでね」

得意げな顔で、皇君から離れて私たちのほうに戻ってきた長峰さん。ペンをくるくる回して、びしっと親指を立てて、わたくしたちのほうにやってきた。

「これで完璧ね」

「何が完璧よ！」

ピークすぎたアイドルのサインを勝手にして、皇先輩が呪われたらどうするの？」

長峰さんに、すかさず広州さんが絡んでいった。

唯一小学生な広州さんは、長峰さんのほうを見上げていた。

「そうですね、これでは皇君の心は開かれたとはいかないですわ」

「なんでよ？あたしのかわいらしさで、とっくに……」

しかし、皇君の様子はほとんど変わらず携帯電話を見ていた。

なんだかそれを見て、悔しそうな顔を見せた長峰さん。

逆に、勝ち誇った顔を見せた広州さん。

「やっぱり駄目ですね、落ち目のアイドルは。」

織香先生、伊豆奈が次やります！見ていてください」

小さい手を挙げた広州さん、わたくしは一番背の低い、広州さんを見ていた。

「いいですよ、では広州さんお願いしますわ」

「はい」

お行儀よく、子供らしい笑顔で広州さんは教室の中に入っていた。そのまま、教室の隅で携帯電話を見ていた皇君。

すると、広州さんが低い背丈を利用して彼の懐に入った。

「お兄ちゃん、何してるの？」

天才子役でもある広州さん、先ほどまでと急に変わってかわいらしい声と顔で、皇君のほうを見上げた。

「あの、広州さん……」

なるほど、広州さんは妹キャラで勝負ですわね。ロリ属性は、強烈ですの。

皇君はそれでも、なぜか困惑気味の顔をしていた。

「伊豆奈、お兄ちゃんが心配。ねえ、悩んでいることなんかない？」

「えっ、大丈夫です。ボクは何もないです」

「ホント？伊豆奈のこと、好きじゃないの？」

「えっ、いや、その……」

広州さんは、澄んだ目で皇君を見ていた。

なんともまあ、本格的な演技ですわ。さすがは、天才子役ですの。でも、逆にすごすぎる広州さんに、皇君は逆に引いている感もあった。

「じゃあ、お兄ちゃん、嘘ついたら、指切りげんまんだよ」

「はい、わかりました」

なんだかぎこちない皇君は広州さんにせがまれるまま、なぜか指切りげんまんをしていた。

そのまま、満面の笑みを浮かべた広州さんは、皇君のほうを見て手を大きく振った。

「じゃあね、お兄ちゃん！」

広州さんは、大声で皇君に言っただけ。

そのまま、わたくしたちのほうに走って戻っていく。

戻ると、先ほどまでの無邪気な妹キャラから、いつも通りの顔に戻っていく。

「ちょっと、伊豆奈。何媚を売っているのよ、馬鹿じゃない。「お兄ちゃん」だつて」

「「お兄ちゃん」は、いいもんだよお」

そこで、なぜか夜奈月さんが参加してきた。

夜奈月さんつて、一人っ子ではありませんか？などと思うと、広州さんは険しい目つきで長峰さんを見上げた。

「あんたに言われたくない、皇君はもう、伊豆奈の虜です。

男は単純ですね、かわいいものに弱いです」

「なるほど、一理あるな」

園川君は、ちょっといやしい目で広州さんを見ていた。

視線に気づいたのか、じーっと逆に見返していた。

「ですが、皇君の心は開かれてはいないですわ」

わたくしは再び教室を見ると、皇君はやっぱり携帯電話を見ていた。

何も変わらず、悔しそうな広州さん。

「なるほど、では俺の出番だな。やはりこういう時は、男同士がいだらう」

園川君は、皇君のほうに向かって歩きだす。

いつも通り、カメラを首にぶら下げていた。

「伊豆奈、一ついいことを言つてやろう。

男というのは単純だが、かわいいものにだけ弱いわけではないぞ」

「じゃあ、何に弱いのか？」

「色気だ」

園川君の言葉に、広州さんは冷静に彼の背中を見ていた。

長峰さんは、「脱ぐの、アンタ？」などどつつばやいた。

園川君は歩きながら、ブレザーの胸ポケットに右手を忍ばせていた。そして、そのまま彼は皇君のそばにやってきた。

「皇、いいか？」

「あ、はい。なんで先輩がここに？」

携帯電話を見ていた、皇君は顔を園川君のほうに向けていた。

「お前、最近元気がないそうじゃないか。アレが立って、いないんじゃないか？」

と、園川君は懷から本を取り出した。写真がいっぱい見えるあの本は、

「先生、あの本はなんだかまずい本じゃないんですか？」

そう、それは成人向けの雑誌。

私の代わりにプリカ様をだっこしていた、夜奈月さんが反応した。女性の裸がいろいろ見えた、R-18指定の本。俗にいうエロ本。

「皇、これはいいぞ」

「ちよつと、なんでこんなものを学校で……」

「好きだろう」

にやりと笑った園川君、皇君は顔を赤らめながらセクシーな写真を見ていた。

やっぱり困惑した園川君は、直視できないでいた。

「なかなかいいだろ、俺の珠玉のコレクションだ。」

ここで気持ちよさそうにしているのなんか、夜奈月にそっくりだ」

そんな気持ち悪いセリフを聞いて、さすがの夜奈月さんもちよつとムツとしていた。

園川君の懷から、さらに追い打ちをかけるように出てきたのが一体の人形。

「こいつはな、『長峰 あずさ』フィギュア。」

十六分の一スケール、マークツー、スク水バージョンだ。

これさえあれば、いつでも毒舌アイドル長峰 あずさといつでも一緒だ。どちらも俺の自作だ」
オリジナル

と皇君に、スクール水着姿の長峰さん人形を手渡されていた。おもわず、わたくしも「まあ」と声を上げしまった。

「あ、あの……」

「心配するな。俺たちがついていけるぞ。皇、お前が心配しているのは女のことだな」

「えっ、あつ……先輩」

「ん、どうした？」

「う、うし……」

皇君は、一段と青ざめた姿で、園川君のほうにあるものを指さした。園川君が振り返ると、ものすごくにこやかな声で長峰さんが立っていた。右手には、血管浮き出る拳が握られる。

猛ダッシュをしたのか、やや肩で息をしていた。

やはり背後に見えるのは、なぜか赤いドラゴンの影。

なんで赤いドラゴンなのでしょう、やっぱりわかりませんわ。

「部長。あたしはこんなにね、胸が……」

「長峰、大体この人形とそっくりだろ。」

体のつくりといい、下のパンツといい、完璧だ」

「小さくないわよ！」

そして長峰さんのキックが、園川君を容赦なく蹴り飛ばした。

吹き飛ばされた園川君は、そのまま床に飛ばされた。よく飛びますわね。

「皇、返しなさい！」

すごい剣幕で、皇君から強引にフィギュアを奪い取ろうと手を伸ば

したが、怖くなったのか反射的に走り出した。

「待ちなさい！」

長峰さんが、追いかけていく。

意外と皇君は足が速いのか、駆け足で教室を出て行った。それを、険しい顔で長峰さんがやはり追いかけていく。

「なんとのことですの」

そっぴいなながら、わたくしたちは地面にのびている園川君のほうに近づく。

広州さんは、やや軽蔑の目で園川君をじーつと見下していた。

長峰さんのキックがすごいのか、ブレザーの背中にしっかりと足跡がついていた。

「不潔ですね、園川先輩」

広州さんの、冷淡な声が浴びせられた。

一方プリカ様を抱きかかえた夜奈月さんは、置かれたエロ本の開いたページをまじまじと見ていた。

「そんなにあたしに、似ているかな？」

「みなさん、何をしているのですか、追いかけますわ！」

わたくしは立ち止まる二人と、園川君を叩き起こして、皇君を追いかけて教室を出て行った。

手分けして、探していた昼の放課後。みんなで、手分けして探していた。

プリカ様が心配なのか。夜奈月さんからわたくしの腕の中に納まったプリカ様と一緒に校内を歩いていた。

いつの間にか、足の速い皇君を見失った長峰さんと合流する。

それから、『織香部』全員で皇君を探す。

二時間ほど歩きまわって、一人で探していたわたくしは、中庭にたどり着く。

そして、中庭でわたくしは、目的の彼がベンチに座っているのを見つけた。

「あれ、皇君ですわ！」

声をかけようとしたとき、少し奥から一人の女子生徒が歩いていった。それは、夜奈月さんですの。

「皇君、ここにいたんだね」

ベンチで、相変わらず携帯電話を見ていた。

彼はちらつと夜奈月さんをみて、ベンチの端のほうに人を避けるようにずれた。

「大変だったね、あずさちゃんに見つからなかった？」

「うん、何とか……」

「皇君は、クラスで友達とかいるの？」

しかし夜奈月さんの問いに、黙々と携帯電話を見ていた。

ただ、なんだか彼の表情はちよつと赤い。

思わず携帯を持っていない左手で、自分の顎を触っていた。

「いません」

「そっか、皇君もあたしと同じで編入組だからね。なかなか友達作るの、大変だよ」

東城学園は、小中高一貫教育ですわ。

二人とも編入で、ほかの学校から来た共通点がありますの。

「ねえ、皇君。もうちょつと、みんなと話したほうがいいよ。」

なんか部活でも、浮いている気がするし」

「……はい」

「皇君は、楽しいの、学校？」

「えっ、あっ」

「あたしは、楽しいよ。学校きれいだし、変な部活だけど、友達もできたし、中学から行きたかった学校だから」

夜奈月さんと皇君、なんかちょっとよさそうな空気を出していますね。

皇君は、夜奈月さんのほうを興味深そうに見ていますわ。

「皇君、あのね、お互い名前で呼び合わない」

「えっ、でも」

「同じクラスだし、同じ編入組だし、同じ部活だし。」

なんかあたしたちって、共通点あるし。

これからも、一緒になること多いからね。皇君、名前は？」

「悠、だけど」

「いい名前だね。あたしはね、椿っていうんだよ。夜奈月 椿、よろしくね、悠」

わたくしは、プリカ様を抱きかかえながら自然な二人を見ていた。

そう、これですわ。皇君に足りないもの、それが青春を謳歌^{おつか}するコト。

彼は、『破壊の皇帝』だけではありませんの。

本来は学生として、生きていかなければならないものですから。

わたくしは、二人をもう少し植え込みに潜んで優しく見守ることにしましたの。

「悠、あたしのこと呼んでみて」

「えっ、あ、夜奈月さん」

「もうっ、椿って呼ばないとだめだよ」

「えっ、えっ……」

「ちゃんと言うの。あたしも、ちゃんと呼んだんだから！」

「は、はい、ごめんなさい」

夜奈月さんに言われて、すごく困った顔を見せた皇君。ちよっと顔も、赤いですわ。

「じゃ、じゃあ……椿」

「よくできましたね、うん」

そんなベンチで二人は、まだ少し離れた場所に座って互いに向き合っていた。

「なんか、初めてだね。こうやって話すの」

「えっ、ダメ」

「ダメ？」

夜奈月さんの語りかけに、皇君は拒絶した顔を見せた。わたくしは、皇君のわずかな反応を見逃さなかった。

「あれは、『破壊の皇帝』？」

皇君の背後には、一人の男の姿が見えた。銀髪のはねた、鋭い目つき
の男性。

わたくしの背中に、一瞬にして恐怖が走った。

夜奈月さんは、皇君が持っている携帯電話を見つけた。

「ねえ、悠。いつもさ、携帯電話で何、見てるの？」

「えっ、えと……」

夜奈月さんが、ベンチと皇君の距離を一気に詰めていく。そして、夜奈月さんは皇君の携帯電話を覗き込んだとき、顔が、一瞬にして赤くなる。

「『自殺サイト』？悠、これ……ダメ！」

夜奈月さんは、すぐさま皇君の携帯電話を奪い取ろうとした。しかし、その夜奈月さんに対し、今度ははっきりと皇君の髪の毛が突っ立った。

「『破壊』、夜奈月 椿のしん……やめろ！」

そのまま反射的に、皇君は後ろに両足を使って器用に跳ねた。

夜奈月さんの手は、皇君にハバリとかわされ、ベンチにうつぶせた。ベンチで寝そべる夜奈月さんは、皇君を見ていた。

「悠、ダメ、死んじやいけないよ！」

「うるさい！俺は人を殺したんだぞ！」

しかし、その声はいつもの皇君の声ではなく、はっきりとした強い声だった。

威圧感のある、いつもとは違う人格『破壊の皇帝』、その姿に変わっていた。

赤い目が、血の色の様に見える。

初めて見たものは、彼の威圧感に驚き、おののくだろう。

冷たい空気を放ち、わたくしも恐怖があった。

でも、夜奈月さんは、彼のほうを険しい顔でじっと見ていた。

「皇君、もうやめましょう！」

遠くから見ていたわたくしは、もう見ているわけにはいかった。

植え込みから出て、彼を睨む。

疲れ切ったわたくしの顔を見た皇君は、顔を歪めて苦しそうな表情へと変わっていく。

「もう、関わらないで！」

その声は、二重にも聞こえた。弱い声と強い声、二つの声を発した少年。

わたくしたちから、逃げるように走り去っていく。ようやく聞こえた心の声に、わたくしは固まってしまう。

「先生、悠と何があったの？」

夜奈月さんは、ベンチに座ったままわたくしを見ていた。

「もう、夜奈月さんの役目は終わりですよ。」

わたくしは、彼を追いかける必要はありませんわ！」

「はぐらかさないでください、先生！」

しかし、わたくしは走りにくいハイヒールで、皇君を追いかけて行つた。

無視された感の夜奈月さんは、膨れたような表情で、後を追いかけていくのだった。

わたくしは、あの場所に気づいたら戻っていた。

一年半ほど前に、起きた体育祭のあの事件。

グラウンドは曇り。

土曜日の夕方、さすがに部活で使っている生徒たちもほとんどいなく静か。

その静かさが、悲しさと呼び起こす。

時折吹く風は、亡くなった彼女の泣き声であるかのように聞こえる。

わたくしが、プリカ様を抱きかかえてその場にたどり着いたとき、

彼はテントのあった位置に立ち尽くしていた。

「はちきれそうだよ、織香！」

皇君は、完全に『破壊の皇帝』へと姿が変わっていた。

赤い目は、グラウンドの土を見ている。

「もう、迷わなくてもよろしいのですわ！」

凜とした顔でわたくしは、プリカ様を抱きかかえ立っていた。わたくしの背後は夜奈月さん、心配そうか顔を覗かせた。

彼女も、皇君のことを気にしているようですわ。

「皇君は、ずっと孤独でしたの」

そう、彼と初めて会ったとき、彼は死ぬ間際でしたの。

わたくしは、能力者として、『破壊の皇帝』である彼の力を欲していましたの。

もちろん、プリカ様を奪い合う聖戦と名付けられた戦いに、勝利するため。

「だからといって、あなたが死ぬことを、誰も望んではいませんわ！」

「俺が存在することを、誰かが望んでいるのか？」

俺はお前専属の、殺人兵器なんかじゃない」

「違うと思う」

そこに、わたくしの背後から夜奈月さんが声を出してきた。

「織香先生は、悠のことをちゃんと考えているよ。」

だって、悠は一人なんかじゃないから！」

「えっ、でも、ボクはこの能力で、いつも一人になっていた、だから」

「そんな優しい悠は、ただ寂しいからだけだと思う」

「うるさい、椿！」

激しく怒った顔を見せた、『破壊の皇帝』。

そのまま、夜奈月さんの首元を激しくつかんできた。

「『破壊』するぞ！お前の心臓」

「させませんわ、夜奈月さんも、皇君も」

わたくしは、抱きかかえた赤ん坊プリカ様の頭をなでた。

すると、さっきまで眠そうな顔を見せていたプリカ様の目が、大きく見開いた。

その眼の色は青く、澄んだもの。

そして、わたくしの胸にしっかりとしがみついたかと思うと、目だけをつぶった。

「ぷりぷり、プリカ様、わたくしのお願い聞いてくれますの」

「にゅにゅにゅっ！」

わたくしが優しく語りかけると、突如、世界の色が灰色に変わる。土のグラウンド、サッカーゴール、トラックの白線、周りの木々の全ての色が灰色へと変わる。

そして、夜奈月さんや、上を飛んでいたむく鳥が、まるでビデオの一時停止のようにぴたっと止まる。

色があるのは、わたくしとプリカ様、そして皇君ではなく『破壊の皇帝』。

プリカ様は、『時を操る赤ん坊』。灰色の世界は、時が止まった世界。絶対的な能力。

プリカ様に、声を語りかけて眠っている間は、ずっと時が止まる。だから、プリカ様は、今わたくしの腕の中で安らかな寝息を立てていた。

「時を、止めたな」

「わたくしは、あなたのクラスの担任ですの。」

担任教師は、生徒を守る義務がありますの！」

「コイツには何の幸せもない、哀れな男だ！」

「違いますわ、彼はあなたを抑えるために、一生懸命、苦悩しているだけですわ。」

それに、さっき見て確信しましたの。

皇君、そのためにあなたには、『織香部』がありますわ!」

わたくしは、微笑みながら言い彼に歩を進めた。

迷った難しい顔の『破壊の皇帝』は、指をくわえ立ち尽くす。

「彼は、いまだに道を失った赤ん坊ですわ。よしよし」

わたくしは、わたくしより少し背の高い少年の頭をなでてあげた。

それはプリカ様を、泣き止ませるためにいつもやること。

泣き出しそうな顔へと変わる跳ねた銀髪の少年は、目を細めていた。いつの間にか、目の色が黒く戻る。

「先生……ボク、死にたくありません」

「そう、よかったです」

「織香先生や夜奈月さんがいる世界に、ボクはまだいたい。それにボクは……」

わたくしは彼を左手で抱きかかえようとしたとき、わたくしの右手に抱きかかえられたプリカ様は眠っていた。

「にゅにゅ」

どうやら男性アレルギーのプリカ様は、皇君が怖いらしいのですの。

そして、次の瞬間プリカ様が目を覚まして、世界に色と時間が戻った。

プリカ様のばたつく足で、わたくしと皇君の距離が一瞬離れた。

「夜奈月さんが、好きになりました」

はじめての、告白。皇君の言葉は戻った時間の中、夜奈月さんにもしっかり聞こえた。

「えっ? 何? あたしが、好き?」

「あ、あんなところにいたわ!」

そういうと、校舎側のほうから三人組の男女がやってきた。

少し前にいた広州さんは、やはり驚いた顔を見せた。
長峰さんと園川君は、広州さんの後ろから急いで走ってくる。
そのまま皇君の顔を、指をさしていた。

「ちょっと、皇。あんたね、何をやっていたの？」

なぜか園川君のフィギュア（六分の一長峰 あずさ）を持って、肩で息を切らしつつも皇君をにらむ。園川君の頭には、たんこぶができていた。

「ご、ごめんなさい」

「このスーパーアイドルに、説明してもらっわよ！」

「あずさ、うるさい」

「ちょー生意気！あんたね、年上に対して、しかも、スーパーアイドルのあたしに対して口のきき方がなっていないわよ！」

「芸能歴は、伊豆奈のほうが上です」

などといつも通りに、長峰さんと広州さんが睨み合っていた。

「どうなっただ？結局のところ？」

「ええ、終わりましたわ」

部長の園川君は、カメラをぶら下げて聞いてくるが、わたくしは満足げに答えようとしたが、時計が視界に入る。

時計は、五時五十五分を指していますの。

まずいという気持ちだが、わたくしに湧き上がった。

「はっ、もうこんな時間ですわ！」

わたくしは、眠そうなプリカ様を抱きかかえて、ハイヒールで再び走り出した。

「今日の『織香部』はこれで終了ですわ。

夜奈月さん、後で女子更衣室に来てくださいな！」

などと、業務連絡を残しつつ、急いで女子更衣室を目指すのだった。

わたくしには、居場所がありますの。そう、夜奈月さんの寮ですわ。夜奈月さんと夜六時過ぎに、更衣室で合流をしますの。黒猫になった、呪われた姿で。

そんなわたくしは、もちろんプリカ様を抱きかかえられず、白いクッションの上に丸くなっていましたの。

プリカ様に、哺乳ビンでミルクを悪戦苦闘しながらも上げた夜奈月さん。

あまり語りかけられずに、わたくしは猫の姿で見えていましたわ。そういうば、今日もおながすきましたわ。

「ミャーミャー」

わたくしは、猫の鳴き声でご飯を夜奈月さんにせがんだ。

しかし、プリカ様にミルクをあげ終えた夜奈月さんは、無視して自分の料理を始めましたの。

夜奈月さんは、学校帰りになぜか立ち寄った書店で、買ってきた料理の本を見ながら、調理していましたの。

（そういえば、夜奈月さん、料理をあまり作ることがありませんわ）などと、空腹なわたくしは、夜奈月さんの料理を見守ることにしましたの。

それから、慣れない手つきではあるもののできたのが野菜炒め。

「うーん、こんなものかな」

テーブルに運んだ、夜奈月さん。

今日は豪勢な夕食ですわ、などと思い始めたら、わたくしに取り分けることもなく一人でご飯を食べ始めた。

おあずけをくらったわたくしは、夜奈月さんの膝の上のつかかっ
ていく。

でも、すぐに手で払われてしまう。

「先生、ダメですよ。悠のことをちゃんと話してくれるまでご飯抜
きです！」

くっ、なんということでしょう。

ややふてくされた夜奈月さんは、一人で黙々とご飯を食べていた。
わたくしがテーブルに飛び掛かって、ふり払われて、結局その日
はわたくしのご飯がありませんでした

第二話：子役と鳥かご（前書き）

——登場人物紹介

広州 伊豆奈：『織香部』部員、子役、小四女子。本編主人公。
赤い髪でカールがかかっている、童顔で無邪気な人気天才子役。
しかし、普段は対照的におとなしく、周りと無駄な関わりを持たない。

最近、彼女は気になる声を聞いてしまった。

三野宮 織香：『織香部』顧問、既婚者

東城学園高等部で、数学を教えている。ショートボブで、色白な大人の女性。

完璧主義者で、理論的。伊豆奈が尊敬している、唯一の人物。

園川 哲治：『織香部』部長、エロい男子。悠や椿、あずさより一
つ年上。

眼鏡をかけている痩せた男で、常にカメラを首にぶら下げている。
好きなものは、フィギュア。彼のことを、エロイ人物だと思っている。

皇 悠：『織香部』部員、気弱な少年。

ぼさぼさの銀髪、気弱で人見知りな少年。ただ、二重人格『破壊の
皇帝』という人格を持つ。

そんな彼の言葉が、伊豆奈の心を揺さぶった。

広州 美雪：伊豆奈の母親兼敏腕マネージャー。

眼鏡をかけていて、背がすらっと高い。若干幼さがのこる顔の女性。
伊豆奈にとって、頭の上がない母親であり、マネージャー。

長峰 あずさ：『織香部』部員、ツンデレ毒舌アイドル。
意外と可愛いロングヘアと、目立ちたがり屋の大きなリボンが特徴。

伊豆奈から見て、彼女はかなりダメな部類。でも唯一会話できる相手でもある。

夜奈月 椿：『織香部』部員、背の高い女子高生。

ポニーテールで、かわいい部類の女子高生。

伊豆奈の頭を撫でて来るけど、伊豆奈はかわいがられるのが嫌がつている。

北斗 元気：伊豆奈のクラスメート、小四男子。

団子鼻に、黒っぽい肌、少し太った体格。

やんちゃで、漫画に出てきそうなガキ大将っぽい彼に、伊豆奈は声をかけられた。

長峰 胡桃：あずさの妹、あずさと一緒に住んでいる。

ほっそりした体、やつれた顔。

ショートヘアに、あずさと顔は少し似ている。

第二話：子役と鳥かご

私は数日前に聞いたその言葉を、いつまでも忘れられないでいた。小さな木製の椅子に座った私は、自分の出番を待っていた。

赤いカールの髪に、白いシャツと子供用ジーンズを着た私は難しい顔で前を向いていた。

私の名は、広州 伊豆奈。都内にある、私立東城学園小学部四年生。その上に、もう一つ私には肩書がある。

ここは、小さな教室。といっても、普通の教室ではない。

大きなクレーンや、半分に切り取られた教室、廊下も途中までない。そう、作られた教室だった。

「はい、本番行きます！」

私の目の前には、数人の大人がいた。

三十代から四十代の男性が立ち上がって、メガホンを持っていた。

ここはドラマスタジオの、教室のセットだった。

そして私は、さっきまであの教室のセットの中にいた生徒。

私のもう一つの肩書は、子役。自慢かも知れないけど、みんなから天才子役と言われていた。

「どういうことだよ、ちゃんと見たらう！禁断の愛を」

目の前の小学生の役の子が、演技をしていた。

「それでも、あいつのことを気にしちゃダメだ。あいつのことだから」

私の目の前には、演技が繰り広げられていた。

それでも、私はドラマの作られたセリフよりも、あんなにシンプルな言葉が頭から離れられなかった。

——数日前、私は『織香部』という付属高等部の部活に唯一、小学生の私が参加していた。

織香先生という、大人の教師に憧れて入った部活。

そこで、ある日みんなで探し物搜索をしていた。

搜索の最中、私は校舎からグラウンドに向かうときに、その探し物が見つかった。

グラウンドにたたずんだ探し物は、失踪した一人の男子高生。

二時間の搜索の末、諦めかけたときにそこにいた。

男子高生は人気のないグラウンドで、目の前の女子高生に言った一言。

「夜奈月さんが、好きになりました」

いきなり告白をした、男子高生。

普段はものすごくおとなしくもじもじした彼が、はつきり口にした自分の想い。

それを遠くからグラウンドの中で、私は見ていた——

なんかすごく懂れる、わたしはそんな思いで二人を見ていた。

そんな目の前では、教室のセットで二人の男の子が演じていた。

「梓が、先生にいじめられていることを、見過ごせていうのか？」

「梓は、まだ助けを求めている。だから僕らでは、どうにもならない！」

「ふざけるな、梓の顔のあざを見ただろう！」

ちなみに、「梓」とは私のドラマの役の名前。『北条 梓』って、

役名をもらっていた。

ちょっと名前が気になるけど、わたしはこの役に、一生懸命に打ち込んでいた。

先生を信じながら、いじめやひどい仕打ちを受けるけど、誰にも言えずに耐え続ける女の子の役。

今は二人の男の子が、私の出ていないシーンで言い合うところを撮影していた。

私は、メイクさんに殴られたあざや、青たんのチェックをしてもらっていた。

でも、なんか落ち着かない。

生まれて初めてもらった主役なのに、頭の中は部活では、あの事と自分と置き換えて考えていた。

「ねえ、伊豆奈」

と、そこに出てきたのが、なぜか少し背の高い女。

長い髪で、ラーメン屋が着るような白い割烹着を着た若い少女。

優雅さよりは、どこにでもいるちよつとだけかわいい少女。

吊り上った目と、威張ったような顔が印象の女は、

「エキストラその二、長峰 あずさ」

「なんで、あんたが主役よ！」

明らかにふてくされた顔を見せ、眉間にしわを寄せて私に近づく。

そのままあずさは、私の頬を引っ張ってきた。

「品がないから」

「馬鹿にしないでよ、あたしはアイドルなんだからねっ！」

長峰 あずさ、一応アイドルとして事務所から売り出されていたが、あまり現場の人氣がない。

毒舌をはき、いろんな芸能ネタの暴露が多く、視聴者から人氣はあ

るみたい。

だけど、芸能関係者からいらぬことを言われまくって仕事を減少して、やがてチヨイ役の扱いに。

まあ、批評ばかりしているだけの中身のない人は私も嫌い。

「伊豆奈、なんか辛気臭い顔わよ。

ちゃんとセリフ、覚えなさいよ。あんたは、演じることだけが得意なんだから」

「女優の顔を、気安く触らないで」

むつとした私はあずさの手を、ぱしつとはたく。この現場で、よく会話をするのがこのあずさ。

高校生の彼女とは、同じ部活ということもあって、何かと向こうが絡んでくるんだけどね。

ただのやつかみよ。芸がないのは、これだからいけないわ。

「伊豆奈、さつきNG出したでしょ!」

「うるさい、あんたもエキストラだからもう出番終わったでしょ、さつさと帰んなさいよ!」

「このスーパーアイドル長峰 あずさ様が、どうしてエキストラよ、ふざけないで!」

あずさは、明らかに不満げに私に愚痴る。ぐちぐちと長いので全部割愛。
かつあい

そんなあずさは、愚痴に飽きたのか、じーっ、と私のほうを見ていた。

「伊豆奈、今日は精彩欠いているわね、ど、どうしたのよ?」

「どうも、していないわ」

でも、あずさに指摘される通りに精彩を欠いていた。

珍しくNGは出すし、会話に詰まるし、なんだかちよっとドキドキ

する。

芸歴七年、三歳からこの世界に投じた私としては、ありえないミスばかりを連発していた。

もちろん、それはあの事を思い出して羨ましく思えたからに他ならない。

「あんたは、あたしのライバルなんだからしつかり……」

「はいはい、それまでよ、ローカルアイドルのエキストラ。うちの女優に、手を出さないでちょうだい」

そんなとき、私の背後から一人の女性が出てきた。

彼女の名は、広州 美雪。私のママにして、敏腕マネージャー。

黒縁メガネで、知的な水色のスーツを着た女性。ショートヘアで、やや目の細い私のママ。

「なによ、あたしはローカルアイドルじゃないわ、スーパーよ」

「スーパーがついていなかったわね、スーパーローカルアイドル、こつえばいいのかしら。」

伊豆奈、こういう相手は無視しましょう。女優としての沽券こけんに関わるわ。

あれほど言っただじゃないですか、こんな輩と関わるとあなたの演技が悪くなってしまうですよ」

「はい、ママ！」

私は、ママに対してもものすごくにこやかな顔を見せた。

それはカメラが回った時に、見せる無邪気な子供の顔。

生まれつき訓練した無邪気な笑顔は、どの子役にも負けない自信があつた。

目の前のあずさは、私の豹変ひょうへんぶりにやや呆れた顔を見せた。

そんなママは、私の無邪気な笑顔を見せるとちよつとだけ笑って頷いた。

そんなママの笑い顔が、私はこの世で一番好きな表情。

「そう、ならいいわ」

と、私のそばから離れて行った。

一般的にマネージャーは、現場より少し後方のエリアから見るルールがあった。

たとえ母親でも例外はない。

わたしは、ママの姿が見えなくなると再び目をやや陰しくして、あずさのほうを見た。

「で、あずさ、一つ聞きたいことあるけどいい？」

「な、なによ？なんで、ふてぶてしい顔をするの？」

「あずさは、好きな人いる？」

「もちろんいるわよ」

自信たつぷりの顔を、見せたあずさ。胸を張った態度が、勝ち誇っていた。

「あたしは、もちろんファンよ。アイドルは、鉄の掟で恋愛禁止だから」

「あつ、そう。ファンなんて、どうせいないくせに」

「なによ！ムカツク。ちゃんとファンレターだって、来るんだからね！」

「はい、北条 梓ちゃん、本番入りま〜す」

と、私のそばに二十代前半女性のディレクターさんから声がした。

「はい、今いくね」

私は一瞬にして、無邪気な子供の顔に変えて見せた。

そのままディレクターが、私を引き連れて、スタジオ中心のセットの中へと入っていく。

背後のあずさに対しては、私はあかんべーをして離れて行った。

私は、^{リアル}実際の退屈な学校に来ていた。

あれから二日後、私は子役と両立した小学校に来ていた。

スタジオのものと違い、本物の教室。そこには、ちゃんと私の机があった。

東城学園小学部はGWという大型連休を終えた生徒たちが、みな一様にGWの思い出を楽しそうにおしゃべりしていた。

GWの思い出、結局私は仕事。

ほかの大人の俳優さんと違い、まとまったGWでドラマを撮ることが多い。

生まれて初めての主役、ということもあるけど。

にぎわうクラスの中、私は静かに台本を読んでいた。

退屈な授業、小学校のものはどこか子供じみていた。

わたしは、世界にのめりこむかのように台本を黙々と読む。

周りの子供な小学生は相手にしない、そっけない私。

これはいつもの光景であって、周りと溶け込めもうとしない自分がいた。

それは、私の感情の無駄遣いを避けているからよ。

「あ、広州さん」

「何？」

「えっと、この前のドラマ見たよ。すごくかわいいね」

「そう、ありがと」

話しかける女子に、私は台本に顔向けたまま会話をした。
そんな女子は、私に興味があるのだろう。

でも、私は相手には興味がない。それは、私はずっと大人の社会を歩いていたから。

子供の社会が、なんだか小さく軽く見えてしまう。

「言いたいことは、それだけ？」

「え、うん、ごめんね。台本読んでいるところを呼び止めて」などと女子は、そそくさと私の席から離れて行った。

だけど、私は人を遠ざけている理由はそれだけではない。座右の銘もあるから。

そんな時、五人組の男子が遅刻すれすれで入ってきた。

五人のグループを私は台本の中から、わずかに逸らしてあるものを探す。

そこには、私の意中の人がいた。

「北斗」

やや日に焼け、団子鼻のあまりかつこよくはない男子。

白と水色の縞々しましまのシャツを着ていて、短パン姿の小学生が、黒ランドセルを背負って教室に入った。小太りの男の子が好きになった私には、理由があった。

——四月入って間もなく、春の陽気が心地よい日。

この日は、二回目の図工の時間。そこで、外に出ていた。

図工の先生が言ったこと、それは、

「春を感じましょう、みなさん今日は外で絵をかくてね」

というものだった。つまり写生大会。

桜が散り始めの今日は、春を感じるために学校のそばにある公園に

来ていた。

周りの生徒たちは、みんな仲良しグループを作りそれぞれ散っていく。

でも、私はこの公園に来たことがなかった。

「どこで描こう？」

しかし周りで距離を置いている私には、誰も近づいてこない。

「同世代の友達と群れる必要はない、大人と交わればいい。」

人間は大人とつき合う時間のほうが、子供の四倍長いんだから」という、母親の座右の銘を忠実に守っていたから。

始めてくる公園に私はとりあえず、うろろろしていた。

歩いて五分ほど、私は自分の認識の甘さに悔いていた。

（なんで、こんなに広いの？）

都内でも数少ない公園なのか、ものすごく広く感じた。

周りは森のように木々が見えた。緑やピンクの木々と、赤と青の花。それに対して、周りには人がいない。

きれいという感嘆の声も出なくなつて、人の姿もなかった。そして、少し寂しさを感じていた。

「寂しくは、ありません」

何となく、孤独に負けないように声を発した。でも、誰も反応がない。

心細く、わたしは周りを見回していた。

こうしてきれいな場所だと、逆に不安も強くなるじゃない。すると不意に背後からガサガサつと、音がした。

「な、なに？」

まさか、熊？それとも大蛇などと考えていると、出てきたのが少し大きな影。

「うがーっ！熊だぞ！」

「えっ、きゃっ！」

と、大きな影は両手を挙げてあたしの目の前に現れた。

思わず、びくついた私は二散歩下がり腰が砕けた。

地面にへたつた私は恐怖で、凍りついたが目の前にいたのが熊ではなく人だった。

「はははっ、広州。何びくついているんだよ。熊はしゃべらないぞ」
「えっ！」

驚いた私は、すぐに冷静になって目の前に現れたのが短パンとシャツの男子。

イケメンとは言えず、少し不恰好な顔。

団子鼻のひょうきんな部類に分類される男子が、私に向けて馬鹿笑いでいた。

「怖かったんだな」

「怖くありません、ただ不意打ちで……」

「なんか、一人で歩いていたら。広州、お前こんなところで何してるんだ？」

「えっと、その春を、描く場所を……」

そっか、と私の話を相槌入れながら聞いていた。

そんな男子が、不意に私の手をつかんだ。

「じゃあ、こっちこいよ。俺も迷ったから、一緒に歩こうぜ」

「馬鹿じゃないの、一緒に歩いたら……」

「大丈夫だって、俺にまかせる。このあたりは、俺の庭みたいなものだ」

何の根拠もないことを、彼は言っていた。

そんな明らかに子供っぽい彼に、やれやれと思いながらも、私はつ

いていこうとなぜか思えてしまった――

そんな彼との出会いで、妙に惹かれていった。

教室で彼の背後を見ていると、ドキドキしている自分がいた。

あの後何度も声をかけ、やはり彼が好きだと自分で感じていた。それでも、半信半疑なところがあったけど、

私の姿は、今体育館の裏にいた。

放課後、私は教室から出る北斗を、半ば強引に呼びつけた。

壁にもたれかかり、人気のない場所で私はただ時計だけを見ていた。

「北斗が好き」

その気持ちが、徐々に自分の中で固まっていることが分かった。

その証が、私の開いている台本の中に忍ばせていた。

（まさか芸能人の私が、一般人に向けて書くとは思わなかったわ）
そこに忍ばせたのが、昨日一晩かけて書いたラブレター。

彼に対する思いが、こめられた一枚の紙。

かわいらしいピンク色の封筒に、入れていた。

（やっぱり渡さないと、私の気持ち）

そう思いながら、私は時間まで待つことにした。

ドキドキしながら、ハラハラしながら。

小さい心は、初めてのドキドキを楽しんでいたかもしれない。

待つということは、こんなにドキドキするものだとは私は、初めて感じた。

今日は、『織香部』に遅れることをすでに伝えてあった。

そんな私は、まだ待っていた。ピンクの時計のさす時間は、三時四十分。

もう、待ち合わせの時間を過ぎて、それでも待っていた。

（遅いね、もう忘れちゃったのかな？）

胸のドキドキが、やがて不安に変わっていく。

不安が、表情に出さないはずの私に出てきた。

そんな時に、突如私の足元にサッカーボールが転がってきた。

不満げに私があると、そのボールを追いかけて一人の男子が姿を現した。

「わりい、悪い広州。待たせたな」

黄色いビブスをつけて、短パンの元気な男の子、北斗が姿を見せた。

「遅い、北斗！」

「で、なんだよ？」

そっぴいながら北斗は、私からサッカーボールを受け取った。

そのまま器用に、リフティングを始める。

おどけている北斗、そっぴえば彼はサッカーをやっているんだった。

「またサッカー？」

「サッカーじゃない、フットサル。今、面白いんだぜ」

と言われたが、聞き覚えのない言葉が出てきた。

それでも、北斗はリフティングを止めることはしない。

「真面目に聞いて！」

リフティングに夢中の北斗は、私の声に反応した。

でも、北斗は頭でくるとボールを回していた。

私は手を伸ばしてボールをとろうとしたが、北斗は私の手をあつさ

りとかいくぐって、私は無様に転倒してしまう。小学部の制服でもある白いワンピースについたほこりをはたくと、北斗は私が落としたピンクの封筒を見つけた。

「なんだ、これ？」

いつの間にかボールを右足に収めた北斗が、私の封筒を拾った。なんか、最悪。

「あつ、えと、北斗に渡そうと思って……」

「そうか、はい」

「それだけ、鈍感？」

北斗が、まるであまり相手にしていない様子を見せて、私はものすごく不快な顔を見せた。

しかも表を見て、すぐに私に手紙を返してきた。

「え、だから？ 広州？」

「これ、何かわかるの？」

「手紙だろ、ファンレター、ラブレターか？」

まあ、そうだけど、と私は言いかけた。でも、北斗は淡々とボールを右わきに抱えた。

「でも、今はフットサルに夢中で、俺は、そんな恋している場合じゃないんだ。

今度、大事な試合もあるし。よかつたら今度の試合、見に来いよ」

「えっ、ちよつと……」

「じゃあ、練習行ってくるから、また明日学校でな」

そのまま、そそくさと北斗は私に背を向けて去っていく。

私は、手を伸ばして北斗を引き留めようとしたけど、北斗はそのまま体育館の裏から消えて行った。

私は呆然と、ただそれを見守るしかなかった。

何かが零れ落ちたように、わたしは呆然として動けなかった。

（なに、やってんだろ。私って、馬鹿じゃない）

次の瞬間、私の心は締めつけられるように苦しかった。

私は次の日から、学校がものすごく嫌になった。

フラれた彼と顔を合わせるのが、ものすごく辛かった。

そんな朝の教室で、私はいつも通りランドセルを置いていた。

しかし、私は不意に周りのわずかな変化が気になっていた。

それは、小さな声で聞こえる話。

普段からクラスの中で周りの生徒を子ども扱いして遠ざけていた私は、クラスの評判はあまりよろしくない。そんな私が着席して先生が来るのを待っている間、北斗の来ていないこの教室で、聞こえた言葉に固まった。

「広州って、昨日フラれたんだって！」

その言葉に、私は一気に顔を赤らめた。

なんで噂になっっているかわからないが、ものすごくショックを覚えた。

「いい気味、あの子、前から生意気だったのよ」

「ねー、誰にフラれたの？」

「北斗君だって。まあ威張っている北斗と、生意気子役ならお似合いね」

などと、女子の声が聞こえた。

悪い噂、私に聞こえるように言っているようで、ものすごく嫌な感じがした。

私は、ものすごく泣きたい心を抑えつつ、そのままドラマの台本を広げた。

涙を出す練習はしても、涙を止める練習を私はしていない。
ドラマの台本に、顔を隠しながらもやっぱり涙は出ていた。

それは悔しく悲しい、フラれたあの出来事。

好きという間もなく、フラれて残った後悔。

（なんで、あんな男子^{北斗}を好きになったんだろう）

経緯を考えても、答えなんて出てこなかった。それでも、私は女優自分の感情を抑えつつ、再び平静を装う女の子を学校で演じることが心に決めた。

なんでこんなことが、度重なるの。

フラれた翌日、結局昨日休んでしまった『織香部』に、今日は姿を見せる。

そんな、私は唯一尊敬できる大人の女性、三野宮 織香先生を頼るべく、東城学園高等学部にある教師棟の部室に向かった。

数学準備室のドアを開けたとき、私は今一番見たくないものを見てしまった。

そこには、二人の男女がいた。

二人とも同じ深緑色のブレザーを着ていて、東城学園高等学部の生徒。

銀髪のショートカットで気弱な男子は、皇 悠先輩。

そして、黒髪ポニーテールの女子は夜奈月 椿先輩。

二人は、机をくっつけ体を寄せ合って教科書を広げていた。

「ここはね、こうするの、悠」

夜奈月先輩は、にこやかな顔で隣の皇先輩に勉強を教えていた。

あの日グラウンドで、皇先輩は夜奈月先輩に告白して、あれ以来、二人はなんだか仲良くなっていた。

それが、今の私にとってもものすごく辛いことのようにも思えた。だから、装う平静。

「あ、伊豆奈ちゃん。こんにちは」

「先輩たち、なにをやっているんですか？」

「試験が近いから、一緒に勉強やっているんだよお。」

それより昨日、伊豆奈ちゃん休んだでしょ。ドラマ忙しいの？」

「別に」と、どこかの女優のようなふてくされた顔で、私は自分の席に着いた。

「あ、あの……広州さん」

皇先輩は、やや申し訳なさそうに私のほうを見ていた。

「何？忙しいんだけど」

「何か、あつたんですか？いつもと違います」

いつも通りに私は接していたけど、皇先輩に指摘されて、私はつまらない顔を見せた。

ランドセルを床に置いた私は、表情をうかがわせないように、台本を広げて見ていた。

「いつも通りです、普通です」

「あ、そうそう、伊豆奈ちゃん」

夜奈月さんは、なぜか私の顔を見て妙ににこにこしていた。

私は、台本から目だけをなぜか恐々と出していた。

「伊豆奈ちゃん、今日来たってことは、ついに、園川先輩の『毒牙』」

にかかるってことだね。ご愁傷様です」

「えっ、そうですね……見て……みたいかも」

「なに、それ？」

私は『毒牙』という言葉に気になるが、夜奈月先輩はなぜか笑っていた。

草食系の皇先輩も、珍しく興味を示していた。

「あたしじゃあ、ダメだったし、あずさちゃんも無理だからね。

アレは、やっぱり伊豆奈ちゃんだね」

「でも、本人の同意が……」

「ちよつと、びっくりするよね、強引だし。

でも伊豆奈ちゃんなら、かわいくなると思っなあ。

元々、伊豆奈ちゃんって、かわいい属性だしね」

「私はかわいくありません、女優です」

夜奈月先輩はかわいいものが好きらしいけど、私は「かわいい」といわれるのが好きではない。テレビの中では、タレントで、子役だから言われ続けているだけ。

年齢だけで、人を批判することは私は好きじゃない。

夜奈月先輩の「かわいい」発言で、いつも通り私は不機嫌な顔をしていると、私の背後から突如手が伸びてきた。

「えっ、なに」と、思わず声を漏らすと背後から一つの影が見えた。

「ふっふっふっ」

「誰？痴漢、いやーっ!!」

と、不敵な男の笑みに、つい演技で私は反応してしまった。すると、背後の男性の眼鏡がきらりと光り、やがて姿をはっきりと見せていく。

「伊豆奈、今日は逃げずに来たようだな。撮らせてもらっぞ」

「へっ、ちよつと……」

私は、ひるんだ顔と演技で背後の園川先輩を見ていると、私の着ていた白いワンピースが、いともあっさりと強引に脱がされていた。

「な、何するの？」などと突っ込みを入れる間もなく、高速移動した園川先輩は謎の高速移動で下着姿に。

そのあと、園川先輩はどこからともなく取り出した、ピンクのメイド服を取り出した。

ひらひらのついたその服は、Sサイズみたいでかなり小さい。

「お前は、これから萌え属性になるのだ！」

どこからそんな低音の声が出てくるかわからないほどの声で、私に語りかけた先輩。

眼鏡を光らせ、そのまま下着姿の私にそのメイド服を着させた。

ついでに、白いカチューシェをかぶせられた私。

小さなメイドの格好に、されてしまった。

「園川先輩、これはなんですか？」

ふりふりのメイド服に高速で着させられた私は、当然のごとく不満を先輩にぶつけた。

水色のブレザー、痩せている園川先輩は、眼鏡越しに私を眺めてそのまま首にぶら下げたカメラを構えた。

「なかなかいいぞ」

と、言いながらシャッターを、何回も押していた。

「先輩、もうやっちゃっているね」

「うん、すごいバイタリテイ」

夜奈月先輩と皇先輩は、なぜか暴走した園川先輩に呆気にとられていた。

「なんで、私がこの格好なんですか？」

「今日の部活で、お前にしてもらうからな」

「メイドの格好って、メイドカフェでもやるんですか？」

「ま、それに近いかな」

園川先輩の言葉に、ものすごく不愉快な顔を見せた。

すると、園川先輩の後ろからもう一人厄介なのが姿を現す。

「あら、伊豆奈。メイドね、似合うじゃない」

そんな時に、数学準備室に入ってきたのが私の腐れ縁で、うるさい長峰 あずさ。

深緑のブレザー姿で、現れた彼女は高等学部の生徒でもあった。

「なんでいるの？毒牙アイドル」

私の言葉にあずさは、すぐくむっとしていた。単純で、分かりやすいわ。

「毒牙で、悪かったわね！」

「みなさん、お待ちどうさまですの」

そんな時、あずさの後ろから一人の女性が出てきた。

いつも通りの大人の女性、紺のスーツに優しそうな顔、私の憧れる

三野宮 織香先生。

ちなみに、いつも一緒に抱きかかえる赤ん坊のプリカちゃんは、見当たらない。

「織香先生、聞いてください！」

「広州さん、メイド服、お似合いですわ」

織香先生の軽い笑顔を見ると、私の反論する気はあっさり消失してしまった。

「そうだね、伊豆奈ちゃんよかったね。はい、これ」

そんな夜奈月先輩は、足元に置いていた通学カバンから、銀色のお盆を取り出してきた。なんで銀色のお盆が通学カバンに入っているのか、少々の疑問は残るけど。

「なんですか、これ？明らかに変です」

「広州さん、本日の『織香部』はこちらですわ」

そっぴいながら、織香先生がホワイトボードを、指さしてくれた。

そこには、『中間試験勉強会』と書かれていた。

「中間試験？それって、なんですか？」

「高等学部では、試験を一学期ごとに二回行いますの。

来週から、一学期の中間試験がありますわ。

我が『織香部』は、試験後に大きな依頼がありますので、中間試験を落ちないよう皆さん、今日はお勉強会ですの」

「依頼？何があるのですか？」

「それは、秘密ですの」

織香先生と呼ばれた大人の女性は、人差し指を一本立てた。

「私は、それで何をすればいいのですか？」

「広州さんは小学生ですので、みなさんに癒しのお手伝いですの」

織香先生の言葉に、わたしはちよつとだけ自分の服装について理解ができた。

このメイド服、着たような形跡がありますが、まさか園川先輩が家で着ているわけではないでしょうね。などと勘繰りながら、私は高等学部の廊下で、お盆を運びながら歩いていた。

『織香部』のある高等学部の廊下は、教師棟という生徒のあまり通

らない場所なので、人とすれ違うこともない。

冷静に考えたらただのお茶くみというわけだけど、このままドラマの撮影に行くよりはまだましかも。今日は、私のメインの撮影が五時からだから時間は空いているし。

私は『織香部』に個人のマグカップに、給湯室からお茶をついで持ってきていた。

戸棚には、お菓子もあるのね。ちょっとだけつまみ食い、お菓子も持っていく。

皇先輩は、かなり渋い茶色の湯飲み。夜奈月先輩は、女の子らしいカラフルなもの。

園川先輩は、趣味悪いわ。ちなみにあずさと同じなんだけど、二人ともあずさの顔写真をプリントしたマグカップ。

なんでこんなものあるのよ、なんて思いながらも私は数学準備室に戻ってきた。

「お茶が入りました、ご主人様、お嬢様」

萌えるメイドという役を、私はやったことない。見たことはあるけど。

でも、あずさにレクチャーされて初めてやってみた。

「あー、かわいい、伊豆奈ちゃん」

椅子に座って勉強していた夜奈月先輩は、立ち上がってお盆で両手をふさがれた私の頭をなでた。

この人は、なんでいつも私の頭をなでてるのだろう。

それでも、満面の笑みになって夜奈月先輩は、私の頭をなでていると、

「あ、ありがとう、ございます、お嬢様」

一応、メイドの役を演じているので、しおらしい顔を見せていた。

「ふむ、メイド姿はいいな。これぞ、男のロマンだ」

奥の机から、私を卑しくいや見ている園川先輩。

一応この人部長だけど、すごくエロい。

もう一人の男子の皇先輩も、きつとそんな目で見ているでしょう。

丁寧に、私はお盆を中央に集めた机の上に置いた。

一人一人お茶を、丁寧に取り分けていく。

「広州さん、ご苦労様ですの」

白いカーテンそばに、椅子で腰かけた織香先生が優しく私に語りかけてくる。

「ちょっと、これ熱いじゃないの！」

「はい、お嬢様。申し訳ありません」

感情をこめて、うつろな顔を見せた私。

役を演じろと言われて、演じないわけにはいかない。それがプロ、

それが女優。

フライド私の女優魂が、適当な仕事を許さない。

あずさは文句を言うさまを見て、私はあずさのマグカップを手にとった。

うるさいクレーマーと思いつつ、私はからのお盆にあずさのマグカップだけに乗せていそいそと立ち上がった。そんな時、私のことを見て織香先生が立ち上がった。

「広州さん、わたくしも一緒に給湯室に行きますわ」

織香先生が、私と一緒に給湯室に来てくれることになった。

私は織香先生と、給湯室に来ていた。綺麗な給湯室は、清潔感のある小さな部屋。

ときばきと私は、メイドとしてお茶を入れていた。

プロの女優である私は、どんな仕事も手を抜くことはない。

そんな私の隣には、優しく憧れの織香先生が手伝ってくれた。

織香先生との出会いは、二年前。

小二の時、代理の教師としてきた織香先生に、悩みを聞いてもらったことが始まり。

役者として悩んでいた私に、アドバイスをしてくれたので、ずっと尊敬している。

優しくて、何より知的、理論的、そんな織香先生が私は好き。

「広州さん、本当にありがとうございますの」

もう一度、私に感謝の言葉をねぎらってくれた織香先生。

私は、すこし恥ずかしくなって、ねぎらいの言葉を受け取った。

「みなさん、試験通るといいですね」

「それは、大丈夫ですわ。」

広州さんは、みなさんが頭よくなるように、お茶を入れてくださいますもの」

優しい織香先生の言葉に、私はちよつとうれしくなっていた。

「広州さん」

「はい、織香先生？」

「広州さん、小学校で何かあったのです？」

織香先生の言葉に、私はどきつとした。

あずさのマグカップを持った私は、ちよつとだけ固まった。

「いえ、たいした……」

「隠さなくても、いいですね。広州さん、恋をしましたわね」

「はい、フラれちゃいました」

はにかみながら言うと、織香先生はすごく悲しそうな顔をしていた。でも、なんで織香先生が知っているんだろう。ちよつと、不思議な感じもした。

「そうですね、広州さん。あなたは、本当に思いをちゃんと伝えたのです？」

「え、その、伝える前というか、もう決まっていたというか……」

「広州さんが好きな人は、ほかに好きな人がいたのですか？」

「うーん、それは言っていないですね」

「そうですね、ならば、もう一度ちゃんと告白必要がありますわね」
そんな織香先生は、ポケットから一枚の紙を取り出した。

「織香先生、これは？」

「今週末の日曜日、フットサルの試合がありますの。」

そこに広州さんの大好きな、あの北斗君が出ますの」

「織香先生、なんでそれを？」

「わたくしは、皆さんの教師ですわ。」

生徒のことを、ちゃんと把握していますし、そういう努力は怠りませんの。

離れていても忙しい広州さんのことが、とっても心配ですから」

織香先生は、ちよつとずるいです。でも、そんな優しさに私は安心もしていた。

「広州さん、今週の日曜日は空いていますわね」

「はい、空いています」

「ならば、行きましょう。一度、北斗君が戦う姿を見るのもいいですね。」

そうすれば、彼がなぜフットサルに夢中なのかが分かりますの」

織香先生が、なんだか私を励ましてくれた。

この先生は、本当に私のことをちゃんと見てくれるんだなって、改めて思えた。

私は、織香先生に元気よく、本心で「はい」と笑顔で返事をした。その瞬間、私の背後からシャッター音が聞こえた。

私は振り返ると、そこにはストーカーのような園川先輩の姿が見えた。

部活が終わり、メイド服から通常のワンピースに戻った私。

車に乗り込んだ私は、なんだか心が晴れていた。

（そう、まだ本当にフラれたわけじゃないんだ）

北斗のこともよく知らず、ただ好きになった私に、織香先生が教えてくれたこと。

気落ちもする必要もなければ、悲しむ必要もない。彼を、もっと知りたい。

そう考えると、感情だけ、想いだけで動いた私の軽率な行動を、今更ながら悔いた。

そんな私は、ドラマの撮影がある。おそらく、日本一多忙な小学生だろう。

マネージャーであり、ママが運転する車の後ろ座席に乗っていた。後ろの座席で、私はドラマに集中をしていく。

（鳥かごと、書かれたおもて表紙の台本を再び見返す。

運転席のママが、車を運転しながら私のほうをバックミラーで見ている。

「伊豆奈、今日の予定だけど、ドラマの撮影が十七時半から三時間。明日は、午後から撮影あるから、授業は午前中で切り上げて」

「はい、ママ!」

台本を読みながら私は、ママの言葉に相槌を打つ。

いつも通りに、ママの私の車の中でのやり取り。

初の主役、夏の改変期に放送されるつなぎのドラマだけど、私にとつては重要な仕事。

小学生でもあり、子役でもあり、時折部活にも参加する私は、とにかく時間がない。

どれも大切だし、どれも私にとって必要なもの。だから、いつも「ながら」行動。

「それと、ドラマの撮影が少し押していて急遽、きんじゅ日曜にも撮影が入ることになったから」

「えっ!」

私は一瞬、耳を疑った。

「日曜、朝七時から夜まで撮影するから。」

もうすぐドラマの編集もあるから、いいわね?」

「ごめん、ママ」

「なに?」

ママの声が、聞き返す声に、ややトゲがあった。

「ママ、日曜休んでいい?」

「ダメよ!」

その時、車はちょうど赤信号。

ママは急ブレーキを踏んだが、車は停止線を少しオーバーしていた。キキッと大きなブレーキ音が聞こえた後、わたしは体を運転席に向けた。

「伊豆奈、あなた主役でしょ！」

「そう、だけど日曜日は、ダメ！ダメなの！」

「馬鹿なこと、言っていないで台本覚えなさいよ！」

最近それじゃなくてもNGばかり出しているから、間に合わないんだからね！」

ママの言うことは、正しい。

最近の私はNGばかり出していて、スタッフに迷惑をかけていた。そのことは、十分に知っている。でも、日曜だけは絶対に譲れない（もう一度、北斗に会いたい）

ただ、そういう想いが私を揺り動かしていた。

「日曜は、用事あるの！」

私が強く言い出す。車の前の信号が青に変わり、車は前に進んでいく。

交差点を抜け、見慣れたスタジオの入口へと入っていく。

ママの頭しか私からは見えないけど、すごく怒っているように見えた。

でも、私は引き下がらなかった。

「大体、何の用よ？学校行事は、何も入っていないわ」

「そ、それは……会いたい人がいるの！」

スタジオの中の駐車場に、車が入っていく。

駐車場で、ママは車をバックするために私のほうに顔を向けていた。その顔は私の想像から離れていて、妙に落ち着いていた。

もともと、ママもかつては役者だから、表情は読み取りにくい。

「誰に？」

「だ、誰だっでもいいでしょ。でも、私にとっては大事な人」

ものすごく恥ずかしくなった私は、そこで名前だけは伏せた。

「それじゃあ、ダメね」

ハンドルを回しつつ、車が曲がっていたので、もう一度車を前進させていく。

「じゃあ、名前を言ったらいいの？」

「そうね」

ママは、淡々と車をバックさせていた。再び、後ろを見ながら車を後進させていく。

ママの言葉を信じて、私は息を大きく吸った。

「同じクラスの、北斗 元気君よ。彼に、会いたいの！」

次の瞬間、後進を終えた車のサイドブレーキを引いたママは、私から顔をそむけるように前を向いた。

「そう」

「いいでしょ、日曜日」

しかし、ママは無言で前を向いていた。私はさらに畳み掛ける。

「いいマネージャーは、役者のスケジュールを管理して調節できるもんだよ！」

「……」

「ドラマの撮影を、平日にずらしてもいいから、お願い！一生のお願い！」

私の声が、車内に響く。ママは、うつむいたまま黙っていた。

そんなママは、バックミラー越しに表情をうかがおうと体を前のように動かしたとき、私の体を、両手で抑え込まれた。

ママの手が、私のワンピースの首元をがっしりとつかんでいた。

「あなた、今のドラマ主役だってこと、わかっているでしょ！」

七年やってようやく、つかんだ主役よ！」

その顔は、ものすごく泣きそうな顔だった。泣きそうで、怒ってい

た顔。

「今まで、どれだけ苦労したと思っているの？わがまま言ったら、次はもうないのよ！」

現場で嫌われたら役者は、二度と役を演じさせてもらえないのよ！伊豆奈、あなたは何もわかっていない。

あなたのわがままひとつで、多くの大人が困ることを。

あなたは、甘すぎる！芸能界は、数少ないチャンスを逃したら、全て終わりなの！」

ママの言葉は、迫力があつた。鬼気迫るものがあつて、怖い。

役者になつた過程が、走馬灯のように私の頭の中をよぎっていく。

そう、私は女優であるから。

でもそんなよぎつた役者としての私を、北斗はいともたやすく追いかけて行つた。

「ダメ、どうしても日曜は北斗に会いたい！」

私は、気持ちに素直になつた。いや、素直になるだけのものが、北斗にはあつた。

「伊豆奈、スケジュールは絶対よ。どんなことがあつても、曲げられないわ！」

ママは、私をつかむ手をさらに強く激しくつかんできた。でも、わたしはひるまない。

「会いたい、北斗のそばにいたい！」

織音部

「あの変な部活に、そのかされたのね、伊豆奈。目を、覚ましなさい！」

「じゃあ、ドラマやらない、やりたくない！」

ママの手を払いのけた私は、そのまま車の隣のドアから出ていく。

ママは、車の中から私の方を見ていた。

その顔は、怒っていてちょっと悲しげにも見えた。
でも、私はどうしてもママが許せなかった。

「ママなんて、知らない！大嫌い！」

「伊豆奈、待ちなさい！」

でも、私はママを置いて、とにかく走った。
駐車場の中に、ママの声だけが響いていた。

星の見えない空、私の心は曇ったまま、夜の町を歩いていた。
スタジオの駐車場から出ていくが、私はこのあたりの町を全く知らない。

綺麗なイルミネーションが見えるけど、それが逆に不安を掻き立てる。

知らない町は、人の波が見えた。そこにもまれる私がいた。
どうすればいいのか、わからない。

なんで、逃げ出したのかわからない。

ただ言えることが、今は好きな人に会いたい。

そして今、大事な主演のドラマをやっている。

それが私の女優として、キャリアとしての大きな分岐点であることはわかっていた。

（でも、私にはドラマの主演より、北斗に会いたい）

町は、帰るサラリーマンや、カップルでにぎわった。

暗くなった夜を、街の明かりが照らしていた。

行き交う人を見ながら、私はいろいろ考えていた。

「罪な北斗」

私は、楽しみに歩くカップルを見るたびに、男の顔が北斗の不恰好な顔にすり替わって見えた。

そんな私は、歩き疲れてスーパーにやってきていた。

おながすいた、などと思いながら惣菜のいい匂いがスーパーからしていた。

「おいしそう」

匂いにつられ、ふらふらとスーパーの中に入っていく。

店内は、夕方のタイムセールスが終わってか、少し人が少なくなっていた。

売れ残りの総菜コーナーで、私は眺めていた。さすがに試食は、なかった。

そんな私のそばを通りかかった、仲のよさそうな親子連れ。

「ママ、あれ買って！」

「今日は、テスト頑張ったからご褒美買ってあげるね」

「わーい」と、幼い子供。親子の会話が聞こえてきた、そんな夜のスーパー。

私は、なんだかそんな会話が、うらやましくさえあった。

それでも、私は帰るところがない。

（ママは、嫌い。私を、何も分かってくれない）

ママの言う座右の銘が、一つある。それは「役者に無駄な恋愛は不要」というもの。

空腹が、私の中に感じられた。

（おなかすいた）

私は、パックに詰められたコロッケを見ていたが、そのコロッケを

一人の女性が取り上げた。そのまま買い物かごに入れていくと、私は無意識のうちに浅ましくそれを目で追っていた。だけど、そんな私に不意に声がかかった。

「あら、伊豆奈。こんなところで、何をしているの？」

その声は、意外と聞きなれたものだった。

やや鼻につく声、その声を出るほうを見ると、ブレザー姿であずさが買い物かごを持って立っていた。

「あずさ、な、なんでもない」

あずさにこんなところ見られた、一気に恥ずかしくなった。取り乱した私は、逆にあずさを睨み返した。

「伊豆奈。あんた、今日は撮影じゃないの？」

「そう、だけど」

「じゃあ、なんでこんなところにいるの？」

あずさの質問に、私はしっかりと答えようとした。

だけど、それ以上におなかがすいて、ぐうの音が聞こえた。

さすがに私のことを感じたのか、あずさはやれやれといった顔を見せた。

敗北感だけが残った私は、なんだか悔しい顔を見せていた。

「あんた、あたしの家に来なさいよ。おなかすいているんでしょ」

「せっつかくけど……お願いするわ」

変な会話だけど、私はあずさの誘いにのっかかることにした。

その家は、思っていた以上に小さかった。そして、何もない。かなりぼろく古いアパート。ここは、あずさの住処^{すみか}らしい。

「意外と、すつきりしているのね」

「なによ、不満？」

何も無い玄関を通された私は、四畳の狭い和室に通された。

外と対照的に掃除はしているらしく中はちょっときれい、というか何もない。

「伊豆奈、その辺に座って」

その辺ってどこよ、畳が広く感じ、テーブルがぽつんと置いてあるだけの部屋。

ただ、あずさのアイドル写真だけは、壁にいっぱい飾られていた。そんなあずさは、隣の部屋に入っていく。

間もなく出てきたあずさは、誰かと出てきた。

「あつ、こんばんは、広州さん」

あずさに肩を借りて出てきた人物は、ショートカットの少女。

あずさと違いどこかおっとりしていて、気立てのよさそうな雰囲気。あずさとちょっと似ているけど、頬がかなりやつれていた。

水色のパジャマ姿で出てきた少女は、私を知っているらしくにっこりと微笑んでいた。

「あ、初めまして」

「紹介するわね、長峰 胡桃。あたしの妹よ」

妹さんか、なるほどね。全体的に、あずさに似ているわね。

でも、あずさとちがって体全体が細く、弱い感じもした。

それよりよくわからないけど、存在感が薄いような、そんな気もした。

まあ、あずさが変にでしゃばっているだけね。

「今日は、ゆっくりしてって、ゴホッ、ゴホッ！」

「胡桃、大丈夫？とりあえずご飯を、食べましょ」

あずさは咳き込む胡桃さんを座らせて、そのままさつきスーパーから買ってからコロッケを取り出した。テーブルもないので、床にそのまま置く。

胡桃さんの表情は、なんだか苦しそう。

でも一生懸命、私に微笑んでいるようにも見えた。

「ゆっくりしていつてね、広州さん」

「あつ、いいんですか？なんだか悪いです」

「ええ、お姉ちゃんのお友達の方でしょ。」

お姉ちゃん、お友達が連れて来るの、珍しいから」

「違うわよ、こいつはあたしの弟子よ、弟子。」

ルックス、歌、それから演技まで、全てにおいてあたしのほうが上なんだから」

あずさの言葉に、胡桃さんは微笑んでいた。

どうやら、あずさの嘘を知っている感じの顔。

でもなんかいいな、姉妹って。一人っ子の私は、そう思えさせる微笑ましい光景。

「ねえ、大丈夫？」

「心配かけちゃって、ごめんなさいね。大丈夫です、私にはお姉ちゃんがいいますから」

「ふーん」

胡桃さんは、元氣なく微笑んでいた。どう見ても、体がやばそうよ。

そのあと割り箸で、コロッケを半分していたあずさ。

割ったコロッケを、私に差し出した。

いきなり差し出されたあずさに、私は首をかしげた。

いつも威張っているあずさだが、この部屋に入ってから、ずっと顔

が曇っていた。

「はい、あんたの分、伊豆奈」

「えっ、これだけ？今日の夕食？」

あずさの渡してきたコロッケを、私はついまじまじと見てしまう。

「そうよ、なんか文句でもある？あたしは、稼ぎが少ないから。ごめんね、胡桃」

「いえ、お姉ちゃんが稼いでくれるのがうれしいです。学校も部活も忙しいのに」

「いいのよ、胡桃が早く元気になってくれれば……そう、元気に」

胡桃さんは、あずさからわたされたコロッケを、嬉しそうに頬張った。

胡桃さんのそばで、あずさは四つ這いになって薬の入っているビニール袋を取り出した。中からは六種類の薬が入っていて、それをテーブルに無造作に広げた。

「これ、全部飲むの？」

「そうよ、伊豆奈。さつさと食べなさい！」

そのあと水を汲んできたあずさは、胡桃さんに一個一個薬を胡桃さんに渡していた。

「はい、胡桃」

胡桃さんは、嫌な顔を一つもせずあずさから受け取った薬を飲んでいった。

「そんなに一気に薬を飲んで……」

「大丈夫よ、胡桃は死なない！」

あずさは、きつぱり言い放った。眉間のしわを寄せ、右手を強く握る。

胡桃さんは、一回だけ軽く頷いていた。

私は、今までの疑問を素直に聞いてみることにした。

「あずさ、なんでこんな生活しているの？」

私は貰ったコロッケを口に入れながら、あずさに質問した。

今度のあずさは下を向いたまま、カラになったパックを見ていた。でも、顔はどこか苦そうな顔になっていた。

「あたしと胡桃は、家族の最後の生き残りだから！」

「お姉ちゃん」

珍しくあずさの絞り出す声に、胡桃さんは心配そうな顔を見せていた。

「あたしたちは、一家心中したのよ！」

苦渋の顔で絞り出したその言葉を聞いたとき、私は言葉を失った。それでも強気なあずさは、憮然とした顔を見せた。

「ごめん」

「いいわよ、あんたには話しても害はないし」

あずさの話を聞いて、周りに物が無い理由がようやくわかった。親を亡くし、二人身を寄せ合い、一生懸命生きているんだ。ちよつと、あずさを見る目が変わったかも。

「伊豆奈はいいわね、いつも一緒にいてくれるママがいて」

あずさの何気ない言葉に、一気に心が急に張り裂けそうになった。そんなママと、

「喧嘩して、逃げてきた」

正直に、話してしまう自分がいた。

「あら、大丈夫ですか？」

胡桃さんは、心配そうに私を見ていた。

割り箸を持ったまま、私が固まっていた。

「平気よ、ありがと」

胡桃さんは、いつも心配そうな顔を見せていた。あずさの大事な妹の前に、私が不安な顔を見せるわけにはいかないわね。

子役として、やはり無邪気な笑顔を見せていた。

なんだか、この胡桃さんをあまり悲しませてはいけないような、そんな気がした。

「伊豆奈、フラれたんでしょ」

そんなとき、あずさの言葉を聞いて、私は不意に怒りを見せた。

「な、なんであんたが、知っているの？」

「あたしは、毒舌アイドルよ。いろんな、ゴシップ情報を持っているわ」

それで、分かった。織香先生が、どうして私の失恋を知っているのか。

「もしかして、部員全員に話したんじゃないでしょうね」

「織香先生だけよ、不安がっていたから。でもみんな、やっぱり不安がっていたわよ。」

あんたの悪態も聞けないし、椿なんか、おろおろしていたわ」

あずさの話を、半分聞き流していたけど、みんなが心配していたことは、ちよつとうれしかった。

「それより、伊豆奈。はつきりさせたいことが、あるの！」

「なに？」

「あなたは、子役が好き？」

あずさの言葉に、「もちろん」と言うはずが戸惑った私。

その言葉が口から出かった時に、呑みこんでしまう。

それは、わずかな思考が入ったから。そしてその思考は、

（本当に私は、役者が好きなのだろうか？）
というもの。今初めて、しっかり考えたような疑問。

ずっと、好きなママが進めてきて、ママが全て仕切って、ママの言うとおりにずっとやってきた。

私にしては、唯一の家族。ママとパパは、離婚したから。
役者は、私の人生の半分以上を占めたモノ。

それが、好きということになるのか、私にはわからない。

「どうしたの？なんか答えなさいよ！」

「わからない！」

あずさの問いに、情けないことに答えられない自分がいた。
怒ったあずさは、すぐさまあたしのワンピースの首元をつかんだ。

「わからないって、あんたね！もう、決まっているでしょ。」

何をすべきか、ああつ、もう生意気よっ！」

なんだかわからないけど、あずさはものすごい剣幕で怒っていた。
胡桃さんが、少し心配した顔で見っていた。

「な、何言っているの。私のワンピースが、よれちゃうわ」

「馬鹿よ、あんた。」

迷っているのも、逃げ出すのも。だから、あんたはまだ子供（、）
なのよ！

もっと欲張りなさい、あなたは一つじゃない。強欲な、子供なんだ
から！」

その言葉を聞いて、私は、ブチッと何かが切れた。

「うつさいわね、ダメアイドル！」

あんたはもう、ピーク、過ぎているのよ！賞味期限切れよ！」

「なによ、生意気。コロッケ返しなさいよ！」

「あの、お二人とも……」

「あんたは、黙ってて！」

最後のセリフだけ、私とあずさの声がなぜかシンクロした。胡桃さんはおびえた表情で、私たちを見ていた。

そのあと、私とあずさはしばらく喧嘩をしていたのだった。

今思えば、ものすごく大人げない。

それでも、あずさはなんだかイヤツだと思う。

結局、私はあずさの家に一泊してランドセルを背負い、学校に向かった。

何度も鳴る携帯電話を、私は一度も取らなかった。

ママとは、やっぱり話せないでいた。

次の日も、学校。あずさとは、付属の高等部なので行く場所は同じ方角。

体調不良で胡桃さんは、家で休んでいる。

そんな私は、授業は普通に出て、あつという間に放課後になる。学校で唯一のユートピア、一番楽しい時間の『織香部』に向かうことにした。

その途中、数学準備室近くの職員室で、私はあるものを見かけた。それは、普段の学校ではありえないもの。

（ママ、どうしてここに？）

いつも通り、マネージャースタイルの黒いスーツを着た女性。

見覚えある女性は、紛れもなく私のママ。

そのママは、眉間にしわを寄せて、椅子に座る人物と会話していた。

「三野宮先生、やはりあなたのところに預けたのが、間違いでした」
「まあ、広州さんがいなくなったのですの」

怒っているママの会話の相手は、なんと織香先生。
綺麗な顔立ちの織香先生は、不安そうな顔を見せていた。

「あなたには、責任を取ってもらうわ、伊豆奈がおかしくなったこと。」

だいたい、こんなへんてこな部活に伊豆奈を行かせたことも失敗ね。もうちよつと、あの子の演技の肥やしになるかと思っただけ、全部あんたの責任よ！」

「申し訳ありませんわ」

織香先生は、ママにまくしたてられて、ただ謝っていた。
困った顔の織香先生は、頭を下げていた。

職員室の教師たちは、織香先生のほうを遠くから見ていた。

私は、なんだか心がはちきれそう。

（どうしよう、私のせいで）

憧れの人の、みじめな姿。理想の大人として認めている織香先生の、悲しげな顔。

「早く、伊豆奈を探しなさい。

そしてちゃんと目の前に連れてきなさい、全部あなたの責任なんだから。」

演技がおかしくなったのも、あなたや、あの変な部活のせいよ。織香部

教師の仕事は、生徒に悪い虫を近づけさせないことも大事な仕事のはずよ！

あんたは間違っているわ、低能の教師よ！」

ママが放つきつい言葉、つばが飛び、激しくつめよっていた。

「本当に、申し訳ありませんの」

「あんたは最低、クズ教師、ダメ教師！」

気落ちした顔で織香先生は、それでもただ聞いていた。唇をかみしめて、言葉をただ受け止めていた。

「伊豆奈は、もう『織香部』をやめさせます！」

たとえ、伊豆奈が行きたがっても、絶対にやめさせます！」

「それは、ダメ！」

私は、その言葉にだけ耐え切れなくて前に出た。

「広州、さん」

「伊豆奈、どこに行っていたのよ！みんな心配していたのよ！ドラマのスタッフさん全員で、昨日夜遅くまでずっと探していたのよ。」

もちろん、私だって！」

ママは、私の顔を見るなりすごい剣幕で私に近づく。

そのまま私を、激しく抱きよせた。

「もう、帰るわよ！ドラマの撮影、おしているから！」

「ダメ！私は、『織香部』をやめない！」

私は、やっぱり意思を強く示した。

そう、『織香部』には私が行きたいと言った、唯一の我が儘^{わがまま}。

「三野宮先生、失礼しました。もうあなたとは二度と会うことはありません！」

ママは、私の手を強引に引っ張る。織香先生は、顔をあげていた。その顔は、なんだかさっきまでの落ち込んだ顔と違って、どこか笑顔にも見えた。

いや、その笑顔は私に向けられていた。

「先生……」

「広州さん、『織香部』はいつもあなたの味方ですわ。あきらめては、いけませんの！」

微笑む大人の女性、織香先生。私は、うつろな顔で織香先生の言葉を聞いていた。

しかし、私はママに強く引っ張られ、職員室から強引に連れていかれたのだった。

引っ張られる間も、私はあずさから言われたあの事を考えていた。

私のエネルギーは、輝きは、失っていた。

それでもドラマの撮影だけは、驚くほど順調に進んでいた。

あれから日曜までの放課後は、部活に行くこともない。

学校の授業が終わると、小学部の校門にママがすぐに車で迎えに来ていた。

部活で二時間使っていた時間は、完全にドラマ撮影にあてられていた。

誰とも遊ぶことも、部活に行けないも感じさせないほどの厳しいスケジュール。

そして、今日は日曜日。朝早く、私は車に乗り込んでいた。

ママの言うとおりスケジュールは組まれていて、車に乗っていた。

今日も始まる、ドラマの撮影。いつも通り、ただこなすだけ。

演技になれば、カメラがあれば、そこで女優としての自分が自然に出てくる。

私を乗せた車は間もなく、スタジオにたどり着いた。

逃げることもなく、私は女優の顔に戻る。

「あなたは女優なんだから、しっかりやんなさいよ」

「はい」

スタジオの教室のセット、毎日通ったこのスタジオで、今日も私は女優をする。

ママに、言われたから。ただ、それだけ。

重い扉を開けると、そこは目がくらむほどに眩しかった。

「空っぽ」

そこに広がったのが、真っ白な空間。なにもない、静かなスタジオ。

「あれ、どういうこと？あなたは……」

「ドラマ（鳥かご）は、なくなった」

そういつて、奥から凜とした男性の声がした。

そこから出てきたのが、二人組の男女。

二人とも、東城高等部の深緑色のブレザーを着ていた。

その顔には、二人に見覚えがあった。そして、驚かされた。

「皇先輩、どういうことですか？」

「ドラマは、この俺が『破壊』した」

見た目は、皇先輩だ。銀髪のショートカットが、見覚えあった。

雰囲気少し違うけど目がしっかりしていて、いつもおびえているようなそんな姿ではない。そういえば、なんか目が赤くないですか。隣は夜奈月先輩、かわいい物好きの先輩も、やはりしっかりした顔で私たちを見ていた。

「あなたたち、ここは部外者以外立ち入り禁止。今すぐ出ていきなさい！」

「あたしたちは、部外者じゃないよ。

伊豆奈ちゃんね、あたしたちと同じ『織香部』だから！」

「伊豆奈は、『織香部』をもつ、辞めたのよ！」

「本人はそう、望んでいるのか？」

ママと夜奈月先輩が言い合う中、皇先輩がママを強く睨み付ける。それにしても、皇先輩。なんだかちょっと冷たい氷のような、オーラを出していた。

普段と違っておどおどした様子もなく、赤い目をしっかり見開く。

（ちよっと、怖いかな）

などと心の中では思っていた。

「お前が、伊豆奈の母親か？」

「そうよ、ママよ。そして敏腕マネージャーよ」

「ならば、子供の幸せを大事に考えなければいけないだろう。」

今の伊豆奈を、本当に愛^{いっく}んでいるのか？」

「あたしはね、愛^{いっく}しんでるよ。オムツかえるのも……」

夜奈月さんは嬉しそうな顔で、私を見てきた。

すぐさまツツコミ役になった隣の皇先輩に、強引に口を押えられた。

「お前のことはいい」

「むーっ、悠、ひどいよお」

「伊豆奈は好きだし、本当に愛^{いっく}んでいるわ。唯一の家族だから」

「なら、これを見る！」

そういつて、見せてきたのが一枚の写真。

その写真を見たとき、私の顔はなんだか真っ赤になった。

「先輩、なんでこんな恥ずかしい……」

「な、何をさせているんですか？伊豆奈にこんなに、恥ずかしい格好させて！」

「お前には、伊豆奈のベストショットはあるのだろう、俺に見せてみる？」

これ以上に、生き生きしていて、伊豆奈の感情あふれる写真があるのか？」

「な、いきなり。わかったわよ」

そういつて、ママは携帯画面を取り出した。

皇先輩に見せようと、携帯電話を向けようとしたとき、なぜかママはためらった。

ママは苦い表情に、唇を震わせていた。

「こ、これは違う……」

「分かっただろう、お前の持っている写真は、伊豆奈が本心で笑っていない。」

そこに映るのはあくまで演技だ、演じている役者の顔をした伊豆奈の笑顔。

お前の夢を伊豆奈にかぶせて、それを演じさせているに過ぎない。この写真との違いが、はつきりと分かるだろう」

「伊豆奈ちゃん、行こう。今日は、何の日かわかっているよね？」
「うん！」

夜奈月先輩の差し出す手に、私は迷うことがなかった。そう、私は『織香部』なんだと。

先生の言うとおり『織香部』が、私にはついていいるんだと。

そして、私は夜奈月先輩の右手を引くと、夜奈月先輩は私のことをぐいっと胸のほうに引きつけた。

「あー、伊豆奈ちゃん、やっぱりかわいいなあ。一週間分の、よしよし」

夜奈月先輩が、私の頭をめいっばいなでてくれた。

「私は、子供じゃないです」

しつこい夜奈月先輩に、いつも通りつつこんだ私。

でも夜奈月先輩の小さな胸は、ちよつと温かった。

私の背後では、ママが悲しそうな目で見ていた。

まるで娘が嫁入りする父親のような、そんなさびしそうな目。

ママのその視線を、私はしっかり感じていた。そして、振り返る。

「ママ、ごめんなさい。やっぱり私は彼が好きだから、これだけは譲れない」

「伊豆奈、ママは……」

「お前に、その写真をやる。伊豆奈のこの顔を見られるように、努力しろ」

スパイシーヘアの冷たいオーラを放つ皇先輩は、落ち込むママに上から見下す。

ママは、ずっとあの写真を見ていた。

負けを認めたママは、写真を持っていた。

それは、私が真つ黒なメイド服を着て、嬉しそうにしていた写真。撮った人は、もちろん工口部長の園川先輩。

すると、私のそばにいた皇先輩が、突如顔を歪めていた。

顔の右側を、激しく手で覆う。

「悠、大丈夫？」

「くそつ、椿！あとは任せた！俺は、もう持たない」

「あ、う、うん」

そんな皇先輩は、夜奈月先輩に寄りかかっていた。肩を貸した夜奈月先輩は、ちよつと私も懂れて見えた。

女子の中でも大きな夜奈月先輩によりかかり、さっきまでの強気な皇先輩は、意識を失っていた。いつの間にか銀髪の髪が、大人しく額に吸いついていた。

「早く、行こう。織香先生が外で待っているよ」

それでも私は、夜奈月先輩の言葉を聞いて、なんだかつれしくなった。

私は、背後で崩れたママをちらりと見た。

ママは、床に置かれた私の写真を黙って見ていた。

「ママ、ごめんなさい。でも『織香部』も、女優もやめないから！私は、強欲な子供で、全てが私だから」

それは、ある親友から言われた言葉の答え。

ママは顔を上げたとき、私はすでに夜奈月先輩と皇先輩と三人で、一緒にスタジオの外に出ていた。

鳥かごから出た、鳥が見た外は広く見えた。

唐突ですが、私は命の危機に面しています。

今、私は軽乗用車の右の助手席に座っていた。

なぜか外車に乗っていた私は、車内が激しく揺れていた。

「先生、安全運転で！悠が死んじゃう！」

車の後部座席、夜奈月先輩の切実な声が聞こえてきた。

だが、まだ甘い。私のほうが、もっと怖いから。

右から近づく電柱が、ふいに大きく見えた。

しかし、車は横に傾いたのかぶつかる寸前で電柱を急ハンドルで回避。

私の隣の運転席には、あの織香先生がいた。

なぜか前髪を一本ぴんと立たせて、顔を強張らせてハンドルを握る。

織香先生の運転は、恐怖そのもの。

ジェットコースター以上の恐怖の世界が、そこに広がっていた。

交差点で曲がるとき、赤信号ぎりぎりですべて、一切スピードを落とさずに左に曲がる。

「わっ！」

ぐらりと傾く織香先生愛車の外車、フォル。スワーゲン、ニュービ
ール。
シートベルトをしている私でも、体が激しく揺れてなぜか浮き上
った。

織香先生の一応愛車である赤い車は、一車線の中央分離帯に乗り上
げて、片輪走行。

「だ、大丈夫ですわ。いつも安全運転ですよ！」
よく見ると、一般車道六十キロ制限道路なのにもかかわらず、スピ
ード計は軽く百三十キロを指していた。

「先生、怖い！」

「安全運転で、ぶつちぎりますわ。試合に、間に合いませんもの
！」

言っている意味が、よくわからない。

今日は、皇先輩といい織香先生といい、裏の顔が出て驚かされてば
かり。

大人はみんな役者だと、改めて思えた。

織香先生の隣、私のそばにはほんの数センチのところで車とすれ違
う。

恐怖が、私の背筋を凍らせた。

そして、私は目の前にある停車中の大型トラックを見かけた。

猛スピードで突っ込む車に私は、思わず前を指さす。

「先生、前！」

「大丈夫、ですよ！」

急ハンドルで、大きく右に切っていく。

ガッン、トラックの後ろの荷台が車にあたったような気もしたが、
そのままスピードを落とさずに車は、前が空いていた自転車専用道

路を、猛スピードで駆け抜けていく。

「風に、なりますわ」

織香先生は、なぜかにこやかな顔で私のほうを見て微笑んだ。その笑顔に、私はおもわず恐怖で凍りついた。

それから、約五分もの地獄の時間を耐え抜いた私は、団地にたどり着いた。

正確には、団地の中にあるグラウンド。小さな公園、そこに待っていたのが、

「遅い！」

あずさだ。腕組みをしながら、やはり深緑のブレザーを着て仁王立ちしていた。

いつも通りかわいこぶってか、大きなピンクのリボンをつけていた。そのあずさの目の前に、車は急ブレーキで止まる。

「死ぬかも思ったよ、ああ、悠、戻しちゃダメ！」

車内では夜奈月先輩は、青白い顔の皇先輩を介抱していた。

そんな後ろ座席の二人組を、疲れた顔で見ていた私。

運転手の織香先生も、魂が抜けたような感じでハンドルにもたれかかっていた。

「風に、なりましたわ……」

などと言いながら、魂が抜けた顔になっていた。

私は、一礼して車を降りてあずさの目の前に立つ。

「伊豆奈、行きましょ。もう試合、始まっているわよ」

「わかってるわよ」

そこは平静を装い、乗り物酔いの残る私は、あずさについて行つた。

小さなフットサルのグラウンド、私はフットサルを生まれて始めて見ていた。

サッカーみたいなものだけど、人数がサッカーより少ないらしい。隣のあずさが、うんちく交じりで説明していた。

屋外の芝のグラウンドでは緑色のユニホームを着たチームと、白いユニホームを着たボールを取り合う。

北斗は、緑か。チーム名は、よくわからないけどスコア的に「五対五」で同点らしい。

「ああっ、もうじれつたいわね！シュート、しなさいよ！」

あずさは、なんか知らないけど私の隣で試合を見ていた。そして、エキサイト中。

そこで、いつも教室で見る以上に、生き生きとする彼を初めて見ていた。

ボールを受けた、北斗。そのままドリブルをしながら、ゴールへと駆け上がったいく。

そんな北斗の目の前には、立ちはだかる大きな体のキーパー。

「北斗、かつこいい」

ちよつと小太りの北斗と、対するは北斗よりさらにがっちりした中学生のような大きなキーパーは、鬼のような形相でゴールを守る。

北斗が右足を振り上げた、そのままシュートを放つ。

キーパーの右方向に、放たれたシュート。

だが、キーパーもそれを読んでいて、北斗のシュートの方向へと飛んでいく。

「ダメ、とられちゃう！」

そう思った瞬間、ボールは急にキーパーの下をかいくぐるように落ちた。

沈んだボールは、ワンバウンドでゴールネットに吸い込まれた。

そして、ゴールと試合終了のホイッスルが鳴った。

北斗の周りには、チームの仲間が集まった。勝利を、喜ぶ選手たち。試合を食い入るように私は、北斗が好きなフットサルの意味をようやく理解した。

（北斗が好きなんだ、これがフットサル。みんなを喜ばせる）

私は、数十人しかいない観客の中でも、喜んでいる親や友達を見てうれしく、誇らしくなった。あんまりかつこよくなく、立派でもなく、どちらかというと面白く、そして残念な顔。

でも、そんな彼がみんなから喝采を浴びて、喜ばせる。広がる歓喜の輪を、ちよつと誇らしげに私は見ていた。

「やったわね、伊豆奈。はい」

そんなとき、さっきまで隣でやかましいあずさが私に、真っ白なA4サイズの茶封筒を手渡す。その中から出てきた、あのピンクのラブレター！

あの時に、渡せなかったラブレターを、私は渡されるがまま、受け取った。

「渡しに来たんでしょ、あんたの気持ち。」

伊豆奈は、今のあたしに少し似ているから分かる。

それに、あなたには一つ貸しを作っておくわ。胡桃に会ってくれた、アンタにね。

一番大事で、一番重いことをあなたにやってもらっわ。アンタ、女優だし」

「何言っているか、わかんないんだけど……」

「いいのよ。じゃあ、そういうわけで、さっさと行きなさい！」
あずさの言葉に、無言で頷いた。

そして簡易ベンチに戻った北斗のところに、客席から私は立ち上がって向かう。

（私は女優、女優は度胸が大事）

いつもママが、大事な撮影の時に私にかけてくれた言葉を、私は私にかけていた。

それから間もなくして、私は試合終了のコートに入った。

少しざわつくけど、私の気持ちはやっぱり抑えきれない。

あの時と同じように、ものすごくドキドキしていた。

勝利の余韻に浸るコートに入った私は、北斗を見上げた。

目の前の北斗は、私の姿に気づいてこっち見ていた。

周りのチームメイトたちは、なぜか私の顔を見るなりひそひそと噂をしている。

でも、構わず私は声を出した。

「北斗、話があるの」

試合終わった北斗は、汗がしたたる顔をぬぐうことなく私を見ていた。

「広州、見に来てくれたんだな」

北斗は、私の顔を見て豪快に笑って見せた。

「北斗、いいよね」

「うってつけの場所がある」

北斗は、私の言葉を理解したのか、一言そういつてくれた。

そういつて、北斗は私のほうに近づき、手をそのままグイッと引く張った。

ある団地の上、屋上に二人で来ていた。そこは何もない。

北斗に言われるまま、私は上がったそこは団地の共有エリア。

この屋上から見えたのが、見晴しい場所。

「遠くに、東京タワーが見えるんだぜ」

北斗が教えてくれたその場所から私は覗き込むが、見えない。

代わりに、学校付近にあるビルが見える。

でもここはちよつと高いから、天気がいいと見えるかもしれないね。

「北斗、勝つておめでとう」

「ありがとな」

北斗は素直に嬉しい顔を見せたけど、すぐに顔を曇らせた。

「あの後……気になっていてな。お前のドラマ、急になくなったみたいだから」

あ、うん、と私は相槌を入れた。北斗は、申し訳なさそうな顔を見せていた。

「なんで、悪いことをいきなりいうの？」

「わ、わりい。なんかこういう空気に慣れていなくて。

俺は、専門じゃないとずっと思っていたから」

「専門？」

「モテる専門。どう考えたって、俺ってかっこよくないだろ」

「当然よ」

私は、そっけなく言った。

それでも、私は彼が好きになったのは外見じゃなく、彼の人柄だから。

こういう気遣い、暖かいところが、私は好き。

「でも、伊豆奈が元気でよかった。

あの日から、伊豆奈がおかしくなって本当に心配だったんだぞ」

「う、うるさいよ！」

でも、うれしかった。

教室にいるときも、北斗の視線が私に向けられていたことは何となく感じた。

そう思ってもらえたことが、私の胸を熱くする。

そのまま、自分のポケットに忍ばせたアレに手を伸ばす。

「もう一回、受け取って」

そんな私は、抑えきれない気持ちをしわくちやのピンクのラブレターにこめて、彼の前に突き出した。

「俺でいいのか、伊豆奈？子役で人気者のお前と、こんな俺でいいのか？」

躊躇する北斗、私はいらだったがぐつとこらえた。

下を向いて赤くなる顔を、こわばる顔を隠して手だけ彼に向けた。それからすぐに、彼は私のラブレターをようやく受け取った。

「分かった。伊豆奈も、勇気出して言ってくれたし、な」

「うん」

声がして、顔を上げた。

北斗は、私にいたずらっぽい笑顔でそれでいてまっすぐ見ていた。手を差し伸べてくれた北斗の手を、私は握った。

その手は、やはり織香先生みたいにとっても温かい。ちよつとこつかったけど、それは男の子の手だった。

私の顔は、自然と赤くなつて、笑顔になつた。

「伊豆奈、これからよろしくな」

北斗の声に、私は子役でも、タレントでも見せない、人生で一番の無邪気な笑顔を見せた。

それから私と彼は、いつまでも屋上にいました。

第三話：病弱少女とナイト様（前書き）

——登場人物紹介

笹川 千影：病弱な少女、車いすで行動している。本編主人公。
紫色の髪を縛っていて、純粋な顔の少女。

もらった絵本を大事にしている、天然系だが、頭がいい。
東城学園の生徒だけど、月一で夜だけ通っている。

授頼 さくら：看護婦、千影の面倒を見ている。

勤務は中堅ぐらいだが、高校教師の免許を持っている。
赤ん坊が好きなロングヘアの癒し系な女性、現在は離婚してバツイチ。

長峰 あずさ：『織香部』部員、ツンデレ毒舌アイドル。

意外と可愛いロングヘアと、目立ちたがり屋の大きなリボンが特徴。

千影にとって、あこがれの存在。妹の胡桃と、一緒に暮らしている。

三野宮 織香：『織香部』顧問、既婚者

東城学園高等部で、数学を教えている。ショートボブで、色白な大人の女性。

完璧主義者で、理論的。授頼先生とは、実は大学の一年後輩。

園川 哲治：『織香部』部長、エロい男子。高三男子。

眼鏡をかけている痩せた男で、常にカメラを首にぶら下げている。
好きなものは、フィギュア。自作フィギュアを作るのが得意。

皇 悠：『織香部』部員、気弱な少年。

ぼさぼさの銀髪、気弱で人見知りな少年。
影の薄い、草食系男子。でも、彼は『破壊の皇帝』というもつ
の人格を持つ。

夜奈月 椿：『織香部』部員、背の高い女子高生。
背の高いポニーテール女子、かわいいものが好き。
悠の『破壊の皇帝』の正体を、知っている。

広州 伊豆奈：『織香部』部員、子役、小四女子。
赤い髪でカールがかかっている、童顔で無邪気な人気天才子役。
好きな男子ができて、現在つき合っている。

雄条 英希：医者。授頼先生の上司でもある。
千影を手術しているが、恐怖の対象でもある。

白衣の医者の中に、緑色の白衣。老けた貫禄のある顔が、特徴。

長峰 胡桃：あずさの妹、あずさと一緒に住んでいる。
ほっそりした体、やつれた顔。ショートヘアに、あずさと顔は少し
似ている。

千影とは、不思議な縁があるようだ。

第三話：病弱少女とナイト様

夜の病院のベッドに、眠っていた私。私の名は、笹川 千影。水色のワンピースを着た私は、白い布団をかけて起きていた。

紫色の髪で縛った私は、その日に限ってなんだか眠れない夜を過ごしていたのです。

一人だけでいる病室、年頃の私は親に会うこともできないのです。誰もいないことは寂しいけれど、お医者さんが言うには私の中にあるウィルスが、ほかの人に感染してはいけません。

（眠れませんね）

病室の窓からカーテン越しに見ようとした星は、ほとんど見えない。それでも、いくつかの星が輝いていた。

時折、胸に苦しみを感じては、不安になっていた。

次の瞬間、私の病室のドアが開いた。

「笹川さん。ああ、無事だったんですね」

そこに出てきたのが、ピンクのナース服を着ていた看護婦。

私を担当している授頼 さくら先生。長くきれいな黒髪が、特徴の若い看護婦さん。

明かりをつけずに彼女は、疲れたような顔を見せ、肩で息をしていた。

「何か、あったのでしょうか？」

「笹川さん。いきなりですがあなたには今、ここで選ばなければいけませんよ」

一つ呼吸を整えた授頼先生は、私のほうを見ていました。

「何を選ぶのですか？」

そついいながらも、授頼先生は部屋に隅に片づけておいた車いすを

広げて、私の目の前に用意してくれた。

「あなたはここで長い死を待つか、それとも外であなたの病気を治すかを」

「この病気が、治るのですか？」

目をキラキラさせた私は、用意された車いすを見ていた。

私は、あることを前に言われていた。それは、

「髪が赤くなったら、死ぬ」ということ。黒から、青に、そして今の紫に。

縛った紫の髪が、時に恨めしかつたりもする。

「治るかどうかは、わかりません。

ただ私の知り合いが、ようやく教えてくれたのですよ。治す方法を」

「知り合い？」

「そうですよ、さあ行きましょう。あなたの世界のドアを、開く旅に。

あなたが影ではなく、光になるその旅に」

授頼先生の手が、私のほうに伸びてきた。

長年私を診てきた信頼できる看護婦さんの手、迷うことが私はなかった。

「ええ、分かりました」

私は優しく、そしてしなやかな彼女の手をつかんだ。

そのまま、私はよそいきの白い服で車いすに乗り込んだ。

そのまま病室を出て、廊下に出て行こうとした。が、

そんな時でした。私はドアの方から、不意に何か殺意を感じたのです。

「授頼、なにか来るのです」

彼女は気づかないが、私は一瞬にして気配を感じた。

私が叫んだ時、私の前から一人の女性が何か光るものを持っていた。光るものは、治療用のメス。

とがった先端を振りかざして、授頼先生に襲いかかってきたのです。とつさに車椅子を大きく前進させて、投げつけたメスを回避した。いきなりの殺意に、私は背筋が凍る思いがしたのです。

「何者ですか？」

ナース服の授頼先生は、険しい顔で相手を見ていた。

その人物は、見慣れた白いナース服を着ていたが、顔を下に向けていた。

表情をうかがうことができない、闇にほぼ同化しているようにさえ見えたのです。

両手に持った二本のメスは、ナイフのように突き立ててこちらを見ている。

しかし、生きていないようにさえも見えた。人間の気配を、まるで感じない。

でも、私は動きが何となく分かっていました。

「向かってきます」

私の声に、合わせるかのようにメスを持ったナースは襲ってきました。

顔の見えないナースは、メスを持つ両手でクロスさせてこちらに向かってくる。

「な、なんでしょう。殺意を感じます……」

「すこし、飛ばしますよ」

授頼先生の強張る声に、私は同意しました。

そのまま授頼先生は、私の車いすを押して強引に病室を抜け出したのです。

いきなりのことに、私の心臓はバクバクしていたのです。

よく顔は見えないけど、明らかな殺意だけははっきり感じたナース。張りつめた冷たい空気は、私には、かつて感じた事のある死の手前。五歳の春、交通事故で車にはねられた私は、電柱に激突して路上を転がった。

苦しくて痛い、小さな私は、あおむけになって恐怖を覚えた。そこで感じた死を、私は再び感じていた。

「やはり笹川さんは、ここにいるべきではありません」
車いすを押しながら、廊下を走る授頼先生は声を漏らす。
静かな廊下は、闇の中に長く続いているようだった。

「どういうことでしょうか？」
「笹川さん、私が守りますよ。大丈夫です、私の命に代えても」
授頼先生がそういうと、彼女の目の前にはさつきと同じように、一人の看護婦が奥に立っていた。明らかに好意的ではない、殺気を帯びた出で立ち。

窓の星明かりしかない、真っ暗な廊下で表情ではやはり顔を伺うことはできない。
でも、はつきりわかっていることがあった。
きらりと光るメスを、持って構える。

「逃げましょう、生き残るために。あなたには、生きる義務がありますよ。」

笹川さんはあの絵本のように、何かを犠牲にしても生きていく義務です」

それは車いすのそばにある、一冊の絵本。私の大好きな、オリジナル創作絵本。

猛然と前に走りだし、看護婦の少し前にある丁路地まで駆け上がる。直前の廊下を、猛スピードで右に曲がった授頼先生。私は、ただ車いすに乗っているだけでしかなかった。看護婦はやはり無言で走り出して、きらりと光るメスを投げつけた。でも、メスを回避して床にはじかれた。

それでも、逃げるだけでは分が悪いことは知っています。ましてや私という車いすに乗っているものをかばいながら、ただ逃げることに、有利なはずはないのです。それでも闇の廊下を、走って逃げる。

「授頼先生、一人では逃げないのですか？」

「彼らは笹川さん、あなたに用があります」

看護婦を逃げながら行くと、さらに奥から看護婦が現れました。

「こつちですよ」

授頼先生が、巧みに車いすを操り、私を導いてくれます。

私は、その事だけが少しだけ心を和らげてくれます。

（授頼先生は、頼りにしています）

全てを彼女に任せ、車いすに乗っていた私は逃げていました。

しかし、授頼先生の目の前には壁がありました。

そう、私たちは袋小路に閉じ込められた。

苦い表情の授頼先生は、ため息を漏らしていたのです。

「追い詰められましたね」

「授頼……」

そんな私たちを追いかけるのは、数人の看護婦に増えていた。メスを持ち、殺意だけを充満させていた。

そこから感じることは、ただ恐怖しかなかったのです。

突然、夜の病院で起きたピンチ。

私には恐怖というより、覚悟がありました。

「死神が迎えに、来たのかもしれないのです」

脳裏によぎる事故の事、大きな車が向かってきて私は奇跡的に助かった。

九十九点九パーセント死ぬ条件の中、わずかに生き残った私の命。

でも、あの場所で本来死ぬべきだった私の寿命を、完全に終焉に向かわせるためにつかわされた『死神』なのだ。そう、思えて覚悟がありました。

「もう、私は死んでしまうのですね」

「笹川さん、諦めてはいけませんよ」

「残念だが、お前はここで死ぬ運命ではない」

廊下の前から男の音がすると、前を阻む看護婦たちが突如、バタバタ倒れていった。

太く響く声に、私は前を向いていた。

「あ、あなたは……」

車いすを向けた授頼先生と私は、廊下の奥を見ていました。

そこに見えたのが、赤い目のようなものが光る男性のようなもの。

夜の廊下は暗くて表情は、見ることはできない。

跳ねた髪、スーツのようなものを着た男性は、右手をすつとあげていた。

「授頼先生、これはきつと……」

思い出したあの絵本の、シュチレーションに私の顔は一気に明るくなります。

授頼先生は、やはりどこか穏やかな顔を見せていた。

「お前らは逃げる、生き延びたければ！」

その男が背中を向けて言うのと、授頼先生は無言で頷いていた。

男の人は、そのまままっすぐに廊下の奥に消えていく。

凜としたその姿に、私は顔を想像していると、私は「あっ」と声を漏らしました。

彼は、間違いないのです、そう、彼は。

私は、明るい学校に来るのが、ずっと憧れてした。

なぜなら私は学校に来るには、三つの制限がありましたから。

一つは夜、一つは一人きりの教室、一つは月に一回のみ。

それは、私の中にある病魔ウィルスが原因とされているからなのです。

「笹川さんは、いろいろ普通の子と少し違うので、寂しいかもしれません。」

ウィルスの影響で、一人だけでいつも学校に行きますね」

授頼先生が言ってくれたこと、私の年齢だと今は中学三年生だそうです。

それでも、勉強の進みがいいことから、高校一年生の授業を受けているのです。

そんな私は、病院を出てお昼の学校にやってきていたのです。

こんなに明るい、お昼の学校は始めてで胸躍ります。

東城学園に通う私は、初めてのほかの生徒を見て驚いたりしていたのです。

みなさんは、いろんな色のブレザーを着ていて、楽しそうな生徒たち。

「お昼の学校は、輝いていますね」

噂に聞いていたお昼の学校を見て、素直に感動していたのです。車いすから見える学校に、多くの人。楽しそうな談笑、何もかもが新鮮。

「よかったですね、笹川さん」

「はい、素敵ですね」

病院から抜け出した私を待っていたのは、天国のような新しい世界でした。

「でも、いいのですか？私が、お昼の学校に来ても？」

「大丈夫ですよ、これからある方に会いに行きます。」

笹川さんはこれから、お昼の住人になるのか知れませんがね」

その言葉に私は最初意味を考えたが、周りを見回すと私を物珍しそうに見る目が見えた。その視線が、私には少し気になっていたのです。

「あの、なんで私を見て、みなさんヒソヒソしているのでしょうか？」

授頼先生が、やや視線を私からそらしてきた。私の顔を、真正面に向けていく。

明らかに不自然な動作。

授頼先生は何か知っていますね、でも私はわかりませんでした。

「笹川さん、今から会う方は、きっとみなさん優しい方ですよ」

「そうですか、楽しみです」

でも私は、授頼先生の言葉をいつも信じています。

長い付き合いで、彼女を疑うことを私はしません。

だから私が、いつも一人でも寂しくないのだと思っています。

そんな私がやってきたのが、『数学準備室』と書かれた部屋の前。もちろん、この部屋に来るのは初めて。

教師棟にあるこの部屋は、やはり新鮮でした。

「ここですか？」

「笹川さん、さあ開けてください。あなたの新しい世界が、待っていますよ」

授頼先生に背中を押された私は、車いすに座りながらそのドアを開けようとしたが、突如、私の体が痛みを發した。

「うっ、ああっー!!」

「笹川さん、どうしましたか？」

ドアを開けようとするとき、胸が不意に苦しくなった。

それは、興奮による高揚感ではなく、ただの苦しみ。

同時に私の額から、気持ち悪い程に汗が噴き出す。

（ま、またですか？）

それは発作。最近、特に増えた発作。

締め付けられるような胸、滴り落ちる嫌な冷や汗。

顔が苦痛に歪み、肌には鳥肌が立った。苦しい、とにかく苦しい。

「大丈夫ですか、笹川さん」

授頼先生は、車いすの後ろから前に屈んで、私の表情をうかがっていた。

「死んで、しまうのでしょうか？」と、そんな不安が襲う。

覚悟はできていても、怖いものは怖い。

人は、きっと弱い生き物なのでしょう。

いくら頭の中で、「死」を覚悟ができていても、近づくものが恐怖を誘う。

「嫌です、嫌なのです」

弱気な私が、感情を抑えきれなかったのです。
その時、私は頭を押さえてかがみこんでいた。

「あなたは、まだ生きていたいの？」

頭に響いた女性の声が、聞こえていた。

誰の声かわからない、知らない声。

でも発作の時には、この女性の声がいつも私には聞こえてきた。
うつすらと聞こえた声に、恐怖で顔が引きつっていた。

そんな時、授頼先生がやってくれたことそれは、私の震える手を握
って、

「笹川さん、いつも私がついていますよ」

母親みたいに優しく、私の頭を抱きかかえてくれた。

すると、不思議とその発作は収まっていったのです。

「はい」

小さく、私は頷きました。

そのことが、私を発作から徐々に開放していくのが分かったのです。

私が開けたドア、数学準備室。

中を開けると、いきなりバンバンと音がした。

そして、私を迎え入れるためのクラッカー。

そこには、数人の生徒がいました。

「ようこそ、『織香部』へ！！」、そう書かれていた、ホワイトボ
ード。

小学生の女の子から、男性の学生さんまでいろいろいますね。

緑や水色のブレザーを着ていた学生さんが、あたしの方を見ていた。

「あゝ、新しい部員さんだね」

「ふむ、新たな女子か。俺の創作活動が、ますます上がるというものだ」

「変な物を作ったら、伊豆奈が没収します」

などと、男女が言い合っていた。その一方で、私は一人だけ見慣れた顔を見かけた。

「そこにいるのは、あずあず」

「あら、千影。千影がもしかして新しい『織香部』部員なの？」

そう、そこにいたのが長峰 あずさ。アイドルをされている、人なのです。

長峰さんこそ『あずあず』も、この東城学園の生徒なのですね。

いつも私にお見舞いするときの、やはりブレザーを着ていました。

そんな部屋の奥から、ショートボブの女性が私に声をかけてきました。

「申し遅れました、わたくしは、三野宮 織香といいますの。

『織香先生』と、呼んでくださいな。

笹川 千影さん、あなたはこれから『織香部』という部活に、期間限定で入ってもらいますわ」

そこに、きれいな姿勢で一人の女性が立っていました。

黒っぽいスーツを着ていた大人の女性は、微笑んでいた。

私は、三野宮先生という女性を、車いすに座ったままじっと見ていたのです。

——アイドルのあずあずは、いつも私に会いに来てくれるのです。今から三週間前。世間では、GWと呼ばれているそんな時期がありました。

真っ白な病室、一人だけの部屋。いつも通りにベッドの上に、私はいました。

両親とも会うことを拒まれ、一人だけで暮らしていた。

私の病気は、伝染性があるということで、隔離された病室。

その部屋で、わたしは手紙を書いていたのです。

長期に入院を繰り返している私の入院費を、両親が懸命に稼いでいるということです。

でも両親には会うことがあまりないのですが、あの人だけは別でした。

「千影、会いに来たわ」

病室にいたのが、授頼先生とあずあず。

二人とも、マスクをつけていて私のそばにやってきたのです。

わたしは手紙を書くのをやめて、彼女らを見上げていたのです。

「長峰さん」

「いつも通り、『あずあず』でいいわ。千影、元気していた？」

彼女はアイドルという忙しい職業なのですが、私にいつも会いに来てくれます、奇特定の親友の方なのです。約一年前に、知り合ったのです。

そんな親友との再会に気を使ってか、授頼先生は静かにこの病室を出て行きました。

「ええ、元気ですよ。あずあずに、私は会えてうれしいのです」

「あたしも、千影に会えてうれしいわ」

外から来る長峰さんは、いつもキラキラ輝いていたのです。

洋服というより表情、赤いシャツ、ミニスカートのかわいらしいあずあず。

それが眩しくて、いつ訪れるかもしれない死の恐怖がある私にとって、心の支えになっていました。

「でね、この前、歌をだしたけどね、ラブバラードだから」

「はい、ありがとうございます」

長峰さんが、鞆から私にCDを手渡してくれた。

キョートな長峰さんの写真が、前面に出されたCD。

やはり、写真の長峰さんもキラキラと輝いていたのです。

「千影、体調はどうなの？」

「はい、今日は調子がいいみたいです。あずあずのおかげですよ」

「あ、千影それは……」

「長峰さんへのファンレターです、まだ途中ですけど……」

始めて書くお礼の気持ち、私は手紙にしたためていたのです。

その手紙を、長峰さんは食い入るように見ていた。

真剣な顔で見ている長峰さんは、大体文章を目で追いかけていて顔を上げた。

「すばらしい、ありがと、千影！」

長峰さんは、ベッドの上の私に抱きついてきました。やっぱり、彼女は暖かいのです。

「いえ、まだ途中です……」

「大事にするからね、千影！」

抱きついて満面の笑みを浮かべた長峰さんは、私に何度も頷いて見せた。

そんな嬉しそうな顔を見せられたら、私もなんだか元気になってしまふのです。

だけどそんな楽しい時間は突如、終焉を迎えました。

「笹川さん、治療の時間です」

ピンクのナース服を着ていた授頼先生が、腕時計を見て、私のところ

ろに来ました。

真剣そうな顔を見せ、私のほうに近づいて来たのです。

『治療』、私はこの時間が一番嫌でした。

そこはとても暗く、背筋も凍るような寒い部屋。

震えが、自然と私に起きていたのです。

「千影、大丈夫？」

「ええ、ごめんなさい。長峰さんに元気をもらったのに、こんな顔を見せてしまつて」

なんだか申し訳なく、彼女に謝っていた。

心配そうな長峰さんの顔は、あまり見たくない。

彼女には、どんなときもキラキラしてほしいのです。

「そう、大丈夫よ。治療すればいつかは治るんですよ。

そしたら、あたしのコンサートに来てよね。

千影のために、あたしが特等席を用意してあげるから」

「はい、わかりました」

「では行きますよ、車いすにお願いしますね」

授頼先生が、丁寧に私を車いすに乗せていく。

彼女は私に気を使つてか、慰めの言葉をかけていた。

「そうですね、笹川さん。がんばりましょう」

授頼先生の言葉に、私はにつこり微笑みました。でも、ぼんやりと知っています。

治療しても、この病気は治っていないことを。

そして、授頼先生は私を車いすに乗せて廊下に出ました。

そのあと、わたしは長峰さんに見送られて、向かったのが治療のための部屋。

二十分ほどかかるこの部屋に行くのが、私は嫌いでした。

『放射線室』という表札で、重いドアの部屋に通された。

そこに入ると、一人の男性が立っていたのです。

緑色の白衣と緑色の帽子をかぶって、鋭い目つきをした男性医師。

彼は、雄条医師。私は、彼にいつも恐怖を感じていました。

「ようこそ、笹川 千影」

やや含みを持たせた低音の声は、彼の恐怖を一瞬で思い出させてしまふ。

「では、さっそく脱いでもらおう。下着になれ」

「あの……」

「脱げ、命令だ！」

口髭を携えた口から聞こえる声に、私は授頼先生の介護を借りて上着を脱がされた。

「では、横になれ」

「あの、彼女は本当に、ウィルスに感染しているもののですか？」

そこで口を開いたのは、授頼先生。声を挟むと雄条医師は、鋭い目つきで睨んでいた。

手に持ったカルテを見ることなく、雄条医師は顔を強張らせた。

「わしに口答えするな！お前は、医師にとって一番大事なものを知っているか？」

「患者さんを救う気持ち、ですか？」

「馬鹿者！データだ。情報こそが医師にとって大事なものの、ヤツに放射線を浴びせて内部のウィルスが、死滅するか調べるのだ。お前の口癖通りだ。

犠牲なくして、医学界の進歩はない」

雄条医師の強い口調に、私は怖かった。でも、口にせずにはいられない。

「それじゃあ、私は実験台なのでしょうか？」

「始めろ」

雄条医師の恐怖に結局、授頼先生は逆らえなかった。

授頼先生も、結局のところ私と同じ被害者なのだから。

悲しげな顔、震える手で私を車いすから抱きかかえました。

「ごめんなさい、笹川さん。」

こんなことをしても、あなたが治るかわからないのに……」

小さく言った言葉が、私にだけ聞こえた。

逃げる足も動かない私は、そのままベッドの上につつぶせにされた。

「背中に照射する。動くなよ」

頭を固定された私の目の前に、ロボットの手のようなものが、先端がまるで蛇のように動いてきました。

背中がよく見えないですが、振り返りたくないそういう恐怖が私にはあったのです。

なので、私は目をつぶることにしたのです――

そんな私が、今こうして学校にいる。

それでも、体はいまだに完治はしていません。

車いすで全く動かない両足、それから時折襲う発作のようなもの。

全てがウィルスの仕業らしいのですが、私にはよくわかりません。

正直な話、私以外に同じ病気の人と会ったことがないからです。

「千影がここに来たのは、もう学校に来られるまで回復したのね」
それでも、自分のことのように、喜んでいる長峰さんがいました。
私と違い、深緑のブレザーを着た彼女は、にこやかな顔を見せていました。

それに比べて、私は定時制の黒いブレザーを着ています。

「もう少しで、治りますよ。それまで織香先生、お願いしますね」
「分かりましたわ、授頼先生後はお任せくださいな」

授頼先生は三野宮先生に挨拶をしていき、私をこの部活において去っていった。

やや不安が残ったけど、長峰さんがいるので心配はなかったのです。

そのあと、みんなで互いに自己紹介をしました。

園川先輩、部長さんでいつもカメラを持っている眼鏡をかけた男子です。

やや猫背で細い体が特徴の、水色ブレザーの三年生です。

夜奈月さん、長峰さんと同じ年の女子高生ですね。

ポニーテールの、少し大きな女子生徒です。なんだか、笑顔でこちらを見えています。

広州さん、小学生なのに高校の部活に参加している人です。

赤いカールが、かわいい女の子です。

皇君、おどおどしていて、あまりしゃべるのが得意ではなさそうな男子です。

そういえば、彼にはどこかで会ったことがあるような気がしますね。そして長峰さん、『あずあず』と呼ばれたアイドルさん。

やはり彼女だけは、長い髪と大きなリボンはいつもキラキラしているのです。

「千影が、こうしてきてくれるとは思わなかった」

「私もあずあずに、会えてうれしいです、憧れの方ですから」

「ねえ、『あずあず』って？」

すかさず聞いてきたのが、夜奈月さん。

首をかしげて少し大きな少女は、車いすの私にかがんで顔を覗かせ

た。

「長峰さんの、あだ名ですよ」

「へー、あずさちゃんに、そんなあだ名があったんだあ」

「椿はダメよ！」

すると、夜奈月さんの後ろで腕組みをする長峰さんがいたのです。

「こんなの、憧れにするんですか？」

すると、広州さんが長峰さんに対して流し目で見ていたのです。

「なによ、分かっている人はわかっているのよ。あたしの素晴らしいさを」

「あずさちゃん、良かったね」

「そんな、憧れているあなたには、ぜひこれを」

夜奈月さんに褒められつつも、園川先輩が私の目の前に見せてきたのが一体の人形。

その人形は、なんだか長峰さんをとっても小さくしたようなそんな人形。

元気な長峰さんの顔が、見えました。

「まあ、あずあずにそっくりですね。かわいらしい、人形ですか？」

「これは、俺が作った、

『長峰 あずさ六十分のースケール制服バージョン、マークスリー』のフィギュアだ。

この貧乳のあたり、吊り上った目つきなんか、ぴったりだろ」

「そうですね、これはフィギュアというのですか。素晴らしい」

私は、初めて見ていたフィギュアというものをじっと見ていた。

まるで、キラキラ輝く長峰さんが、今にも動き出しそうなそんな感じ。

私は、しばらくそのフィギュアを食い入るように見ていたのです。

「部……長……」

「そこでだ、今度、新部員でもある、笹川のフィギュアを作らせてくれないか？」

俺のような、傀儡師かいらいなら超リアルに作ることができる。

こっちは椿だ。どうだ、体がデカい割には貧乳だろ」

「私がそのようなのに、いいのですか？こんなに私は、キラキラしていませんよ」

「ああ、可憐さ、上品さ、紫色のレアな髪と、あずさや椿にない豊かな胸。

どれをとっても、あずさの上をゆく最高傑作ができそうだ。協力してくれるな」

「せ、先輩……」

「なんだ、椿、今忙しいだろ」

夜奈月さんが園川部長の袖を引くと、夜奈月さんと夜奈月さんの背後にいる長峰さんから真っ赤なものが見えました。煙じゃなく、オーラですね。

それにしても、長峰さんの後ろにはなぜか赤いドラゴンの影が見えるのです。

気のせいでしょうか？わかりません。両手を握って、身構えていました。

握りこぶしににこやかな顔、園川部長はただならぬオーラに逃げようとしたけど長峰さんは握りこぶしでなく、おもいきり蹴飛ばしてきました。

蹴飛ばされた園川部長は、吹き飛ばされて棚ぶつかった。

園川部長の上から、夜奈月さんがじーっと睨んでいるようだった。

「あーっ、あたしはデカいだけじゃなくて、貧乳でもないもんっ！」

「千影、こいつに近づくんじやないわ。こいつは、変態人形男よ！」

「何を言う、失敬な！」

「でも私の人形を、作ってくれるみたいですよ」

「違うわ、こいつは人形を作って、あんなことやこんなことをするんだから」

「あんなこと？こんなこと？なんででしょうか？」

私は想像が全くできなかったが、長峰さんの鬼気迫る声に、何となくよい事でないことに気づきました。

「そう、とってもエロいことだよ。ゾクゾクしちゃう」

「そんなにすごいのですか、楽しみです」

「えっ、ち、違うよお」

夜奈月さんは、苦笑いをしていた。

その対象となる園川部長は、よろよろと立ち上がった。

「ゾクゾクはいいぞ、笹川、お前はどうかやら知らないようだ。ならば……」

「ふざけんじゃないわよ！」

長峰さんは、すぐさまとび蹴りを園川部長に繰り出す。

しかし、園川部長は眼鏡をきらりと光らせて、長峰さんのけりを回避した。

空気を切った長峰さんのけりを、後ろに下がってかわすと、大事そうにフィギュアを持っていた。

「ほう、何が困るのだ？」

「あたしのファンに、変なことを吹き込んだら、ただじゃおかないわよ！」

長峰さんの迫力に、園川先輩が逃げ出した。血相を変えて、長峰さんが追いかける。

二人は走って、そのまま数学準備室から出て行った。

教師の織香先生は、なぜかにこやかにほほ笑んでいた。

「元気が、ありますわ」

「あまり元気がありますのも、問題ですよ、先生」

織香先生の言葉に、広州さんはあきれ顔で見ていた。

「びえ〜ん」

そんな時、部屋の奥にある白いカーテンの奥から、赤ん坊の泣き声が聞こえてきたのですよ。

「あつ、プリちゃんが、泣いちゃった」

夜奈月さんが白いカーテンを開けると、そこには普通の学校にないベビーベッドが見えたのです。そこにいたのが、私の髪の色に少し似ていたピンク髪の赤ちゃん。

黒いベビー服を着ていて、顔をくしゃくしゃにして、赤ちゃんは泣いていたのです。

私も織香先生に車いすを押され、カーテンのほうに向かいました。

「プリカ様、大丈夫ですよ？」

織香先生も、なんだか心配そうな顔を見せていた。

「その子は、なんですか？」

「織香先生の娘、プリちゃんだよ」

夜奈月さんは、嬉しそうな顔でベビーベッドの泣いている赤ちゃんを抱きかかえた。

うん、うんと赤ちゃんの顔を見ながら

そのまま、夜奈月さんは私に赤ちゃんを見せてきました。

「今泣いちゃっているけど、千影ちゃん、頭なでてあげて。

プリちゃん、寂しがっているんだよお」

「いいのですか？」

初めて見る赤ん坊、顔は大きいけど小さいです。

夜奈月さんが少し屈んで、見せてくれた赤ん坊を、私はそっと撫でてあげた。

するとプリちゃんという赤ちゃんはぴたっと泣きやみ、私の顔を覗き込む。

「にゅ？」

「よしよし」

すると、赤ちゃんが私のほうに手を伸ばしてきました。

夜奈月さんの手を抜け、そのまま私の膝にダイブするように飛び乗ってきました。

「ママ、ばぶばぶ」

「ええ、よしよし」

私がもう一度なでると、赤ちゃんは嬉しそうな顔を見せていました。その赤ちゃんはつぶらな瞳で、私の胸のあたりを見ていたのです。その時、夜奈月さんが私の車いすの取っ手部分を握りました。

「笹川さんは、才能が有りますわ」

「才能、ですか？」

私はその時、良くわかりませんでした。

「千影ちゃん、こっちおいで」

夜奈月さんは、なんだかにこやかな顔で車いすの私を導いてくれた。そこは、部屋の奥にある白いカーテンの中。

「はい」

私の後ろに、織香先生が車いすの取っ手をつかみ、白いカーテン奥に連れて行くのです。そのやり取りを、一人の男子がじっと見ていました。

なんだが、存在感がないようですね。

「悠、覗いちゃだめだよ」

「わ、わかりました」

そのまま夜奈月さんは、私と織香先生を入れて、白いカーテンを閉めたのです。

カーテンの中は、本当に赤ちゃんのための部屋でした。
オムツ、ベビーベッド、ガラガラに哺乳瓶。

狭い場所に、多くの赤ちゃんグッズが置かれていました。

「千影ちゃん、じゃあ、プリちゃんにおっぱいあげてみよ」

「まあ、私ですか？」

「うん、千影ちゃん。プリちゃんがね、欲しがっているよ。ね、プリちゃん」

「にゅ、にゅ」

確かに赤ちゃんは私の胸で、おっぱいを見ていた。

そんな白いカーテンに、織香先生も入ってきたのです。なんだか、夜奈月さんの楽しそうな顔を見ると、私もできそうな気がしてしまいます。

「私、やってみますね」

「ありがとうございますわ」

「うん、できるよ、千影ちゃんなら」

「では、脱がせますわ。少し体を前に倒してくださいな」
織香先生に言われた通り、私は体を前に立ちました。

そのまま、私はあつという間に下着姿になったのです。

抱きかかえた赤ん坊は、わたしのおっぱいを小さな手でつかんで離さない。

「にゅ、にゅ」

「よしよし、おっぱいですよ」

興味津々に夜奈月さんが見ていて、^{あら}露わになった私の肌から赤ちゃんが顔を近づけたのです。

「ちゅうちゅう」

「あゝ、出たね、すごいよお」

「これだけ立派なものがあれば、当然ですわ」

なんだか、ほのぼのしていた白いカーテンの世界。

赤ちゃんは、嬉しそうに飲んでいたので。でも、

「あなたに、会いたい」

突如、ここにいる誰でもない女の声が、私の頭の中に響いたのです。

「会いたい？どういうことですか」

私は、思わず聞き返してしまう。

すると、私の胸に抱かれていた赤ちゃんが顔色を変えて、不意に泣き出したのです。

「えーん、えーん」

「どうしたの、プリちゃん？そう、怖かったのね」

夜奈月さんが、赤ちゃんをあやすように抱きかかっていたのです。

その時、赤ちゃんは指をくわえて私の足元をじっと見ていました。

そのあと、すぐまた泣き出しました。

そんなプリちゃんから離された私は、寂しさが残りました。

それは、なにかを失ったような、喪失感さえあった。

その私を織香先生は、優しくそうに見守っていた。

でも、声はきれいな声が聞こえてきました。

「笹川さん、赤ん坊というものは、正直で、残酷ですわ」

その一言に、わたしははっとしていたのです。

私は今、楽しいのです。

それは憧れているあの方の、おうちに来ているからなのです。

私は、憧れの人に車いすを押してもらいながら、ついたのが古いア

パート。

新緑の木々の中、たどり着いたアパートの一階にその部屋がありました。

「千影、ゆつくりしていつてね」

そこは、意外にも古ぼけたアパートでした。

ところどころに年季があって、シミのある壁。

そして、意外ときれいでテーブルと布団以外何ありませんでした。四畳半の狭い部屋に姉妹で暮らしている、と長峰さんが話してくれました。

部屋の隅には、一人の女性が眠っていました。

ボロボロの布団から出てきたのが、白いパジャマで出てきた少女。痩せ細った顔に、長峰さんとそっくりの顔、髪型がミディアムヘア。なことを除けばほぼ同じ顔なのです。ですか、彼女は全くキラキラしていないのです。

「お姉ちゃん、おか……」

「ただいま、胡桃」

しかし私はその声を聞いて、なんだか不思議な感覚を覚えました。

（どこかで、聞いたことのある声）

そう、初めて会ったのに、何度もあっているような雰囲気を彼女から感じたのです。

「紹介するわね。こっちがあたしの妹の胡桃よ」

「なんで？」

その瞬間、胡桃さんはひとつだけ小さく頷いた。

「笹川 千影さん、ですね」

妹の胡桃さんが言った言葉に、私は不思議な感覚を覚えた。

そう、私も彼女のことをなんだか知っているような、そんな気がしたから。

「あれ、二人知り合い？胡桃？」

「どうやらそのようですね、何となくですけど」

「でも、胡桃はずっとここで寝たきりじゃない。病院にも、行けないし」

あずあずは、胡桃さんのことを不思議と思っていた。

「他人の空似、かもしれませぬね」

「違う、あなたが持っているのは、『星のナイト様』ですね」

そんな胡桃さんが見つけたのが、私の車いすのポケットに入れてあった一冊の絵本。

指さした胡桃さんの顔は、少し強張っていたのです。

「よく御存じですね、『星のナイト様』は有名なのでしょうか？」

「授頼先生が書いてくれた、オリジナルの絵本よ！」

その言葉に、私は首をかしげた。

なんでこの絵本のことを知っているのか、驚いていました。この絵本のことは授頼先生と、私しか知らないはずなのに。

よく意味が分からない、でも私は彼女を知らない。

知らないけど、不思議と声を聞いたような気がしていた。

でも、顔を合わせようとすると胡桃さんは私から顔をそむけようとします。

「ね、その本って、どんな本なの？」

長峰さんが興味を持っていたので、私は車いすのひざに乗せて開いていた。

それは私の大好きな、一冊の絵本。

私は、車いすのポケットにある絵本を取り出しました。

「その昔、一人のお姫様が遠くの星に住んでいました。そのお姫様は、王国で暮らしていたのです。でもその王国に突如、魔女が現れました。その魔女は、お姫様を殺そうとしました。」

そんな時も、ナイト様がお姫様をいつも助けて守ってくれました。そんな魔女とナイト様は、最後の戦いを迎えます。

見守るお姫様、だけど魔女がナイト様に倒される間際に、お姫様にある『呪い』をかけてしまったのです」

「呪いつて？」

「呪いは、お姫様のかわいらしい声を失ったのです。」

王様は、お姫様を助けるために『星のしずく』を探しに、宇宙へと旅立たせたのです」

「随分、展開変わったわね」

「途中、巨大要塞やビーム兵器に襲われながらも、なんとかたどり着いた第三惑星」

「地球なの？」

「いえ、第三惑星『ドコモン』です」

私の話に、胡桃さんは目をつぶったままうんうんと頷いていた。逆にあずあずは、困った表情を見せていた。

「ドコモンって、すごい名前ね。見た目は地球ばいし」

「そんなドコモンまで馬車で移動したお姫様とナイト様は、『星のしずく』を探しに旅をしました。」

未知の星に、見たこともない生物、この星にどんな危険が待っているのでしょうか」

「ねえ、ドコモンってそんなに危険なの？」

「さあ、次のページでは、こう書かれています。

『ついになんやかんやあって、『星のしずく』を見つけ出したのです』」

「展開早くない、ねえ、千影」

あずあずの言葉、確かにそう思えました。

そういえばなんでドコモンに、あることが分かったのでしょうか。それになんやかんやって、なんででしょうか、わかりません。

「ナイト様は、お姫様に星のしずくを飲ませようとしたが、そこにいた真っ黒いヘルメットに、真っ黒なマントで、わけのわからないボタンを胸にいつぱいつけて、なんだか赤く光る棒を持った……」

「ねえ、なんでそんなのがいるの？」

「ドコモン星人ですよ」

「どう見てもダー。・ベーダーじゃない！」

「いえ、ドコモン星人なのです」

確かにそう書いてありますね、なんですか、ダー。・ベーダーというのは。

世の中には、わからないことがありますね。不思議で、面白いのです。

「ドコモン星人が言うには『星のしずくを、フォーッ、飲むな、フォーッ。飲むと、声は元に戻るがフォーッ』」

「なんか、セリフ見づらいわね。フォーッって言うし」

「つまり、『星のしずく』を注ぐ杯は、生きている人間の耳を切り落とさなければなりません。耳を失えば、声が元に戻るということなのです。

ナイト様とお姫様は、困ってしまいました。

これではお姫様の声が元に戻っても、彼女が自分の聞くことはできない。

すると、ドコモン星人はあることを教えてくれました」

「耳はお前の耳でも、構わない。二つ差し出せ。

お前の耳をはぎ取り、杯代わりにすれば彼女の耳は聞こえるようになる。」

と、ドコモン星人は話してくれたのです」

「なんか、めちゃくちゃ胡散臭そう。第一、黒い人だし。」

「でも、ナイト様は、彼女の幸せのために迷うことなく耳をそぎ落としました。

必死に止めようとする、お姫様の制止を振り払います。

そして、『星のしずく』をついで、杯代わりに飲ませたのです。

すると、お姫様の声が元に戻ったのです。自分の声を自分の耳で聞こえたお姫様は、嬉しくなったのと同時に、頭から血をだらだら流したナイト様を介抱しました」

「最後は感動だけど、なんか、だらだらってねえ」

「これぞ、『星のナイト様』ですね」

「間違い、ありません」

胡桃さんも、あたしと同調するように頷いていました。

私は、この話が大好きです。

ナイト様は、お姫様のことを自分の身を切って助けたその姿が、大好きなのです。

そしてそのナイト様に、私はついに会ったのです。

夜に会ったあの男の人、彼こそがナイト様なのです。

「やはり、ナイト様は実在するんですね」

「千影、騙されていると思う。第一、そんなヤツいるわけ……」

「いますよ、授頼先生はきっと実在するナイト様を、見て書かれたのでしょうか」

「そうですね、お姉ちゃん。きっとナイト様はいますよ」

なぜか胡桃さんも、私に同意してくれました。
長峰さんは少し困った顔を見せたけど、私は共有できる仲間が見つかったみたいで、とてもうれしかったのです。

「笹川さん、あなたはいきたいのですか？」

「生きたいですよ、私は生きたいのです」

「そうじゃなくて、学校ですよ」

「はい、行きたいです」

胡桃さんは、私の問いの後に、なんだか切なそうな顔を見せていた。

「あの、千影。その学校の事なんだけど」

「なんですか？長峰さん」

「やはり、千影のことを考えて、夕方までここにいてももらえる？」

なんか、胡桃とも仲がよさそうだし、学校の方はやっぱり千影の方も大変だと思うから。

授業は夜間になっちゃうけど、あたしも、椿と一緒に受けるからさ」

「はい。あずあずと、私は一緒に授業を受けられるのですね」

長峰さんの声に、私はなんだかうれしくなった。

それはナイト様に導かれた外を、楽しむかのようなそんな気持ち。

「だけどウィルスは、みんなにうつらないの？マスクとか、用意できるけど」

「授頼先生は、感染の疑いはないと言っていましたよ。」

それにマスクだって、隔離した病室だって、本来必要ないものだからです。

だから、大丈夫なのだと言可を貰いました」

「そうね、それなら大丈夫ね」

長峰さんに、わたしは答えていた。

そう、ウィルスも初めから半信半疑。

私のように感染した人は、見たことありませんから。
私は、自分の紫色になった髪を、鏡越しに見たのです。

あれから二日後、私は夜の学校に来ていたのです。

それは私が、四年前から続いていることで、中学部から高等学部に変わってもそれは続いているのです。真っ暗な外、私たちのいる教室だけは明るい。

廊下の暗さと対照的に照らされた教室は、教壇に一人白衣の先生が立っていました。

「では、次の英文を日本語に訳してみましょう。笹川さん、はい」

「大好きな赤ちゃんと、家で過ごしました」

「そうですね、ここで大事なのは、「家で」、というのがどこにかつてくるかです」

授頼先生は、英語の教科書を持って文法の解説をしていた。

いつも私が、学校に行ってやっていたこと。月一の夜間学校、一人だけの定時制。

しかし、今回の私には今までと一つ違っていることがあった。

「すごいね、千影ちゃん。すらすら訳している」

「当然よ、千影は天才なんだから」

そう、私のそばの教室には、長峰さんと夜奈月さんがいました。

私と違い、深緑のブレザーを着ていた二人が私のそばで、同じ授業を受けています。

夜奈月さんの足元にはなぜか、黒猫がお行儀よく丸くなっていました。

そのことが、私は嬉しかったのです。

「じゃあ、次の文章を、長峰さんおねがいします」

「ええ、わかったわ」

長峰さんが立ち上がり、難しい顔で教科書を見ていた。

「どうしましたか？」

「Misfortuneというのが、わかんないんだけど……」

「『不幸』と訳すですよ」

「じゃあ、『それでも、彼女は不幸でした』て、こと？」

「そうですね、不幸ということですよ。」

一見新しい単語のように見えますけど、実は中学レベルの単語です。普段見ている景色も、見方や出てくる形が変わると、新しい単語のように感じてしまいますね」

授頼先生が言っていた言葉は、今の私の置かれている状況なのです。

「え〜ん、え〜ん！」

すると、教室の端にあるベビーカーから泣き声が聞こえました。

「あ、クレ……赤ちゃん」

授頼先生は、いそいそとベビーカーのほうに歩み寄っていきました。

「オムツ、濡れていますか？」

心配そうな顔の授頼先生は、すぐさま赤ちゃんを抱きかかえていた。

「ねえ、なんでプリカがいるのよ？」

「織香先生が、急にいなくなったからね」

そう、そこにいたのがプリカちゃんと言われた赤ちゃんは、織香先生の娘。

私を受け入れてくれた織香先生は、なぜか今は来ていません。

「授頼先生は、小児科に行きたいぐらい赤ちゃんが大好きなんですよ。」

本当は赤ちゃんが、ここにいるはずなんですけど……」

「笹川さん、その話はダメです！」

授頼先生は、あわてて私の方に手をバタバタと振りました。それでも、ベビーベッドから抱き上げたピンク髪の赤ん坊をなだめています。

「ね、なになに、千影ちゃん。どういうことなの？」

聞いてきたのは夜奈月さん、興味津々の顔で私を見してきました。

「なんでもないのです、ごめんなさい」

授頼先生がかつて妊娠中絶していて、もう子供を産めない事。

やはり、話すのをやめましょう。

それ故に、授頼先生が赤ちゃんに対してもものすごく優しいことも。

「千影、楽しい？」

「ええ、みなさん、本当にありがとうございます」

「千影ちゃんの病気、早く治るといいね」

「夜奈月さんも、早く胸が大きくなるといいですね」

「むーっ、それは余計だよお」

夜奈月さんは、なぜか口を尖らせて自分のおっぱいを見ていた。

彼女は、なぜだかわかりませんが、胸が大きくなりたいみたいです。

しかしそんな目の前の教壇では、授頼先生が赤ちゃんを抱いてお世話していました。

「紅廉愛ちゃん、オムツ交換しましたよ」

「にゅにゅ？」

「おっぱいが欲しいのですか、いいですよ。私のおっぱいをあげますね」

授頼先生は、そういつて白衣を脱ぎ始めました。

「せ、先生、授業は？」

「授頼先生はああなると、絶対に止まらないのです」

赤ちゃんをあやす姿はまさに母親そのもの、しかしそれがとまらなくなります。

それが他人の赤ちゃんであっても、なのです。

ちよつとだけ、赤ちゃんが苦しそうにするのが難点ですよ。

「にゅにゅ？」

やはり、赤ちゃんは苦しそうな顔を見せていました。

「おいしいですか？」

すると、夜奈月さんのそばにいた黒猫が、いきなり授頼先生に飛びかかるのです。

でも黒猫にとびかかれられても、授頼先生は脱いだ白衣で黒猫を覆いかぶせます。

もごもごと黒猫は、白衣から抜け出そうともがいていた。

そんな授頼先生は、赤ちゃんのお世話ばかりで全く授業を行う気配はないのです。

過剰なまでに赤ちゃんの頭を撫でて、赤ちゃんは嫌がった顔を見せていました。

「授業に、なんないね」

「まあ、いいんじゃないの。あたしはね……」

そうついいながら携帯電話、（長峰さんの曲の着メロ）が鳴っていた。すぐに、長峰さんは携帯電話を手を取った。

その時の顔が、険しかったのです。

「ああつ、いいなあ。授頼先生も、ちゃんとおっぱいでるんだあ」

夜奈月さんが、目の前の教壇でおっぱいをあげている授頼先生を羨ましく見ていた。

それとは対照的に長峰さんの顔色が、曇っていた。

なんだか彼女から、キラキラしたものが一瞬にして消えたそんな顔。何度も入れる相槌の声のトーンが、重いのです。

「わかったわ、待ってなさい。何とかするから！」

一瞬、ちらりと私と目が合いました。

すると、長峰さんは困った顔で私から視線をそらすのです。

（なにか、あったのでしょうか？）

でも、その言葉を私が言う前に、長峰さんはずっと席を立ち上がりません。

そのまま携帯の電源を切り、授頼先生のほうを向いていました。

「ごめん、あたし急用ができたから、先帰るね」

「あずあず、どこからの電話でしょうか？」

私は、つい彼女に声をかけてしまいました。

「どこだっというじゃない！」

怒った口調の長峰さんは、すぐに後悔したような顔を見せて、そのまま通学カバンをもって教室に出ていく。

ブリちゃんのお世話をしていた授頼先生は、気づいたのか長峰さんを見ていた。

「長峰さん、ごめんなさいね」

「いいのよ、千影。あたしが絶対に治すから、千影はいつも笑っていて！」

アイドルは、みんなに笑顔を与えるのが、仕事なんだからね」

そんな長峰さんは、全くキラキラと輝いていなかったのです。むしろ、鬼気迫るような顔で私に言ってきたのです。

でも、私は長峰さんの言うとおり、

「ええ、私は笑っているですよ」

彼女に対し、めいいつぱいの微笑みを見せていた。

白衣から何とか出てきた黒猫は、じっと長峰さんを見送っているかのようです。

そのまま、長峰さんは合鍵を私に投げ渡しました。

「これ、あたしの家の鍵、千影」

「はい」と私は鍵を大事そうに受け取って、長峰さんは走って教室を出て行きました。

あれから三時間ほど、十二時過ぎたこの時間に私は、家に戻って眠っています。

長峰さんの家で、私は夜遅くに眠りについていました。

胡桃さんは、隣の部屋で寝ています。

私は車いすのまま背もたれを、横に倒して眠っています。

この時間でもあずあずは、長峰さんは戻ってきませんでした。

（こんな時間にどこに、行ったのでしょうか？）

目をつぶり、なかなか眠れない私は不安でした。

気になって仕方ありません、ですがどうしようもないのです、歯がゆいのです。

そんな中、私は背後にある気配を感じた。

「あれ？」

目を開けて私は起きました、そこにいたのは人じゃない。

うつすらと人の気配、でも様子がおかしい。姿がよく見えないのです。

「いませんね？」

「いますよ。私はいつもの場所に」

その声の後に突如、私の車いすが前に押されて動き出したのです。いきなり勝手に動いて、驚かされました。

「ああっ」

急いで両手で車輪を止めようとしたが、背後から押してくる力が強くて、前に進んでいく。でも、声は前から聞こえた。気配も前から、不思議な感覚。

私の車いすは、そのまま狭い部屋の壁に激突する直前、足のつま先から数ミリのところでなんとか止まりました。

「た、助かったのですか？」

「笹川 千影、なぜ私の目の前に現れたのですか？」

暗闇の部屋の中、私の車いすの上から顔を覗かせていた。その声に、私ははっとした。

その声は、明らかにいつも恐怖を与えるあの声でしたから。

「苦しみの時に聞こえる声と同じ、なぜ？」

「あなたと私は、もう会うことはないと思っていましたが……」
その声で、私は確信しました。

「胡桃さん？」

「そうよ、長峰 胡桃。本当は、もう死んでいるの」

車いすを強引に回した彼女、病弱な彼女の力ではなく強い力で回していく。

そのまま腰をかがめて、私のほうにしつかりと顔を向けてきた。短い髪の少女は、険しい顔で私を見てくる。

「あなたの顔を、見せて」

そういつて彼女が、手を伸ばした。伸ばした手は、私の頭にいや、

前髪を掻き上げた。

それでも私は、不思議と怖さがありませんでした。

「やっぱり。あなたは、ずっと知らないんですね」

「なにがでしょうか？」

すると、胡桃さんが私の額に触れてきた。

「この頭のは、何かわかる？」

残念ながら見えないですが、額には何か固いものが当たっています。

「あの、なんですか？」

「分からないようね、やっぱり私と同じ。雄条医師は、何も言わないから」

「雄条医師を、ご存知ですか？」

それでもその医者の名は、分かっていた。私が、好きじゃないあの医師。

授頼先生をよく殴っていて、緑の白衣と帽子の中年医師の顔を思い浮かべた。

「あなたの額には、これがあるの。私とあなたをつなぐもの」

胡桃さんは、私の手を引いて彼女の手を額に当てさせた。

それは、固い宝石のようなもの。

ひし形の石を埋め込まれて、暗い中でも黄色くぼんやりと光っているようだった。

「なんですか？」

「『奇石』、これがあなたを苦しめている正体です。雄条医師のところ……」

「『奇石』？」

「雄条医師の所にお姉ちゃんは今、それを向かっているんです。私とあなたが、どうしたら生きていけるかを。」

お姉ちゃんだけではありません、おそらくお姉ちゃんのお仲間さん

も……」

「どういうことでしょう？」

「ただ、一つだけ分かっていることがあります。

あなたが生き続けるためには、私は死ななければいけないということです」

胡桃さんの言葉に、私は胸が一気に苦しくなった。

『死ぬ』、その言葉は世界で一番嫌いなのです。

「そ、そんな……なんで、そんなことを？」

「なんとなく、感じます。授頼先生が、『星のしずく』を読ませたずっとあの日から。

不思議な感覚、薄れていく存在、空しいような気持ち……抽象的な言葉ばかりで、よく自分が分からない。

でも、あなたが生きていくことが、私の死につながる、そんな気がします。

私は、ずっとあなたに語りかけているんですよ」

「やはり、あなたでしたか」

「笹川さん、もう、生きないでください。休みましようよ」

「ダメ、胡桃のやっていることは、間違っている！」

玄関の奥から、一人の人物が声を出して入ってきた。

その声には私は、顔がゆるみました。

「あずあず？」

でも、顔は見えません。

声はちよつと幼い気もするけど、不思議とあずあずだと思えた。

「胡桃、ごめんね。千影は、あたしの大事な友達よ。

失うわけにはいかないの、あなたがなにもかも知っていても……」

「姉さん、わたしは、姉さんのことが大好きだから……」

胡桃さんは、声の方に顔を向けていた。

「でも、あたしは決意したの。どんなことがあっても、間違ってるんだって。

正しいことは正しいし、間違いは直さないといけない。

だから、やっぱりやらないといけないの。破壊を」

「姉さん、ヒドイ！私は姉さんと一緒にいたいだけなのに……」

私は分かりません、オロオロするだけで、何も知らないのです。

胡桃さんは、悲しそうな顔で力なく叫んでいた。

でもその声には、違和感がありました。

私は、やはり気になってその声に反応していた。

「違いますね、あずあずではありませんよ」

すると、玄関の中に一人の小さな女の子が入ってきた。

黒い服を着ていたけど、その子は、見覚えがあった。

「広州さん？」

「バレてしまつては、しょうがないわ」

白いワンピース、赤いカールの小さい広州さんが姿を見せて私を見上げていた。

小さいはずなのに、その存在感は大きく感じてしまう。

「笹川先輩、あずさからの伝言。よく聞いて。

あなたが、迷ったら周りを見ないで自分で考えなさい。

何をしたいのか、何をすればいいのか」

広州さんの言葉に、私は一言、ふた言頷いた。

私は、迷う必要なんて、はじめからない、なかったのです。

長峰さんは、雄条医師のところに行った。彼は、私が嫌いなことをする人。

授頼先生にも、ひどいことをする人。

そして、思い出される一つの言葉。

「あたしが絶対に治すから、千影は笑っていて！」

その言葉に、私は胸騒ぎがあつた。その時に見せた難しい顔は、そこにあつた。

そんなことを、知っていたら私は、絶対笑ってなんかいられない。

私のせいで、私のために、彼女を危険に犯してしまうのだから。

すぐさま、私は携帯電話をとった。かける場所は、あの人。

私のそばで、ずっと見守ってくれたあの人に。

「どうして、教えてくれなかったのですか！先生は、全て知っていたのですね」

授頼先生にかけた。彼女は起きていたし、黙っていた。

やがて短い沈黙、電話口から聞こえたものは、あまりにも意外な言葉だった。

「笹川さん、あなたは『長峰 あずさ』とどこで知ったのですか？」
そんな時、はっとしたのです。

偶然ではない、長峰さんを、あずあずを、最初から知っていた。
気がついたときから、長峰さんはいつも会いに来ていた。

「私が知っていた？」

「そうですよ。あなたは、『長峰 胡桃』と同じ記憶を有しているからです」

授頼先生の言葉に、私は始めて胸が熱くなった。

その感情は、決して病室にいるときに感じられなかったあの事。

「やはり助けに行きます、もう止められませんよ！」

私は車いすを漕ぎ、家を出ようとした。

携帯電話の通話を切り、それでも失いたくないのは私の親友。

雄条医師の残忍ぶりは、私がよく知っていた。だから、近づけさせてはいけない。

携帯電話からは、授頼先生が引き留める類の言葉が聞こえてくるけど、私は聞こえなかった。猛スピードで、玄関から外に出ようとする。

必死に車いすをこいだ私の目の前には、胡桃さんは両手を広げて立っていた。

「やっぱり行くの？」

「胡桃さん、あなたの思いは分かるけど、どうにもならないの。

あなたは、おそらく終わっている……」

伊豆奈さんの言葉に、胡桃さんはしゃがみこんで泣きだした。

静かに泣き崩れる胡桃さんを横に、広州さんは叫んでいた。

「早く行つて！ここは、あなたのいる場所じゃない」

広州さんの顔を見て、私は迷うことなく頷きました。

慰める広州さん、慰められる胡桃さん。

そんな彼女達の横を通り過ぎて、私は外に出たのです

あずあずを、失いたくない。その気持ちは、人一倍強い。

雄条医師は、やっぱり悪い人だったんですね。

数日前に抜け出した病院から私は、結局自ら戻ってくることを自ら選びました。

空いていた夜の病院、中の待合室はぼんやりと明るかったのです。

そして、そこには一つの影が立っていた。

「授頼先生！」

彼女が白衣を着て、仁王立ちしていた。

「笹川さん、悪いですけど、今のあなたをこの病院に戻らせるつもりはありません！」

「どうしてですか？私は数少ない親友を、失いたくないのです」
恐怖の対象でしかない雄条医師に、大好きな親友を近づけさせるわけにはいかない。

夜中二時過ぎの病院の中で、私の声と授頼先生の声が響きます。

「雄条医師は、あなたをどうしたいのか知っているのですか？」
やや涙声になった授頼先生、私はひるむことはありません。

「私は、ずっと一人ぼっちに……」

「千影ちゃんは、一人ぼっちじゃないよ」
私の背後には、深緑のブレザーを着た一人の少女。その声に、私は聞き覚えがあった。

「夜奈月さん、あなたもここに？」

「『織香部』は、千影ちゃんの味方だよ。
あずさちゃんが、ずっと抱えていた悩みを解決するために動いているの。」

悠も、園川先輩も、伊豆奈ちゃんも、私もあずさちゃんも」

「夜奈月さんも、騙っていたんですね、ひどい！」

「笹川さん、落ち着いてください。」

私たちは、あなたのウィルス調べていました。
あなたの病状、やはり初めから、ウィルスではありません。

長峰 胡桃と、あなたを人工の『奇石』というもので、命をつなぐ手術を行いました。

でも、それは間違いでした。あなたには、未知の力があつたのです。
あなたに『奇石』を埋め込んだとき、『アビ』というあなたの潜在能力がありました。

そして、『奇石』の力と、あなたの『アビ』を反応させて存在しているのが、長峰 胡桃。彼女の存在そのものです。

長峰 胡桃を、作ることに成功した雄条は、考えを変えました。

雄条がずつと行つたのは、二つの命を使って生命兵器をつくらうと……」

授頼先生が淡々と続けました。そんな時、奥の方で光りました。

すると、授頼先生の背後から、飛んでくるメスが見えた。

授頼先生は、すぐさま私のそばに近づいて動いていた。

メスは、私をかすめて後ろの床に刺さったのです。

「よくも、まあ調べましたな」

奥から出てきたのが、緑色の白衣と帽子の雄条医師だった。

嫌な威圧感を放つ彼の背後には、数人の看護婦。

あの時と同じ、顔をうかがうことができない暗さ。

「雄条先生、もうやめてください！」

「笹川 千影の『影使い』の『アビ』、実に素晴らしいではないか。これがあれば、戦争はもっと楽になる。お前には、もっと影を生んでもらおう」

「園川部長とあずさちゃんを、返して！」

すると私と授頼先生の前に、夜奈月さんが両手を広げて立ちふさがった。

「ああ、病院の地下に侵入したネズミか。」

奴らは、今頃地下牢で自らの行いを悔いて、落ち込んでいるだろうよ。

それより千影、戻ってこい。お前の病気を治してやろう、この俺は天才だからな」

「嘘を、言わないでください！」

「嘘ではない、本当だ！病気というのは、苦しみを感じるからだ。

ならば、お前の苦しみを、永遠に取り除いてやるうではないか」

なんだか、胡散臭そうにやりと笑う雄条医師。

「お前は、かつて交通事故で、この病院に運ばれたのだろう」

そう、私は幼い時にここに事故で運ばれてきた。

その時に近くのベッドで、同じような重症の少女がいた。

そして少女の顔を、私は思い出した。その時に、私ははっとしたのです。

「胡桃さん？」

見覚えのある顔が、ようやく思い出された。

「そう、そこにいたのは長峰 胡桃。」

集中治療室にいた二人は、どちらも死ぬかもしれない存在だったのだ」

「うそ、でしょ」

「本当だ、そしてどちらも死なないような方法を思いついた」

雄条の言葉に、私は怪訝な顔を浮かべた。

授頼先生は、その話を知っているらしく顔をしかめたのです。

「お前ら二人を、『奇石』繋いだ。お前の額に、あるそれが証。

胡桃にもあつたろう、それが全てだ。

千影の体の弱さを、胡桃の体の健常さで補い、千影の体を治す方法。健康なものが、そうでないもの弱ったものを引き上げて命をつなぎとめる方法を、俺たちは行った。要は、いいものだけを残し、悪いものを排除するやり方だ。

さっそく千影と胡桃の体から、『奇石』で肉体的と精神的な力の摘出を行った。

だが実験の途中に、胡桃の精神に異常をきたしてしまう。

大きな精神的ショックを受け、手を打ったときは、彼女は既にショック死していた」

「精神的ショックで、ショック死？」

「長峰一家は、十年前に一家心中をしていて、生き残ったのがあずさと胡桃の姉妹。」

当然のことながら、父と母が目の前で死んだことにショックがあつて、それが心に残った。体こそは健常だが、すでに小さな彼女の心はもたなかった。

実験半ばで、亡くなっていたのだ」

雄条の言葉、あずあずの家の貧しさの意味が少しわかりました。

「それが、思わぬ反応を生んだ。」

笹川 千影には、大きな力を秘めていた。『影使い』という『アビ』を。

死んだはずの長峰 胡桃を、『影』という形で存在させてしまったの」

「額に埋め込まれた黄色い石が、すべてだ。」

お前の『アビ』を永続的に続けることで、長峰 胡桃は影として存在し続けられた」

「だけど、雄条医師、あなたはそれを利用しようとしていますね」授頼先生の言葉に、にやりと笑った雄条医師。

「後ろにいるこいつらも、笹川 千影から摘出された影だからな。痛みも感じない、裏切ることも、おなががすくこともない。」

影は、便利な殺人兵器だ。そして影を摘出するために千影には、いろいろとつき合ってもらったよ」

「影を摘出するたびに、千影の命がすり減らしていることに……」

「髪の色も、そのために変色しているのですね」

私の髪がなぜ、みんなと違う紫色なのか、赤くなると死ぬのかが分かった気がした。

「そうだ、でも我が軍に、『影』は必要な兵器として彼女は必要だ。『アビ』として分離した千影、お前の力はまだ採取していない。」

恐怖や、ショックを与えようと……」

「それで、今まであんなことをしたんですか」

一連の雄条医師の言葉を聞いて、私はなんだか悲しくなった。

「お前の内に秘めた能力『影使い』を、その能力を最大限に引き出すための努力だ。

そして天才的な俺は、あることをつきとめるのだ。

お前が死んでも、その亡骸から影を取り出せばいいのだと」

すると、雄条の左手から拳銃がいきなり出てきた。

「というわけで、死ね」

「ダメ！」

その時に阻んだのが、授頼先生。

私をかばう授頼先生は、なぜかにこやかな顔を見せていた。

そのまま私に覆いかぶさるように、背中に銃弾を受けた。

激しく飛び散る、赤い液体。白衣の背中が、赤く染まる。

一気に青ざめた顔に変わった彼女を見ていた私は、体が震えた。

「授頼先生！」

前から倒れこんだ白衣の女性を、わたしは強く抱きかかえたのです。

「大丈夫です、笹川さんは長く生きる義務があるのです。

責任ではなく、私の義務なのですよ。この『奇石』の名前が分かれば……」

それは授頼先生が、妊娠中絶した赤ん坊に対しての思い。

いつも語りかける先生の言葉は、やっぱり温かく優しいものだ。

そんな彼女はすぐに力なく、私に覆いかぶさるように倒れていく。

「ダメです、私を置いて……」

「次は、お前だ」

奥の雄条は、深緑の帽子で顔を隠しながら私に拳銃を向けた。

いきなりのこととて、戸惑いと悲しさがこみ上げる。
強く抱きしめた私は、死を覚悟したが、

「千影ちゃんは、死なせない！」

なんと、後ろにいた夜奈月さんが私の前を阻んだのです。

わずか数日前に出会った同じ年の少女が、雄条に走って無鉄砲に向かう。

「一般人が、何を血迷う？」

「お兄ちゃんの教えだよ、弱い人がいたら助けるの！」

「馬鹿か、死ね！」

だけど、夜奈月さんの動きが一瞬速く、引き金を引くより雄条にたどり着いた夜奈月さんはそのまま思い切り殴った。顔を殴られた雄条医師は、バンと引き金を引くが拳銃の銃口は、天井の蛍光灯のそばに命中した。

すぐさま、体勢を整えようとしたところに、夜奈月さんの右手を大きく振り上げた。

「こう見えても、あたしはバスケで鍛えているから」

そのままもう一度平手打ち、雄条医師の拳銃を振り払った。

床に転がった拳銃は、雄条医師の後ろにいる看護婦たちのほうに流れていく。

それでも、看護婦の姿をした影たちは、こちらを見ていたのです。

「す、すごいです！」

「千影ちゃんは、『織香部』だよ。だから、誰にも傷つけさせないよ！」

すると、夜奈月さんの背後から、気配を消した看護婦たちが周りを囲む。

それは、雄条の周りにいた看護婦たち。

十人ほどの看護婦は、持っているメスを光らせた。

「あれ、まずいかも……」

殺気の威勢いい顔つきから、やや冷や汗に変わった夜奈月さん。私は手負いの授頼先生を、抱きかかえて見ていたのです。

「ぬう、こうなれば、奴らを皆殺しにしろ！」

雄条は、険しい顔で看護婦たちの後ろに下がる。

私のほうにも、数人の看護婦がメスを持って向かってきたのです。もちろん、この看護婦に感情なんてものはない、私の影だからですね。

「もう、やめましょう！」

気を失った授頼先生を抱きかかえ、不安な顔の私が咄嗟に出た弱弱しい言葉。

車いすの私は、それでもどうしても叫ばなければいけなかった。

意識を失った授頼先生を抱きかかえ、私は恐怖に震えるしかないのです。

「何をやめる必要がある？俺たちは、負けたりはしない」

「助けに来たわ、千影」

病院の廊下の奥から男女の声、待合室の奥から二人の人物が出てきた。

病棟側の通路から出てきた方向は、なんだか神々しく輝いているようにも見えます。

「待たせたわね、千影」

声は完全に、あずあずだった。

いつも通りキラキラした顔を見せたあずあずは、嬉しそうな顔をしながら一枚のクリアファイルを持っていた。

その隣には、明らかに強い存在感を見せた男性。
その空気を私は、はつきりと覚えていた。

「ナイト様！」

そこにいたのが逃げ出したあの日、見かけた銀髪の少年。私のナイト様でした。

「Misfortuneを『破壊』する」

少年がいきなり言ってきたその言葉に、私の体に変化があった。
なんだか体が、軽くなるようなそんな気分。すると私の額が、なんか黄色く光った。

「これは？」

「笹川 千影、あれがお前のウィルスいや、人工『奇石』の名だ。
お前が苦しむすべてを、ここで破壊した」

「あの……」

「俺は『破壊の皇帝』だ、どんなものも破壊できる。」

それは原子レベルから、地球までだ」

「な、なによ！ かつこつけちゃって」

あずあずは、不機嫌そうにちょっと戸惑っていた。

それと同時に、雄条の周りにはナース服があちこちにはらりと床に落ちていた。

影が消滅をしたから、そこには何も残らない。

「もしかして織香が、言っていたことはこういうことなの？」

「そう、だね」

あずあずは、なんだか隣の『破壊の皇帝』と名乗ったナイト様を見つめていた。

もしかして、あずあずも彼を好きになってしまったのでしょうか。
少し複雑で、嫉妬の気持ちがありましたよ。

「さあ、千影よ。あとは、あいつだけだな」

「なんだと、アビが、消滅している」

雄条は、驚いた顔を見せていた。

戦慄を覚えた顔に、私の『ナイト様』は雄条を指さした。

そういえばこの『ナイト様』、どこかで見たことあるような気がします。

私は絵本と同じ『ナイト様』に会えて、うれしさと同時にあのく雄条医師を見ていたのです。

「守りたいのだろう、お前の親友を」

『ナイト様』の言葉に、私はうんと頷いていた。

あきらめ悪く、それでも床の拳銃に向かって四つん這いに歩く雄条医師。

「『破壊』、雄条の拳銃」

すると、雄条が手に取ろうとした拳銃は、ガラスの割れた音と同時に完全に消えた。

「なにっ、なぜ……」

「雄条医師、あなたのやっていたことは間違っていたのです。」

影で想いをつなぎ留め、その影を兵器として利用することなど、人間のすることではないのです」

私は、その台詞を四つん這いの雄条医師に投げかけた。

その時、私の声に胡桃さんの声が影とともにシンクロしました。

雄条医師は、もはや抵抗するわけでもなく、その場にうずくまったのです。

全てが、決した瞬間でした。

長峰さんの家に帰って、やっぱり悲しみに暮れていた。

あるはずのない人が、いないとこんなにも辛いことで悲しいこと。
長峰さんは、ずっとしくしくと泣いていたのです。

このことを、胡桃さんは知っていたのですね。

あずあずも、おそらくは知っていたでしょう。

ただ、それでも現実を受け入れることは難しいのです。

「胡桃、ごめんね、ごめんね！」

泣き崩れるあずあずに対し、私は車いすのそばに座っていた。
私の下半身が軽くなり、今の私の体は恨めしくさえ感じます。

「ごめんなさい、私が生きるためには、彼女を犠牲にしないといけないとは」

「違うの、胡桃はあの時、もう死んでいたの！」

あずあずは、振り絞った声を出した。

かけがえのない大事な存在、自分以外の唯一の生き残り。

それが生きがい、支え。私があずあずに会って、生きがいになっていたのと同じように。

「ありがと、千影」

「私のことを……」

「大好き、千影！いつまでも親友よ！」

あずあずは、私に抱きついてきた。

彼女はやっぱり強いです。泣いていても、キラキラ輝いています。

「アイドルは、みんなに笑顔を与えるの」

いつか彼女が、私の病室で言った言葉。私は、長峰さんのその言葉が大好きでした。

「はい、あずあずに、私は笑顔をみせるのです」

私も、彼女に対してにっこり微笑んで見せた。

彼女を安心させること、それがきつと親友なんだと、その時にほんやりと思えたから。

「千影、あらためて、これからもよろしくね」

そう、最後はもう笑ってくれた。私は、そんな彼女の笑顔がやっぱり大好きでした。

第四話：強さと人形（前書き）

——登場人物紹介

園川 哲治：『織香部』部長、エロい男子。高三男子。本編主人公。眼鏡をかけている痩せた男で、常にカメラを首にぶら下げている。好きなものは、フィギュア。自作フィギュアを作るのが得意。彼には、苦い過去がある。

長峰 あずさ：『織香部』部員、ツンデレ毒舌アイドル。意外と可愛いロングヘアート、目立ちたがり屋の大きなリボンが特徴。

現在一人で暮らしている、最近悲しい事件が起きている。

夜奈月 椿：『織香部』部員、背の高い女子高生。背の高いポニーテール女子、かわいいものが好き。悠の『破壊の皇帝』の正体を、知っている。

三野宮 織香：『織香部』顧問、既婚者
東城学園高等部で、数学を教えている。ショートボブで、色白な大人の女性。

完璧主義者で、理論的。娘のプリカを大事にしている。
園川部長とは、ある約束をしていた。

広州 伊豆奈：『織香部』部員、子役、小四女子。
赤い髪でカールがかかっている、童顔で無邪気な人気天才子役。
好きな男子ができて、現在つき合っている。

皇 悠：『織香部』部員、気弱な少年。

ぼさぼさの銀髪、気弱で人見知りな少年。
影の薄い、草食系男子。でも、彼は『破壊の皇帝』というも一つの人格を持つ。

園川 優香：哲治とは、一つ下の妹。
あることがきっかけで、二人は別れてしまう。

笹川 千影：『奇石』というものを頭につけた少女。
紫色の髪を縛っていて、純粋な顔の少女。
最近は、不治の病が治って歩けるようになったらしい。

プリカ様：ピンクの髪の赤ん坊。
とても愛らしい、「にゅ」と、「ばぶばぶ」ぐらいしかしゃべれない。

でも、この赤ん坊はすごい能力を持っている。

第四話：強さと人形

——今から十一年前、俺が住んでいたその家は修羅場でした。六歳だった俺は、どこにでもいる子供だった。

俺の名は園川 哲治、小学一年生。

そして、俺の両親と妹の四人家族というごく普通の一軒家に住んだ家族。

でもそんな家で、起きている修羅場。

「なんということだ、情けない」

俺のパパは、リビングで怒りと呆れの両方を交えた顔を見せていた。机の前に出されたのが、いろんな人形。

俺は、生まれて初めて見たものばかり。

男の裸の人形と、抱き合っている男同士のアニメ絵のもの。

「私の趣味を、馬鹿にしないで！社会では、ちゃんと市民権を得ているんだから」

「息子と娘もいるのに、こんなのはまっぴいわけなろう！」

ド真面目な顔のパパは、ドの強い眼鏡をかけたママにやりきれない怒りをぶつけていた。腕組みをして、険しい顔で睨んでいた。

「俺は、お前が映画鑑賞好きというちゃんとした趣味を履歴書で見ただから、こうしてつき合って、結婚までしたんだぞ！」

「ちゃんと趣味は、映画鑑賞ですよ」

そいつって出てきたのが、アニメのDVD。男の制服姿が、悪そう微笑んでいた。

「この子、すごかつこいいのよお」

ママは、DVDの表紙の男を見つつ、今まで見たことないような惚れ顔を見せていた。

でも、俺はちよつとだけママの気持ちが、わかった気がした。

「ならんぞ、大体、子供がいるのにそんな男性同士の、なんというんだ、ホラ？」

「『B L』^{ボーイスラフ}よ、常識」

「と、その、そんな趣味を持っているのは間違っている！認めんぞ、結婚詐欺だ」

「結婚詐欺じゃないわ、堅物！」

「なんだと！」

パパの怒りは、止まらない。まくし立てるように言ってくる。そのままママは、怒りを覚えてパパと向き合う。

夫婦喧嘩、リビングから少し離れて俺はドア越しに見ていた。そんな俺の隣には、ものすごく泣き出しそうな妹の優香がいた。

「どうした、優香？」

「なんか、怖い」

パパは厳格ということ、幼いころから知っていた俺たち。俺もビビるが、妹の優香はさらに怖いだろう。

父親が、公務員の上官ということもあって厳しさは本物。

「あっちに行こう」

兄らしく俺は、妹の手を引いた。小さい妹の手は、やっぱり震えていた。

うんと、小さくつぶやいた妹の背中では、未だに夫婦喧嘩が続いていた。

俺と優香は、不安になりながらも子供部屋に戻っていた。

まだ小学生な俺と、小学校にも入っていない優香。

優香は部屋に入った途端、泣き出した。

「おにいちゃん、ひつく」

「大丈夫か、優香？」

「パパとママ、どうなっちゃうのかな、別れるのかな？」

その言葉に、俺はものすごく敏感になっていた。

今まで、あまりなかった夫婦喧嘩。

ただ、最近パパは様子がおかしく、ママはなんだかそわそわしていた。

「……うん」

ちよつと前に、パパは俺に言っていた悪い言葉。

後々わかることだけど、俺はこの時肯定しなければ、小さな優香は心配がらないで済んだのかもしれない。でも、優香に対して嘘がつけなかった。

「やっぱり、別れちゃうんだ、えーん」

優香は、さらに激しく泣き出した。小さな体を震わせて。

「大丈夫だ、俺は優香と別れない。そして、優香は俺といつまでも一緒だ」

だが、次の瞬間、激しい声が家じゅうに響いた。

「お前とは、もう離婚だ！」

こんな得体も知れん趣味を持ち、子供たちに悪影響を及ぼすヤツとは一緒になれん！」

それは、パパのものだった。はっきり聞いてしまった、パパの怒り声と意志。

その言葉を聞いて、俺は覚悟した。

覚悟は、あつという間に現実なものへと変わるその瞬間だった。

それから、別れの日があつという間に訪れた。

結局俺はママに、妹の優香はパパに預けられることになった。別れ際、引越しのトラック。そこに俺とママが乗れば、別れになってしまう。

あまりにも幼い俺と優香にとっては、残酷すぎる結末。大人のことに、自分たちは口をはさむことはできないで無力な子供。そんな俺は、優香と顔を見合っていた。互いに、悲しい顔を見せていた。

「優香、俺はママについていく」

「うん、お兄ちゃん」

小さい優香は、体を震わせていた。

そんな俺は、優香のそばに来て手に持っていたものを渡す。

「優香、これ」

俺は、大事にしていたヒーローの人形を手渡した。特撮モノのヒーロー。

「お兄ちゃん、これ一番大事にしていたものでしょ」

「やるよ、優香に。俺だと思って、いつまでも大切にしてくれよ」
半べそな顔で、俺は優香に渡した。その時の、俺の宝物。

「ありがとう、じゃあ、優香からはこれ」

そういつて優香が取り出したのが、女の子の人形。着せ替え人形で、赤い服を着ていた、ブロンズヘアのかわいい人形。

「じゃあ、こっちは優香だと思って大切にしてくね、お兄ちゃん」
ああ、俺は優香に泣き顔で頷いた。その顔を見た優香は、やっぱり泣いてしまった。

分かっていた、これでお別れなんだということ。
幼心を感じ取った、悲しみ、別れ、切なさ。

「もう、お前と会うこともないだろう。そちらも、会いに来るな！」
「私の趣味を理解しない堅物のところには、二度と行きません！」
最後の最後まで、ママとパパは喧嘩していた。
そして、俺はママの手にひかれて車に乗り込んだ。
優香と俺は、別れを惜しんで最後まで手を振った。
俺も、負けじと手を振りかえた。
その隣で、ママはつらそうな顔をしているのを見ることがなく――

月日は流れて、あれから十一年が経った。
高校生になった俺は、東城学園に入学し、『織香部』という部活の部長。

俺の目的は、部員の悩みを解決するために影となり織香先生を支えること。

そんな織香先生から言われて、俺はある病院に来ていた。

「『雄条総合病院』」

東京都内にある大きな大学病院、しかも今は夜。

夏に近い蒸し暑さの五月下旬、夜の病院は恐怖があった。

人気もない病院に、俺の足音だけが聞こえてきた。

もともと体は丈夫なほうなので、病院の世話になったことはない。

俺は人形たちを取り出して、いつも通りの任務に向かっていった。

「笹川 千影の『奇石』の名前、その『カルテ』を手に入れるため」
それが、俺の任務。静かな病院は、ロビーだけ明かりがついていた。

「いくぞ、俺たちの子供たち」

俺はいつも通りに、二体のフィギュアに命を吹きかけた。

俺は『アビ』という能力を、持っていた。それは、学校生活で突如目覚めたもの。

熱中して執着したものが、中学あたりで人と少し違った力となっていく。

それが『アビ』という、特殊な能力みたいなもの。

そして、動かない粘土フィギュアが動き始めた。

俺の手を離れた、『夜奈月 椿』人形、『笹川 千影』との二体の人形は歩いていく。

二つのフィギュアは、あくまで俺の目や耳でしかない。

視覚と聴覚の共存、それが俺の『アビ』、通称『人形遣い』。

可動範囲ぎりぎりから俺は、椿&千影フィギュアを進める。

途中の道で、上と下に分かれる道。

俺は少しだけ考えて、フィギュアを下に向かわせた。

俺の『アビ』は、なぜか高低差に弱い。

だから俺も病院の外から、中に潜入してフィギュアを追いかけた。

こんな病院の搜索も三日目、広い病院を慎重に探す。これも、織香部に来た笹川 千影のため、織香が言っていたあいつの悩みを解決するため。

するとフィギュアは、また下の階段を見つけた。

「いったい、何階あるのだ？」

ため息をつきながら、薄暗い病院を一部屋ずつくまなく探す。

目的はカルテだから、ある場所はおそらく医院長室。

初日、二日目と四時間ずつの搜索を行い、上は大体確認した。

たいていは一階にあるはず、だがそれが見つからない。

それにしても、顔の見えない看護婦があちこち巡回していたな。

俺は、うまくやり過ごしながら見つからないようにする。

「地下三階へ、行くか」

下の階に行くと、フィギュアとともに視界を共有していた。俺も、フィギュアに合わせて地下三階に歩いていく。

間もなくして、俺はフィギュアを止めた。そこに見えたのが、院長室という表札。

「ビンゴ！」

その瞬間、二日間の苦勞が報われた気がした。

俺は、ぐっとガッツポーズを握る。

そのままフィギュアのそばに、俺はやってきていた。フィギュアなので、ドアを開けることはできない。

だから俺が、「医院長室」の部屋の目の前まで慎重に歩いていた。重いドアだけど、フィギュアを回収して俺が中を開ける。

すると、そこは軍事基地みたいな大きなモニターが見えた。

「うお、すげえ」

だが、空いたドアの瞬間、赤いランプが鳴った。

一瞬にして、俺に緊張がほとばしる。

「非常事態、非常事態」

大きなサイレンと赤く光るランプ、そしてアナウンス。俺は一気に緊張が走った。

「ま、まずい、見つかった！」

俺は、苦い顔ですぐさま走って逃げようとした。

だがあつという間に、上の方から走り音が聞こえてきた。

そして素早すぎる動きに、俺は対応が遅れた。

「しまった！」

俺の上の階から、数人の看護婦が現れた。俺には、戦うだけの力は

ない。

『人形と視界が共有できる』こと以外俺は、無力だった。その看護婦は、メスのようなものを持って静かに現れた。

それから十分ほどして、俺はある部屋に入れられた。

そこは、放射線室。手足を縄でぐるぐるに縛られて、侵入の時に着ていた水色のブレザーは、いたるところがメスでボロボロに切り刻まれていた。

そんな俺の目の前に現れたのが、一人の医者。

白衣を着て深緑の帽子をかぶり、口髭をはやした中年男性。強い威圧感を放ち、俺の事を見下していた。

「こんなところに何の用かな、学生無勢が」

やや睨むように、口元だけ笑っていた。

目から感じるのは殺意、こいつはやばいと本能で悟った。

そして手に持っていたのが、昨日ようやく完成した車いすに乗った笹川 千影のフィギュア。

「俺のコレクションに、汚い手で触るな！」

「状況が、お前は分かっているのか？」

医師は、迷うことなく俺を蹴り飛ばした。あずさのよりは、痛くないか。

「それより、この女を探しているのだが、どこにいるかわかるな？」

そういいながら、医師は嫌すぎる笑みを浮かべた。

その時、こいつの名前がはっきりとわかった。

こいつが噂の雄条医師か、授頼先生や笹川が嫌いなのも分かる気がする。

「さあな」

「とばけるな！」

さらに俺は二、三発殴られ、そのまま床に倒れこんだ。

その時、俺のブレザーのポケットから一体の人形がゴロリと出てきた。

その人形は、俺が優香にもらったあの赤い服を着た人形。

俺は、優香からもらって肌身離さず持っていた、形見のようなお守りのようなもの。

手を伸ばそうと、とろうと思ったが、両手が縛られて動かない。

だが、やつは次の瞬間俺の目が疑うようなことをした。

「白状しろ、出ないとお前の記憶は、すべて消えるぞ」

俺の一番大事にしていた人形を、ためらいもなく踏みつけた。俺の顔は、固まった。

目の前で踏まれた人形、口を開けたまま、俺は動けなかった。

いくつも作る人形の中で、それだけは失いたくない。

やや古ぼけた着せ替え人形の首は取れ、俺の目の間に転がっていた。それと同時に、悔しさと悲しさが押し寄せる。

でも、両手両足を完全に縛られて身動きは取れなかった。

「マジ……」

「白状しろ！」

雄条の声は、俺に耳にも届かない。

俺の首元をつかみ、詰め寄ったが俺の魂は抜けたような顔をしていた。

もうそれからしばらく雄条から殴られたが、痛みすら感じることなく気を失っていた。

それからというものは、よく覚えていないが、気がつくにあずさが駆けつけてきた。

織香先生の連絡網を聞いて、駆けつけたらしい。

そんな俺は命拾いしたが、俺の壊された人形は残ったまま。

心に不安がありつつも、あれから一週間がたっていた。
いつも通り、俺は学校に通っていた。

首にカメラをぶら下げた俺は、三年生の教室に佇む。

普段はねくらの俺は、周りにあまり友達がいない。

授業も終わり、放課後。ほとんどの生徒が、帰り支度と部活に向かうべく動いていた。

「園川、おい」

声がする用だけど、どこかわからない。

あの件以来、俺は本当に魂が抜けたような、気がしていたから。

「園川！客、来てるぞ」

でも、授業が終わった俺は、そのまま茫然としていた。

あの大切な人形は戻らない、どうしても戻らない。

そのことが、俺の心に埋まらない空白を作っていた。

「園川！」

俺は近くの男子から強引に肩をつかまれて、振り返らせた。

「あつ、なんだ？お前は知らんぞ。名無しのA君」

「俺は知らなくても、あれは園川の知り合いだろ、呼んでるぞ」

A君？本当に名前は知らんが、俺がその方角を指さすと、そこには深緑ブレザーの長峰 あずさがいた。

「ちょっとあんたに話があるの、付き合ってよ！」

いつも通り、腕組みをしたあずさに無理矢理連れて行かれたのだった。

無理矢理、歩かされること数分。

学校の中庭、荒っぽく俺をつかんだ俺に、いつも通り深緑のブレザーを着たあずさは険しい顔を浮かべていた。俺は、三年だから水色のブレザーだけだな。

「ねえ、なんで来ないの？」

「なんの、ことだ？」

「『織香部』よ！」

そう、俺はあの病院の一件以来、『織香部』に足を運んでいなかった。

顔をズイツ、と近づけて挑発的に腕を組んだ。

睨みつけて怒っている顔を、俺は困った顔で見ていた。

彼女は、こう見えてもアイドル。芸能事務所にも、ちゃんと属している。

かわいい部類の顔は、俺の鼻と当たるぐらいの距離にあった。

「今は、そんなじゃない」

「あたしだって、妹を失って辛いんだからね！」

あずさの言葉に、俺の心はなんだか苦しくなった。

そういえば千影を助けることは、あずさの妹を失うことと繋がっていたからな。

「あんたは、おかしいわよ！」

「俺だって、あの時、妹を失った」

俺の放った一言は、あずさを苦しめた。それが、すぐにわかった。

——二週間ほど前に、あずさは一人の病室にいる女の子を助けてほしいと言ってきた。

彼女の名は笹川 千影。東城学園の生徒だが、ほとんど学校に来ていないという。

彼女は、『奇石』というへんな石で、胡桃というあずさの妹を存在させていた。

その千影は、あの病院で治療され、彼女の中にある『アビ』を強引に摘出され結果、千影の寿命を削っていた。

そこで、『人形遣い』の『アビ』を持つ俺が、病院に侵入した。

カルテを手に入れるため、そうすれば、『破壊の皇帝』というウチの部員が、何とかしてくれるから。

病院側から授頼先生という協力者が、笹川 千影の病の正体を話してくれた。

その時、千影は交通事故で失った下半身と、あずさの妹胡桃の上半身をつなぎとめて命をつなぐ大きな実験をしたと白状した。

それは、影から人間をつくる実験を行っていた。

人が持つ影を、具現化して別の人間を作り出す魔法のような実験。

でも、千影には病院側に埋め込まれた『奇石』があった。

交通事故の治療と偽って、埋め込まれた人工的な『奇石』。

千影の体に埋め込まれた『奇石』で、死んだはずのあずさの妹、胡桃が生き返った。

千影は、もともと潜在的に『アビ』を持っていた。『影使い』というアビ。

影を操れるアビだが、応用したことで、『奇石』と化学反応して、亡骸から影を作って人を存在させてしまう。

でも、それは千影とつながった胡桃の命。千影が死ぬと、胡桃も死ぬ。

そして、胡桃が存在し続けると千影は死んでしまう。

逆にいうと千影の病気が治る条件として、胡桃の存在が消えることを教えてもらった。

千影の『奇石』を破壊すること、千影の影である胡桃を破壊することしかなかった。

あずさは妹の別れがすごく辛いだろうが、それでも千影を救う方法はそれしかない。

それを悠の『アビ』である、『破壊の皇帝』の力。織香先生が話した作戦。

名前が知っていれば、どんなものでも破壊できるとてもない『アビ』。

だが『破壊の皇帝』は、名前の知らないモノを、破壊することができない。

そこで俺は再び病院に潜伏し、『奇石』の名前を知るためにカルテを探す。

そして千影を救うことは成功し、胡桃は死んだ。
あずさに看取られることなく、影となって――

そんなあずさは、自分が来ていて、俺が来ていない『織香部』にか
なりの怒りを覚えているのだろう。

「あんたに、妹なんかいたの？ あんなに、エロいことばかりで」

「うるさい、小娘！」

俺はあずさを殴りたいが、ぐっと抑えた。あずさも、俺のことをき
りつと睨んでいた。

「そこまでですわ、園川君、長峰さん」
そこにいたのが、織香先生。『織香部』の顧問。
優しい大人の女性は、きりつとした顔で俺とあずさを見ていた。
右腕には、いつも通りのピンク髪の赤ん坊プリカを抱えている。
ちなみに、俺は赤ん坊にはあまり興味はない。プリカという名前の、
女の子らしいが。

「園川君、あなたの妹さんに会わせることをお約束しますわ。
入部当初の、あなたとわたくしの約束ですものね」
織香先生は、なんだかにこやかな顔を見せた。
そう、俺は『織香部』に入る条件として、妹のことを調べてくれる
約束をしていた。

「ちょ、ちよつと、どういうことよ？」
「えゝん、えゝん」

だけど、いいところで織香先生が抱きかかえる赤ん坊プリカが、泣
き出した。

ピンクの髪の、かわいらしい赤ん坊。
しかしこの赤ん坊は、俺なんかよりも、もっと凄い『アビ』をもつ。
戦争の火種に、なるぐらいだからな。

「よしよし、プリカ様。とりあえずみなさん、数学準備室に戻りま
しょう」

織香先生は、妙に納得した風の顔を見せ、そのまま先に校舎に戻っ
ていった。

あずさと俺は、お互いの顔を見合わせてすぐにそっぽを向いた。

数学準備室は、いつも通り。

ぼさぼさ銀髪の草食系の男子、皇 悠。彼は部屋の隅で、おどおどしていた。

ポニーテールの夜奈月 椿は、織香先生が戻るやいなや、かわいいブリカの頭をなでてばかり。なぜこいつは、かわいいものが好きなのかいまだに分からない。

かわいい部類の小学生、広州 伊豆奈はちょっと顔が赤い。

最近、好きな人ができて恋をしているらしい。

それと数日前までいた笹川 千影は、今は別の病院に通院していた。東城の生徒なので、いつでも会える。体調は、驚くほどに回復しているようだ。

そんな『織香部』、白いカーテンで椿と織香先生、伊豆奈の三人がブリカを抱いたまま入っていく。いつも通りの、授乳タイム。

「部長、大丈夫ですか？元氣ないですよ」

皇から、声をかけてくるなんて珍しい。明日は雨だな、これは。

「大丈夫だ、カメラは忘れていない」

俺はいつも通り、カメラをぶら下げていた。これは、資料をとるのに必要だ。

だが、最近はそんな資料をとる気さえ薄れていた。俺にとっては極めて重症。

俺も、千影と同じ病院に行くかな。

あずさとは、相変わらず不機嫌な顔を見せていた。

あずさは耐えられないか、口を真一文字に結び、携帯を見ていた。

「ふん、こつち見ないでよ！」

そんなあずさとは対照的に、白いカーテンがもこもこ動いていた。どうやら授乳をしているようだな、ってしまった。

今は、あずさがこつちにいるってことは、天敵がいないのだ。

ならば……、いかん織香先生も天敵だ。

などとおもっていると、突如白いカーテンから伊豆奈が出てきた。

唯一の小学生部員、ショートカールの女の子が出てきて、俺のほうの足元にすりよる。

「パパ、元気ないよ。もしかして、浮気でもばれたの」

そして、伊豆奈は子役だ。完璧なまでの演技で、上目遣いの小学生は俺を見てきた。

「お、おい……」

「伊豆奈を、見捨てないで。パパとママは、いつまでも一緒だよね」その臨時のママ役は、どうやらあずさらしい。

伊豆奈にしては手が込んでいる、織香先生の入れ知恵か。

「な、なにしているのよ、伊豆奈」

「ママは、パパが嫌いななの？」

伊豆奈のウルウルした目は、どこか哀愁を漂わせる。

涙さえにじませた瞳、なるほど役者は泣くのが早いほどいい役者というのも頷けるな。

「な、なによ。変な趣味を持つこんな部長、嫌いよ。なんか文句ある！」

そんなあずさは、伊豆奈のウルウル視線に耐えたのか、吐き捨てるように言った。

その言葉に、俺は驚愕した。そう、あの時を思い出したから。

「お前は、こんな趣味を持って、理解ができない。お前とは、離婚だ！」

そう幼い時にパパが、はっきり言ったあの言葉。

俺と妹を、別れさせたあの言葉を聞いて、

「ふざけるな！」

俺は反射的にあずさの顔を、思いっきりひっぱたいた。いきなり叩かれたあずさは、驚いた顔でほほを抑え俺の顔を見た。そして、俺は殴った瞬間に後悔が残った。

「あつ！」

「な、なによ、まだ怒っているの？」

「ごめん、長峰」

俺は取り返しのつかない悪いことをしてしまったことに、素直に謝った。

あずさは、本当は何も悪くない。

ただ俺がその言葉を、勝手に思い出して手を出しただけのこと。

「ごめんで済まないわよ、あたしはあんたに千影を助けてもらって感謝しているの！」

それなのに……心配で」

矛盾した二つの言葉、彼女の頭の中もごっちゃになっているのだろう。

「長峰さんが、一番園川君のことを心配されていたのですわ」

カーテンの中から出てきた織香先生が、またもいいタイミングで割り込んできた。

隣には、椿が下着姿でプリ力を抱きかかえている。

「そつだよ。あずあずも、あたしも悠も、伊豆奈ちゃんもみんな心配だったんだよ。」

学校で声かけても、部活に三日も無断で休むし」

「うん、『織香部』はみんなで悩みを共有するって。そのための部活……」

「俺のは、関係ない！」

俺は吐き捨てた。セリフを遮られた皇は、ひるんだ顔を見せていた。

「先輩……」

「俺は、もう帰って人形を作らないといけない！」

「先輩は、妹さんがこの学校に入ったことをご存知ですか？」

それでもあきらめずに、皇が言った一言。

帰り支度をしようとした俺の動きは、一瞬にして止まった。

妹、幼いころに生き別れになってそれ以来、全く会っていない。

気弱な皇から、まさかそんな言葉が出てくるとは俺は全く思わない。

「どういうことだ、皇！」

迷わず俺は、皇のブレザーの首元を乱暴につかんだ。

そして、なんで皇が知っているのか知りたかった。

「苦しい、この前、たまたま……」

「悠が、死んじゃうよお」

プリカを抱いたままの椿が、割り込んできた。意外と力あるな、こいつ。

俺は、皇とあっさり引き離された。そんな俺を、険しい顔で睨みつける椿。

皇は、二回ほど咳き込んでいた。

「園川 優香さんは、ボクがこの前、たまたま美術の授業で一緒にあったから」

「本当か？」

「本当です、間違いありませんよ。」

ずっと一人で、絵を描いていましたから。おそらくは……」

皇は、そのあと俺に対してある情報を教えてくれた。俺は皇の話を、生まれて初めて熱心に聞いたのだった。

そこは、学校近くの文房具屋。

俺の商売道具を買う文房具屋とは違っておしゃれな外觀。

見た目ブティックや、洋服屋に見えてしまうショウウィンドウ。

そんな、高級感漂う三階建の文房具屋に、部活が終わって来ていた。

「こんなところに来るのか？」

俺は、皇の話を半信半疑で来ていた。

周りは、高級なボールペンや万年筆なんかが置かれていた。

どこか違う空気に、全く落ち着かない。

なぜ、こんな場所に妹があらわれるかわからない。

それにしても、気になるのが妹の姿。

十一年も過ぎていると、さすがに姿は見当もつかない。

（品揃え、悪いし、高いなここ）

俺がいつも愛用する文房具屋には、パテやフィギュア用の絵の具なんかがあるが、ここには普通の絵の具しかない。しかも、俺の持っている絵具より高額ときたもんだ。

（優香に会ったら、いい文房具屋を紹介してやろう。

優香は二年になって編入で入ってきて、町の文房具屋のこともよく知らないだろうし）

にしても、文房具屋で再開するとは思わなかったが、現れない。現れないというか、いろんな顔を想像していた。

でも幼い時の、かわいい顔しか想像できない。

眼鏡をかけたママから想像するに、眼鏡姿の女の子が出てきた。それとも太っているとか、もしくは椿並みにデカい女とか。

意外と可愛かったりして、それはないか。
などと想像していた、だめだ、顔が分からないのに探すのは無謀すぎる。

こういうのは、出会いのインスピレーションだけだ。

すると奥の方から、商品を探している女とぶつかった。

「あっ！」

「うわっ」

その女が持っていた、ボールペンが落ちてしまう。

これはもしかして、と女の顔を覗くと、

「えっ」

紫色の髪を縛った同じ年の少女が、そこにはいた。

顔は可愛らしく、可憐な声の持ち主は、丁寧に頭を下げてきた。

「お久しぶりなのです、園川先輩」

そこにいたのが、笹川 千影だ。車いすには、乗っていない。

東城の黒いブレザーを着ていて、優しそうに微笑む彼女の姿が見えた。

ちなみに黒いブレザーは、特進か夜勤の生徒の証らしい。

ちょっとドキッとしてしまうが、スカートの中のパンツが見えそうでも、左手でしっかり手で隠していた。なかなかやるな、などと思っ

「どうしましたか？」

「えっ、いや、もう歩けるようになったんだなと」

俺は千影の足元、スカートの中を覗こうとしたけど、うまく千影が、体を動かして覗かせまいと動いている。

やるな、おぬし。そんな千影はいつも通りに、にこやかな顔を見せていた。

始めて会ったときは、車いす。でも、今は自分の両足で立った千影。『影使い』の『アビ』を持たない、普通の優等生な女子高生の千影。俺たちが助けた少女の姿が、そこにはあった。

「もう、立ちましたよ。先輩、それはなんですか？」

すると、俺の股間もなぜか立っていた。やばっ、これは病気だ。千影に指をさされ、無意識のうちに立ってしまった股間のソレを、なんとか落ち着かせてようとしていた。それにしても千影は、胸はデカいし、黒いブレザーが窮屈そうで、逆にそれが色気あるようにも見えた。

こいつ、病弱なんてありえんだろ。セクシーなグラビアアイドルのような、色気さえあった。

「それは、なんですか？」

再び千影は拾って、買おうとしているボールペンで、俺の股間を指してきた。

「やめろ、つつくな！」

「何が、いけないのです？」

完全無欠の可憐な少女である千影の弱点は、病室ですっと暮らしたせいで、世間的にちよっとズレているところ。

男のコレを、本当に知らないのだろう。純粹な目で、俺を見てくる。ヤメロ、見るな。めちゃくちや恥ずかしい。

あれだけ女のスカートを下から写真に撮る俺にとって、純粹すぎる天然女子のエロ発言だけは苦手だ。千影の声も顔も、めちゃくちや可憐だし。

だけど、そんな微妙な空気は、突如ある一言で打ち砕かれた。

「あんた、変態」

すると、明らかに俺を罵^{のの}った声が聞こえた。

千影の背後にいた女性は、ものすごい形相で俺を睨^{にら}んでいた。
赤みがかったミディアムヘア、深緑のブレザー、やや小柄な女性。

「な、なんだ？こいつは？」

「ええ、この方は、園川 優香さん。昨日美術の時間で、知り合った方なのです」

千影は、さらりと紹介した。

その少女は、ものすごく険しい顔を見せていた。
腕組みをする姿は、誰かに似ていた。あ、俺の親父だ。

「ふーん、笹川さん。この人、私知っています」

「優香、お前が……」

思っていた以上に太ってもいなく、大きくもなく、眼鏡もかけていない。

それどころか凜としていて、ちょっとかわいい顔立ちの女子。

控えめなミディアムカットの女は、どこか強気な顔でしっかりした女子。

「笹川さん、行きましょう。この人、絶対変態です！」

「えっ、そうなのですか？私を助けてくれた、一人なのです」

「いいえ、違うわ。あそこに人形があるでしょ、あれが変態の証よ」
優香が、すかさず俺に指摘した。

いつの間にか俺は、大事な非売品のフィギュアを落としていた。
オリジナル

それは千影フィギュア十六分の一、車いすバージョン。
もちろん俺の完全自作。

肩を怒らせて、不機嫌極まりない顔の優香に、俺は立ち上がった。

「優香、待って！」

「もう、知りません。あなたは二度と、私に声をかけてこないでく

「ださい」

それは、最悪の出会いだった。優香は、千影を連れて文房具屋を後にした。

まるで俺から、過去の異物から、避けるかのように。

そんな俺は、咄嗟とつとに優香の後姿を一枚の写真に収めたのだった。

俺は、いつも通り薄暗い部屋にいた。

学習机が置かれていて、その机に照らす明かりが唯一の明かり。どちらかというと、俺の作業は周りか暗い方がやりやすい。

ここは俺の実家、そして俺の部屋、または俺の作業場ともいう。

俺の机には、赤く染まったティッシュがあっただが、ごみ箱に投げ入れていた。

不機嫌な顔で、精神を統一させた俺は、一息を吐いた。

俺は暗い部屋の中で、今まさにある作業をしていた。

あの時踏まれて、壊れた着せ替え人形を治していた。

手には接着剤、震える手つきで人形の首のところに慎重に垂らしていく。

ちよつとでも接着部がズレると、接着剤が白く首の表面を溶かしてしまうので緊張感があつた。しかし、これがうまくいかない。

「優香、待っている、今助ける」

でも、それは優香じゃない。あくまで、かつての優香からもらったもの。

慎重に細かい作業をしていたブロンズヘアの少女は、やはり何事もなかったかのようにほほ笑んでいた。

それは非常に、酷なこと。

首がとれているのに、やや顔が歪んでいるのに、笑っていた。

俗社会、世間と全く違うファンタジーの世界が、人形にはある。フィギア

パテを固め、新しい腕の部分を慎重につけていた。

実際の人間でも、まるで違う分身ができたかのようになる。

そして俺は、人形作りに熱中して『人形遣い』のアビさえ持っていた。

その俺が、人形に感情を込めないはずもない。

机の上のガラスケースの棚には、椿、あずさ、千影、伊豆奈、織香先生フィギュアがやはり嬉しそうな顔をして飾られていた。

もちろん、全員『織香部』に現れる姿かたちで。

そのまま、保存されてガラスの中に入っていた。

「いつかは水着姿を作ってみたいが、なってくれないだろうな」などと思いつつも、もうすぐ七月になるカレンダーを見上げた。

「それより、完成させんとな。優香のために」

だけど、その優香とは最悪の再会をしてしまった。

俺は、どうしたらいいかわからない。迷っていた。

接着剤を、ピンセットでつまむ手が震えていた。

反対側の頭のほうに、今度は接着剤を垂らす。

「俺は、優香と会って何がしたい？謝るのか？」

そこに、やはり細かく割れたプラスチック部分を、くっつけようとしていた。

「優香は、俺と会いたがっていない、そんな気だったぞ。どうする、俺？」

細かい破損した首をくっつけたとき、俺は背後から途端に気配を感じた。

「てっちゃん、ご飯よ」

そこには、ドのきつい眼鏡をかけてエプロン姿の女が立っていた。いかにもオタクオーラを放つ彼女は、俺の母親だった。

次の日から、俺は真面目に『織香部』に来ていた。

というより、皇に会いたかった。男に、会いたいと思ったなんて、俺は重症だ。

皇は俺の妹に会っているから、何か知っていると思った。数学準備室にやってきた俺は、皇の姿を探したが、なぜか全員変な格好をしていた。

「おい、これはなんだ？」

「えゝ、やだよ」

椿は、なぜかもしもじしながら水着姿をしていた。

大きな体と健康的な肌に、ちよつと小さい胸。恥らう椿が、かわいく見える。

「なんで、あんたが水着姿なのよ！」

そついうあずさは、なぜか着ぐるみを着ていた。

「あずさちゃん、かわいい」

椿は、あいかわらずとろけだしそうな顔を見せていた。

そつなのか、あれって目玉が飛び出ているし、口がすぐく開いているし、おまけにしつぽまで生えた黄色い生き物だぞ。

なんか子供向けの特撮で、あんな怪獣がいたような気がするな。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

そういつて伊豆奈はいつも通りではない、黒いメイド服で現れた。あれは知っているぞ、伊豆奈が前に中間試験のお手伝いできたメイド服だ。

「まあ、みなさんの、コスプレ用意完了しましたわ」

そんな織香先生は、なぜか西洋鎧を着ていた。

「これは、またレアな」

「今日は、園川先輩のカメラ小僧心理について、コスプレパーティを行いますの」

織香先生は、にやかな顔を見せていた。

そのままレプリカの剣を抜いて、俺に顔に剣先を向けてきた。

「さあ、たっぷり、カメラを撮ってくださいな」

「どっから、こんなコスプレを……」

「わたくしの旦那が、持ってきたのですわ」

ふむ、素晴らしい趣味だな、織香先生の旦那は。

前に伊豆奈のメイド服を持ってきたときに、織香先生の旦那はIT企業の社長という話を聞いているぞ。ほかに、肩書があるらしいが。

「そういえば、皇は？」

「ちゃんと、来ておりますわ」

「悠は、あそこだよお」

水着姿の椿が、なぜか小さい胸を隠しながら指さしていた。

そこには、灰色の棚に同化して、一生懸命固まっている皇の姿があった。

俺たちの言葉を聞いて、背中がびくんと動いた。

よくみたら、皇は灰色のタイツを着ていた。なぜタイツ？謎が少し残った。

「ほら、悠、あんたも」

あずさが皇のほうに近づくが、つぶれた足が歩きにくいのか、着ぐるみで大きくこけてしまう。

こけたあずさは、両手で自分の大きくなった体を支えようとしたけど、手が出ていないのでそのまま倒れていく。

同化した灰色タイツの皇の上に、着ぐるみが覆いかぶさった。

「うわっ！」

「きゃっ！」

皇の上にのしかかった、あずさの着ぐるみ。

反射神経の鈍い皇が、あずさにのしかかれた。

「これ、重いわよ」

「何をなさっているのですか、お嬢様。はしたないですわ」

伊豆奈は、やや毒のある視線で二人を見ていた。

なんだか、小ばかにしているように見えていた。

「今ですわ、シャッターチャンスですよ！」

「ああ、そうだな」

俺は迷わず、首からぶら下げたカメラを構えて、カメラのシャッターを押そうとおもったけどためらっていた。

そんな俺を西洋鎧の織香先生は、隣でじっと見ていた。

あずさは、重い着ぐるみがあいなくて、なかなか起き上げれない。

それどころか、悠のほうをじっと見ていた。固まっているぞ、あずさ。

「どうしたの？」

「えっ、あっ」

悠の公認恋人でもある椿は、不安そうに見ていた。

そっいえば椿に悠が、告白したんだってな。みんな知っているけど。

「なによ、あんたね、千影を助けたじゃない」

「重いんですけど」

そんな悠は、いつも通りに赤い顔を見せていた。

「あんた、なんでそんな、弱そうな顔をしているの？」

そんなあずさに対し、椿と伊豆奈が着ぐるみあずさを起こそうとした。

「えっ、ああ……」

「ほら、あずさちゃん大丈夫？」

「デカすぎです、皇先輩が死んでしまいます」

苦しそうな顔を見せて悠は、もがいていた。

あの着ぐるみ、見た目通りに純粹に重いんだろうな。

「ほら、起きなさい」

「えっ、重いよお」

そんなあずさを引き上げようとしたけど、背中に引き上げられず椿と伊豆奈は後ろに倒れる。外れたのは着ぐるみの手の部分だけで、後ろに倒れていった。

「うっ、痛いよお」

「も、もうしわけありません」

伊豆奈、いいアングルだ。

こいつ研究しているな、などというパンツが見えそうな倒れ方をし
て見せた。

みんなが、倒れて立ち上がろうとしていたけど、着慣れないコスプレ
のおかげか、うまく立ち上がれず悪戦苦闘。

「部長、何とか起こしてあげてください！」

「そうよ、ぼけっとなしないで何とかしなさいよ！」

などとみんなの声が響くが、俺はそれを実に満足げに眺めていた。
結局、最後まで俺は首にぶら下げたカメラを、使うことはなかった。

あれから三時間、部活はあつという間に過ぎていた。

俺は、今二人でファーストフードにいた。そんな俺の隣を歩いていたのが、

「椿、なんで俺を呼んだ？」

織香部でも、背の高い女子の椿だ。

活発的なポニーテール少女が、俺を誘うのは珍しい。

なんだか、椿はいつもにはないにやにや顔をしていて、かなり気持ち悪い。

「ねえ、先輩」

さっきまで水着姿の椿は、ブレザーに着替えて、俺を見ていた。

「皇とはいいのか？」

「悠は、あずさちゃんのほうに行っているから、買い物につき合うとかで」

「ふーん」

「先輩は、将来何になりたいんですか？」

「いきなり唐突^{とうとつ}だな。どうしたんだ？」

椿がやや、もじもじしていた。なんだ、ちょっと変な気になってしまっぞ。

「言っておくが俺には妹がいる、勘違いするなよ」

「えっ、そうだね」

しかし、椿はなんだかうれしそうな顔を見せた。

こいつ、ちょっと変だな。じーっと逆に観察をする。

「先輩は、妹さんと話をしたんですか？」

「何が言いたい？」

「優香さんのこと、私も知っていますよ。先輩のこと、悪く言っていました」

椿の言葉を聞いて、俺はしかめっ面を見せた。

「なんだ、そんなくだらないことを、俺に言いたいのか？」

「なんで二人は、そんなに仲が悪いの？」

椿の質問に、俺はちよつとだけ考えたが、

「そんな馬鹿な質問するな、それだけか？」

「ずつと、一緒にいなかったんでしょ」

椿は、なぜかそのことを知っていた。

織香先生が言ったと考えれば、不思議ではないが。

「どういうことだ？今日の部活といい、なんだかみんなおかしいぞ」

「それは、先輩がおかしいから」

椿の言葉に、俺は思い当たることがたくさんあった。

「今日の先輩、すごくまじめだし。」

普段のエロオーラを出さない先輩は、先輩らしくないなあ。

ううん、今日だけじゃない、病院に潜伏したあたりからずっと」

「真面目に、なるときも……」

「嘘だよ！」

椿は、なぜか立ち上がった。握った握り右拳と、険しい顔で俺を見下していた。

「じゃあ、先輩の腕は、なんで傷だらけなの？」

大きな少女の椿は、強引に俺のブレザーの裾をとった。そこは、無数の切り傷。

「我慢しているでしょ、先輩。もう、耐えるのをやめましょー！」

「ああ、そうだな」

俺は立ち上がり、椿の胸のあたりをさわってやった。

小さな胸を、わしづかみにされた椿は、普段と違い険しい顔を見せていない。

むしろ、柔らかな顔を見せていた。

だけど、周りにいる女子高生の冷やかかすぎる視線が、ピリピリと俺に突き刺さる。

「悔しいんだよ、変態と妹に言われて、やっと会えたのにすごく嫌われて！」

「先輩、ずっと耐えていたんだね。よしよし」

椿が、俺の頭をなでた。それは、母親になでられたそれと同じものだった。

なんだか怒りとか、悲しみとか、悔しさとか、すべてが忘れられるそんな感覚。

甘く、酸っぱい感覚が、俺を支配する。

それと同時に、俺のエロ神経が刺激されて、椿の胸のあたりに手を伸ばしていく。

「あたしもね、先輩みたいに憧れている兄じゃない「お兄ちゃん」がいるんだよお」

「椿……」

椿の言っている意味は分からないけど、しっかりと椿は、俺の胸を触る手をはじいた。

「必ず助けてくれて、かつこよくて、立派で、たくましくて、大きくて、そして誰よりも強い。そんなお兄ちゃんが、あたしもいるんだ！」

その話をする椿の顔は、ものすごくうれしそうだった。

「でも、その「お兄ちゃん」と今はもう会うことができない。
できないの、人を殺めちゃったから。」

ねえ、そんな時、妹はどうすればいいの？会いたいよお「お兄ちゃん」」

椿は、逆に泣き出しそうな顔をみせた。

泣くのをこらえているけど、やっぱり泣いていた。大粒の涙が、あふれ出る。

「今の優香さんも、ひつく……きつと会いたがっているはず……だよ」

「俺は、面とむかって……」

「そんなの、……ひつく……意地。」

本当の妹なら……、どんな理由で別れていても……会いたいはず」
椿の涙は、やけに澄んでいた。妹に会うことをためらう俺は、少しだけ紛れた。

そんな俺と椿は、ファーストフードで頼んだハンバーガーセットやシェイクを食べ終えることなく後にした。

俺には、優香に対しての甘い考えがあったのかもしれない。

それは向こうが、俺に対して会いたいという気持ちを持っている期待。

でも、あの時の優香は俺をはつきり嫌っていた。

まるで父親が、母親を嫌っていたかのように。それを知ることが、怖かった。

「そうだ、今度こそ俺の本当の姿を見せよう。」

本当は、椿の言うとおり意地はっているだけなのかもしれない」
夕日が沈むころ、俺と椿は色違いのブレザーを着たまま歩道を歩い

ていた。

椿は女子寮で、どういわけか織香先生と暮らしている。

俺は実家だから反対方向だけど、なんだか助けてもらえた椿に感謝の意味を込めて寮まで送っていくことにした。

「じゃあ、ここで、部長また明日」

「ああ」

寮の入口にある広場まで送って、別れるちょうど間際、寮の道路そばの電話ボックスで、二人組を目撃した。仲のいいカップルというよりは、ナンパとその女という感じ。

「あれは、優香」

そして、俺は優香が向き合う相手を見ていた。

その相手は男、そして二十代の背の高い男だけど、色黒。

髪を金に染めて、いかにも遊び人といった感じ。

その遊び人風の男は、優香に楽しそうに話しかけていた。

でも優香の顔は、なぜか困惑気味な顔を見せていた。

「なんだ、いやな感じだ」

「先輩、いろんな意味でチャンスかも」

椿が、にやにやとしながら俺の背中を、文字通り両手で突き飛ばした。

椿、やはり力あるな、と感心しつつも少し前に進んだ俺から、声が聞こえてきた。

「なあ、今から俺と遊ぼうぜ」

「ごめんなさい、寮の規律があるので、あなたの誘いには乗れません」

「固いこと言うなよ、夜は長いんだ」

男は、にやついた顔で優香の左肩をグイとつかんで、自分の胸のあ

たりに引き寄せた。

「や、やめてください」

「おおつ、かわいいねえ。強い女は好きだぞ」

「寮の門限が……離してください！」

優香の嫌がる顔がはつきり見えた、俺は迷わなかった。

「しつこいぞ、ナンパ野郎！」

「なんだ、お前？うざいやつが来たな」

「また来たの？」

優香は、俺に対して不機嫌な顔と、口をとがらせてみてきた。

大丈夫だ、いま俺が助けてやる。椿からもらったあの言葉が、あるんだから。

そうすれば、お前は俺に対する考えが変わるはずだ。

「俺は優香の兄だ、汚い手を離せ。さもなければ、この俺が相手だ！」

学生かばんを投げ捨てた俺は、拳を構えた。

「おおつ、お兄様かよ。けっ、この俺とやろうつてのか？」

ナンパ野郎は、優香を突き放した。

優香は、少し離れたところで胸に手をやってこっちを見ていた。

（あとは、俺がヒーローっぽくこのナンパ野郎をぶちのめせば、優香が俺を見直してくれる。さすが俺！）

俺は問答無用で、ナンパ野郎を殴りかかった。

ナンパ野郎も、悪態をつきながら俺に対して殴りかかってきた。

結果は、三十秒後ついた。

「う、うそだろ」

これは、俺のセリフ。俺はボコボコにされて、地面にうつぶせに倒れていた。

ボロボロになったブレザー、かろうじて眼鏡は守ったが、顔にあざをいっぱい作った。

な、なんという展開だ、こういうのは想像していないぞ。

「たいしたことねえな」

「馬鹿じゃないの、変態」

なぜか、倒れた俺に対してもしつかり罵^{のの}った優香。なぜだ、ありえん。

「さ、こんな馬鹿を放っておいて、遊び行こうぜ」

ナンパ野郎は、何もなかったかのように優香のほうに振り返った。

でも、優香は嫌がっているのか後ずさりをしていた。

「来ないで！あんたとは遊びたくも、絡みたくもないの！」

「いいだろ、かわいいし。楽しいとこ、俺いっぱいイトコ知ってるんだよ！」

ナンパ野郎が、俺の大事な優香に近づいていた。くそっ、もうだめだ。

俺の意識が、殴られて徐々に遠くなっていく。そんな時、

「待ちなさい、女の子をいじめちゃだめだよお！」

その声は、椿だった。

だけど、俺はその姿を見ることなく、そのまま重くなるまぶたに逆らえないでいた。

それから間もなくして俺は、やわらかい肌の感触で目を覚ました。
「ここは天国か？」

やわらかい女性のひざ、そこが俺の頭を乗せていたから。

「先輩、もう起きてください」

そこから、顔を覗かせたのが椿だった。

ちよっとほが泥ついていたけど、にこやかな顔を見せていた。

「あ、えと」

「あたしの膝のお金は、高いですよ」

「違う、カメラ！」

すると、俺は椿に頭を小突かれて強引に起こされた。
体を起こすと、椿ともう一人の女の顔が見えた。

「うちの兄、最低ですよ。夜奈月さん」

そこにいたのが、ショートヘアの優香だった。

やっぱり怒っているのか、クールを装っているのかわからないけど、俺に対しては、いつも通りきついことを言ってくる。

「エロいところ、あるもんね」

俺は、カメラを構えた。でも、シャッターを落としても反応しない。

「残念でした、こういうこともあってロックかけてあるんですよ」

「くそつ、なんかこういう時は、隙がない」

「まったく、だから私は、あなたが嫌なんです」

優香は、あきれ顔を見せていた。そんな優香も、緑のブレザーか。
そつえば一個下だから、椿と同じ年になるんだっけな。

「でもね、いいところもあるんだよ。優しかったり、リーダーシップあったり」

「どうかしら？それより、夜奈月さん、助けてくれてありがとう」

優香は、俺に一瞥いちべつもくれず、椿に深々と頭を下げていた。頭を下げられて椿も、まんざらじゃない顔を見せていた。

「あの人、最近しょっちゅう私に絡んできて、困っていたんです」

「そう、また絡まれたらあたしに声かけてね。」

あたし、こう見えても殴るのはかなり得意だから」

おい、どんな得意だ。どストレートに怖いことをいう女だ、椿は。

「それでは、また学校です。夜奈月さん、ありがとう！」

優香は、やっぱり椿にだけ笑顔を振りまいて去っていった。

そんな椿も、優香の後を追いかけるように、女子寮に戻っていくのだった。

（いったいなんだったんだ、さっきまでは）

しかし、近くの電話ボックスが、何か鈍器のようなものでガラスが割られていたのが見えた。俺の背筋が、途端に凍っていた。

俺は、敗北感があつた。

敗北感があつた俺は、傷を癒すために自分の部屋に戻っていた。真っ暗な部屋で、机の明かりだけが明るい。

パテを切るカッターナイフを持つて、机に向かっていた。

今日もやるのか、優香に好かれられない自分を傷つける行為。

傷を癒すために、傷つける矛盾した行為。

自分の手の甲に、歯を向けていた。

「先輩、耐えるのをもうやめましょう」

椿の言葉が、なぜかぶれた。カッターの刃が俺の腕に刺さる寸前、そこで止まった。

（空しい……だけ）

刃を離して、ケースに飾ったブレザー姿の椿フィギュアを手にとった。

このフィギュアは、椿シリーズ。ちなみに今は、マークツウーまで作ってある。

罪滅ばしにこいつの水着でも着させるか、とにかく思い出そう。

しかし、数学準備室でのが思い出せない。

やはり、カメラを撮っておけばよかったと後悔だけが残った。

物思いにふけり、机に向かった俺は首に人差し指を当てて考えていた。

すると、俺の背後のドアが開いた。

「俺はお前のことが忘れられない。お前以外、何も入らない」

「そうか、ボクも君が大好きだ。さあ、契約の口づけを」

そんな声がすると思うと、裸の男のフィギュア二体が、体と体を交わらせていた。

そのフィギュアを持っている手を見ると、そこに見えたのが眼鏡をかけた女。

ぼさぼさの髪で、エプロンをつけていた女がそこにはいた。

「なんだ、母親か」

「ドライな反応ね、てっちゃん、ごはんよぉ」

にこやかな母親に対して俺は、机に引き出しにカッターナイフをしまっていた。

母親の職業は、OL。でも、家事もこなす、仕事もできる万能なOL。

俺は自慢じゃないが、母親について行ってよかったと今でも思っていた。

ただ母親は、普通のOLではない。

いつも通りに、普通の食事が運ばれてきた。

「さ、冷めないうちに」

「ああ」

そんなママは、テーブルにあるパソコンを見ながらご飯を食べていた。

食事をしながら、マウスを動かす様子はいつも通りで、手慣れていた。

「てっちゃん、今度の学園ものだけど、誰が好み？」

そういつて、ノートパソコンを見せてきた母親。

画面には、美少年の顔がずらりと並ぶ。

「俺はこいつかな、なんかかつこいいし」

「うーん、草食系ですか。なかなか見る目あるわ、さすがあたしの息子。」

この子のフィギュアが、今度出るんだよ。欲しいし改造したい」
そう、母親はフィギュアの改造を得意とする。

「あつ、魔改造『傀儡師』サークルからメールだって。待つてね」
そう言いながらも、母親はパソコンを自分のほうに向けていた。

母親は、魔改造の使い手である。

魔改造とは、フィギュアを特殊なペイントで裸にする改造のことだ。
俺のような、自作フィギュアクリエーターとは違う。

まあ、裸に関しては興味あるが。

だがフィギュアは、服を着てなんぼだろう、俺にはそんな持論がある。

「ねえ、てっちゃん。今度、ホビーショウあるけど行かない？」

母親は、いきなり言ってきた。

なかなか連れて行ってくれないが、俺は思い返してみる。

（今は少し忘れよう、優香のことは）

そう、単に気分転換をしたかったから。

負けた傷をいやすには、やはりフィギュアしかない。俺は快諾した。

週末の日曜日、電車で揺られてついたのがフィギュアの祭典、ホビ
ーショウだ。

都内の大型展示場で、年に一度だけ開催される。

いつも母親が一人で行くので俺は行くことも、存在よく知らなかつ
たが不覚だ。

多くの人間とすし詰め状態の中、会場に入る。

そこでは、多くのメーカーが参加していた。

でも客層は、俺なんかより大人っぽい気もする。子供の姿は、ほと
んど見えない。

おそらく食玩や、キッズトイのコーナーもあるからそっちに流れた
のだろう。

間もなくしてママは、歩いて間もなく数人のグループと遭遇した。

「ようこそ破壊姫……」

そのあとのセリフは、オタクっぽい独特の暗号での会話が続く。

俺の母親は親しげに、グループの大人のメンバーと話し始めた。

さすがの俺も、話についていけそうもない空気を感じて母親と離れ
て、このショウを見まわることにした。

マップ片手に俺が気になったのが、『創作フィギュア展』リアルか
ら、アニメまで。

よし、これにしよう。俺は、意気揚々と目的の場所に向かっていく。

そのブースは、確かに精巧に作られたフィギュアが並んでいた。かわいい女の子や、恐竜、はたまた車や赤ん坊まで多種多様。

「こいつは、見事だ」

俺は、一つ一つを眺めてため息をついたり、自分の技術の未熟さを知ったり、フィギュアの奥深さを知ったりした。

でも、一個一個のフィギュアが個性を主張していて全然飽きない。

ここはパラダイス。

時間が過ぎてあつという間に一時間が過ぎたころ、ほかに面白そうな場所をマップで探すことにした。

そんな展示ブースを抜けると、人だかりができていた。

（なんだ、なにかあるのか？）

ただ、興味に誘われて向かった先には、コスプレの写真撮影会があった。

（これは、俺が求めているもの！）

レアものコスプレに、興味津々。コレクター魂が、うずいて仕方ない。

もちろん大事に持っていたフィギュアを、作るためのカメラを持って、撮影をしていた。モノを語らない、俺の相棒だ。

アニメのキャラが、やっぱり多いな。アニメはよくわからないが、かわいい制服や、かわいいメイド服、そしてかわいいアイドル服の写真をいっぱい撮りまくった。

（大体……終わったか）

などと思っていると、さらに集まっているところがあった。

（あれで、終わりにするぞ）

などと最後の人だけに行ったとき、そこには二人組が周りに囲ま

れていた。

正確には、一人の母親と娘。

真っ白のドレスを着ていた織香先生と、ピンクのベビー服を着たプリカだった。

「お、織香先生！」

「まあ、やっと見つかりましたわ、園川君。ずっと、探したのですわ。

ですが、なぜか撮影会になって、実に不愉快ですよ！

わたくしは、見世物なんかではありませんわ！」

不愉快そうな顔を見せると、逆にカメラ小僧の心を揺さぶってか、横顔にシャッターが切られた。

こうしてみると白い肌と、整った顔立ちはどこかのお姫様に見えてしまう。

「それより、あなたとお話がありますの。実は……」

織香先生が話すが、パシャパシャ撮られていて話どころではない。

不愉快顔の織香先生は、走りにくそうなモノクロのドレスのまま俺の手を引っ張った。

「こっちで話しますわ。皆さんは、もう来ないでくださいな！」

「ばぶばぶ」

織香先生に、俺は手を引かれて歩いていく。

しかしカメラ小僧の執念は見事で、追いかけて回されていた。

それから二時間もの間、歩き回って、なぜか俺は、織香先生と一緒に会場内にある喫茶店にいた。

すでに昼も過ぎていて、もうすぐ三時。

四時終了のホビーショウは、入場が締め切られる時間になっていた。

「なんでコスプレではなく普段着で来て、こんなに人の注目を浴びるのです？」

やや不満げな顔で、俺の前に座っていた。

一応、織香先生はコスプレと普段着の識別はしているらしい。

アイスマルクを飲みながら、不機嫌そうに愚痴っていた。

でも白と黒のフリフリのドレスなら、童話の世界や、アニメの住人にしかどう考えても見えない。あ、『ゴスロリファッション』ってやつか。

「なかなか、妖艶ようえんですよ」

「違いますわ、普段着ですの。見せるために、着てはいませんもの」
織香先生は歩き回って、疲れた顔を見せた。俺も、つきあわされてかなり疲れたが。

そんな織香に抱かれた赤ちゃんプリカは、心配そうな顔で織香先生を見ていた。

織香は、プリカの頭をなでていた。こういう時は、さすがに母親の顔を見せていた。

「さて、本題ですわ」

織香先生が、俺に向けて大人の笑みをを見せていた。

「本題？」

「あなたの、妹さんの事ですわ」

織香先生が、また言ってきた。最近聞きすぎるその言葉は、嫌味にさえ聞こえていた。

「もう、いいですよ。俺の妹のことは」

「そうは、いきませんわ。『織香部』は、これから最終段階に入る

のですから。

その前に、あなたにすっかりしてもらわなければいけませんの。
さあ、どうなのです、妹の優香さんとは？」

織香の言葉に、懔然^{ふぜん}とした顔を見せていた。

織香先生がこの部活を作った理由を、俺は知っているから。

彼女が抱えて解決する問題を、みんなで最後は解決するのが最終目的。

そこまで、俺は部長としての役目を全^{まっ}うすることが俺の理由。

「まったくだ！」

「彼女は、本当は困って……」

「うるさい、何が困っているんだ？」

「愛は、屈折しますの。本当は会いたいと思っていても、求めても、時として突き放してしまう、そういうものなのですわ。これは、『ツンデレ方程式』と言って、わたくしが導いた方程式ですの。

園川君、本当は彼女のことを好きなのでしょう、会いたいのでしょう」

「優しく見守っていければ、それでいい」

「嘘ですわ！」

なんで、こんなに織香先生はおせっかいなんだ。

「ならばなぜ、あの人形を捨てないのです？」

その言葉に、俺は着せ替え人形を出していた。優香にもらった、あの人形。

俺が人形に惚れ始めた、きっかけを与えてくれた着せ替え人形。

「人形は、何かに投影され、生まれていくものですわ。

あなたの人生は、あの妹さんを、心の支えとしてずっと生きていましたのね」

「そうだな、俺は」

「ならば、当に結論は出ていますわ。彼女は今、あそこにいるはずですよ……」

織香先生は、にこやかな顔で教えてくれた。俺は、織香先生の次の言葉を待っていた。

俺は、夕暮れの公園にやってきた。そこは、学校の途中、寮との間にある大きな公園。

日が傾く公園、晴れたこの日はジョギングしている若い女性、ドッジボールをしているガキども。

ほかにはベンチでいちやつくカップルに、絵を描いている人がいた。その絵を描いているベレー帽の人物に、見覚えがあった。

「優香」

俺は、やっぱり声をかけた。清潔感のあるシャツに、ベレー帽をかぶった優香は、キャンバスに向かって座っていた。椅子に座ったまま、絵を黙々と絵を描く。

「今、忙しいから、後にしてくれない？」

「優香、お前と話がしたい。どうして俺を、そんなに避けるんだ？」
優香は筆を止めないで、黙々とキャンバスに向かっていった。

「私、パパにそう言われたの。兄とは二度と近づくなんて。変態だから、ママと一緒にいておかしくなっているから」
「本当に、そう思っているのか？」

俺の語尾を上げた声に、優香の筆はぱたととめた。
でも、顔をキャンバスに向けたまま。深く息を一回吐いた。

「そうよ、なんか文句でもあるの？」

「ああ、何も知らないでお前は、よく言えたな！」
顔をこわばらせて俺は、迷わず優香の肩を強く握った。

「変な趣味を持っているのが、変態でしょ！」

「変態じゃない、立派な大人だ。」

今はそういう集まりもあるし、差別の対象にはならない！」

「だけど、それがママの趣味だったら……子供は親を見て育つの」

「認めるよ、お前の母親だろ！」

言いたかった、母親はそれを父親に隠していたことも。でも、それではいけない。

人は、もっと欲望に素直にならなければならぬんだと。

「でも、それは……」

「その彼女、俺とお茶しない」

すると、優香の奥の方からサングラスの男が現れた。

アロハシャツを着て、金髪に染めた男。

優香の顔が、さらに引き締まった。すぐさま優香に近づいた。

強引に優香の腕を引っ張り、にたにたと下品な笑みを浮かべた。

そう、電話ボックスで絡んでいたあの男。前みたいに相も変わらず、絡んできたな。

「今、機嫌が悪いの。どこかいつてくれる？」

優香は、ぱしっとナンパ男の手をはたいた。

だが、そういう男は逆に興奮してか、からんでくるのが常。完全に逆効果だ。

「おつ、いいね。今日はノリ最高だぜ」

「馬鹿じゃないの？つて、ああつ！」

ナンパ男は、強引に優香の手を引っ張った。

優香は手首を痛そうに顔をゆがめたが、男は優香の苦痛の顔をむし

る嬉しそうな顔で見ていた。そのまま優香を強引に立たせ、腰に手を回す。

「さ、俺といいとこいこうぜ。楽しませてやつからよ」

「さて、その汚い手を、離せ！」

俺はやはり迷いなく、立ちふさがった。

前回、この男に歯が立たなかったが今回は違う。

織香先生に励まされたから、優香をとられるわけにはいかない。

邪魔をされたくない、こんな汚い男に。

「なんだ、お前。また、やられに来たのかよ？」

「優香に、手を出すな！」

俺は、振り返った男に顔面めがけてパンチを打った。

先手必勝、情けないが不意打ちに勝機を見出した俺は、殴ることにした。が、

「は、なんだ？この、へなちょこは？」

顔面に俺の拳が命中したけど、男はビクともしない。

それどころか、俺の手首が逆に痛かったりする。

「い、いてえ」

「おい、てめえ、謝れよ！」

すぐさまひるんだ俺の首根っこを、驚づかみにつかんでくるナンパ男。

「兄さん、あきらめたら。もう、何を言っただって……」

気落ちした優香は、ため息をついていた。そのまま俺は、ナンパ男にボコられていた。

あの時みたいに、椿はいない。

周りにいるのは、俺と優香とナンパ男。

人影まばらな夕方の公園に、俺が殴られる音だけが聞こえていた。顔を上げたいが、目の上のあざが邪魔して視界を遮っていた。

全身ボロボロの俺は、服までボロボロになっていた。

優香はナンパ男に右手を握られて、うつむいていた。

ナンパ男の足が、容赦なく俺の背中を踏みつける。

そこから走る激痛、さすがにもう限界が近い。

うつろな意識、こうしてみると俺って喧嘩は、苦手なんだよな。

「もう、くたばれよ」

「いや、あきらめん！」

俺は、あきらめが悪く弱弱しく言っていた。

「兄さん、死ぬからやめなさい。黙っていれば、いいのに」

「そうはいかない。俺はお前に、俺を認めさせる。母親も、認めさせる！」

「馬鹿ね」

小声で上のほうから、優香はつぶやいた言葉。

「けつ、しぶとい。なら、いつそ息の根でも止めてやるか。マジで、うぜえし」

ナンパ野郎は、最後に近くに落ちていた堅そうで、やや大きな石を見つけた。

「それは、やめて！」

「なんだよ、じゃあ、俺とエッチしてくれたら、止めてやってもいいぜ」

俺の頭の上で、優香とナンパ野郎が会話をしていた。

「エッチ？」

「そつだよ、やらせろよ。お前、初だろ。」

でなきゃ、こいつの頭の上にこの大きな石を落とす。

こいつは、死ぬぜ。確実に。」

ナンパ野郎の、下衆な笑い声が聞こえた。

俺は不愉快になったが、それ以上に体が動かない。

「わ、わかったわ」

優香は、重い口をようやく開いた。

なんだか、俺は一番いけない言葉を聞いて、石を落とされるよりシヨックだった。

だが、そんな時だった。俺は目の前が、ほんの一瞬だけ光った。

「な、なんだ？」

光の後に広がる、灰色の世界。

そして、俺の目の前にはなぜか鎧を着た織香先生がしゃがんでいた。

「お待ちせしましたわ、ナイト織香参上ですの！」

につこりほえんだ織香先生は、西洋甲冑を着た赤ん坊プリ力を抱きかかえていた。

そのプリ力は、目をつぶって眠っているのが見える。

「ここは？」

「立てますか？」

金属鎧をガチャガチャと音を立てて身にまとう織香に、肩を借りて立ち上がった俺。

ややよろめいた俺だが、ちょっとだけ意識が戻っていた。

「ここは、『時が止まった世界』ですの」

そこは、完全に灰色の世界。始めて見た、静かな世界。

優香も、ナンパ野郎もビデオの一時停止のように止まって動かない。

「触れてしまえば、彼らは動きますわ。それより、何とか無事で何よりですの」

「どうやって、でも……」

「『プリカ様』は、『時を操れる赤ん坊』なのをお忘れですの?」

そう、プリカは争奪戦になるほどすごい能力、『アビ』を持っていた。

それが、『時を操れる赤ん坊』。そんな、肩書を持っていた。

しかし、今まで実感のないものだったから、こうしてみるとすごい能力だと改めて思えてきた。

「園川君は、立派なお兄様ですわ」

織香先生はにこやかに、頭をなでた。

すると、織香先生の抱きかかえた赤ん坊プリカが目を覚ました。

その瞬間、動きだす時間。元に戻る色と色。

そして目の前のナンパ野郎は、俺の姿を探していた。

しかし、織香先生と移動された俺は、少し離れたところにいた。

「佐々木君、あなたはなぜここにいますか?」

「お、織香先生、なんでここに?」

先ほども余裕を見せていたナンパ野郎（佐々木君）は、驚いた顔を見せていた。

そりゃそうだ、急に瞬間移動して織香先生が目の前に現れたら、誰でも驚くって。

「なんでもですの! わたくしの『織香部』部員を、よくも傷つけて

くださいましたわね。これでは、わたくしの旦那をここに呼びますわよ」

「な、それは……、助けて！」

明らかに慌てふためいたナンパ野郎、佐々木君。

そのままナンパ野郎は、おびえた様子で織香先生から、俺たちから離れて行った。

いったい、俺の戦った時間はなんだと思った、そんな時間。

「先生、あのナンパ野郎は知り合いですか？」

「まあ、昔、ちょっとわけありで戦ったものですよ」

織香先生が、言うのは聖戦^{シ・ハート}という名の戦争。

学園内で、プリ力をめぐる戦いをした事ぐらいしか、俺は知らないが。

「あ、織香先生。ありがとうございます」

「いえ、助けたのは、園川君ですの。私ではありませんわ」

「違いますよ、兄さんは何もしていません」

優香の言うことはまあ、もっともだ。言い返す言葉が、何も見つからない。

「でも、そんな彼も、わたくしの部活では、部長をしていて立派ですよ。」

園川 優香さん、あなたはうらやましいですわね。

彼は、あなたのことをいつもちゃんと見ていますの」

しかし、そんな時だった。

公園の時計が、ちょうど六時を指していた。同時に、時計のチャイムが鳴りだした。

すると、織香先生から突如煙のようなものが現れていた。

「な、なんだ？」

紫色の煙が、瞬く間に織香先生を包み込んでいた。
あつという間に包むと、カランカランと金属が落ちる音がした。

それから、間もなくして煙は晴れた。

そこから聞こえるのが、赤ん坊の激しい鳴き声。

さっきまで静かにしていたプリカは、突如泣き出していた。

そして、その赤ん坊の隣には赤ん坊と同じぐらいで、小さく真っ黒な猫が、こちらをじーっと見ていた。

それを初めて見た俺と優香は、呆然としていた。

（な、何がとうなっているんだ？）

それでも急に起きた現象に、女は強いものだ。

優香は、必死に泣きまくる赤ん坊をあやそうとしていた。

そんな優香を見ている俺の足元には、真っ黒な猫がすり寄っていた。

結局、最後はよくわからないが、何があっても不思議ではない。

もしかしたら、『時を操る赤ん坊』の『アビ』の副作用が、黒猫になることかもしれない。きっとそうだ、俺はそう納得させた。

そんなボロボロの俺は、なぜかわいらしい女の部屋にいた。

きれいに片づけられた部屋、中央には黄色いテーブル。パソコンと、鏡も見える。

なるほど、俺の部屋とは全く違う。そこは実の妹優香の部屋、だった。

「まさか、こんなことで入るとは」

しかも、俺はベッドで寝かされていた。

私服を脱がされ、シャツ一枚の俺は横になって天井を眺めた。

ほこりまみれの私服は、優香がきれいに折りたたんでいた。

「言っておきますが、そこは私が寝ているベッドじゃありません」
なぜか、わかりやすい否定した優香。

とはいえワンルールの女子寮、一つだけのベッドはどう考えても優香のモノだな。

「赤ちゃんの世話なんてしたことないから、自信ないな」

などと俺が声をかけると、優香はパソコンを立ち上げてインターネットで赤ん坊の世話の仕方を調べていた。

「優香」

「ああつ、だめだね」

優香は、なんだかがっかりした声を漏らした。

そのあとプリカが、不安そうに泣き出していた。

「うーん、この場合どうやってあやすんだろう？」

「オムツが、濡れているんじゃないか？」

よく椿がオムツ交換を、甘い声をかけながらやっているのをふと思いついた。

優香がオムツを触ると、なるほど濡れているみたいだ。

「あつ、えつと、オムツはつと……あるわけないよね。どうしよう」

優香は、赤ん坊を見ながら困った顔を見せていた。

「買ってくる、おそらく近くにコンビニにあるから」

俺はまだ傷が癒えていないが、ちよつとだけ看病してもらったし、ベッドの上で横にもなれた。何より、優香がやつぱり心配だった。このまま何もしなければ、本当にただの情けない兄でしかない。

「兄さん、わかる？」

「大丈夫だ、俺はお前の兄だぞ」

「ありがと、ごめんなさい」

小さく、つぶやいた優香。

俺には顔を見せないで、泣いている赤ん坊を一生懸命にあやしていた。

「お前はちゃんと見て、あやしている」

「なんで、私にそこまでするの？」

優香は、赤ん坊をあやししながら俺にやっぱり聞いてきた。俺は、迷うことなかった。

「行き違いの妹だろうが、大切にする、それが兄だ。

そして、俺の母親も優香を心配していたんだぞ」

「……っ、本当？」

優香は、ちよつと涙声だった。小刻みに、体を震わせていた。

最低とか、変態とか罵^{のの}って避けていた相手が、実は自分の事を心配
していて大切に思っている。そのことが、分かっただけで胸が痛い。
なんとバカげたことをしたのだろうか、と自己に懺悔に気持ちが入
みあげてしまう。

「あたりまえだろ、父さん元気か？」

「元気よ。兄さんや母さんにつきあうな、関わるな、っていつも電
話してくる」

「そか、まあ、そうだろうな。じゃあな、ちよつくらコンビニ行く
ぎこちない兄妹の会話をした俺は、顔を合わせることもなく優香の
寮から出て行った。

強く握りしめた俺は、優香の家にあったものをみてほっとした。

（ちゃんと飾ってあったな、俺のヒーロー）

優香に上げた、唯一の俺のプレゼントは、ちゃんと木の棚の中に、表彰状の額縁と一緒に飾ってあった。凛々しくたたっているヒーローは、俺の人形、分身。

俺は、なんだかそれを見た瞬間に、うれしくなっていた。

そんな俺の足元には、しっかりと黒猫と一緒に走っていた。

第五話：憧れと恋心（前書き）

——登場人物紹介

夜奈月 椿：『織香部』部員、背の高い女子高生。本編主人公。

岐阜県出身、彼女は中学までずっと岐阜で生活していた。

背の高いポニーテール女子、かわいいものが好き。

悠の『破壊の皇帝』の正体を、知っている。

皇 悠：『織香部』部員、気弱な少年。

ぼさぼさの銀髪、気弱で人見知りする少年。

影の薄い、草食系男子。でも、彼は『破壊の皇帝』というもう一つの人格を持つ。

星ヶ崎 彩芽：小さい女子高生、甘えん坊で、甘いものが好き。

夜奈月 椿とは長い親友。実は、あまり頭がよくない。

彩芽と椿は、同じ東城学園を受けていた。

三野宮 織香：『織香部』顧問、既婚者。

東城学園高等部で、数学を教えている。ショートボブで、色白な大人の女性。

完璧主義者で、理論的。ピンク髪の娘を大事そうに抱きかかえている。

園川 哲治：『織香部』部長、エロい男子。高三男子。

眼鏡をかけている痩せた男で、常にカメラを首にぶら下げている。好きなものは、フィギュア。自作フィギュアを作るのが得意。

広州 伊豆奈：『織香部』部員、子役、小四女子。

赤い髪でカールがかかっている、童顔で無邪気な人気天才子役。
好きな男子ができて、現在つき合っている。

長峰 あずさ：『織香部』部員、ツンデレ毒舌アイドル。

意外と可愛いロングヘアート、目立ちたがり屋の大きなリボンが特徴。

最近、大事なものを失って落ち込んでいるようで落ち込んでいない。

西園寺 轟：大きくて、太った男。

岐阜出身で、おとなし目。彼にはある野望があった。

沢尻 桜子：東城学園日本史教師、独身。

なぜか常にセーラー服を着ている、セーラー服日本史教師。

三野宮先生を尊敬していて、別のマンションに住んでいる。

福永 東雲：夜奈月 椿の甥。

小さいけれど、すばしっこいらしい。

第五話：憧れと恋心

まだ寒い冬のこの日、ポニーテールのあたしは、慣れ親しんだ中学のセーラー服を着ていました。あたしの名は夜奈月 椿。

遠く離れた、東京の東城学園という学校を受けに来たんだよ。そして、今日が入学試験の発表の日なんだ。

「椿お姉ちゃん、一緒に受かっているといいね」

あたしの隣には、あたしと同じ制服を着た小さな女の子がいた。

彼女の名は、星ヶ崎 彩芽。一番大事な、あたしの親友だよ。

背の差はかなりあるけど同級生、ツインテールの童顔な女の子は、あたしのほうに顔を覗かせていた。

「そうだね、二人とも受かっているよ」

枯れ木並ぶ寒い冬の道を、二人で歩く。

間もなくして、やってきた掲示板は、多くの人だかりができていた。掲示板に近づくにつれて、緊張と不安と期待が、心を支配する。

「じゃあ、いこっか」

「うん、椿お姉ちゃん」

試験番号を互いに見直して、掲示板という運命の分かれ道に向かう。手に持った受験票を、持つ手が震えていた。

『4056』、これがあたしの番号。掲示板を見上げ、探す。

こういう時は、あたしの高い背が役にたつなあ。

前の掲示板から意中の番号を探すこと、約一分。

緊張の顔つきであたしは、見上げていた。

「4040……あ、あった4056」

あたしは受験票と、掲示板の番号をもう一度見返した。
間違いなく、そこに張り出されていたのがあたしの番号だった。

「あつたよ、あたし、受かっていた！彩芽は？」

思わず、興奮気味に言ってしまったあたし。

隣の彩芽は、なぜか視線を落として前髪に目を隠していた。
体が小刻みに震え、目には何か光るようなものが見えた。
右手で握りつぶした受験票、それだけであたしはわかった。

「おめでとう、お姉ちゃん」

そんな彩芽は、不意にあたしに笑顔を振りまいた。無邪気な、屈託のない笑顔。

そのままあたしに、抱きついてくる。

「ありがとう、彩芽。よしよし」

あたしは、小さな同級生彩芽の頭をなでていた。

親友のあたしは、彩芽のことが何でも分かっている。

だからあたしも、なんだか泣けてきた。

それは、地元から遠く離れた学校に通う親友との、別れの意味をなしていたから。

でも、そのことをあたしは口にしないで、大親友の女の子の頭を何度もなでてあげた。

「じゃあ、帰ろうか。学校に、報告もしないといけないしね」

「うん、椿お姉ちゃん」

そこでも彩芽は、気丈にふるまって笑顔を見せた。

そんな小さく健気けなげな彩芽に、あたしは逆に心がチクリと痛い。

掲示板を後にして、あたしと彩芽は手をつないで歩く。

枯れた木、合格発表後のあたしたちは、ここに来た心境とは別の心境になって戻っていく。そんな時、校門には一人の女性が立ちふさ

がっていた。

「夜奈月 椿さん、ですわね」

そこに立っていたのがやや白い肌の、紺のスーツを着た大人の女性。ショートボブで、美人の顔立ちをした女性は、こっちを見ていた。

「そうですけど」

「わたくし、東城学園高等部の数学教師をしております三野宮 織香と申しますの。」

あなたに話がありますわ、つきあってもらえますか？」

三野宮先生は、軽く丁寧に頭を下げてきた。

そういえばこの人、面接のときにいたかも。

「彩芽は、じゃあ先に帰ったほうがいいかな？」

「いえ、あなたにも大事な話にもありますの。星ヶ崎 彩芽さん。」

さあ、みんなで参りましょうか」

そんな三野宮先生は、学園のそばにある喫茶店に、あたしたち二人を案内してくれた。

古風でやや高級な喫茶店、客層は学生よりサラリーマンやOLなんかが多い。

三野宮先生がおこつてくださるということなので、テーブルの上はあたしと彩芽が頼んだものが運ばれていた。

それにしてもなんだらう、三野宮先生が見せる余裕ある笑み。なにか裏がありそうで、不思議な気もした。

隣の彩芽はいつも通りというか、かわいい顔でパフェをスプーンですくっていた。

「なんで、あたしたち二人を呼んだのですか？」

「まずは、夜奈月さん東城学園高等部合格、おめでとうございますわ」

「ありがとうございます」

「星ヶ崎さん、不合格でしたわね、残念でしたわね」

三野宮先生がそういうと、彩芽のスプーンがぴたっとまる。

前髪に目を隠して、どこか悲しみを押し殺そうとしている彩芽。

「彩芽に、そんなことを言わないでください！」

あたしは、思わずバンとテーブルをたたいた。

親友に浴びせられたあまりにも現実な言葉、あたしは悔しかった。

触れないように気遣った言葉に、見ず知らずの人に土足で侵入されたようで、あたしは彩芽の代わりに眉をひそめた。

目の前の織香先生は、それでも冷静にあたしを見ていた。

「そんな星ヶ崎さんに、朗報ですわ。あなたを、補欠合格させようと考えていますの」

「えっ」不思議な顔で彩芽は、顔を上げて三野宮先生を見ていた。

「どういうことですか、補欠合格なんですか？」

「まあ、そういうことですわ。そのために夜奈月さん、あなたは責任重大ですの」

三野宮先生が、アイスマルクを一気に飲み干して、身を乗り出してきた。

そのまま、大人の女性の落ちついた顔で、あたしを見てきた。

「責任重大？」

「そうですね、星ヶ崎さんを合格にさせるために、あなたに我が『織香部』に入ってもらいますの」

いきなり、三野宮先生が部活の勧誘をしてきた。

席に戻り、にこやかな顔を見せた織香先生。

すると、急に髪の毛のてっぺんのあほ毛がいきなり現れた。そのあほ毛は、手招きしているように動いていた。

「動いていない？」

「何をおっしゃっていますの？わたくしは真剣ですわ。

夜奈月さん、『織香部』は少し変わった日常を体験できるものの」

三野宮先生は真剣だけど、髪が動いて滑稽に見えた。

『織香部』かあ、どんな部活なんだろう。なんか怪しそう。

「その部活にあたしが入れば、彩芽は合格になるの？」

「そうですね、わたくしのコネを見くびらないでもらえますの」
「なんだか裏口入学っぽいなあ、大丈夫なんだろうか。」
するとあたしの隣で、袖を引っ張ってきた彩芽。

「椿おねえちゃん、彩芽。東城に、行きたい！」

ウルウル視線、小さい彩芽のおねだり仕草。

それは、かわいいものの好きのあたしの心を、容赦なくくすぐる。
かわいいなあ彩芽、でもなんか怪しそうな部活だし。
ちよっと理性的に戻ったあたしは、やはりこの質問をすることにした。

「『織香部』って、具体的にどんなことをするんですか？」

「簡単ですわ、わたくしの雑用が主な仕事ですの。」

ほかにも部活ならではのイベント盛りだくさんですわ」
「雑用ね、特別難しいことはなさそうかな。」

本当は、中学までやっていたバスケも気になるけど。

でも、あたしはまだ揺れ動いていた。

あたしには、東城を受けた二つの理由があったから。

ちなみに、バスケットは理由じゃないから。

「椿お姉ちゃん、彩芽は東城に行きたいな」

「かわいいっ、よしよし。じゃあ、あたし『織香部』に行きます。その代わり、絶対彩芽を合格させてください」

「分かりましたわ、交渉成立ですの。ではこの契約書に、サインしてくださいな」

三野宮先生は、ポケットから一枚の紙を取り出した。

何の変哲もない紙に、サインしたあたしだけど、名前を書いた瞬間、あたしの体全体をチクリとなにか針のようなものが刺さった感覚を覚えた。

「えっ？」

「契約成立ですわ、あなたは卒業するまでもう『織香部』の一員ですの。」

あなたは、逃げも隠れもできませんわ」

「椿おねえちゃん、ありがとう。だ〜いすき！」

彩芽は、あたしに抱きついてうれしそうな顔を見せた。
無邪気な笑顔に、さっきまでの不思議な感覚を忘れさせるほどだった。

契約書をいそいそとしまった三野宮先生は、立ち上がって伝票を持っていた。

「最後に、夜奈月さん」

「はい、なんですか？」

「猫は好きですか？」

「ん〜、あたしはどっちかっていうと犬派だよ。
でも猫も大丈夫、飼ったことはないけど」

「なるほど。あなたには、十分素質がありますわ。」

では後日、説明会がありますので来てくださいな」
三野宮先生の言葉は、その時はよくわからなかった。

あれから一年半もの月日が流れた。高二になったあたしは、新幹線に乗っていた。

『織香部』という部活に入ったあたしは、隣の座席に一人の女の子がいた。

女の子の彩芽。彩芽は、にこやかな顔をあたしに向けていた。

彩芽も、織香先生（織香部で三野宮先生を織香先生と呼ぶ）の配慮のおかげで東城学園に入学していた。

「彩芽、やっぱりかわいいなあ」

小さな同級生を、あたしはいつも通り頭をなでていた。
乗っている新幹線は、東京から名古屋に向かう。地元の岐阜まで長旅。

隣どうし座席の彩芽は、あたしに体をすり寄せてきた。

「えへへっ、椿おねえちゃん、だ〜いすき！」

「彩芽は、本当になでがいがある頭だね」

彩芽は、にこにこしていた。

待ちに待った夏休み、あたしと彩芽は故郷の岐阜に帰っていた。

あたしと彩芽は長いつき合いで、小学校三年の時に転校してきた彩芽。

それ以降、あたしの一番の親友。一番大事な、かけがえのない人。
街中歩くとあたしと彩芽は、仲よし姉妹に見えるんだよ。

でも、あたしには最近気になる人がいて、それでいて頭の中でふわふわしていた。

甘いもの大好きな彩芽は、車内販売のチョコレートをご飯代わりに食べていた。

互いに、別々で寮暮らしをしている彩芽とあたし。

本当は一緒の寮に入りたかったんだけど、残念。あたしの方に、理由があるからね。

「彩芽、いつも、ご飯食べないでやつばかり食べているでしょ」

「チョコレートがあればご飯いらないよ、えへへっ」

「彩芽、チョコレートばかり食べていたら、大きくなれないよ」

「椿お姉ちゃんの妹だから、彩芽は小さくてもいいんだよ」

彩芽はすぐ、あたしに甘えてきた。彩芽に甘えられると、あたしは怒れないよお。

「椿お姉ちゃん、恋しているよね？」

「えっ、な、何言っているの？彩芽！」

あたしは、思わず取り乱してしまう。あたしには、最近ちょっと気になる人ができた。

好きというほどではない、恋もしていない、でも気になる、あやふやな存在がいた。

「夜奈月さんが、好きになりました」

放課後のグラウンドで、気弱な少年にいきなり言われた一言。

かつて、つきあった彼が言わなかったその言葉を、あたしは生まれて初めて聞いた。

彼に告白され、彼の裏を見て、彼のことを知っていき、彼に惹かれるあたし。

「椿お姉ちゃん、もしかして好きな人できたの？」

「えー、あー、うーっ……」

彼とずっと行動しているうちに、気になる自分がいて、惹かれる自分があった。

始めは、ただ弱すぎる彼を、なんとなく世話しているだけだった。それでも、彼の見せる強すぎる本性はなんだか違う。そんな彼の顔が頭に浮かぶと、鼻白たしろむあたしがいた。

「彩芽には、隠さなくてもわかるよ。」

彩芽は、椿お姉ちゃんが幸せになるのが、一番うれしいな。

中学のこともあったし、彩芽は応援するよ。」

自分のことのように喜んでくれる、無邪気な彩芽。

あたしが彩芽のことが分かるように、彩芽もあたしのことが分かる。そんな彩芽には隠せないと観念したあたしは、重い口を開いた。

「彩芽、みんなに内緒にしてくれる？」

「うん、内緒にする」

彩芽はしーっと、かわいらしいしぐさを見せた。

赤面したあたしは、そのまま彩芽の耳に手を当てた。

「あのね、あたしは、……同じクラスの皇君が、今、すごく気になっているの」

「皇 悠？」

彩芽は、思わず口に出してしまう。

彩芽が名前を言ってしまったので、やっぱり赤くなつたあたし。

「彩芽、言っちゃダメ！ 恥ずかしいんだから」

「悠……皇……、椿お姉ちゃん正気？」

そんな彩芽の様子がちよつとおかしい、ぼんやりとチョコレートを見ていた。

その持っていたチョコレートが、突然ぱきつと割れた。力強い握りしめた手に、拳を震わせていた。

「正気って、彩芽」

「椿お姉ちゃん、それだけはダメ！」

うるませた瞳、子供が駄々こねるそんな顔であたしを見てきた。

「えっ、なんで？」

「彩芽は、椿お姉ちゃんが、だ〜いすき。だから、皇 悠とだけは別れて。」

彼は、ものすごく危険だから！」

切実な彩芽の顔、声。予想外の反応に、あたしはショックだった。

彩芽は喜んでくれる、祝福してくれる、そう思っていた。

しかし、あたしの考えは、無残に打ち砕かれた。

「椿お姉ちゃんといつまでも一緒にいたい、今度は椿お姉ちゃんを彩芽が守るから。」

だから皇 悠とだけは、別れて！」

「できないよ！たぶん……」

あたしは、適当な言葉で濁した。

彩芽は、なんだか悔しそうな、泣き出しそうな顔を見せていた。

その顔が、悠のあの言葉と同様に、あたしにはとても印象的だった。

ひさしぶりの実家の前で、大きなカバンを持って立っていたあたし。夏の空気、木々のにおい、セミの音、それから打ち水の道路、懐かしき我が家。

長旅を経て、ようやく戻ってきた。

二年生になったあたしが、ママとパパと再会、やっぱり懐かしいなあ。

リビングで会話を交わした後、学校であつた楽しかったことを話して、階段を上がる。

大きなカバンを持って上がった、二階にあるあたしの部屋。

あたしは、部屋を開けると、そこから聞こえてきた声があった。

「『子育てキラキラ ベイビーズ!』」

謎の子供の声が、聞こえてきた。

白髪交じりの子供が、携帯ゲームを片手にかわいいポーズであたしを見上げる。

「えっ、東雲君」

「君は、こういうのが好きなんだね」

そこはあたしの部屋、ベッドとぬいぐるみ。

後は、アイドルのポスターなんか飾られた、普通の女の子らしい部屋。

だけど、そこには一人の小さな男の子が、あたしの携帯ゲームを持っていた。

彼の名は福永 東雲、小学生であたしの甥だよ。

「あーっ、東雲君、返してよ。あたしのゲーム!」

「ふーん、このゲームは、自分の赤ちゃんを幼稚園入園まで育てる育成ゲームなんだ」

あたしが手を伸ばして、ゲームを取り返そうとするけど、東雲君はゲーム画面を見ながらすばしっこく避ける。そのまま、大きなベッドの上に乗った。

「もう、あたしの部屋のものを、勝手に触らないでよぉ!」

「君はかわいいね。小さかったり、かわいかったりするものが、好きなんだね」

「返してよっ!」

あたしがベッドにそのまま飛びついたけど、東雲君はそれをあざけるかのように、ひらりと飛び上がった。そのまま、フワフワとあたしの背中に馬乗りした。

「東雲君、お姉ちゃん怒っちゃうよ!」

「君の好きなものは、何も変わっていない。でも、君自身は少し変わっている。」

君は綺麗になったね、もしかして恋をしたのかな」

「東雲君、お姉ちゃんを『君』とか言っちゃだめだよ」

「においがいい、桜のほのかな香り。君は女性として磨きがかかったね」

「東雲君、うん……」

そこは、否定ができなかった。こういうところは東雲君、鋭いんだよね。

あたしの上からゲームを差し出した東雲君から、ようやく携帯ゲームを取り返した。

「東城は、楽しいかい?」

「えっ、あつ、そうだね。楽しいよ」

東雲君があたしの上から降りて、あたしはベッドに座った。

そんな東雲君は、なぜかあたしの机のほうを向いていた。机には中学までの教科書やノート、ほかにメモ帳や、プリクラの写真までが無造作に置かれていた。

その中から、一冊の雑誌を取り出す。

「岐阜だと、地元紙に『健康的少女』と載る君が東京の学校に行くとは、驚愕だよ」

あたしは、小学生の東雲君がこんなに饒舌じょうぜつに話せることにびっくりだけだね。

「うん、あたしが選んで入ったんだから」

「偏差値的にも、そこまで遠くに行く必要があるのかい?」

「東城のブレザー、かわいいし」

「ボクの兄が、卒業できなかったから、かい？」

東雲君の声に、あたしは顔が曇った。東雲君の兄は、福永 誠。東城学園の体育祭で、殺人を起こして少年院に入ったあたしの甥。幼いころから、憧れていた、あたしの尊敬する「お兄ちゃん」。

もともと一人っ子のあたしは、よくお兄ちゃんと、（もう一人そういえば誰かいたようだけど）遊んだ記憶があつた。

そんなお兄ちゃんは、何でもできた。

スポーツ万能で、正義感のある、たくましい甥に、あたしは尊敬していた。

あたしは、一人っ子だけとお兄ちゃんのように慕っていたから。

小学校後学年、周りより小さい彩芽が転校してきていじめられた。彩芽と一緒に仲良くなつて遊んでいたあたしも、いじめられていたの。

でも、そこで助けくれたのが「お兄ちゃん」。

わざわざ学校に乗り込んで、いじめっ子を撃退してくれたんだよお。だから、あたしも彩芽も「お兄ちゃん」が大好きなんだ。

「東雲君は、どう思うの？あの事件」

「君は、今でも信じているのかい？福永 誠を、彼のことを」

「うん、お兄ちゃんは、そんなに悪いことをするとは思えない。何かの間違いだよ」

「真実は東城、そこにいればいつか会えるかもしれない。

世界は廻り、また東城に戻る。大事なものは、会いたいと思う気持ち」

「えっ、なにそれ？」

「ほら、その赤ん坊がオムツを交換してくれって言っているよ」
と、あたしの携帯ゲームの画面を覗き込むと、赤ちゃんが泣きだしていた。

その画面に出てくる三択画面、

「1：ご飯を上げる、2：オムツを交換する、3：何かを飲み込んだ」。

あたしは、声を聞くけど鳴き声からだと判断できない。

「違うよ、この赤ちゃん何も言っていないよ」

ゲーム画面の泣いている赤ちゃんは、ただ泣いているだけ。それでも、あたしは分かっていた。

あることが原因で、あたしに身についていた不思議な現象。そんな時、あたしの部屋のドアがガチャ、と開いた。

「椿、そういえばあんたに手紙が届いているんだって。はい」

それは、やはり少し大きな背の女性のママだった。

あたしはママが持ってきた、封が切られていない手紙を手にとった。

手紙の主と話すのは、一年半ぶり。

懐かしい再会だけど、あまり会いたくない気持ちもあった。

（なんで来ちゃったんだろう？暇だから？未練はないし）

夕日が沈む夏の夜、あたしの目の前には大きな川が広がっていた。

真っ黒なシャツ、深緑のデニムミニスカートにポニーテールのあたしは、不機嫌な顔になっていた。

この周辺は、昔からあちこちに大きな川があって昔は治水が大変だったらしい。

近くの河原は、提灯ちようちんの明かりがともっていた。

今から、夏祭りが始まるんじゃないかという賑わい。

「遅いなあ」

ママから渡された手紙を握り、約束の時間を三十分以上過ぎても呼

び出した人は来ないで、大きな橋の下で待っていた。

すると、上のほうからあたしの場所に、一人の人間が走ってきた。その人は、黒っぽい着物を着て、頭に頭巾をかぶった小太りの人。

「椿、またせたな」

「あゝつ、轟。どうしたの、その格好？」

あたしの目の前に現れたのが、口髭をはやして老け顔のあたしと同じ年の男子。

彼の名は、西園寺 轟。中学まで同じ学校だった、地元の知り合い。やや小太りで、のっそりとした大柄な彼はあたしに手を振った。着物を着て、老け顔に貫録さえあった。

「轟、ちよつとやせたね」

「そんなことはないぞ。今から、あの船に乗るぞ」

「な、何を言っているの？ あれって……」

轟が指さした方向に、見えたのが船着き場。

その場所は、あたしが小学校の遠足で外から見ただけの伝統漁法、

「『鵜飼い』？ なんでまた」

「そう、いまからそこに行く。お前との、中学の時のデートのやり直した」

轟は、恥らいながらもその言葉を言い切った。

『鵜飼い』ってニュースとかで見たことはあるけど、行ったことないなあ。

高級なイメージがあるから、遠巻きに見ただけの場所。

「行くぞ、見せたいんだ！ 大丈夫」

「うゝん、何があつたの？」

「話があるんだ」

その時の轟の声は、ものすごく大人びていた。

あたしは、そんな大人びた同級生の思いを素直に受けることにした。

あたしは船上にいた。大きな屋形船に乗り、大きな川を眺める。

涼しい風と屋形船の提灯ていとうが、夏の風情を感じさせた。

暑かった夏を、忘れさせるそんな船上の光景。

「わゝ、きれい」

こんなことならシャツじゃなく、浴衣を着てくれば良かったと、今更ながら後悔した。

あたしの隣には、着物姿の轟。

彼が高そうなチケットのお金を、堂々と払っていた姿がちょっとかっこよかった。

「初めてか？僕は、何回もあるぞ」

「でも、『鵜飼い』ってチケット高いでしょ。高校生だと、なかなか買えないよね」

「買ってはいないぞ」

轟が、自慢げに言っていた。不思議に思えたあたしは、轟の顔を見ていた。

「じゃあ、買っていないってことは？」

嫌な予感がしたけど、轟は首を横に振った。

「チケットがあっただけだ、それに、……始まるぞ」

轟は川のほうを指さす頃、アナウンスがポロポロ〜ンと鳴りだした。

「皆様、本日は当屋形船「みずき」にご乗船いただきありがとうございます。さいます。

この船は、伝統漁法『鵜飼い』を楽しむためのものです。

これより、『鵜飼い』が始まりますので、鵜側のほうにご注目くださいませ」

などと流れると、あたしたちの背後から人が続々と集まってくる。どうやら上の柱には、鵜の絵が描かれていた、納得。

すると、川の奥のほうから明かりが見えた。

その小さな明かりは、船に近づいてきたのかやがて大きくなった。現れた松明をつけた小型の船、二人の人物が乗っていた。

周りが暗いので、はっきり細部までは見えないが大人の男の人が乗り込んでいた。

「ほうほう、ほうほう」

などというと、ツボのようなものから三匹の鵜が姿を現した。

首に縄をつけた鵜が、現れたかと思うとそのまま川に入っていく。

「わゝ、すごい。テレビでは見たことあるけど、生は初めて！」
あたしは、なんだか感動していた。幻想的な光景が、そこに広がっていた。

川の上の不思議な空間、不思議な雰囲気。

松明のチリチリっていう音と、羽をばたつかせる鵜の音だけが聞こえる。

周りの客もどうやら、音を立てずに静かに見守っている様子。

鵜が川から上がると、おなかのあたりが膨れていた。

そこから出てくるのが鮎、かこの中に吐き出して、また川に潜っていく。

健気でかわいい鵜、松明のぼんやりとした明かり、その空間だけを別世界の出来事のように見るものを誘う。^{いっしょ}

「すごいだろ、僕の爺ちゃん」

「えっ、あつ、轟のおじいちゃんなの？」

あたしは、素直に驚いた。自慢げに鼻を鳴らした轟は、その光景を見ていた。

「我が『西園寺家』は、数百年も続く鵜飼の伝統漁法を守る一族。俺は、その十八代目にあたる」

「う、うん。轟って、すごいね」

「椿、この僕とやり直さないかい？」

轟の言葉にあたしは、目を丸くした。

そう、轟の会いたい手紙は、このことが理由だったんだとようやく分かった。

——轟との出会いは中学に入ってから。二年生で同じクラスで初めての席替えの時。

大きくのそつとした彼と、やはり女子の中で一番背の高いあたしと、自然と隣どうしの席になった。

当時の彼は、あまり友達もない。そんな彼は、クラスでも大きいから目立つ存在。

おとなしい轟は、一人でいつも掃除を押しつけられていた。

放課後の教室の掃除を、黙々とこなす轟に、見かねたあたしが手伝ったのが始まり。

それからしばらくして、あたしは轟に放課後を呼ばれた。

そこで轟が、あたしを好きになったから、つきあって欲しいと言いつ出したの。

当時、バスケット部で部活に熱中していたあたし。

初めは断ろうとも思っただけど、彼の熱意には叶わなかった。

好きな人がいないあたしは、彼と何となくつきあうことにしたの。

でも、つきあったもののデートもなく、なにもなくて、ただ席が隣に
いるだけの変化のない日々を過ごしていく。
一年間、ほとんど進展のないあたしと轟は、同じクラスでもう中三
になっていた。

そんなあたしはGWの近いある日、大親友の彩芽から映画のチケット
をもらったの。

そして、彩芽の計らいもあり轟とつきあい宣言以降、初めてのデー
トに誘ったの。

GWに映画館デート、おしゃれして出かけたあたし轟。
でも轟は、やはり乗り気じゃなかったなあ。

「轟は映画、何が好きなの？」

「僕は、あまり映画観ません」

「むーっ、こういう時はなんか言うもんだよね。」

たとえばカンフー映画とか、アニメ映画とか、恋愛映画とか」

「そんなものに興味ありませんから、映画なんて観ませんし」

私服姿の轟は、なんだかうわの空で携帯電話ばかりをいじっていた。

「じゃあ、アクションとかどう？上演時間近いし」

「別に、いいですよ」

やや、投げやりの轟。あまりうれしそうじゃないので、あたしのほ
うで何とかテンションを上げていた。手を引いて、彼とともにシア
ターに。

そのまま近くの席に座り、映画が始まった。

……二時間ほどの超大作SFアクション映画が終わり、あたしと轟
は出てきて近くのフードコートに来ていた。

思った以上に、面白かった映画を見たあたしは上機嫌。

轟も、声を上げながら映画に見入っていた。

「なかなか楽しかったね、映画」

「つまらなかったですよ、映画」

やはり、携帯ばかり見ていた轟。

ちよつと膨れたあたしは、轟の携帯電話を無理やり覗き込んだ。

「そんなに熱心に、何を見ているの？」

「み、見ないでください。邪魔です」

すぐさま、慌てた様子で携帯電話を隠した。

轟は、なんかイヤそうな顔をあたしに向けた。

「ねえ、轟。映画嫌い？」

「普通ですよ」と、携帯電話を背後に隠して、あたしに言ってきた。ため息をついて、困った顔を浮かべたあたし。

「じゃあ、何がいいの？」

デートとかも行かないし、あたしの部活も忙しいけど、電話もメールもないし。

なんか、つきあっている感じが全然しないんだよね」

「ちゃんとつきあっているじゃないですか、僕は……」

「いい加減にして！」

あたしは、思いつきりテーブルをたたいた。

そこに今までの不満や怒りを、ぶつけるかのように。

「夜奈月さん、どうしたんですか？」

「どうしたじゃないよ、あたしのこと好きじゃないんでしょ！」

「いえ、普通に好きです」

「普通じゃないよ！これ以上、あたしは轟とはつきあえない！」

あたしは、そのまま彼のテーブルから走って去っていく。

そのまま轟を置いてあたしは、帰ることにした。

つきあっているとか好きと、そういうのがないまま、轟とのあやふ

やな交際は、こうして終わっていった――

そんな彼と、やり直したいと思えるはずもない。

でも、中学の時に誘ったことさえない彼の変化。

始めて見せる能動的な轟は、船であたしの顔を見ていた。

提灯の明かりが、ぼんやりとあたしと轟の顔を照らす

「椿、この僕と結婚してくれないか？」

「……なんで、そうなの？わからないよ、あたし」

轟の言葉に、あたしは小さな声で漏らした。やや強引で、やや不思議な感覚。

裏がありそうで、利用されていそうで、不器用なプロポーズ。

結婚の申し込み、はじめは冗談に思えた。

でも、轟は冗談なんて言う性格じゃないことを、あたしは知っていた。

「僕、椿と別れてようやく気づいたんだ。椿が、少し大切な存在だつてことに」

あたしは、轟の言葉を無言でかみしめた。
もつと、早くその言葉を聞きたかった。

「それに、僕は好きな人がいない。椿だって彼氏はいないだろう、もう一度……」

「馬鹿にしないで！」

その言葉であたしは、一気に怒りが込み上げてきた。

でも、時折言ってくる轟のこういう心無い言葉、あたしは嫌い。

「じゃあ、いるんだ？誰？そいつは？本当に好きなんだろうな？」

「えっ、うつっ……」

あたしは、困っていた。悠は好きかもしれないが、まだわからない煮え切らない関係。

ただ告白だけされた人、ちょっと彼のことが分かってきて、気になっている。

無意識のうちに、惹かれていた自分がいた。

でも轟の前で発表するほどはつきりしていないし、彼の名前をだすと恥ずかしい。

そんな困り顔のあたしに、ここぞとばかりに轟は追求する。

「それでも、僕は本気です！」

「うーん、どうやって説明しよう……」

それぐらい微妙な関係、あたしと悠。

そんな目の前の小型船は、鵜が健気に鮎を口に入れては、吐き出す漁法を、黙々と続けていた。その度に、船から歓声が上がる。そんな時、

「『破壊』、重力」

どこからともなく、男の澄んだ声がした。その声の後に、見えるのが一つの人影。

そしてありえない人物が、ありえない川の上流あたりから歩いてきた。

その姿を見てあたしの体に、驚きという名の電気が流れた。

提灯の明かりで分かってくる、川の上に立つ男をあたしは知っていた。

「悠、どうして？」

その姿は悠ではない、『破壊の皇帝』というもう一つの姿。

「俺は、夜奈月 椿に会いに来た」

その言葉に、あたしの心はなんだかうれしくなる自分がいた。

欲しかった言葉を、聞きたかった言葉を、あたしは彼から聞けたのだから。

「なんで、なんであたし？」

「お、お前は？」

「俺の名は、皇 悠。椿の恋人だ！」

ファンタジーチックに、川の上を歩いて現れた悠、いや『破壊の皇帝』に対し船の中は騒然とした。しかし、轟は苦い表情で悠を見ていた。

そのまま悠は、船に強引に乗り込んでくる。

「こ、恋人って、あたしは……その……」

「もういいだろう、俺は待てないぞ。」

あの時の答えを、俺は聞きにわざわざ来たのだから」

悠は、悠々と船にたどり着いていた。自信たつぷりの顔は、いつもの彼とは正反対。

そんな彼と、気弱な彼のギャップを両方見ているあたしは、彼が気になっていた。

『破壊の皇帝』、彼のことをこう呼んでいる。

どんなものでも、『破壊』できるすごい悠、強気の彼。

「何を言っている！」

「椿、この輩は？」

「轟、あたしの中学の知り合い」

あたしは、轟のことを言う。『破壊の皇帝』赤く光る眼で、轟のほうを覗き込んだ。

あたしはまるで助けを求めるかのような目で、悠に『破壊の皇帝』に視線を送る。

大柄の轟は、あたしに言い寄ってきた。

怒りをにじませ、貫録ある顔であたしを見ていた。

「椿、こんなヤツが、本当にお前の恋人なのか？」

「うん、そう……だよ」

あたしは、やっぱり恥ずかしかった。

そんなあたしのそばに来た悠は、お構いなしに頭をなでてきた。きれいに整えたポニーテールが、乱れていく。

おもいきりゴシゴシと、あたしの頭を乱暴になでていた。

「あたしが今、気になっている人」

「帰るぞ、椿。ノーマルがさびしがつている」

「待て、僕は椿を、その……デートに誘って……」

急に轟の声が、歯切れ悪くなる。

そんなことをお構いなしにあたしは、悠に手を引つ張られお姫様抱っこされていた。

委ねるあたしの大きな体、あたしはやっぱりうれしく恥ずかしく半々の気持ちでいた。

「お前は、椿と何をした？」

「えっ、それは……」

「何もしていないのだろう、こういうことも」

悠はそういつてあの時のように、あたしの前髪を掻きあげた。そのまま顔を、唇を近づけてくる。

ドキドキした、生きていた中であの時と同じように。

あたしの心は、張り裂けそうだった。

そして、交わした唇。

「っ、椿、やめろ！」

轟が手を伸ばして、あたしたちを奪おうとした。

だが顔を上げた悠は、余裕の表情で後ろに下がった。

悠に抱きかかえられたあたしは、そのまま船の手すりに飛び上がった。

た。

どうやら危険な行為なのか、乗務員のおじさんも人垣のほうから姿を見せた。

「危ないぞ、やめないか！」

しかし、『破壊の皇帝』になった悠は全く動じることがない。

「な、おい」

「お前の負けだ、椿はもう俺のものだからな。契約の儀式だ」

その言葉に、赤らめたあたしは口をつぐんでドキドキしていた。

あたしは、長い間この言葉を待っていたのだとはつきりわかった。

自分の本能で潜在的に、それがあつたのかもしれない。それが、恋だから。

そのまま悠と抱きかかえられるあたしは、手すりから川へと飛び込んだ。

でも重力を『破壊』した彼は、川に落ちなくて、魔術的で非科学的に浮いていた。

（やっぱり、悠のこと好きなのかも）

この時、はつきりしない恋心は、また一つ動いたような気がした。

お世話したいんじゃない、お世話されたい、誰かのものになりたい、そんな潜在的気持ち、感情。あたしの奥底にあるその気持ちを確認して、彼の顔を見上げた。

川の水面に浮かぶ彼の顔は、やはり凜々しい。

前を向き、赤い目がきらりと輝く。

「いくぞ、椿」

「えっ、うん」

『破壊の皇帝』になった悠は、無敵。何にも動じない、何にもひるまない。

彼はあたしを、抱きかかえて川を歩く。

そこは『鵜飼い』以上に、幻想的な世界が広がっていた。

「椿、戻ってこい！」

轟は、ただ遠ざかる船から大声を出すだけだった。

「戻ってこい、椿！もう一度……」

でも轟の声は、離れることでやがて聞こえなくなる。

川のせせらぎ、奥のマンションの明かり、船から離れての二人だけの静かな空間。

あたしは、重力を『破壊』して浮いている悠に、一生懸命抱きついていた。

両手を絡ませて、彼から離れないように懸命に肩から首に手を伸ばす。

「あたしは、悠のこと、まだわからないけど、気持ちがちよっと固まったかな」

「ノーマルの望みは、俺の望み。お前が俺を好きになることは、悪くない選択だ」

そんなあたしを抱きかかえたまま、川に浮いたまま川の対岸に向かって悠は歩く。

真つ暗な岸にたどり着こうとしたとき、その奥には一人の女性が立っていた。

「はい、それまでですよ」

赤ん坊を抱きかかえて、セーラー服を着た女性の姿が見えた。

周りが明るいけど、顔まではつきりうかがえない。

だがそれとほぼ同時に、『破壊の皇帝』である悠は顔をしかめた。

悠の前髪が、影になって見えない。

だけど体が小刻みに震え、ちよっと息を切らしているようにも見えた。

「くそっ、こんな時に！」

身震いした悠は、あたしを抱きかかえる力を強くした。

あたしは、心配そうな顔を浮かべた。

「大丈夫、悠？」

「だめだ、もたない」

すると、悠の赤い目がいつも通りの目にもどり、気弱な少年の顔が見えた。

ぼさぼさの銀髪で、恥ずかしいのか顔を赤くしていく。

『破壊の皇帝』が、元に戻るということはつまり、

「えっ、落ちるっ！」

戻った重力に引っ張られてあたしと悠は、そのまま川に落ちていった。

それから一時間ほど、あたしが目を覚ますとそこはベッドの上に寝かされていた。

あたしの下着も、あたしが着ていた青いシャツも、カジュアルなパンツも、リボンも床に無造作に置かれている。

しかも、悠のはいていた真っ黒なトランクスマで。うつつ、見ちゃったよお。

ほかにもポテチの袋や、紺のビジネススーツ、はたまた雑誌や新聞まで散らかった汚い部屋。あれ、そういえばあたしのブラだけがないんだけど。

「はい、気付きましたか」

「ここは？」

「カプセルホテル、ですよ」

そこには、なんと東城学園の日本史教師である沢尻先生の顔が見えた。

授業しているときも、セーラー服を着ている若い女教師。

若作り教師とも言われているけど、意外と生徒から人気もあるそんな先生。

あたしも、沢尻先生が好きだよ。そういえば、織香先生とも仲がいいんだね。

「あつ、悠は？」

「そのことで、残念なお知らせが……」

沢尻先生は、なぜか目に涙を浮かべていた。

あたしは、心配そうな顔で沢尻先生の顔を覗きこむ。

「えつ、悠がもしかして……」

最悪のことが、頭をよぎる。

あの大きな川だから、行方不明になっても不思議ではない。

だけど、あたしのベッドの上を、ハイハイしている黒いベビー服の赤ちゃんがいた。

その赤ちゃんは、なぜかあたしの赤いブラジャーを頭にかぶっていた。

ピンク髪をつぶらな瞳の赤ちゃん、プリちゃん。

「にゅにゅ」

あたしは、実は一つだけ特技があった。

よしよしと、なでた後プリちゃんを抱きかかえてあげた。

「プリちゃん、どうしたの？あつ、そう。うん」

「皇君は、いい子でしたね、あまり……」

沢尻先生が、ハンカチ片手に涙を拭きながら話をしていると、あたしはハンカチを強引に奪った。横目で、沢尻先生を見る。

「先生、悠は隣の部屋で寝かせているんですよ」

「えっ、あら、わかつちやいましたか」

沢尻先生は、舌をペロツと出した。もう、生徒を心配させないでくださいよ。

「皇君は無事です、ごめんなさいね。」

それにしても夜奈月さんは赤ちゃんと、しゃべれるんですね。私のうっかりさん、でしたよ」

「うん、プリちゃんはとってもかわいいんだよお」

あたしは、『アビ』という特殊を持っていた。

『織香部』に入部した際に、手に入れた特殊な能力。

それは、『赤ちゃんとお話ができる』特殊能力、『アビ』だよ。

かわいいものが大好きで、小さな子が大好きなあたしにぴったりの能力。

なんで織香先生の娘、プリちゃんがここにいるんだろう。

あたしの次の質問を、沢尻先生に向けることにした。

「そういえば、織香先生は？」

「こつちです」

あたしの質問に、沢尻先生はカプセルホテルのユニットバスに案内した。

そこには、洗面器の中でもぞもぞしている音だけがした。

「この中で、『オリツチ』は気持ちよく眠っているのです」

ちなみに、『オリツチ』は沢尻先生がつけたあだ名らしい。

つけられた本人は、気に入っていない様子だけ。

あたしに抱かれたプリちゃんは、洗面器に向けて手足をばたつかせていた。

織香先生は、夜六時から十二時間限定の黒猫になる呪いがかかっているんだって。

本当はちゃんとした人間んだけど、今は夜十時を過ぎているね。あたしが洗面器をどかしてあげると、疲れた表情の黒猫が出てきた。湿気のある浴室の床で、のぼせているようにも見えた。

「あ、そう。なんか織香先生が、沢尻先生の家からあたしの寮に引っ越した理由、分かったような……」

「だって、『オリツチ』、ひっかいてくるんですよ」

沢尻先生が、スカートの下から太もものひっかき傷を、あたしに見せてきた。

「うーん、織香先生って潔癖症だからね。

それにしても、なんでここに、みんないるんですか？」

「そうだねえ、私たちは皇君を追いかけて来ました。そう、おっかけなのです」

沢尻先生が、どこからともなくピンクのハッピを着た。

そこには『LOVELY SUMERASGI』と書かれたハッピ。

「あははっ、そうなんだ」

「夜奈月さん、そこは突っ込むところです。」

本当はね、皇君は数学の補習を、抜け出してきたんですよ」

沢尻先生は、いろいろ涙あり笑いありで説明をしてくれること十分ほど。

「要は悠が補習を抜け出して、あたしに会いに岐阜まで来て、沢尻先生と織香先生がその悠を連れ帰しに来たんですね」

「ざっくりと、まとめすぎですよ」

沢尻先生の説明中に、あたしはプリちゃんの無地オムツを、ウサギのオムツを交換していた。お昼寝したのか、夜十一時過ぎてもプリ

ちゃんは元気だね。

うん、かわいいなあ。

その時、あたしたちの部屋のドアがガチャ、と開いた。

「夜奈月さん、ごめんなさい！」

姿を見せると、いきなり悠は直立であたしに頭を下げた。

やはりしわくちゃんなぼさぼさの髪、気弱な悠は顔を赤くしてこわばらせていた。

白いシャツは濡れていて、慌てていてズボンのチャックが開いたままになっていた。

「ゆ、悠？大丈夫？」

「ボクは馬鹿なことをしました、ごめんなさい！」

そのままもう一言、言って彼はいそいそと部屋を出て行った。

それでも、あたしは嬉しかった。

（奪われるのも、いいかも）

そんなあたしの目の前には、プリちゃんがにっこり微笑んでいた。

「ばぶばぶ（もう、皇とは子供を作ったのか？）」

「えっ、ち、違うよお」

あたしは、プリちゃんに対し顔を赤らめていた。

沢尻先生は、プリちゃんの顔を見て不思議と、赤らめたあたしに首をかしげていた。

帰省で夏休みがほとんど終わった。そして、二学期を迎えた。

二学期開始の式を終え、今日は二学期に入って二回目の登校日。

あたしは放課後、『織香部』のある数学準備室にいたの。

この日が、『織香部』が二学期初の部活の日。

いつもの部活に、いつものメンバーが集まっていた。

「みなさん、お久しぶりですわ」

ドアを背に、織香先生がホワイトボードに何かを書いていた。久しぶりに集まった面々と、会話を交わす。

この『織香部』には、あたしと悠以外にも三人の部員がいる。

唯一の小学生部員の伊豆奈ちゃんの背が少し大きくなったり、現役アイドル女子高生のあずさちゃんは今黒くなったり、眼鏡をかけた園川部長は趣味の自作フィギュアの種類が増えたり。

そして夏休みにあたしに会いに来た悠が、ゲッソリとやつれた顔になっていた。

そんな部室のホワイトボードには、『文化祭企画会議』と書かれていた。

ちなみに今、プリちゃんは白いカーテンのベビーベッドの中。顔は見えないけれど、寝息だけがスースーと聞こえた。

「文化祭って、もうそんな時期ですか」

「えっ、そうかなあ。文化祭、この学校だと大きいからいろんな人が来るね」

「当然ですわ、そこで皆さんは文化祭の出し物を決めようと思ひますの。」

一応『織香部』は、れっきとした部活ですの。」

織香先生は、にこやかな顔を見せていた。

紺のスーツを着た、数学教師をあたしたち織香部部員は見ていた。ちなみに、みんなはおのおのブレザーを着ていて、伊豆奈ちゃんだけが白いワンピース。やっぱり、かわいいなあ。

「俺は、フィギュア撮影会をしたほうがいいと思う」

「伊豆奈は、演劇したい」

「あたしのコンサートが、一番よ」

園川部長、伊豆奈ちゃん、あずさちゃんがそれぞれ主張。発言の後、三人ともがいがみ合っているようにも見えた。

「残念ながら、それらは全て却下ですの」

「えー、じゃあ赤ちゃんカフェですか？」

「夜奈月さん、惜しいですの」

織香先生の言葉に、あたしはなんだかがっかりした。

「なによ、なんでもダメダメって、ダメ教師ね！」

「くっ、ひどいですわ」

織香先生は、あずさちゃんに反対されてとても悲しげな顔を見せた。そんな織香先生の顔を、園川部長がいつも胸にぶら下げたカメラでおさめた。

「あの……、そろそろ……」

「じゃあ、何をやる予定なのですか、織香先生？」

伊豆奈ちゃんが聞くと、立ち直りの早い織香先生はきりつとした顔を見せた。

「ズバリ、『数学カフェ』ですわ！」

「す、『数学カフェ』って？」

「この部屋は、なんとという部屋の名前かご存知ですか？」

「数学準備室、ですね」

「そうですね、大正解ですの。」

この『織香部』は数学準備室でやっているの、『数学カフェ』が当然ですの」

「内容は？」

園川部長が眼鏡を抑えて、いつの間にかフィギュアをいじっていた。

そのフィギュアは園川先輩のオリジナル、あたしで水着姿。うつつ、このまえ園川部長を励ます時に、写真を撮られたやつだよ。お。

フィギュアだけど胸のあたりを触られてあたしは、思わず身震いをして手を伸ばす。

「というわけで、『数学カフェ』で皆さんよろしいですか？」

「えっ、あっ、届かない」

園川部長は、あたしのフィギュアの胸をもろごく卑しく触りながら、あたしの手を器用にかわしていく。

うつつ、東雲君みたいにすばしっこいよ。あたしは、ムキになっていた。

「伊豆奈は、先生に賛成です」

「カフェなんて一般的よ、個性が足りないわ。やっぱり見た目よ、見た目！」

「あたしは……返して！返してよ！」

机に身を乗り出して、あたしは園川部長のフィギュアを奪いに手を伸ばす。

しかし、園川部長の回避力がとにかく高い。

立ち上がった一年上の部長は、体をそらしてあたしの手をかくぐる。

業を煮やしたあたしは、立ち上がって素早く園川部長の背後に走っていく。

「いいんじゃないか。織香先生は、こういっただけ聞かないからな」

「よし、とれた」

あたしはようやく園川部長から、水着バージョンの自分のフィギュアを取り返した。

「かわいそうな、あたし。かわいそうな、あたし」
園川部長が、あたしそつくり精巧に作られた非売品オリジナルフィギュアに慰めをいれた。

取られた園川部長は、表情を変えずに伊豆奈ちゃんのメイド服フィギュアをいじり始めていた。伊豆奈ちゃんは、見て見ぬふりしている。なんか、落ち着いているなあ。

「具体的な内容は、どうなんですか？」

「なんとか、数学とコラボしたカフェを作りますの。
ですが、具体的にどうするかは、これからしっかりとつめねばなりませんわ」

織香先生は、やや難しそうな顔を見せていた。

「皆さんには、メニューを考えてもらいますの。ほかにいろいろ企画を考えますわ」

「分かった、では早速考えるぞ」

部長の号令、そして部活が始まった。

数学カフェの中身を、議論するための話は夕方まで続いた。

夜、あたしは自分の寮に戻っていた。あたしの寮には、天使が住んでいるの。

お風呂であたしは、そんな天使を洗っていたんだよあ。

あたしのそばには、ピンク髪に赤ちゃんが洗面器で泡だらけになっていた。

「プリちゃん、お流しするね」

泡だらけのプリちゃんを、水で流す。

織香先生の娘、プリカこそ、プリちゃんがあたしの寮にいる。

そもそもこの寮では、織香先生とあたしと一緒に暮らしていた。

「にゅにゅ（お姉ちゃん、あのお兄ちゃんとはうまくいっているのか？）」「

「えっ、プリちゃん」

赤ちゃんのプリちゃんは、「ばぶばぶ」と「にゅにゅ」しかしやべらないけど、あたしは言葉が分かる。

「にゅにゅにゅ、ばぶばぶ（わらわは見ておるのじゃぞ、ママのそばで）」「

「うん、まだわかんないの」

お風呂であたしは、プリちゃんのピンクの髪を洗う手を止めた。

赤ちゃんと話ができる、あたしの『アビ』。

あたしはプリちゃんのような赤ちゃんや小さな子が好きだから、プリちゃんと会話ができるんだよ。

ちよっとプリちゃんの言葉が、古風なのは気になるけど。

あたしの言葉が分かるように、プリちゃんもあたしの言葉が分かるの。

「にゅにゅにゅにゅ（あの男は助けを求めているのじゃ、わらわにはわかるのじゃ）」「

「助け？なに、それ？」

「にゅにゅ、にゅーにゅ（あの男が、普通ではない事からじゃ）ばぶばぶ、にゅにゅ（だから、彼のことをよく知るといいのじゃぞ）」

「うん、わかったよお。あたし、頑張ってみるね」

プリちゃんの言葉、あたしは何となく心にとどめていた。

翌日、あたしは休み時間の教室にいた。

いつもの授業が終わった休み時間、あたしは同じクラスの彩芽と、もう一人の三人の女子があたしの机に集まっていたよ。

「椿ちゃん、もうすぐ文化祭だね」

「うん、そうだね」

ショートカットのさわやかな少女、姉瑠花ちゃん。

彼女とは、東城で知り合ったあたしの新しい親友。

あたしと同じクラスで、風紀委員をしているんだよ。

彩芽とも、知り合いで仲がいい姉瑠花ちゃん。

「彩芽、文化祭楽しみ」

「姉瑠花ちゃんは、クラスの出し物に顔を出すの？」

「参加したいんだけど、私は文化祭の取締りで忙しいですね」

彩芽はわくわく、姉瑠花ちゃんは凜と引き締まった顔を見せていた。

「椿ちゃんは、クラスと部活もあるんだっけ？」

「うん『織香部』があるよ」

その単語を出すと、彩芽はしかめ面を見せた。

彩芽は責任を感じているんだと思う、あたしが入ってしまったこの部活に。

あたしは、悲しそうな顔の彩芽の顔を見て、話題を変えることにした。

「彩芽のクラスは、お化け屋敷やるんだよね？」

「そうそう、彩芽はお化けだよ」

「彩芽みたいならお化けなら、あたしいくらでも、なでなでしちゃうよ」

「えへへっ、椿お姉ちゃん、だ〜いすき」

彩芽は、やっぱりあたしに甘えてきた。

あたしは頭をなでてあげると、自慢のツインテールがご機嫌に動いていた。

「私と椿ちゃんのところは、『茶屋』だっけ」

「うん、でもあたしは部活のほうもあるし、クラスのほうは参加できないかも。」

だから準備のほうにだけは、少し参加しようと思っているんだ」

「そっか、残念だね。椿ちゃんの振袖姿見たかったですね」

「うん、なんかそっちの服が、かわいくていいなあ。」

できれば、クラスのほうがいいんだけどね」

あたしは、頭に『織香部』の園川部長の顔が浮かんだ。

「おい、夜奈月。ちょっと来てくれないか」

そんな時、あたしを呼ぶ声がした。

そこに現れたのが、紺のブレザーを着た一人の男子生徒。

「あつ、なに？」

「ここの飾りつけ、どうしたらいいかな？」

「うん、そこはね、こうしたほうがいいと思うよお」

あたしは、男子生徒のメモ帳を見ながら話し込んでいた。

あたしのクラスにいた悠は、なんだか元氣なく窓を眺めていた。

その視線が、少しだけ気になっていた。

その日の『織香部』、あたしは買い出しに外に出ていた。

周りは、多くの雑貨が並び、賑やかでモノがあふれている店内。

日本というのはつくづく雑貨社会なのだと、あたしは思えてしまう。

この国は、家の中の雑貨が世界一多いんだって。

「あの、いきなりで……」

隣には困惑気味の悠の顔が、覗かせていた。紺のブレザーを着た悠とあたし。

しかし、あたしの目の前には、なぜか欲望に負けそうなおもちゃがいっぱいあった。

「あれ、これ、かわいいよね」

そこにはベビー用品、おもちゃコーナーがあった。

ガラガラから、押して歩くタイプ、さらにはクマのぬいぐるみまであった。

「ほら、このガラガラ。プリちゃんに買ってあげたら喜ぶだろうなあ」

「うん、そう……だね」

制服であたと悠は、買い出し中。

『織香部』の数学カフェに必要なものを二人で、買い出しに来ていた。

ここは、某ディスカウントショップ。

迷路のような店内と、ペンギンぽいマスコットキャラクターが、店の看板に堂々と描かれたスーパ―。

なんでもそろつ、激安殿堂、おまつりさわぎ、などと軽快なお店のテーマ曲まで流れていた。

「こっちのベビー服も、ちっちゃくってかわいいなあ。黒のふりふりなんだよあ」

「ついつい、脱線してベビー用品に、目がいつてしまうあたしだった。夜奈月さん」

「わ、わかってるよあ。ちゃんと数学カフェの備品、買いに来たん

だよね」

買い物かごを持った悠は、やっぱり困っていた。そこにはいろんな食品が入っていた。

「うん、でも夜奈月さんなら、あのままでも……」

「絶対ダメ！」

あたしは、かたくなに拒否をした。

——それは二時間前のこと。

『織香部』の数学準備室では、数学カフェの会議が行われていた。

「数独というパズルで、注文が変わる仕組みか」

「そうですね、何百通りかパズルを作って、それをカフェに来ていただいた方に、解いてもらいますの」

園川部長と、織香先生のやり取り。

目の前には、何枚かの数字が書かれたカードが置かれていた。

ちなみに数独とは、三かける三のブロックに区切られた九かける九の正方形から枠内に一から九までの数字を、縦横、ブロック内で重複しないように並べるパズルだって。

「初級編としまして、二かける三の六かける六の長方形ブロック。

その長方形ブロックを六つにしまして、数字を皆さんにパズルを解いてもらう仕組みにしますわ」

「なによ、これ難しいじゃない」

あずさちゃんが早速、数独を解いていた。いらいらした顔で、カードに向かっていた。

「あ、四が縦に来ているから、横には、入らない」

「悠、ここはね、こつちに四が来るんだよ」

一足早く解けたあたしは、悠に丁寧に教えてあげた。

あたしと悠、あずさちゃんと伊豆奈ちゃんの四人で、数独にチャレンジ。

最初に伊豆奈ちゃん、次にあたしが解けて、あずさちゃんと悠が悩んでいた。

「確かに、解ければ面白そうなパズルだ。だが、それだけで客は呼べるのか？」

園川先輩は、なぜかあずさ着ぐるみフィギュアを舐めるように触っていた。

「解いたら、覚えていなさいよ」などと、うねり声も聞こえるあずさちゃんは、やっぱり数独に夢中。

「数学の良さを、皆さんに知ってもらえれば何よりですが、確かにインパクトに確かに欠けますわね」

「織香先生、前の撮影会のことを覚えていますか？」

「えっ、ああ。園川君を元気づけるための撮影会でしたわね。」

わたくしの旦那がやっているネット通販会社のコスプレで、みなさんでコスプレを着ていましたわね」

「それです！」

園川先輩は、なぜか珍しく立ち上がった。

そして目の前のあずさ自作フィギュアを、前に突き出す。
オリジナル

「みんなコスプレで、接客してはどうでしょうか」

「えっ、な、なにを……」

「さすがは園川部長、素晴らしいアイデアですわ、ぜひそうしましょう。」

前のコスプレは、ちゃんとクリーニング屋に頼んでおいてあります

ので、いつでも試着できますわ」

「さすがは、織香先生。見事な仕事だ」

「当然ですわ、完璧な数学教師ですもの」

園川先輩と織香先生が、互いに妙に納得していた。

「じゃあ、長峰が着ぐるみ、広州がメイド服……」

「勝手に決めないでよ！」

あずさちゃんと伊豆奈ちゃんの声が、きれいにはもった。

「それでも広州さんのメイドさんは、かわいらしいですわ」

「はい先生、私着ます！」

「まあ、広州さんは優秀ですわ。」

子役でかわいい広州さんが着たら、さすがに目立ってしまいますわね」

「あたしだって、着るわよ」

あつという間にあずさちゃんも、織香先生に乘せられていた。

「じゃあ、夜奈月も水着で参加と……」

「それは、絶対だめっ！」

しかし、園川先輩の手には、いつの間にかあたしの水着バージョン
フィギュアが握られていた。一体いくつあるの。

「絶対、水着だけは着ないからね、あたしいやだから！」

「そうはおっしゃっても、夜奈月さんは大きいので、サイズは水着
ぐらいしか……」

「あるもん、何かちゃんとあるよお。大体、あたしの制服だって」

「ドンペリドンペリ」

すると、伊豆奈ちゃんが無表情で変な歌を歌い始めた。

「なにそれ？」

「ドンペリホームの歌。ドンペリホームならきつと大きいサイズあるんじゃないかな、コスプレ」

「あるの、かな？だってディスカウントスーパーだし……そういうのって専門店とか」

「行ってみる、価値はありますわ。」

早速ですが夜奈月さん、メニューの買い出しついで行ってくださいいな。

ついでに、皇君と一緒に行ってきてくださいな。夜奈月さん一人では不安ですわ」

織香先生は、そういつてあたしと悠を送り出したのだった――

再びドンペリホーム、ここは激安ジャングル。

伊豆奈ちゃんの歌っていた軽快なテーマ曲が流れる店内、夕暮れ時ということもあり主婦の姿が多く見えた。

あたしと悠は、互いにぎこちなく店内を五分ほど歩いていた。制服で歩くあたしたちは、難しい顔で周りを見回す。

「うーん、ここどこ？」

あたしは、迷っていた。そばにいた悠も、一緒に迷っていた。

「ここ、ベビー用品のところですね」

「うーん、あたしたち出られるのかなあ」

最初に見たベビー用品、おもちゃコーナーに戻ってしまった。本当に、迷うほどに店内は入り組んでいる。

赤ちゃん用玩具の中に、隠れた店内マップを見つけたあたし。

「悠、地図見てくるね。ここで待っててね」

悠の前ではしっかりした自分を演じたい、いつもリードしているあたしは店内マップに歩いていく。

『破壊の皇帝』の前では、逆にリードされたい複雑な心境があたしにはあった。

そんなあたしは、彼に好かれたいから。
気弱な彼を、何とかお世話したいから。

「えーと、ここは……こうして。あ、近いね。じゃあ、いこっか」
あたしが、振り返るとそこには悠はいなかった。

「あれ？悠、悠は？」

あたしは周囲を見回すけど、なぜか悠の姿はない。
消えた悠に、途端に不安になるあたしがいた。

（トイレにでも、行つたのかな？）

とりあえず、あたしは周りを見回しながら、パーティグッズのコーナーと悠の両方を探して歩いていた。

それから間もなくして、あたしはパーティグッズのコーナーにたどり着いた。

「あ、大きいサイズもあるね。わー、かわいいなあ」

そこにコスプレコーナーと、はつきり書かれていた。

並んでいる多くのコスプレ、大きいサイズコーナーもあるね。

一つコスプレを手にとって、パッケージを見ていた。

いろんな種類のコスプレが置いてあって、その一つ一つが、かわいいモデルの人が着た写真が並ぶ。

「って、そうじゃなく！早く、悠を探さないと……」

「椿には、これが似合う」

すると、あたしの後ろから手が伸びてきた。

太い手は『スーパードール警さんシリーズ』と書かれたコスプレのパッケージを持った。

あたしは、その手から顔のほうに視線を移すと、あっと驚いてしま

った。

「な、なんでいるの？轟？」

そこには、小太りで、ひげ顔で着物を着ていた轟の姿があった。地元の岐阜から、数百キロ離れた東京の、このドンペリホームにいたことに素直に驚かざるを得なかった。

「椿に、会いに岐阜から来た。椿に、告白するために来た」

「なんで、あたしは轟のことなんか……」

「椿、僕とつきあってくれませんか？もう、結婚をしてくれませんか？」

「高校生だよ、あたし。できるわけ、ないじゃない」

「僕は、違う。僕はもう、鵜匠だ。『西園寺家』十八代目当主だ」
轟の目力に、あたしはやや気おされていた。

「ボクは、あきらめられないんだ！

あの子
中学の時は、もっとバカなことをしたと後悔している。

だから、ボクは君が必要なんだ！」

「ごめんなさい、できません」

悩ましい言葉、そして中学せいじゅんの時に聞いたかった言葉。

でもあたしは、悠に対する気持ちがあつた。

徐々に強くなったこの気持ち、彼に対する思い。

轟も大人になったと思うけど、あたしは逆に子供になって、
わがまま
我が儘
になったのかもしれない。

「やっぱり我わがままが儘を通すけど、あたしには気になる人が……」

「彼のことですか？」

すると、轟がパーティグッズのコーナーから、少し先の化粧品コーナーを指さした。

轟の指さす方を見て、あたしは目を疑ってしまう。

「えっ、悠がなんで？」

そこには悠とあずさちゃん、二人とも制服を着て一緒に歩いていた。あたしの中に、途端に悔しさと悲しさがこみ上げ、体が震え、胸が苦しい。

「椿、君には……」

「悠、何やっているの？」

少し離れた化粧品コーナーに、無我夢中でダッシュしたあたしがいた。

そこには、確かに悠とあずさちゃんがいた。

はつきりと手をつないでいて、恋人のようにさえ見た。

そういえば、あずさちゃん有名じゃないアイドルだけど顔はかわいいから。

嬉しそうな顔のあずさちゃんと、いつも通り落ち込んだ下を向いている悠の顔。

「椿、なにやっているのよ！早く買い物をしなさいよ」

「なんで、あずさちゃんがここにいるの？部室でメニューを考えていたんじゃない……」

「何って、見てわかんないの？皇とデートに決まっているでしょ！馬鹿じゃないの」

あずさちゃんは、勝利者のような顔を見せていた。

「皇、そんなことより、こんな馬鹿、ほっというて行きましよ。こいつというより、あたしといたほうがずっと楽しいでしょ」

「悠、なんで……」

「あの、長峰さんに……」

「椿、考え直してくれ！ボクと一緒につきあってくれ」

すると、背後からあたしの右肩を強くつかんできた。

大きな手、太く低く切らした声は轟のもの。

轟の声に、どうしたらいいかわからないあたしは、目に涙を浮かべていた。

「あんななんか、皇はふさわしくないわ！

早く、行きましょう、あたしたちは忙しいのよ！」

「悠とは、キスしたんだよ！あたし」

「それがなんだっていうのよ！

あんな、ただ『破壊の皇帝』になすがままにされただけでしょ！」

あずさちゃんの、言うとおりであたしは返す言葉がなかった。

この時の悠は、ちよつと青白い顔をしていても、ただうつむいているだけ。

何も言ってくれない、何も答えてくれない。

「あなたは、何にも動いていない。彼が好きだという態度をちゃんと示していない。

そんなので、彼が好きだって言えるの？あたしのほうがよっぽど積極的よ！

ちゃんと皇のことを考えているし、あんなみたいに漠然としていないわ」

「うつつ」

あずさちゃんは言い切ったが、悠は突然あずさちゃんから手を放した。

そのまま、しゃがんで頭を押さえていた。うねり声と、震わせた体。あたしは心配そうな顔で、悠を見守っているしかない。

「悠、どうしたの？」

「椿、ちゃんと聞きなさい、あたしの話……」

「それどころじゃないの、あずさちゃん邪魔！」

あたしは、轟の手を振り切り、彼女を押しつけてうずくまる悠に駆け寄った。

彼が、最近変な頭痛で悩まされていた。その時に決まって起きるのが、

「クサイ台詞だ」

「『破壊の皇帝』、なんでまた……」

頭痛の後に現れるのが、悠のもう一つの人格、『破壊の皇帝』。

最近誰もいない教室で、悠は一人でこの姿になっていた。

初めて見たのが、グラウンド。告白された、あの場所。

織香先生に聞かされたあとドラマのスタジオや、病院で彼を見ていた。

破壊的性格の彼は、跳ねた銀髪と赤い目をしていた。

「あ、あいつが……あの時の」

あたしの後ろにいた轟は、前に出た。

右手を強く握り、険しい顔で悠を『破壊の皇帝』をにらみつける。

「お前が椿を奪ったんだな、返せ！」

「違うな、すでにお前は椿に捨てられたんだ。わからないのは、愚か者だ」

「やめなさい、轟。こいつに、かなうわけないわ！」

あずさちゃんが、叫んだ。あずさちゃんも、『破壊の皇帝』を知っている。

しかし、興奮した轟は止まらない。大きな体の轟は、あたしのほうを見ていた。

「こんな悪そうな男と、今すぐ別れさせてやる、僕の拳で。行くぞ、必殺『ホウホウ拳』！」

轟は素早いパンチを何発も悠に、『破壊の皇帝』に繰り出した。しかし、悠はあわててすることはなく、涼しい顔で次々と轟のパンチをかわしていく。

そのあと、口元に悪そうな笑みを浮かべていた。

「『破壊』、着物とシャツ」

すると、轟の着物が破壊され、白いシャツ姿に変わった轟。

意外とブヨブヨな、体の轟の肌が見えた。なんかものすごく、胸の毛が深いよお。

轟は悠に、パンチを繰り出すこともなく胸毛を両手で隠した。同時に、轟の顔が瞬間湯沸かし器の様に赤くなっていく。

「み、見るな！」

「轟、ボウボウ」

「確かに、ボウボウね」

あたしとあずさちゃんは、同意しても哑然としていた。

轟の羞恥心が言葉でさらに刺激されて、その場にうずくまる。

あっという間に、轟は戦意を失っていた。

「次は、自慢のブリーフにするか？ここで変態を、お前はさらすことになるのだぞ」

「や、やめろ！」

「悠、もうやめて！」

だけど、轟の前にあたしが現れた。両手を広げ、立ちふさがっていた。

「じゃあ椿、俺とキスをしろ」

「えっ、何？」

「夜奈月さん、ごめんなさい。ボクは、取り返しのつかないことを『破壊の皇帝』の顔に、なぜか気弱な悠の顔が見えた。」

その悠が、うつすらと語りかける。グラウンドと同じ、二つの悠が重なる。

「悠のこと、助けてあげる。やっぱり悠は、あたしの世話がないとダメなんだから」

思い出す、プリちゃんの言葉。普通じゃない、助けを求めている、そういうこと。

あたしは顔を硬直させ、赤くした。

赤くしても恥じらうことなく、前に、悠の目の前に進む。

彼と目と鼻の先の距離に近づいたとき、あたしは息を呑んだ。

『破壊の皇帝』の赤い目が、あたしを見下していた。それでもあたしはひるまない。

「迷わないよ、悠。あたしは悠のこと、好きだから」

あたしの言葉を聞いた瞬間、『破壊の皇帝』はにやりと笑っていた。はつきりと固まった、自分の気持ち。浮ついた心に、まったく迷いはない。

あたしの気持ちに、四月のあの言葉に答えなければならない。

逃げて、隠れてもいけない、悠はあたしに言ってくれたんだから。

「悠が好きで、気が強いところも、気が弱いところも、全部、大好き」

あたしは、『破壊の皇帝』を、悠を抱きしめた。

「夜奈月……さん……」

「だから、悠、愛してくれて、ありがとう」

あたしは、につこりと微笑んだ。

そのまま悠の頭をなでると、『破壊の皇帝』の跳ねた銀髪からいつものぼさぼさの髪へと変わっていく。黒くなった目、悠の目が涙でにじんでいた。

あたしの後ろでは、あずさちゃんと轟がそれを見ていた。

あたしは、人目を気にせず、悠をいつまでも抱きしめていた。

穏やかなあたしは、気弱な少年と『破壊の皇帝』と両方が好きになった瞬間だった。

最終話：破壊と少年（前書き）

——登場人物紹介

皇 悠：『織香部』部員、気弱な少年。本編主人公。

ぼさぼさの銀髪、気弱で人見知りな少年。

影の薄い、草食系男子。でも、彼は『破壊の皇帝』というもう一つの人格を持つ。

夜奈月 椿：『織香部』部員、背の高い女子高生。

背の高いポニーテール女子、かわいいものが好き。

悠の『破壊の皇帝』の正体を、知っている。

三野宮 織香：『織香部』顧問、既婚者

東城学園高等部で、数学を教えている。ショートボブで、色白な大人の女性。

完璧主義者で、理論的。授頼先生とは、実は大学の一年後輩。

園川 哲治：『織香部』部長、エロい男子。高三男子。

眼鏡をかけている痩せた男で、常にカメラを首にぶら下げている。好きなものは、フィギュア。自作フィギュアを作るのが得意。

長峰 あずさ：『織香部』部員、ツンデレ毒舌アイドル。

意外と可愛いロングヘアと、目立ちたがり屋の大きなリボンが特徴。

千影にとって、あこがれの存在。妹の胡桃と一緒に暮らしている。

広州 伊豆奈：『織香部』部員、子役、小四女子。

赤い髪でカールがかかっている、童顔で無邪気な人気天才子役。

好きな男子ができて、現在つき合っている。

福永 誠：赤いショートヘアで、筋肉質の男。
背は高く、スポーツ万能風な空気を持つ彼は、特殊な人間。

西園寺 轟：大きくて、太った男。

岐阜出身で、おとなし目。彼にはある野望があった。

星ヶ崎 彩芽：小さい女子高生、甘えん坊で、甘いものが好き。
夜奈月 椿とは長い親友。実は、あまり頭がよくない。

最終話：破壊と少年

そこは闇の中、ボクの闇の時間。

ボクの名は皇 悠、中学三年生。明るいはずの教室が、暗かった。今は授業中、それなのにボクのそばには三人の男がいた。

「なんだよ、その目。生意気なんだよ」

金髪に染めた男は、挑発的な目でボクの髪の毛をつかむ。

ボクの目の前では、先生が関わらないように普通に授業をしていた。ほこりまみれの黒襟制服は、ボロボロ。

それでもボクは、ただ彼らを見ていることしかできない。

「皇、楽しいか、ああつ？」

「俺たちのクラスは、最高だよな。クス皇」

周りから聞こえる嘲笑と、前で淡々と進む授業。

温度差がある異様な光景で、ボクはもがき苦しんでいた。

「汚ねえ男だな、皇。くせつ、きつたねえんだよ！」

すると、ボクのことをつかんでいた男が、ボクの顔をためらいもなくに殴った。

ボクの顔が激しくゆがみ、そのまま床にたたきつけられた。

「なんで、ボクがなぐられ……」

「親のいない汚い男、やっべ、さわっちった」

言い放った言葉に、ボクは悲しくなったが、嘆いている時間はない。ボロボロなボクを助けてくれる場所も、人もいない。

「なんだ、その反抗的な目は？」

「こいつ、クソ以下の価値のくせに抵抗するってのか？」

彼らを見ればボクは、モノのように投げ飛ばされて床にたたきつけられた。

それでも、前の教師は助けられない。まるで録音したラジオのようになんかと話す。

こちらの世界とは別世界のように注意もしない、空気のような存在。それもそのはず、その中年教師も顔にあざができていた。

（ボクはこんな世界、いやだ！）

誰も助けられない、何もしてくれない。

周りにいるボクの知り合い、仲間はみんないなくなった。

父親も、親しい教師も、母親も、数少ない友人も。

そして残ったのがボクを嫌う生徒と、ボクを相手にしない教師。

「相変わらず醜いな、皇」

「クソ野郎で、どうしようもないな」

踏みつけられたボクに、つばをつけられた。

ぼろぼろの顔に、さらに二発腹にけりを入れられた、苦しい。

「こいつ、たまに見せる目が生意気なんだよ」

「結局お前はクズなんだよ、ばか」

どうしようもなく、生きている価値もない本物のクズだ」

馬鹿にされていた、クズ扱いされていた、ボクはもう嫌だった。

（ボクは、なんでこんなところにいるんだろう？）

いつも思う疑問、親も死んでいるので学校に行く必要もないはず、ひっそりとどこかで暮らしていればいいはず。

なのになんで、ボクは生きているんだろう。

なんで、ボクはここに來るんだろう。

そう思ったとき、ボクは教室から闇の中にいた。

「お前は、自ら命を絶てばいいじゃないのか？それができないのか？」

「誰？君は？」

闇の中から聞こえた声。それは強く響いた声、ボクとは違う凜々しい声。

「『破壊の皇帝』、お前の中にいるペルソナだ」

「……随分怖い名前ですね」

「つけた人間が、ただのひねくれ者だ。」

名前など、所詮はどんな価値を持つかを認知できればいい」
その声だけで、顔の見えない相手とボクは会話していた。

「お前は、自殺をすればいいんだろ。」

生きているのがつらいなら、いつでも逃げられるだろう。

死という世界に永遠に逃げられれば、それでお前は勝者だ。

誰もお前を、追いかけることはできない」

「勇気がないんだ、死ぬ勇気だ。どうしようもないクズだよ、ボクは」

苦笑いしたボクは、得体のしれない自分の中のもう一人のものと会話をしていた。

やがて見せる姿は、自信たっぷりな口調とは違いばくにそっくりだった。

違いと言えば銀髪が跳ねたスパイシーヘアー、赤みのかかった前髪、それと威圧感のある雰囲気。

それ以外は、着ているものまですべて同じ。

皇帝なんて名ばかりだけど、ボクより自信たっぷりで時折笑みを浮かべていた。

「じゃあ、いつそ世界を破壊してみるか？」

「えっ、どうやって？」

「俺様に『破壊』できないものはない、さっそく試してやろう。手始めに、お前が嫌うコイツらを『破壊』してやろうか。

心臓か？首か？それとも全てか？こいつらだって人間だ、破壊すれば死ぬぞ」

そのおぞましい空気に、ボクはすくんだ。

そんな真っ暗闇に、映されたボクをいじめる男たちの顔。

こいつの言葉は本気だと、自信たっぷり語られた声にボクは震えていた。

「いや、ボクを殴っている手と足を、破壊してくれ」

「全く、お前は優しすぎるな。わかったよ、手足な」

そういつてボクの目の前の『破壊の皇帝』は右手を開いて上にあげた。

次の瞬間、激しくバリリッ、とガラスの割れる音がした。

それと同時に、ボクは現実に戻った。戻って目撃した姿に、ボクは声を失った。

あちこちから聞こえる、男どもの阿鼻叫喚。

怯え、震え、驚きといった感情が混じった声が聞こえてきた。

「な、なんじゃこりゃ！俺の手足が、ない！」

ボクを殴っていた男たちの手足は、本当になくなった。

床に這いつくばったボクは、恐る恐る立ち上がった。

男たちの胴体だけが、手足のないマネキンのように床に転がっていた。

鋭利な刃物で切られ跡もなく、ただ手と足の先端が、初めからなかったもののようになくなっていた。

「はははっ、そうだ、そうだ」

なんだかボクは、嬉しくなっていた。

唯一の中年教師は、明らかに驚いた顔を見せていた。
やや体が、小刻みに震える。

「な、何事じゃ？」

「俺の名は、『破壊の皇帝』。そして、ボクの名は皇 悠。世界を破壊するもの」

ボクの半身は、銀髪の男『破壊の皇帝』という男の顔が一瞬だけ映った。

転がる生徒の一人を踏みつけたボクは、高笑いをしていた。

「お前も、こうして、こうしてやる！ボクにやったように」

ボクは、動けないいじめっ子にけりを入れた。

反撃は、遅くまで続いた。それは今までの恨みを晴らすかのように。
こうしてボクは、世界を変える力を手に入れた。

その日は、夕方から雨が降っていた。

夜に、家に帰った。ボクの家は、古ぼけた築三十年以上のアパート。
壁のところどころにシミやひびがあり、一見廃墟のようにも見える
アパート。

何か月分もの家賃滞納のチラシが突っ込まれていて、電気もガスも
水道も止められていた。でも、ボクはただ唯一払い続けている義務
教育の中学に通っていた。

ボクは仕返ししている間も、ただむなしさしかなかった。

（あんなことをして、なんのためになるのだろう。

結局、ボクはどうしようもない世界にいるのに）

手足のない無抵抗のいじめっ子に、ボクからの仕返し。

いじめを黙ってみている、空気のように干渉を嫌う中年教師。

ボクは、今までいじめられた分、殴る蹴るを繰り返していた。

でも、すぐに飽きてしまう。ただ、空^{むな}しかった。
不意に与えられた圧倒的な力、その使い方が分からない。
いわば、赤ん坊にパソコンを与えるようなものだ。

「何の役にも立たない、生きていくのには……」

ワンルームの部屋、ぼろい廃墟のような部屋。

襖^{ふすま}から見えるのが、ハエがたかる一体の人の形をしたもの。

いや、それは人というよりミイラ化していた。壁に、もたれかかりうなだれていた。

ボクは、そのミイラのそばに蹴り跡のついた学ランのまま立っていた。

「帰ってきたよ、父さん」

半年前にひっそりと亡くなった、父。ボクが見つけたときは、もう死んでいた。

彼はもともと優秀な商社マンだったし、奥さんもいた。
でも離婚して、そこからおかしくなった。

中学に上がるころ、父の勤めた会社がなくなった。

無職の父は働く気も失せ、酒とギャンブルに明け暮れた
気に食わないと、すぐボクに暴力をふるうので、僕自身父にいい思
い出がない。

酒とショックから父は、そのまま病をこじらせてしまう。
お金がないので、治療費もないボクの家。

それでも父は、最後まで生活支援を拒み続け、医療も薬も受けるこ
となくそのままここで亡くなった。

半年前に亡くなった父を、結局埋葬するお金もないまま現在もここ

に放置していた。

この家の守り神のように、ボクの行く末を見守るかのようにただ座っていた。

「さあ、次は何を『破壊』する？」

唐突に闇が広がり、ボクの目の前に再びあの『破壊の皇帝』が現れた。

「ボクは、これからもずっと一人なんですか？」

「当たり前だ、お前に近づくものは俺が破壊する。」

俺の快楽は、『破壊』だからな。今まで漠然と、『破壊』というものが見えなかったが、ようやく見えるようになっただけ」

やっぱり危ない、怖い力、それが『破壊』。

ボクはその言葉に怖くて、震えが止まらない。

それを見た『破壊の皇帝』は、嬉しそうな顔をしていた。

「別にいいだろ、お前に近づくヤツはお前をみんな嫌っている。」

お前を殴る、蹴る、馬鹿にするカスどもだ」

「そうだね、そうだよ……」

「ならば、何をしても構わぬ。お前に対し、みなにそうされてきたように。」

世界には、『復讐』という言葉がある。

それでも、お前がこの生活を、この世界を嫌いなら、俺の力で、お前の心臓だつて破壊してやる」

「そうか、そうだね」

ボクは、ずっと覚悟を決めていた。

できない勇気を、ボクはおびえながら暮らすのは嫌だった。

父は死ぬ間際に、唯一残した言葉がある。

雨降る夜に、うつろな顔で酒を最後に飲んでいた父は、

「悠、何をしてもお前は構わねえが、誰にも迷惑をかける人間には

なるなよ」と。

その父のポリシー、プライド。ボクは、飲んだくれのダメ父から唯一教わった言葉。

何度、屋上から下を見ただろう。

結局、恐怖に打ち勝てず、飛び降りることができない。

何度、木に縄を巻きつけ輪を作っただろうか。

そこに、ただ恐怖があつて輪に入れない自分。

首をつるせば終わりなのに、飛び降りれば、この苦しみから解放されるのに。

でも、彼ならできる。誰にも迷惑をかけずに、この生という地獄から抜け出せる。

ボクは彼に語りかけようとしたその時、闇を切り裂くような声がした。

「いけませんわ!」

全く聞き覚えのない女性の声がした。

そして、ボクの周りの闇が晴れて広がる四畳半の部屋。

ボクの目の前にいた『破壊の皇帝』も、闇と同時に姿を消していた。代わりにボクの家いきなり現れたのが、一人の大人の女性。

見知らぬ顔、きれいで凛々しい顔立ち。

髪を後ろにまとめた女性は、紺のスーツを着ていてボクをまっすぐに見ていた。

「あなたは、皇 悠君ですわね?」

「えっ、はい。あなたは……」

「この家、鍵がかかっておりませんわ、不用心ですの。

大事なものは、ちゃんと鍵をかけておいてくださいな。

そうしないと、わずかな大事なものも、あなたの手からすり抜けるように失ってしまいますわ」

紺のスーツを着た大人の女性は、ドアのほうを指さして微笑んでいた。

美人な大人の色気ある女性の微笑み、ボクは顔を赤らめていた。

「あの……あなたは……」

「申し遅れましたわ、初めまして三野宮 織香と申しますの。

東城学園で、数学教師をしておりますわ」

「東城学園の、数学教師？」

さらに聞き覚えのない単語が出てきた、かまわず三野宮先生は続けていく。

「わたくしのことは『織香先生』と呼んでくださいな。

ただ、オリツチと呼んではいけませんわ」

「は、はあ」

「皇君、あなたの中にいる『破壊の皇帝』はどうですか？悪さしていませんか？」

「ちっ、そういうことか」

ボクの中から、ボクじゃなく悪態をつく声がした。もちろん、もう一人の彼の声で。

「しばらく、体を借りるぞ」

そのままボクは『破壊の皇帝』は、ボクの体に乗っ取った。

一気にボクの髪が跳ねて、目が赤くなる。

見下すような蔑んだ目^{さげす}で、数学教師の織香先生を見ていた。

「なんの用だ、東城の先こうが」

「まあ、汚いお言葉ですの。教師として、あなたに言葉づかいを指導しますわ」

「そいつは結構、さつさと本題を言え」

ボクの体を使い、『破壊の皇帝』は強気な声で威圧し、織香先生を

睨みつけていた。

それでも織香先生は、背筋よく立ったままボクの顔を見ていた。ちよっと悲しげな顔で、ボクを哀れむかのように。

「『破壊の皇帝』、あなたに用はありませんわ、皇君に用がありますの」

「皇 悠は、お前と話を……」

「皇君。あなたは、こんなところでひっそりと消えるべきではありませんわ。」

今、ここで命を絶つことを、あなたのお父様は喜ぶのでしょうか？
その言葉は、織香先生が表の『破壊の皇帝』に言ったんじゃない、中にいるボクに語りかけるもの。ミイラの父は、反応を示さない。腐敗しきり肌がボロボロの顔は、ただうつむいていた。

（この人とは、もう少し話したい。なんだかボクを、理解してくれるような気がする）

ボクは、念じると『破壊の皇帝』からいつの間にか自分の体を取り戻していた。

髪が元の跳ねない髪に戻り、目の色が黒くなっていた。覗かせる顔は、気弱なボクに。

「どういう……ことですか？」

「皇君、お願いがありますの。『破壊の皇帝』ではない、あなたへのお願い」

「な、なんですか？」

「東城学園に来て、私たちの聖戦ジ・ハートに加わってもらえますか？」

その言葉に、ボクは耳を疑った。

いきなり出てきた知らない単語に、ボクはどこか懐かしさを覚えた。

「そして、あなたは東城に来るべきですわ。」

あなたは今、わたくしに必要とされているのですわ。

人は、必要とされることに生きがいを感じますわ。

生きがいこそが、世界を変えますの」

織香先生の言葉に、ボクは考えていた。

（必要とされている、このクズな、生きる価値もなく、死ぬ勇気もないこのボクが？）

そんな抑え込まれた『破壊の皇帝』は口惜しく、今のボクを見ていることだろう。

その言葉に、ボクは下を向いたまま目だけを織香先生に向けた。

「いいですよ、こんなボクでよければ」

考えたら、ボクには何もないんだから。

親も、家も、食べ物も、服も、なにもないんだから。

失うものは、ボクの命だけ。それすらためらうボクは、本物の弱虫だ、クズだ。

ならば、行こう。この力があれば、いつでも命を絶てるのだから。

『最後の破壊』は、いつでもできるのだから。

中三のボクは、初めて高校にやってきていた。

秋晴れの高校のグラウンドを、織香先生と歩く。

ジ・ハード聖戦と聞いて、いろんなものを想像していた。

学校テロリスト、武器を持って生徒同士の殺し合い。

でも、そこはなんともまあ平和的だった。唯一ボロボロの（これでも一番きれいな）中学の制服を着ていたボクだが、歩くだけで注目を集めてしまう。

「体育祭？」

少し離れたところにある体育祭のゲートを見て、ボクは首をひねった。

周りには体操服姿の男女が、歩き回っていた。

「そうですわ、体育祭のスコアこそ、^{ジ・ハード}聖戦での勝者と敗者を決めるもの」

織香先生と歩いてたどり着いたスコアボードを見て、彼女は頷いていた。

スコアボード前には、多くの人が集まって注目していた。

現在、赤組と青組が九三十対九四十。

わずか十点差という僅差で、青組リードと表示されたスコアボード。

「あの、ボクは何をするんですか？」

「『破壊』か、待ってたぜ。さて、どいつだ？全部やるか？」

ボクの中で、『破壊の皇帝』の声が聞こえた。幸い彼は、まだ姿を現さないでいる。

どうやら彼はボクが抑えようと思えば抑えられる、体を乗っ取られることはない。

「『破壊』、つて殺人ですか？」

「そんなことはしませんわ。」

この聖戦には東城学園独自の規定がありますもの。^{ジ・ハード}

殺人は禁止、人の命を奪うことはあくまで犯罪行為ですわ」

さらには、直接相手に『アビ』を使うことは禁止事項ですの」

「『アビ』というのは？」

「簡単な話、特殊能力ですわ。あなたの行つ『破壊』も『アビ』ですの。」

好きや、得意、または熱中した事柄が、一般的な人間の限界を超えて使える特別な力、それが『アビ』ですわ」

その言葉を聞いて、ボクは二つの矛盾があった。

「でも、ボクは破壊なんて……好きでも、得意でも、熱中も……」

「皇君には、潜在的なものがあるのかもしれないせんわ。」

あなたの『アビ』は、わたくしが見たことない特別な人ですもの」

「それと、『アビ』を使うのは禁止では……」

「その通りですわ!」

織香先生が、一本指を立てて顔を近づけてきた。

大人の甘い、いい匂いがする。ボクはどきっとしてしまふ。

「だからこそ、あなたの『破壊』という間接的な『アビ』を使いますの。」

さて、ではここで問題ですわ」

織香先生は、紺のスーツの内ポケットからなぜか出てきたのが、小さなフラスコ。

中には透明の液体。下のほうに、沈殿する白い粉が見えた。

「食塩水から、酸素を抜き取ると何が残るでしょうか?」

「えゝ、えと……」

「ちつつちつ、ブーですわ。中学二年生の化学の問題ですわ。」

皇君は、ちゃんと勉強をやっているのですの?」

「ご、ごめんなさい」

そんなボクは、おびえるように謝った。

織香先生は、一つ咳払いをしてボクの謝る顔を見ていた。

「正解は、水素とナトリウムですの。燃烧の基本ですわ。」

人間の汗は食塩水、塩分と水分で構成されていますわ。

固体のナトリウムは、布に残りますわ。

なのであなたには、ナトリウムと酸素を破壊してもらいますの」

「すると、どうなるんですか?」

「残ったのは水素のみ。」

酸素をいきなり非科学的に失った水素は、単一で熱を帯びた空気に

触れると……」

「触れると？」

すると、織香先生がボクの目の前に右手こぶしを持って握って見せてきた。

「バン！」

拳を開いて、ボクは驚いてしまう。

あまり迫力はないのに、ボクは腰を抜き、その場にへたれこんでしまう。

「わっ！」

「つまり、爆発しますわ。わずかな汗でも、その爆発の力は大きなガラスのフラスコを飛ばす勢いがありますもの。俗にいう水素爆弾の原理ですわ、まあ恐ろしいですの」

「爆発させるんですか……やはり、物騒ですね」

「ですがその爆発も彼だけを、足止めさえすればよろしいのですわ」
織香先生は何となく余裕の笑みを浮かべて、一人の人物を指さした。

「次のリレー、彼が出ますわ。ターゲットは福永君、青組の彼ですの」

その人物は、赤い髪で青い鉢巻の男子生徒、一見ちよつと大きく顔立ちのいい凛々しい男子。

「彼は、何者ですか？」

「我が赤組のライバルで、青組のアンカーエース、福永 誠。」

彼は、普通の人間ではありませんの」

織香先生の言葉に、含みがあつた。苦めしい顔を見せていた。

「普通じゃない？」

「彼は人間を超越した、悪魔ですの」

「あ、悪魔って……」

真つ先に、黒い体に羽の生えた人間ばくないトカゲのような生き物

を、ボクは思い浮かべた。でも、羽もなければ黒くもない、ごくごく普通の日本人男子。

しいて言えば赤い髪の毛と、顔立ちがいいことぐらい。

「悪魔もいろいろあつて、彼は人間でありながら人としての道を捨て悪魔と契約した『半悪魔』ですの。

抜群の運動神経、アビを超えた魔法のような力、なにより一番すごいのは……」

「えっ？なんですか」

「彼は死にません。心臓が動いていませんから」

織香先生の言葉に、ボクはただ驚くだけ。

真偽は定かではないものの、確かに言われてみると人とちょっと違う空気を出していた。いじめっ子のような空気で、威圧するような嫌な空気。

「だから彼に、水素爆弾をぶつけても平気ですの。

とにかく次のリレー、絶対勝たないといけませんわ！

そうしなければ、わたくしの大事な娘が、奪われてしまうのですの！」

織香先生は、ボクに訴えるような顔で見てきた。

ボクはただならぬ彼女の気迫におされていた。

織香先生と歩いたボクは、テントにたどり着いた。赤組用のテントに入った織香先生は、一目散に黒いベビーカーへと駆け寄った。

そこには、一人の赤ん坊がかわいく眠っていた。

織香先生に遅れてたどり着いたボクは、その赤ん坊の顔を見た瞬間、なんだか不思議な感覚になった。

（あれ、おかしいな。ボク、この赤ん坊を……知っている）

その赤ん坊は、ピンクのちじれ髪で愛らしい寝顔をしていた。

黒系のベビー服に、大きなほつぺ。

赤ん坊としては髪以外あまり珍しいものではないけど、懐かしいというそんな気がしてならなかった。

「^{ジ・ハード}聖戦は、プリカ様を守る戦いですよ」

「これより、東城学園体育祭、最後の種目に入ります。

最後は、『男女混合リレー』です！」

体育祭の運営委員の生徒のアナウンスで、テントの後ろの生徒たちが歓声を上げた。

ボクが赤ん坊を見ていると、織香先生が隣にやってきた。

「^{ジ・ハード}聖戦は、絶対に負けられせんわ。あなたの力が必要ですよ」

それから間もなくして、赤と青組の代表の生徒、二人の女子がスタートラインに立つ。

赤と青のリレー、最後の種目ということすごーい熱気に包まれたグラウンド。

高校の体育祭で、ボクは初めて見る光景に食い入るように見ていた。もう間もなくやってくる役目に、ボクは顔をこわばらせていた。

「緊張しているのか？」

そんな刹那、闇が広がりすぐボクは、『破壊の皇帝』が声をかけてきた。

「本当にこんなことをして、いいのかな」

「やるのは俺だ、お前じゃない。人間というものは酷いものだ。力があるとわかれば近づいてきて利用する、なければずっとお前はずっと孤独。」

見向きも、相手にもされない。結局、あの織香という女は俺が目的なんだよ」

ボクは『破壊の皇帝』の言葉に、胸が痛い。

きれいな言葉を並べて誘った織香先生は、ボクじゃなく『破壊の皇帝』をアテにしているんだから。

「やるぞ、時間は待つてくれない」

再び、現実。グラウンドでは、リレーの熱戦が続いていた。

赤と青の拮抗したレースは進み、そして次はアンカー。

ターゲットのあの男、福永がスタートラインに向かう。

その福永に対して、黄色い声援が飛び交った。

「彼にバトンが渡るときが、勝負ですよ」

テントの中からボクに指示を出してきた織香先生。指をさした福永をボクは見ていた。

「やるか。こいつの存在を、守つてやらないとな」

ボクは、そして彼に体をゆだねた。

そこは『破壊の皇帝』の戦場、ボクの出る幕ではない。

そして、福永ともう一人の男子がバトンを待つ。

彼の背後から、赤と青の鉢巻をつけた女子が二人、走つて来た。

ほぼ横一線のリレー、間もなくバトンが渡る瞬間。彼は動いた。

「『破壊』、酸素とナトリウム」

織香先生の言うとおり、『破壊の皇帝』は、福永のはちまきを狙つて『破壊』を行った。

だが、福永の目が一瞬ボクとはつきり合う。

（えっ？）

その瞬間、ボクは身震いした。その福永は、バトンを受ける手を、素早く頭のほうに持つていく。

伸びた左手で、彼は躊躇なくはちまきを投げた。

後ろに投げたはちまきは、背後の赤いはちまきの女子に向かって飛

んでいた。

そのはちまきから間もなく酸素が抜け、水素が空気と混じり合う。そして、織香先生の理論通り、爆発した。

わずか、一瞬のことだった。大きな爆発音が、グラウンドに響く。そしてその爆発は、後ろを走った女子を巻き込んでいた。

「なんだ、一体」

「何が、どうなっているんだ？」

巻き込まれた女子は、爆音と立ち込める黒い煙。

やがて晴れた煙の中、そこには巻き込まれた女子が横になって倒れていた。

息絶え絶えの少女の顔を見て、ボクは顔を青ざめていた。

依頼を終えたボクは、織香先生を待っていることにした。

誰もいない静かな教室、窓から眺めるグラウンド。

人がいて、警察の姿が見えた。もちろん、あの事件の見聞をしていた。

そんな窓から、こけしの置いてある棚を通り過ぎ、ボクは空いている机に座った。

「この現象は、非科学的なことですわ。」

ですので、あなたに何のリスクもありませんの、心配いりませんわ。

あなたが、犯人になる確率は百パーセントありませんわ。

いざとなれば、わたくしが責任をとりますの」

織香先生が言う、グラウンドの実況見分が行われ終わる頃。

ボクは、あの場所に帰らなければならなかった。

中学生、受験生のボクは、ここにいてはいけない。

「不安か？」

不意に目の前がまっくらになり、例のごとく現れた『破壊の皇帝』。ボクは、どうしても気になっていた。

狙うべき相手を仕損じて、巻き込まれた少女。

水素爆発に巻き込まれ、いまだに起き上らない少女。

体操服の少女は、頭から血を流し、すすけた黒い顔で意識を失っていた。

遠巻きに、それが見えた。

「ボクは、なにか取り返しのつかないことをしたのではないか。

そもそも、ターゲットにする福永にすら、ボクはなんの興味も憎しみもない」

「俺は楽しかったぜ、俺様の能力に間違いはないということだ」

「本当に君は、壊すのが好きだね」

悪そうに笑うほぼボクと同じ姿の『破壊の皇帝』に、ボクは半ばあきれていた。

「少女は死んじゃうのかな？ボクのせいで」

「まあ、それは仕方ない。世界が決めた、運命だからな。それとも、助けたいのか？」

「世界は……残酷だね……」

『破壊の皇帝』にボクは、悲しくなる顔を見せるのが精いっぱい抵抗だった。

「それより、お前に客がいるぞ」

そして、ボクの周りの闇が晴れると、そこには赤い髪の男性が立っていた。

緑色のブレザーを着て、ズボンのポケットに手をつっ込み、顔立ちのしっかりした男。

その黒い目は、忘れられない強烈なインパクトを放つ。

「見慣れない顔だな、お前か？もしかして、あの『アビ』を使ったのは？」

そこには、間違いなくあの福永の姿があった。

いかにも好意的な感情ではなく、敵対的にとれる彼の雰囲気。

突然姿を現し、ボクはおののいた。冷たい目で、彼はボクを観察するように見ていた。

「な、なんですか？」

「違うか？いや、なんだこいつは？」

彼は、乱暴にボクの頭をつかんできた。

ボクは、いじめられたいつもの日常がシンクロした。

「えっ……」

「じつとしてもらおう、すぐ終わる」

張りつめるような威圧感を放ち、彼はボクの頭をつかんだまま立っていた。

わしづかみされた頭から、ボクは彼の顔を逆に見返すことができない。

ただ、ボクは怯えるしかなかった。

「なるほど、やっぱりお前か」

「え、なんで、ボクのことか……」

「俺に、わからないことはない。だが、お前には礼を言わねばならないな」

ボクは何のことかわからない。そのあと、誠は手をボクの頭から離して目を向けた。

「あいつを、天照 小百合を、殺してくれてありがとう」

「殺して……違う！」

「あいつは死んだ、お前の手で殺した。それが現実」

「なんで、そんなことを？」

「分からないのか？生身の人間が、あの水素爆弾を頭に受けて、生きられる人間^{ヤツ}がいるか？頭が消し飛ばなかったことは、幸いだ。でも脳はぐちゃぐちゃ。シヨック症状をおこし、人間的機能はマヒ。仮に生き返ったとしても、ヤツは植物人間。

よって小百合^{あいづ}は死んだ、ありがとう。お前の手で殺してくれて」

違う、と言おうとしたが、ボクの声が恐怖と悔しさでかすれた。恐怖と不安、罪と苦悩を背負ったボクはシヨックで震えていた。そんなボクを、うれしそうに眺める福永。

「お前には、織香のところ『G R O O』^{グロウ}はふさわしくない。

どうだ、俺と一緒に『M O B A』^{モバ}来ないか？」

「えっ……ボクは……」

「断らせてもらおう、彼はどちらの人間でもない！」

すると、教壇そばの棚に置いてあるこけしが、いきなりしゃべりだした。

女の顔をしたこけしから、男の声がした。

「園川 哲治か、織香の犬め」

「織香先生から言われてきたが、ここに現れたとはな、福永！」

次は、こけしはしゃべらなかった。

ボクの背中から聞こえた声、福永はドアのあたりを鋭い目つきで見ている。

でも、余裕の顔を見せていた。

一人は赤いショートカールの髪型で、小学生の女の子。ランドセルを背負っていた。

もう一人は、眼鏡をかけたボクと同じぐらいの年の男。紺のブレザーを着ていた。

「追ってきたようだな」

「警察の間をすり抜けるとは、たちの悪いことをする。福永 誠容
疑者。」

お前は、すでに犯人なんだよ」

眼鏡をかけた園川君は、福永と向き合っていた。

夕日が傾く教室、赤い光が入り込んで作られた四つの影。

そんなボクのそばには、小学生ぐらいの女の子がやってきた。

心配した顔を見せ、ボクを見てきた。

ボクは何がなんだかよくわからない、ただ立ち尽くしていた。

「心配しなくていいよ、伊豆奈が何とかしてあげるね、おにいちゃん」

ピンクのワンピースを着た女の子は、無邪気な笑顔を見せた。

彼女の笑顔には、なんだか不安がかき消されて心が落ち着いていく。
何より、かわいいその女の子の笑顔が、けなげにさえ見えて心が和んだ。

「逃げることはしない。ただ俺は、こいつに興味があつたから会いに来ただけだ」

「お前には少年院が似合う、犯人として」

すると園川君の言葉を聞いた福永は、下を向いて黙つたまま歩きだした。

机に座るボクのそばにすれ違う福永の足音だけが、夕ぐれの教室に響く。

ボクの近くに來た小学生の女の子は、睨むような顔を見せてボクのことを、小さな両手を広げてかばっていた。

「あの女は、決してお前の欲望を叶えてはくれない。
織香

俺たちのほうが、今のお前に限りなく近い」

その一言を言つた後、彼は眼鏡男子のいる方に歩いていった。

彼に付き添われて、二人は教室から出て行つた。
彼の足音が鳴り響く中、ボクは言われた言葉を考えていた。

あれから三か月、秋から冬になったこの時期。

ボクは、やっぱり同じ東城学園の教室にいた。

再びボクは東城学園の門をくぐった、この日は編入試験の日。
織香先生に勧められるまま、ボクは東城学園に入試をすることにした。

（結局、ボクには居場所はない）

あの少女は、やっぱり死んだ。

ボクは目の前で死を目撃して、いやボクの手で殺してしまい、それを自供することもできず、立証することもかなわず、ただ生きていた。

いつも通り、あのアパートと義務教育という名の監獄で。

犯人が捕まったから、東城学園の体育祭事件は、すでに過去のものになった三か月後。

あの事件をきっかけに、ボクは死に対してさらに臆病になっていた。
嫌いな世界、食べていくのも、生きていくのも、さらに地獄のような世界。

ボクをいじめる奴は、次から次へと現れていた。ボクを馬鹿にし、殴り、けなす。

学校そのものが、ボクの敵にさえ感じてしまう。ボクは、この世界に必要な存在。

それでも、ボクはあの事件以降、『破壊の皇帝』を使わない、そう心に決めていた。

『アビ』と言われるこの能力は、関係ない人を不幸にする。危険で、

怖いもの。

そんな僕は、ボロボロの制服のまま着て試験を受けていた。筆記試験を受け終え、次は面接。全国的に有名なこの学校の試験、難しい。何点取れているのかすごく不安。

東城学園は、もともと偏差値も高く、難関な私立学校という話も納得できた。

ボクは、問題がほとんどわからなかった。

そんなボクは、気落ちしている暇もなくもう一つの試験である面接を受けに、この教室に来ていた。

「失礼します」

中に入ると、ボクの前に椅子が置いてあった。

中央の机には一人の女性、ボクが知っているあの女性がいた。

「織香先生！」

「お久しぶりですわ、皇君。わたくしは、今日は試験官ですので、よろしくですの」

久しぶりに紺のスーツを着た織香先生は、にこやかな顔でボクを迎え入れた。

ボクは、目の前の空いている椅子に座った。

それと同時に車いすが、押される音が聞こえた。

そのあと、ボクの席のそばに車いすがやってきた。

「はい、よろしくおねがいします」

ボクの隣には車いすの少女、紫色の髪の少女は、可憐な声で澄んだ目をしていた。

車いすで華奢な体の割には、なぜか大きな胸、かわいらしい声と顔、髪の毛以外はかわいい部類の少女は、織香先生のほうを向いていた。

そんな織香先生は、なぜか両手にあの赤ん坊を抱きかかえていた。テントで見かけたあの赤ん坊、その赤ん坊が指をくわえてこっちのほうを見ていた。

「プリカですか？」

「プリカ様、ちゃんと覚えてくださいな」

しかし、織香先生の抱きかかえられたプリカ様は、ボクではなくもう一人の少女を凝視していた。少女からも、やはりいい匂いが漂う。この世界は、不思議だ。なぜ女性はボクと違ういい匂いなのだろう。

「では、改めまして。面接として自己紹介をお願いしますわ。まずはそちらの方」

抱きかかえたプリカ様を、隣になぜかおいてあったベビーカーに座らせた。

真剣な顔つきに変わった織香先生は、ペンを片手にボクたちのほうを見ていた。

織香先生に刺されて、ボクは思わず背中をビクつかせて立ち上がった。

「はいっ、ボクは皇 悠といいます。中学は帰宅部で、引つ込み思案です。」

あと、しゃべるのが苦手で、特技は、なくて……」

「皇君、答えがネガティブすぎますわ。」

まあ、皇君はちゃんと言うことを聞いてくれることが、わたくしは思いますの。

そういった長所を、ちゃんとお話になったほうがよろしいのですの。織香先生の正しい指摘に、ボクはただうなだれるだけだった。

座って、肩身を狭くして、やっぱり体が震えた。

「……ごめんなさい」

「では次は笹川さん、車いすのまままでお願いしますわ」

「はい」

かわいい声、ボクはどきつとしてしまふ。彼女は、深々と一礼した。

純粹なきれいな瞳で織香先生を映した彼女は、両手を広げていた。

「笹川 千影と申します、勉強は大好きです。特に国語と音楽が大好きです。」

東城学園は、私のような障害者でも勉強しやすい環境があるのが志望動機です。

あと、あこがれている方が東城学園で頑張っています。よろしくおねがいします」

「はい、よろしくお願いしますわ」

笹川さんは、優等生の風格で最後にまた深々と頭を下げていた。

ボクは、なんだか自分にさらに自信が持てなくなっていた。

「当試験は、お二人の適性を確認しますの。では、まず笹川さんからいきますわ」

「はい、わかりました」

織香先生は立ち上がり、そばのベビーカーからプリカ様を抱きかかえた。

そのまま、彼女のほうに歩いていく。

やっぱりプリカ様は、笹川さんをじーっと見ていた。

「笹川さんには、このプリカ様をあやしてもらいますの。」

名付けて『母性適性試験』ですの」

「にゅ〜?」

「はい、わかりました」

『母性適性試験』って、変な試験。まるで保育園の保母さんを決める試験みたい。

そっついながら織香先生から笹川さんは、両手で優しくプリカ様を抱きかかえた。

「よしよし、かわいいのです」

そんな疑問に、一切問題視することなく笹川さんは、プリカ様の頭をなでてあげた。

すると、プリカ様は嬉しそうな顔を見せて笹川さんの、胸にしがみついた。

よく見ると笹川さんの胸、かなり大きいな。

ちよつと、プリカ様がうらやましかったりする。

「にゅ」

「笹川さん、プリカ様をしばらくよろしくですの」

「ええ、わかりました」

笹川さんは、やはり保母さんのようにプリカ様をあやし続けていた。そのまま織香先生は、やや険しい顔に変わってボクのほうを見ていた。

「さあ、皇君。次はあなたの番ですの」

「えつ、ボクもプリカ様ですか？」

ボクは、なぜか自分の胸を見てしまう。

もちろん笹川さんのような、立派なおっぱいはない。

「違いますわ、プリカ様は男がだっこをすると泣いて、暴れて、大暴走ですわ。」

それより、彼はどうですの？」

織香先生の言葉、ボクはよくわからない。抽象的な言葉に、最初戸惑った。

「彼ですわ、あなたの中にいる彼」

「彼、ですか。最近、彼の力に頼らずに暮らしています。」

あんな力、ボクには怖くて使えません」

「では、質問です。中学時代、あなたは何か熱中できたこととかがありますの？」

「熱中ですか、……とくには」

「好きな食べ物は何？」

「ありません」

面接試験らしく織香先生は、ボクへの質問を次々としていく。

「では、これが最後です。あなたは、この世界が好きですか？」
いろんな質問の中で、この質問だけが漠然としていた。
何を言っているんだろ、ボクには分からない。

「えと、嫌い……です」

ボクの言葉を聞いて、織香先生は深くため息をついた。
隣で赤ちゃんをあやす笹川さんと、あまりにも対照的で異様な面接の風景。

「あなたは、世界を好きにならなければいけませんわ。
これは、あなたの世界ですから」

「どういふことですか？」

「決めましたわ、あなたは合格ですの。」

春からあなたは東城学園の生徒です。喜んでくださいな」

織香先生が、にこやかな顔を見せていた。

ボクはいきなりの合格宣言に、どちらかというと戸惑っていた。

「いいのですか？……ボクが合格で？」

「ただし、皇君」

「はい、なんですか？」

「あなたは、わたくしの『織香部』に入ってもらいますわ。よろしいですわね？」

織香先生の優しそうなショートボブの髪から突如、謎のあほ毛が出現。

ミミズのように現れたその毛に、ボクはびっくりして椅子ごと倒れそうになった。

「よろしいのですの？」

「は、はい……」

「『織香部』は、難しいことはしませんわ」

にこやかな顔を見せ、織香先生は笹川さんからプリカ様を抱きかかえていた。

そのプリカ様は、織香先生のゆらゆら揺れ動くあほ毛に気になっていたのか、小さい手を一生懸命伸ばしていた。

「具体的には、プリカ様のお世話と、わたくしの雑用ですね。それともう一つ」

「もう一つ？」

「皇君、あなたの世界を、変える部活ですの」

織香先生は、優しく微笑んでプリカ様を抱きかかえた。そのプリカ様は、満足そうな顔を見せていた。いつの間にか、プリカ様は笹川さんのブラジャーと思える黒いブラジャーを頭にかぶっていた。

あの面接からさらに半年、一年生のボクは東城学園高等部に入学していた。

そして、あの面接で言われた通りに『織香部』という部活に入っていた。

部室の数学準備室で、ボクの周りには何人もの部員がいた。テーブルをくつつけて、みんな資料を眺めていた。

「星ヶ崎か、あのロリっこだな」

「ロリをフィギュアにすることは、反対です、法律違反です」

そこには眼鏡をかけて紺色のブレザーを着た園川君、じゃなく園川先輩がいた。

体育祭で助けてくれた彼。だけど彼の前には、なぜか女の子のフィギュア。

前に置いて、名簿を眺めていた。

隣にるのが、小学生の広州さん。

小三の広州さんは、なんでも役者をやっているとか。

彼女が、冷やかな目で園川先輩を見ていると、不意にボクに白い紙を渡してきた。

「皇先輩、こっちの電話番号は、終わりました」

「あつ、はい」

広州さんから渡された名簿と電話番号を、ボクは受け取った。

本人は、ランドセルから台本を取り出した。

「すごいねえ、伊豆奈ちゃん」

「ああいうところは、誰に似たのかしら、全く」

ボクの右隣にるのが、同じクラスでポニーテールの夜奈月さんと、大きなリボンが特徴の長峰さん、二人の女子がいた。

二人ともボクと同じ深緑のブレザーを着て、ペンを走らせていた。

ドアのそばのホワイトボードには『本日の活動「名簿の照合作業」』と書かれていた。

書いた織香先生は、何でも今日も時間がなくプリカ様の世話をするためにボくら『織香部』に頼んでいた。

連絡網と、ボクたちのクラスの名簿を調べ上げて、プリントを作る作業を先生の代わりにしていた。

「でもでも、あずさちゃん。こういうの、生徒がやってもいいの？」

「いいんじゃない、あんたと皇は同じクラスでしょ。あたしのクラスは関係ないし」

「あ、そか。皇君もそういえば、同じクラスだね」

そういつて夜奈月さんは、隣のボクをちらりと見てきた。もしかして、ボクのことを知らなかったのかな。

確かに、夜奈月さんとは接点もないし。それに、ボクは人と関わりを持ちたくない。

中学まで、ボクはずっといじめられてきて人が怖かった。関わらなければ、ボクはいじめられることもない。

「お前はクズだ、生きる価値もない」

いじめられていた時の言葉がよみがえって、ボクは震えていた。

その時、ボクは園川部長にじーつと見られていることに気づいた。

ボクは、仕事をしないといけない。そのために、『織香部』に入っただんだから。

ボクを、少なくとも必要としてくれる織香先生のために、再びペンを走らせることにした。

「あたしのほうも、終わりね。全く織香のやつ、人使いが悪いわよ。あんなにわがままで、よく嫁の貰い手がいたものね。とんだ奇特な方もいたもんね」

ふんつ、と鼻を鳴らす長峰さん。だけど、ボクは長峰さんの背後から何か殺気のようなものを感じた。

それは狭い数学準備室を、さらに狭くする白いカーテンの奥から。明らかに、何かがきらりと光った。

「あ、あの……その……」

「なによ、皇？ちゃんと話さない」

「う、うし……」

「うしつて、何？　そういえば焼肉が食べたいわね。芸能人はやつぱ焼肉よ」

長峰さんは怒っているけど、その怒り顔が次の一瞬にして引きつった。

突然、風を切り裂くように飛んできたのが三角定規。

白いカーテンから、ブーメランのように飛んできた。

「な、なにっ！」

長峰さんの後頭部をかすめ、そのまま近くの壁に突き刺さった。めりこむ小さな三角定規が、飛んだほうをみんなが注目していた。

「わたくしをそれでも、大事にしてくださいる方がいますわ」

織香先生のダーク属性の声だけが、白いカーテンから聞こえた。

そのあと、ゆっくり姿を現した。

プリカ様を抱きかかえた織香先生は、いつも通り優しそうな顔を見せていた。

けど、あほ毛だけはなぜか立っていた。まるで生き物であるかのよう。

それを、プリカ様がつかんでいた。

しかも、織香先生は下着姿でブラすらしていない。

白いきれいな肌がはつきり見え、ボクは赤くなってしまう。

かろつじて胸の大事なあたりはプリカ様の頭が、あつて見えないけど。

「ここは、数学準備室。今度は大きな三角定規を投げますわ」

「は、反則よ！　織香、あたしを殺す気？」

「わたくしは、旦那を馬鹿にするものが許せませんわ。大丈夫ですわ、三角定規が頭に刺さったところで非科学的に死ぬことだけはありませんの。」

わたくしの計算は、間違いありませんわ」

「にゅにゅ？」

「まあ、プリカ様。わかりましたわ。おっぱいをさしあげますの」
険しい顔を見せた織香先生は、瞬時にママの顔に戻り、白いカーテンの中にプリカ様を抱きかかえて入っていく。

「なによ、あれ！」

「織香先生は、怒らせると意外と怖いんだよお。」

この前は、教師用の大きなコンパスを投げてきたし」

夜奈月さんとボクの間壁、確かに野球のボール大の不自然な穴が開いていた。

「そうね、気をつけるわ。椿、それより終わった？」

「もう終わっているよお、あずさちゃん」

「なんで終わっているのよ、椿」

「それはね……」

長峰さんは、夜奈月さんのほうに突っかかっている。

でも、夜奈月さんは白いカーテンのほうを見ていた。

今にも飛び出そうそんな夜奈月さんは、両手を広げた。

「プリちゃんと、遊びたいからだよお」

「あつ、そう。それはよかったわ。」

椿、あんた終わったんだから、あたしの手伝いなさいよ、あんたのクラスでしょ」

「えー、やだ。そんなこと言っていたら、あずさちゃんも嫁の貰い手ないよお」

夜奈月さんは、白いカーテンのほうに顔をつっ込んでいく。

長峰さんは、なぜかふてくされていた。

「椿、あたしは忙しいのよ。さつさと……」

そういいながら、長峰さんとボクは目が合ってしまった。
すると長峰さんは、なんだか悪い笑みを浮かべた。

「ああ、いるじゃないの、こんなところに適任が」

なんだか、イヤな予感がした。

長峰さんは、嬉しそうに甘える顔でボクのほうにすり寄ってきた。
ボクは逃げようとしたけれど、長峰さんがすぐに迫っていた。

結局、ボクの仕事は『織香部』の時間まで終わらなかった。今も変わらず仕事の継続。

（長峰さん、ひどいよ）

心の中で、そう恨みつつもボクは断れない自分を呪っていた。

数学準備室には、ボクがたった一人残っていた。夕日傾く五時に終わる『織香部』。

そんなボクの机の前には、大量の資料があった。
自分の仕事はもちろん、追加の仕事まであった。

（夜七時までには、終わらないなあ）

防犯の関係もあって、学校が閉まるのは夜七時まで。
それまでに終わらないと、風紀委員が見回りに来る。

顧問の織香先生や、ほかのみんなはすでに帰っていた。

園川先輩は、フィギュア作りをするって言っていたし、長峰さんと
広州さんは、同じドラマの仕事があるみたい。ちなみに長峰さんは、
アイドル。

広州さん言うには、ローカルアイドルで、レア仕様らしい。

夜奈月さんは、まあ普通に帰ったと思う。

家に帰っても、結局一人ぼっちのボクは黙ってこなすしかなかった。

静かな数学準備室、ただボクが仕事をするペンの音だけが響いていた。

そんな数学準備室のドアが、突如開いた。

仕事に集中していたボクは、急に開いたドア。

気弱なボクは、その音だけでびっくりした。

「もうっ、織香先生も自分で取りに行つてほしいよあ」

女の声と同時に数学準備室に現れたのが、夜奈月さんだった。

ポニーテールをなびかせ、ボクに見向きもせず白いカーテンの中に入っていく。

そのあと、夜奈月さんはなぜか織香先生の赤ちゃんの持ち物でもあるカラフルなベビー服を持って出てきた。

「かわいいなあ、このベビー服」

なんだか目を、とろんとさせて歩く夜奈月さん。

ほほをすりすりさせると、不意にボクの視線に気づいたか慌てて平静を装っていた。

「あつ、皇君？」

「うん……」

気まずい空気が流れた、そんな夜奈月さんがボクのそばに来た。

「あれ、まだ終わっていなかったの？」

「うん……」

「終わりそう？」

「大丈夫……です」

「大丈夫じゃないよ、これ全部、残ってるんですよ！」

夜奈月さんに言われて、ボクは黙り込んでしまう。

そのまま彼女は、黒いベビー服を机に置いた。

「ちょっと待ってね、今電話するから」

そのままブレザーのポケットから取り出した、携帯電話をかけていた。

「あ、織香先生。ごめん、今日ちょっと帰り遅れるから」

どうやら電話の相手は、織香先生みたい。

うんうん、と頷いてそのまま彼女は電話を切った。

ボクは夜奈月さんのほうを見ながらも、自分の仕事に集中していた。すると、電話の終わった彼女から、

「皇君、じゃあ今日は頑張ろう」

「えっ、あの？」

「二人なら、間に合うから、ね」

戸惑うボクのそばに、夜奈月さんはにやかな顔で隣の席に座った。ボクは、彼女の笑顔と仕草にドキドキしていた。

（なんか夜奈月さん、すごくかわいい）

そのまま夜奈月さんは、ボクの名簿を手に取り書類を片手にペンを持っていた。

「早く帰ないと、姉瑠花ちゃんがおそってくるからね」

夜奈月さんの声に、ボクは無言で何度も頷いていた。

それと同時に、ボクは一気に胸が熱くなった。

（ドキドキする、なんだろう？）

それは中学までにいじめられ、殴られておびえていた時の感情と違う。

「どうしたの、皇君？」

不思議そうに、夜奈月さんがボクの顔を覗きこんだ。

さらにボクは、顔を赤らめてしまう。

かわいい夜奈月さんの顔を見てしまうと、さらに心臓の鼓動が上がる。

「はやくやろ、あたしも大好きなプリちゃんが待っているから」
「う、うん」

ボクは今の状況を、いろいろな角度から自分のことを分析する。
（怖い？違う、苦しい？違う、さびしい？違う、じゃあそれは……）
そして導き出した、一つの単語。ボクはその状況を飲み込んだ。
（これが、好きなんだ……）

彼女のことを、好きという初めての感情を感じたことをボクは初めて知った。

あの日から、ボクの人生は変わった。それからあつという間に一年以上が過ぎた。

いろんなことが起きた、夜奈月さんにあの場所で告白もした。

広州さんの告白も、手伝った。

長峰さんの親友も、助け出しに行った。

夜奈月さんに、ボクはキスをしてしまった。

楽しい思い出も、あつという間に過ぎていった。

中学までの絶望した人生から、一転した世界。

ボクは、いつの間にかこの世界が好きになっていた。

高校二年になったボクは、東城学園のビックイベントの一つ『東城祭』の日を迎えていた。打ちあがる花火、開始を知らせるあいさつ。

ボクは数学準備室にいた。

ボクの所属する『織香部』は、織香先生考案の『数学カフェ』が『東城祭』の出し物。

四組限定（狭いから）の、数独を使ったカフェを営業していた。そんなわけで数学準備室の中は、いつも以上に人口密度が高く、ちょっと蒸し暑い。

唯一の予約席以外は、満席と盛況だった証でもあった。

「伊豆奈ちゃん、かわいいなあ」

夜奈月さんの声、カフェ仕様に飾りつけられた数学準備室、入口にいたレジ係の広州さんの頭をなでていた。

「椿、私は女王陛下、伊豆奈様ですわ。」

私に踏みつけられなくてはさっさと働きなさい、馬車馬のごとくビシビシしごきますわよ」

などと言いながら、猫耳ピンクメイド服を着た広州さんが、ビールの宣伝のようなレースクイーンの夜奈月さんになぜか持っていた鞭で打ちならす。

「やー、伊豆奈ちゃん、こわーい。でも、かわいいなあ」

「とつとと行く、二番テーブル」

「はーい、女王伊豆奈様」

などと言いながら夜奈月さんは、銀色のお盆に数独カードを乗せて二番テーブルに向かっていく。

二人が、コスプレをしているということは、ボクも当然コスプレをしていた。

そんなボクは、テーブルについて接客をしていた。
カンフー映画さながらの、真っ黄色な全身タイツを着て。

どうやら数独よりも、お客さんはコスプレ喫茶だと思っているらしい。

なのでメニューを見ると、数独のカードしかないのでびっくりする客が多かった。

「では、このカードの……二重□……」

今ボクが、男の生徒の接客をしていた。人前が苦手のボクは、完全

にあがっていた。

人見知りなボクは、どう見ても声がたどたどしい。

あがったボクを、男の生徒は不思議な目で見ていた。

でも、彼らはなんだか中学のいじめた連中に見えてしまう。

昔、ボクをクズ呼ばわりした人に。

「あの、どうするんですか？」

ボクの客が、明らかに困っていた。

でも、ボクは声が出ない、頭の中は動いているのに。

（どうしよう、どうしよう）

心の中で、次の言葉を探していた。でも見つからない。

「数独は、縦横そしてブロックの中に数字が重複しないように、一から六までの数字を並べるものです。二重の□が四つありまして、四つすべて埋まったら、裏に書かれているメニューをお持ちしますね」

そばにいた夜奈月さんが、ボクに助け船を出してくれた。

なんでも夜奈月さんはできるね、運動神経もいいし、頭もいい、おまけにかわいいし、性格もいい。

なぜか小さい子が好き、（園川先輩いわくロリコン属性）だけど、ボクが好きになった人、初キスをした人。

そんな彼女は、ボクに文化祭の準備の買い出しの日に初めて気持ち伝えてくれた。

一年前のボクの告白を彼女が、彼女の、彼女なりの言葉で返してくれたこと。

そんな彼女の丁寧な接客の様を見て、ボクはドキドキしていた。

「悠、こんな感じね」

「うん、ありがとう」

そんな彼女のおかげでボクは変わった、変わることができた。
だからボクも、ちょっとだけ感情を崩そう。

はにかんだ笑顔で、彼女に応えた。

すると、ボクのタイツをお尻のあたりから強く引つ張る姿があった。

「俺は椿のことは、あきらめない。

お前が何をしようがな、俺と椿の時間のほうがずっと長いんだ」

そこにいたのが、太った男子生徒。

ひげが生え、貫録のある老け顔、険しい目でボクを見ていた。

西園寺君、夜奈月さんの地元の幼馴染み。

ちよつと強面で睨む顔にボクは、戸惑っていた。

「……はい」

脅しに弱いボクは、弱気な態度でうつむいてしまう。

「轟、ダメだよ。悠をいじめたら、あたしが許さないから！」

そういつて夜奈月さんは、西園寺君とボクの間に割って入った。

また、助けてくれたんだ。

でもボクは、彼女を助けていないのに。助ける力もないのに。

夜奈月さんが言うと、西園寺君はバツの悪そうな顔でボクを見ながら数独カードに目を落とした。

「戻ったわよ、こら、離しなさい！」

声と同時に、数学準備室には長峰さんが姿を見せた。

彼女は、なぜか着ぐるみを着ていた。

子供向け番組、ウラドラマンの怪獣メガロドン、見た目は二足歩行する赤いサメの姿、口から顔を出していた。

「メガロドン、ウラドラマンの仇！」

「メガロドン、これでも喰らえっ！」

子供たちにすっかりなつかれ？た長峰さんは子供のキックを食らい、

その場に倒れこんだ。

「や、やられた〜」

やられっぱりは見事、長峰さんに勝利した子供たちはわーい、と喜びそのまま廊下を駆けていく。

「あの子たち、かわいいね」

「ふざけんじゃないわよ！」

なんでトップアイドルのこのあたしが、子供に怪獣の相手をしないといけないのよ」

「性格凶悪だから、お似合いよ、うふふ」

メイド服の女王様、広州さんが言うとき長峰さんは広州さんに詰め寄ってきた。

サメの鼻のあたりが、広州さんの猫耳にしっかりとあたっていた。

「あんた、今はかわいって言われているけど、裏ではかわい子ぶった勘違いヤロウって言われているのよ」

「わがままローカルメガロドン。」

この伊豆奈様になうはずありませんわ、おーほっほっほ」

メイドとサメが、いがみ合っていた。

ボクはまずいと思いながらも、ただ見ているだけでしかない。

「ちょっと、二人とも。今日はお祭りだし、ね、ね」

夜奈月さんが、やっぱり二人の間に割って入った。

二人は、お客のほうを見るとすぐに笑顔を見せた。

怒りをそれぞれこちなく抑え、問題はすぐに解決した。

「そんなことより、フィギュア部長は？戻っていない」

長峰さんが、ここに来たってことは交代の時間か。

時計の針が、昼の二時を指していた。

部長の園川先輩と長峰さん、ボクと夜奈月さん。
二人一組で、この数独力フェの当番になっていた。

ちなみに広州さんは、レジ係。

小学生で、本来お客さんだけど、彼女が進んでレジをしてくれた。
それにしても、交代要員の部長、園川先輩の姿がまだこの部屋には
なかった。

「おお……、俺のフィギュア。椿マークスリー、おいおい」

それからほどなくして、泣きそうな声で現れた園川先輩がいた。
彼はパイロットスーツを着て、眼鏡もかけて、賢そうなパイロット
のような雰囲気。

でも、顔だけは泣きそうだ。なぜかフィギュアを持って、登場した
泣き虫パイロット。

「びーびー、泣くんじゃないわよ。」

さあ、仕事よ。仕事は、全てを忘れさせてくれるわ。

悲しいことも、つらいことも、あんたは一応ボスなんだから」

などと長峰さんが、園川先輩を引いて部屋の中に入った。

「何があつたの？」

「椿、聞かないほうがいいわよ。椿マークスリーのことだから」

「そうだね、聞かないほうがいいかも」

すると、園川部長は、なぜか夜奈月さんのほうに近づいて、這いず
りまわりなめまわすように見てきた。

「あ、あの……」

「レースクイーン椿か、こいつは新たな上物だ」

すると、どこからともなくカメラを取り出し、素早くカメラを構え
た。部長の構えるカメラに夜奈月さんが、戸惑っていたけど、ボク
もなんだか自分のことのように戸惑っていた。

「そして、メガロドンに、カメラを奪われました。残念だったわね」
「おい、返せよ。椿マークフオーを作る」

「馬鹿なこと言わないで、少しは部長らしくしなさい！
そんなんだから、妹に逃げられるのよ」

長峰さんの突っ込みに、園川部長が口を真一文字にした。
それは、園川部長のキラード。

「じゃあ、あずさちゃん、部長。二人とも、伊豆奈ちゃんをおねがいします」

「まっかせなさいよ、スーパーアイドル、長峰 あずさが来れば大行列間違いないよ！」

「メガロドンを、やっつける子供たちの大行列ね。いい気味ですわ、ほーほっほっ」

「かわいこぶってんじゃないわよ、賞味期限切れの子役メイド！」
長峰さんと、広州さんはやっぱりがみ合っていた。

それをなぜか、頑張ってカメラに抑えようとする部長。

カメラを撮るのは、自作フィギュアの資料にするためだって。

「じゃあ、悠。いこ、あたしたちの文化祭も、スタートだから」

夜奈月さんは、そういいボクの手を引いてくれた。

しなやかな彼女の手にひかれ、ボクは数学準備室を出ようとしたとき、

「皇、しっかりやんなさいよ。あんた男でしょ」

長峰さんが、ボクになぜか声をかけてきた。

ボクは、その言葉になんだか勇気をもらえた気がした。

「悠、せっかくだからいろいろ見に行こうよ」

ボクは、夜奈月さんに手を引かれて進んでいた。楽しい世界は、まだ続いていた。

廊下を歩いていったボクと夜奈月さん。なんだかドキドキとしていた。いつの間にか制服に着替えたボクたちは、文化祭のクラスの出し物を見て歩いていた。

「賑やか、だね」

「そうだね、みんな青春真っただ中だね。ほら、あれ、かわいいなあ」

そういつて夜奈月さんが見つけたのが、なぜかお化け屋敷。

和式の古ぼけたお寺の絵だけで、ボクは怯えた。

なんか怖そう、生徒が作ったものであってもビビリ症のボクは震えていた。

そのお化け屋敷の前で、白い布をかぶった小さな女の子が廊下をうるついていた。

「お化けだよ」

「よしよし、お化けちゃん」

夜奈月さんは、ためらいも、怯えることもなく、小さなお化けの頭をなでていた。

その白い布のお化けもどきは、確かに入り口と比べると迫力が感じられなかった。

すると、お化けは顔を向けて脅かすというより犬のように夜奈月さんになついていた。

「よ、夜奈月さん。お化けが、なついていますよ」

「ああ、これ。彩芽のクラスの出し物だよ。ウチの隣のクラスの、ね」

あつ、そういえばそうだった。『織香部』の出し物ばかりでほかのクラスのことを気にしていなかったな。

すると、小さいお化けはゆつくりと白い布を取り上げた。

そこから現れたのが、ツインテールの女の子。

広州さん並みの、童顔だけどブレザーを着ているから東城の生徒。しかし、背がすごく小さい。

「えへへっ、椿お姉ちゃん。」

そこからは、椿お姉ちゃんが大好きな彩芽が出てきました」

「彩芽だね、かわいいよお」

いつの間にか、夜奈月さんに抱きついてすりすり。

彼女は、夜奈月さんの親友の星ヶ崎 彩芽さん。

しかし、星ヶ崎さんはちらりと、ボクに対して悲しい顔を向け、すぐに夜奈月さんに笑顔を振りまく。

「お化け屋敷は、人、入ってる？」

「うん、いっぱい来たよ」

「よかったね、彩芽。じゃあ、あたしたちもいつてみようか」

「えっ……ちよ、ちよっと」

怖がりのボクは、断ろうとしたけど断れそうもない。

星ヶ崎さんに見送られて、夜奈月さん手を引かれて一緒に中に入っていた。

そんな時、ボクは最近立ち読みしたある雑誌のことを思い出した。

「お化け屋敷は、男が女をリードするとデートに適している。お化け屋敷のように、怖かったりドキドキしたりする場所には、逆に恋のようなドキドキと錯覚をする。

それが、吊り橋状態である。そうすることで恋愛がうまくいくことが多い」

お化け屋敷は、ボクと夜奈月さんの距離を近づける。

そう、ボクにとってはまたとないチャンス。

（ボクは、変わったんだ。新しい皇 悠を見せるんだ）
ボクは、気合を一つ入れて顔をたたいた。そんな決意でお化け屋敷
へと入っていく。

「ひーっ、ダメダメダメダメ、メダメダメダメだ！」

ボクは腰を抜かしていた、お化けに怯えたボクはクズだ。
本で見た、シユチュレーションと真逆の展開。

男が、女を守ってお化け屋敷で株を上げるはずが、やっぱり腰を抜
かしてしまった。

そこは真っ暗、自分のいつもいる教室が暗くなることに違和感を覚
えていた。

それ以上に、単純にボクは震えていた。足がすくんで前に進まない。
何も見えない、真っ暗闇。

黒いダンボールで隠された部屋、電気も消されて、お墓のようなも
のも見えた。

「悠、どうしたの？」

ボクの前にいた夜奈月さんが、声をかけてきた。
でも彼女までの距離が、ものすごく遠くに感じた。

そのボクは、恐怖で前に進めないでいた。足が、すくんで震えてい
た。

「ほら、悠。行くよ。それとも怖いのか？」

「怖く……ないよ」

でも、声はしっかり震えていた。強がりには、いともたやすく簡単に
看破された。

「しょうがないな、じゃあ椿お姉ちゃんが、手を引いてあげる」

そういつて前から手が、ボクの手をつかんできた。
そのまま、ボクは体ごと引っ張られた。

墓地をモチーフにしたエリアを抜け、見えたのが小さな小屋。
火の玉お化けに驚き、ろくろ首に腰を抜かし、そして骸骨に気を失
いそうになるボク。

「彩芽のクラスも、大がかりだね」

そこには古ぼけた小屋の絵が描かれ、入り口が見えた。イラストの
絵だけど、ボクを怖がらせるには十分だ。

さらに、ボクはものすごく疲れていた。

怖がって、騒いで震えて、夜奈月さんに手まで引っ張られて。

「そ、そうだね」

「悠、火の玉で腰を抜かしちゃだめだよ」

「こ、怖くない……ですから」

上ずった声のボクは、何とか女の子の前で強がろうとした。

でも、夜奈月さんがボクの震える体を引っ張る。

なんか、ボクはめっちゃくちゃダメな男にしか見えないな。

（ちゃんとしないと）

ボクは夜奈月さんに、なすがままの自分にサヨナラしないといけな
い。

「こ、こ……ち」

「どうしたの、悠？」

「ボクは、あの……」

「もう、悠。入るよ、後ろつかえてるし」

夜奈月さんに、結局ボクは怯えるまま引っ張られてしまった。

そのまま、前の小屋の中に入っていく。

「皇、お前はおびえていたほうがいいかもしれないな」

と目の前の闇が広がり、ボクの目の前に抑え込んだ彼が、『破壊の皇帝』が出てきた。

「お前は、なんで出てきた？」

ボクが、いつも意図的に彼を抑え込んでいた。でも、ボクの精神の隙間に彼は現れるのだ。幸い、『破壊』は彼の自由にはさせていない。

「おい、お前は俺を抑え込むなよ。こんな俺でも、お前自身なんだからさ」

「……うん」

確かにそうかもしれない。ボクの姿によく似た彼の姿を見ると、そう思えてきた。

「積極的な椿と、おびえて何もできないお前。

逆にあっているじゃないか、尻に敷かれっぱなしだな」

「うつつ、なんだよ。他人事だと思って」

「今の世界、好きか？」

『破壊の皇帝』は不意にボクに聞いてきた。ためないなどない、ボクはきっぱりと、

「世界は、本当はいいものだったね。ボクは、あそこでは悪い世界しか見ていない」

「そうか、でもやるんだな。お前の決意、『最後の破壊』を」

「ずっと決めていたから、あの時から」

『破壊の皇帝』は何も言わず、ボクと交わるように消えた。

そしてボクの目の前は、お化け屋敷を歩く夜奈月さん。

大好きになった彼女の、後ろ姿を見ていた。

（いつか、ボクは決しなければいけないんだ。彼女が好きだから）

そんなボクと夜奈月さんが入った小屋は、何もなかった。

「あれ、へんだね。ここに一番怖いお化けがスタンバイしているのに」

「一番怖いお化けって……」

でも、この空間にボクは震えなかった。

それよりも、ひんやりとした冷たい空気さえ漂っていた。

「何か来るよ！ 気をつけて！」

夜奈月さんは、目の前から何かを察知した。ボクの手を、強く握ってきた。

ボクも、彼女の手を強く握り返す。

その気配は、作り物のお化けなんかではない。

もつと凶悪で、かつての不良たちを呼び起こされるもの。

やがて、薄暗い闇の中で足音が聞こえ、それから先に一人の人物が姿を見せた。

「久しぶりだな、皇 悠。そして、椿よ」

その声に、夜奈月さんははっとした。

ボクもどこかで聞いたことある声だけど、思い出せない。
いや、思い出したくない類の声だった。

「「お兄ちゃん」？」

「えっ、お兄ちゃん？」

やがてはつきりと見えた、赤い髪の男性。

長い髪を結わえ、鋭い目を向けてきた背の高い男。

何より、殺気のような威圧感は、あの時の教室を、思い呼び起された。

そう、目の前にいるのが、少年院にいるはずの福永 誠。
前に会った時より、明らかに貫録のある顔になった。

「どうして？」

「俺は、『破壊の皇帝』である皇 悠に会いに帰ってきた」

その言葉にあったのが、ものすごい嫌悪感だけ。ボクは、険しい顔で彼を見ていた。

相変わらず凜々しいというか、目をぎらぎらさせた男。

不敵な笑みが、なんともいけすかない。

ダメーजीジーンズのポケットに手をつ込み、真っ黒なシャツ。

そんな彼を夜奈月さんは、好きとも、好意的とも、憧れとも目で見ている。

「悠、もしかして知り合いなの？あたしの「お兄ちゃん」、福永誠と？」

「うん、古い……」

「俺は、お前みたいな雑魚は知らん。知っているのはあくまで『破壊の皇帝』だ」

余裕たつぷりに言う言葉、挑発と感じたボクは精神のタガを強めた。彼を封じるために、感情が働く。

それより、気になるのは夜奈月さんが、なぜ福永を知っているんだろうということ。

ボクが頭の片隅で考えていると、目の前の福永が言葉を発してきた。

「だが、今のお前に何の魅力もない」

言葉だけを残し、福永は姿を消した。いや、違う。

ボクの目の前にいきなり現れた。わずか一瞬のこと、ボクは思いっきり焦った。

「お前、椿が好きだな」

「えっ、あ……」

ボクは一瞬顔を赤らめようとしたが、それはできなかった。

福永の拳が、ボクのみぞうちに思い切りめり込む。

ドスッ、と鈍い音。ボクは呼吸が途端に苦しくなった。

痛みというより、苦しさが、ボクの体を襲う。

何かを発しようとしたけど、声が出ない。

そのまま、ボクの視界にあった福永の顔がおぼろげになり、まもなく闇に包まれた。

長すぎる闇、それはボクを不安にさせていた。

そんな闇から覚めると、真っ白な部屋。ボクは保健室のベッドにいた。

ボクは目を覚ますと、白衣で黒髪の女性が心配そうに顔を覗かせた。でも、すぐ視線を少し下に映す。

「大丈夫ですか？よしよし」

「よしよしって」

「にゅ、にゅ」

白衣の女性は、なぜかピンク髪の赤ん坊プリカ様を抱きかかえて頭をなでていた。

ボクは、困った顔を浮かべつつも白衣の女性を見ていた。彼女の名は、授頼先生。

前の事件で、ボクたちに助けを求めた元看護師さん。

現在は、東城学園の保険室の主をしていた。

プリカ様は、授頼先生に抱かれてうれしそうな顔を見せていた。

「……はい」

「皇君、夜奈月さんは、どうしましたの？」

そういつて、プリカ様を抱きかかえていない紺のスーツの織香先生が、授頼先生の隣に座っていた。ボクに珍しく焦った顔で姿を見せ、

不安がっていた。

ボクは話すのをためらおうとしたけど、プリカ様の視線がボクをなぜか見ていた。

「福永 誠が……」

「福永 誠、そうですね。MOBA^{モバ}の活動が、なるほど……」

織香先生は、苦虫をつぶしたような顔でボクの話聞いていた。すると、急に保健室のドアが開いた。

「皇先輩、一体何をやっているんですか！」

ドアから出てきたのが、意外にも広州さん。

普段落ち着いた小学生の彼女が、やはり取り乱したように、やってきた。

そのままベッドの上にいるボクの襟元をつかんで、ボクを激しくゆすった。

「く、苦しい……」

「どうして夜奈月先輩が、連れて行かれるんですか？」

「えっ、ボクは……ダメなんだ」

「ダメ、ダメでは進みませんわ。」

夜奈月さんを、助けなければなりませんの。福永に連れて行かれたのですから」

織香先生は、険しい顔を見せていた。

ボクのせいでいなくなった夜奈月さん、彼女が連れて行かれた隣に、彼女のぬくもりを感じない。

そのことは、ボクに痛烈な精神的ダメージを与えた。

そんな折、ボクは一つの疑問が生じた。

落ち込むボクは、目の前の織香先生の顔を下から見ていた。

「先生、夜奈月さんと福永はどんな関係なんですか？」

「そうでしたわね、まだ話していませんでしたわね。実は、二人は親戚同士ですわ」

「親戚、ほ、本当ですか？」

「彼らは、血でつながっていますの。ただ、それだけの関係ですわ」
「そう、ですか」

ボクは、すごく複雑だった。

夜奈月さんが見せたあの時の目は、それだけじゃないから。

「皇君、それで福永は、何か言っていますでしたか？」

「えと、『破壊の皇帝』に会いたいとかで、でも夜奈月さんをさらって……」

「『破壊の皇帝』ですか、くっ」

織香先生の顔が、険しくなった。明らかに、何かを知っていた。

「前言撤回ですわ。皇君、あなたはここにいなさい。広州さん、彼をお願い……」

「待つて、ボクは大丈夫です！」

ボクは上体を起こして、織香先生に食らいつく。

夜奈月さんがさらわれたのが、ボクの責任。

やっぱりボクのせいで、みんなは不幸になる。

だったら、ボクは彼女を助けなければならぬ。

居ても立つても居られないボクは、織香先生のほうを見上げていた。

「いけませんわ、彼の狙いはあなたの中にある『破壊の皇帝』ですの。

あなたは、彼と接触してはいけません」

「それでも、ボクは彼女を助けたい。夜奈月さんを助けないといけない」
「ダメですの！あなたのいいところは、なんでも言うことを聞くと

ころなんですから」

織香先生は、ボクにふつつつと怒りがこみ上げた。

ボクはうつむいて、自分の寝ている白いシーツを見ていた。そして、白いシーツを力強くぎゅっと握った。

「広州さん……」

「そんなんじゃない、ボクだって人間。ボクだって意見がある」

「皇君……」

「みんなに合わせるだけじゃ、ボクの世界は変わらない。

織香先生は、ボクに言ってくれたじゃないですか。

『織香部』は、ボクの世界を変えてくれる部活だって。

ようやく好きになれたんだ、ボクはこの世界を！」

ボクは初めて、織香先生に意見をちゃんと言った。織香先生は命の恩人。

ボクの寮から、学校の授業料まで全てを出してくれた人。

嫌われるかもしれない、ずっと黙っていた。

でも、彼女のことにはだけは曲げられなかった。

それだけ、彼女に思いがあつたから。

彼女のために、ありのままの自分をさらけ出したいから。

しばしの沈黙、やがて織香先生はにっこりと微笑んだ。

「分かりましたわ、そこまで言うなら広州さんと一緒に探しに行ってくださいな」

織香先生の声に、ボクは嬉しい顔を見せた。

だが、そこにさらに一人別の女の声が聞こえてきた。

「その必要は、ないわよ」

すると、保健室のドアに一人の女が立っていた。夜奈月さんかと思っただけ、違う。

「ローカルメガロドン」

「うるさいわよ、クソ生意気な子役！伊豆奈」

長峰さんが、手に腰を当てて立っていた。

左手に一枚の手紙を持って、ボクらを見下ろしていた。

ちなみに、着ぐるみ姿ではなくいつも通りの紺のブレザー姿になっていた。

「長峰さん、何しに来たのですか？」

「そうそう、皇。あんたに招待状が来ているわよ」

「招待状？」

ボクは、長峰さんからもらった招待状を見ていた。

それを見た瞬間、ボクは目を疑った。

そこは何もないグラウンド。静かに、フォークダンスの音楽が流れていた。

祭りを惜しむ人たちが残って最後に踊る、グラウンド。

後夜祭、文化祭の最後に行われるフォークダンス。

夕暮れから、暗くなっていく講堂。

外のグラウンドでは、フォークダンスの音楽が流れる中でここは静かだ。

先ほどまで出し物が行われていた祭りの後は、片づけそっちのけでみんなはグラウンド。よって、軽音部のものだろうか、大きな看板がそのまま残っていた。

かすかに聞こえる音楽で、祭りの後の哀愁漂う静けさ。

講堂のステージに、二人がフォークダンスを踊っていた。

一人は赤い髪の男子、福永。そしてもう一人は、

「夜奈月さん、助けに来たよ」

ボクは招待状を、片手に握りしめた。

両手を握り、抱き合う二人の姿を見て少し切なくなる。
声がしたのか福永が、ボクのほうをじっと見てきた。

二人は、踊っていたフォークダンスをやめた。

「夜奈月さんを……」

「悠、知っていたのね」

その夜奈月さんは、悲しげな顔を見せていた。

その瞬間、ボクの世界がはつきりと音が崩れて壊れた気がした。

「何を知って……」

「とぼけないで！お兄ちゃんを、殺人犯にしたでしょ、ひどい、ひどいよ！」

『殺人犯』と聞いて、思い出された体育祭のこと。

あの時、確かにボクが破壊を行った。

「椿よ、皇 悠こそが悪。そして、その鼠こそが……」

福永は夜奈月さんから離れて、降伏のように手を上げた。

すると、舞台袖から二人見えた。

日本史で、セーラー服姿の沢尻先生が赤ん坊プリカ様を、抱きかかえて出てきた。

しかし、彼女の背後にはテロリストのような銃を持った二人組の男が見えた。

真っ黒な布を顔にかけていて、顔をうかがうことはできない。
だが、大きさからみても男だ。

「さ、沢尻先生、どうして？」

「織香先生に頼まれて、来ちゃったんですけど、トホホですう」

なんだかうれしそうに、降参ポーズをとっていた。

「お前の思いのたけを、話してやれ。皇 悠に」

「お兄ちゃんが捕まって、あたしたち大変だったんだよ！

みんな暗くなつて、親戚の間でもめていて、喧嘩も起きて……

みんな、めちやくちやになつて、苦しかった。だから、悠は、『破壊の皇帝』は嫌い」

そんな夜奈月さんは、急に涙声へと変わる。つらそうな顔で、目に涙を浮かべていた。

「本当に、本当につらかったんだよ。お兄ちゃんが、殺人なんかするばずないって。

でも、真犯人が、高校で知り合つて、告白されて、好きになつたのが、よりにもよつて悠だつて、馬鹿みたい。

あたし、どうすればいいの？ねえ、教えてよ！」

夜奈月さんは、その場でしゃがみこんで泣いていた。体を震わせて、ただ泣いていた。

いてもたつてもいられず舞台上上がったボクは、夜奈月さんのそばで立っていた。

「ごめん、夜奈月さん、ごめん」

「もう、悠もお兄ちゃんも、ひどいよお。

やだ、やだ。あたしに、何も教えてくれない」

全てを知ってしまった夜奈月さんは、いろんなことが、頭の中をこちやこちやに駆け巡っていることだろう。

整理がつかない、夜奈月さんを悲しませた自分に罪を感じた。やっぱりボクは、人間のクズだ。

「殺人鬼、皇 悠。椿を傷つけたお前は、もう今までの関係ではいられない」

福永の淡々とした言葉に、ボクは苦しかった。

その瞬間、ボクの世界は一気に崩れた。

それは、押さえつけていた堤防が完全に決壊したものであり、

「お前、俺と会いたかったんだろう、悪魔よ」

あつという間に、体に乗っ取った『破壊の皇帝』が現れて、ボクはボクの目からそれを眺めるしかなかった。

「『破壊の皇帝』、それで殺したの、天照さんを？」

夜奈月さんの目は、涙目だけど睨みつけているようにも見えた。

でも『破壊の皇帝』は、彼女の頭に手を触れた。

「そうだ、こうやって破壊したんだ。『破壊』、樁の脳内の酸素」
夜奈月さんが、「えっ」という言葉を漏らしたが、間もなくボクに寄りかかるように倒れていく。

それを、彼は抱きかかえた。脳内の酸素を失った夜奈月さんは、生きていくというより眠っていた。

「お前が目を覚ましたら、踊ってやろう。ノーマルが大好きな女」
「会いたかったぞ、『破壊の皇帝』。そして、お前と取引がある」
夜奈月さんを舞台の床に寝かせた後、『破壊の皇帝』は声の主である福永のほうをにらんでいた。

「取引だと？」

「お前に、もつと破壊をやらせてやろうというものだ。」

この腐った世界を、破壊するということだ」

「どうということだ？」

「理不尽で、つまらない世界。そんな世界にサヨナラしないか？お前が欲しがるものは、MOBA^{モバ}にある」

福永は、『破壊の皇帝』にいきなり右手を差し出してきた。その言葉に、ボクは聞き覚えがあった。

「MOBA^{モバ}は、世界を改革する集団だ。
だが、この学校には世界さえも従わなければいけない絶対校則がある。

それでも、学校を出れば自由だ。

お前は、たくさんの破壊をしたいのではないか？

その体を、使っているのはそのためだろう」

「確かに、このノーマルの体を使って幾多の『破壊』をしてきた。

そこで俺は、幾多の快楽も得た」

「お前は、もつと多くの破壊を望んでいるのだろう。

『破壊』は、『世界』という集合の一つだ」

「いい案件だな。興味がある」

「ダメですう、そんなことしちゃ」

そこに沢尻先生が、口を挟んできた。

しかし、銃を突きつけられて、積極的に発言ができない。

「黙れ、ん？その赤ん坊は……」

「まさか、あのプリカ。その赤ん坊をこちらによこしてもらおう」

「やー、ダメですう」

逆に沢尻先生を人質にとった黒い布の男は、赤ん坊プリカ様に手を伸ばす。

だが髪の毛に触れると、いきなりプリカ様が泣き出してしまう。

「びえーん、えーん！」

プリカ様の激しい鳴き声に、思わず二人組の男は戸惑っていた。

すると、ボクは、いや『破壊の皇帝』は一瞬の隙を逃さずすでに動いていた。

「『破壊』、男たちのズボン」

言葉と同時に、男たちの下のズボンが文字通りなくなった。

「な、なんだよ、いやっ」

「み、見るんじゃねえ！」

男たちは、恥ずかしくなってパンツ姿の下半身を隠す。
いきなり起きた非科学的なことに、理解できないでいた。

それとほぼ同時、黒猫が沢尻先生のスカート下から現れた。
いきなり黒布男に飛びついて、ひっかいていく。

ひっかかれた男は、顔を抑え逃げていく。

もう一人の男が黒猫を捕まえようと手を伸ばした。

「これでも、くらいなさ〜い」

沢尻先生は、背中に背負ったリュックから哺乳瓶をとりだして男の顔に突き刺した。

どうやら、哺乳びんの固いところが当たったらしく、武器を手放し顔面を抑え痛がって逃げていく。

それでも、仲間の闘争に余裕の顔でボクを『破壊の皇帝』をみていた。

「実にすばらしい『アビ』。

お前は敵にしておくのが惜しい、お前は『破壊』が好きなのだろう？」

「もちろんだ、俺は『破壊の皇帝』だ。存在理由、特技、意義、すべてが『破壊』だ！

これは素晴らしい提案ではないか、俺の趣向にあっている」

嬉しそうな『破壊の皇帝』、でもボクはそれを見守るしかない。

ボクには、体の主導権はない。

左手を差し出す福永に、『破壊の皇帝』は手の先の彼を見ていた。

だが、次の瞬間固く握った右ストレートを彼の顔面に思いっきり殴った。福永はよけようと後ろに下がろうとしたが、反応が遅く顔面

をとらえていた。

振りぬいた右ストレートは、ボクより大きい福永の体を吹き飛ばした。

そのまま彼は、ステージの床にたたきつけられていた。上体を起こして、苦々しくボクを福永が見ていた。

「お前は抗うのか、世界に？」

福永がつばを吐いた。だけど『破壊の皇帝』は、にやりと笑っていた。

「けどな、ノーマルはそれを望まないし、ノーマルが言う『最後の破壊』も俺は興味がある。勘違いするな！

俺は破壊狂だが、ノーマルは大事だ。こいつの世界は、お前たちとともにはない」

「なるほど、それがお前の意志か」

すると殴られた福永は、よろよと立ち上がった。

重そうな体を引きずり、険しい顔を見せていた。

「俺はあきらめんど。お前の力は、世界を破壊するためのものだ。

『破壊の皇帝』よ！

だが、今日は預けておこう。お前の意志だけは、伝わったからな」福永は口惜しいセリフを吐いて、人並み外れた跳躍力で飛び上がっていく。

ボクは上を見上げていた、あつという間に福永はいなくなった。

沢尻先生は、まずそうな顔でボクを見ていた。そして、ボクは闇の中に入った。

真っ暗な闇の中、ボクは『破壊の皇帝』と再び向かい合っていた。

「あとは、お前で決着をつける」

「うん、ボクが彼女の誤解を……」

「誤解なんか、解く必要はない。お前は、現実を受け入れなければいけない。」

お前は、結局織香に踊らされた殺人犯だ。それは変わらない事実。」その言葉に、ボクはようやく抵抗なかった。不安も、不満も何もない。

「椿とは、もう戻れないんだぞ。このままではな」

「そうだね、彼女はボクの知らない過去を知ってしまった」

「知っているか、人間というのは脳にいろんな制御を抱えている。

脳内の酸素不足は眠気を誘い、脳内の細胞は記憶をつかさどる。

中でも側頭連合部は、聴覚の記憶だ。

記憶を消せば、彼女は福永の話した事を忘れることができる」

「いや、そんなことはしない。ボクは、やっぱり彼女が好きだから」
「そういいながら、ボクは再び『破壊の皇帝』にふたを閉めた。

元に戻った髪が、自分であることを示した。

「あちゃーあ、お手伝いのはずが……」

「夜奈月さん、大丈夫ですか？」

ボクは、夜奈月さんに近づいた。沢尻先生は気まずそうな顔を見せていた。

お邪魔とばかりに、裾のあたりに隠れていく。

肩に黒猫を乗せ、赤ん坊プリカ様を抱きかかえたまま。

眠った夜奈月さんは、ボクに抱きかかえられて目を覚ました。

「なんだか、短い夢を見ちゃったよ。いい夢、心地いい夢」

「夜奈月さん、ごめんなさい。今までずっと黙っていて、ずっと逃げていて」

夜奈月さんに、ボクは甘える顔で見ていた。

夜奈月さんは、体を起こしてボクに抱きつく。

「お兄ちゃんは、あたしの大事な人なんだ。」

いじめられているときも、助けてくれたし、すごく懂れていた。
何でもできて、大人で、かつこいいの。あたしの初恋の人」
はにかんだ夜奈月さんの笑顔が、やや苦しそうにも見えた。ボクは黙って聞いていた。

「でも、お兄ちゃんが殺人犯で三年前に捕まって、みんなおかしくなつて、でも、お兄ちゃんを信じていた。

間違つてはいないんだよね、お兄ちゃんが犯人じゃないんだよね」

「そうだよ、ボクが悪いんだ」

「悠は、やつぱり嫌いだな」

夜奈月さんの言葉に、ボクは悲しかった。

ボクが行ったあの行為は、間接的に彼女を傷つけたただけだから。後悔と無念が、ボクに残る。

仕方のないこととは思つても、それを判断したボクに後悔があつた。

「でも、悠は今のあたしにとって大切な存在。

悠が殺人を犯していても、あたしの中で大きくなっていくの。

始めから弱そうで心配症で、臆病で、今でも頼りないけど……」

「夜奈月さん……」

「でも、結局好きになつちやつた人なんだよね。

世話したい、かわいがりたい、構つてあげたい。

結局あたしが悠を下に見ていたんだね、だからお兄ちゃんから体育祭の話を、真実を聞いたとき動転したの」

「うん。ボクが悪かつたんだ。

あの時、逃げた。知らないつもりで過ごそうとして、逃げた。

人並みの幸せをつかみ、世界を変えようなんて馬鹿げていたんだ。そんなボクも……」

夜奈月さんは、やや涙目にボクの言葉を見ていた。

軽快なフォークダンスの音楽が、外からおぼろに聞こえる。
ボクに対し、夜奈月さんは手を差し伸べてきた。

「踊ろうよ、あたしたちの文化祭は、まだ終わっていないよ」
夜奈月さんは、そこで嬉しそうな顔を見せてくれた。
ボクは、『破壊の皇帝』に対して一言声をかけた。
（ボクに、期待してくれてありがとう）と。

ボクと夜奈月さんは、フォークダンスを踊っていた。
外から聞こえるかすかな音で、踊る。

「悠と踊るの、初めてだね」

「そうだね、本当にボクはずっと逃げていて、ダメだね」

「ダメは禁止」

夜奈月さんは笑っていた。彼女にリードされ、ボクはやはり踊っている。

いつも通りのかわいい笑い顔に、ボクはドキッとしてしまう。

そう、ボクは普通の彼女が好きなんだ。

やはり夜奈月さんは、ボクにないものを持っている。

「夜奈月さんが、ボクは大好きです」

「あたしも、だよ。だから……」

夜奈月さんの言いたい言葉は、分かっていた。だからこそ、ボクは
つらかった。

でも、殺人を犯していつまでも逃げているわけにはいかない。
夜奈月さんの言葉で、二年近く抱えていた罪にようやく分かった。
何をすべきか、何をしなければいけないか。

そんな時、ボクは初めて踊るフォークダンスに体勢を崩してしまう。
「あつ、ごめん」

するとボクと夜奈月さんの顔が、一気に近づいた。二人で顔を見合
わせてしまう。それと比例して、ボクの心臓がバクバクとしていく。
顔も赤くなつたボクと夜奈月さん。

「でも、悠はやっぱり優しいね」

「夜奈月さん、ボクは……」

そんなボクが行う。一瞬『破壊の皇帝』の姿が見えた。彼は、にや
りと笑っていた。

「本当にやさしいよ、悠は」

夜奈月さんは、ボクを引き上げて、笑ってくれた。

そんな瞬間が、たまらなく心地よい。今まで生きた中で一番、心地
よい。

やっぱり夜奈月さんにリードされるボクだけど、それでも一緒に合
わせていた。

ボクと夜奈月さんとの最後の時間が近づく。そして曲が終わった。

「終わっちゃったね」

「うん、ごめんなさい」

「やっぱり祭りの後は、さびしいね」

しみじみという彼女の横顔に、ボクは息をのんだ。

「もう、ダメだよ。悪いことしちゃ」

「そうだね、逃げるのはもうやめる。ボクは、やっぱり夜奈月さん
が好きだ」

「恥ずかしいなあ、そんな急に言われたら」

夜奈月さんは、恥らっていた。ボクは真剣な顔で、じっと見ていた。

「ごめんね、大好きだよ」

「いいよ、あたしも好きだから。でも……」
「だから……」

ボクはためらった。彼女の顔が、笑ってそして赤い。

好きになったボクが、夜奈月さんにどうしてもやりたいことがあった。

もう、逃げない。

それは、ボクは彼女が好きだということ。そして、それが全てなんだと。

だから夜奈月さんの顔から、ちよつとそらしてしまう。

ボクの顔には、はつきり影が出ていた。

「だから……」

「だから？」

夜奈月さんが、ボクに訪ねてきた。そしてボクが顔を上げたとき、ボクの髪が跳ねた。

『破壊の皇帝』が、ボクの顔に現れた。それは、強気のボク。

なんでもできるボクが、選んだこと。

彼に体をゆだねた。いきなりの登場に、夜奈月さんは驚いて悲しそうな顔を見せた。

「悠、なんで？」

「夜奈月 椿を、破壊します」

そして、ボクが最後の究極の破壊をしたとき、ボクのそばにいた夜奈月さんがいなくなった。彼女が、何か声を発しているけど最後まで聞こえなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8928p/>

東城学園戦記

2011年10月7日15時31分発行